

学位論文

明治青年僧の「探検」とは何だったのか
－能海寛の資料を通じて－

同志社大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科
グローバル・スタディーズ専攻 博士課程(後期課程)

篠原由華

(4I141204)

目次

序章

はじめに	4
第一節 能海寛の略歴	4
第二節 先行研究	5
第三節 問題設定	9
第四節 本稿の構成	11

補論 資料の来歴

はじめに	13
(1) 中国から送られた「荷物」	13
(2) 日本国内を巡った「遺品」	17
(3) 波佐に伝わる「資料」	19

第一章 明治二十年代の仏教青年とチベット探検

はじめに	22
第一節 「宇内一統教」の「準備」としてのチベット探検	23
第二節 「思想の変遷」による述懐	30
第三節 布教からチベット探検決断まで	31
第四節 仏教外からの影響	40
おわりに	47

第二章 四川に集まった日本人とチベット

はじめに	49
第一節 同行者寺本婉雅と成田安輝そして護照	
(1) 重慶領事館の護照	49
(2) チベット行き護照交付の経緯	54
第二節 重慶領事館の人々とダルツェンド	59
第三節 入蔵方針をめぐる衝突	65
おわりに	70

第三章 探検における交遊録	
はじめに	72
第一節 「中国」との出会い—詠帰舎	
(1) 詠帰舎と中国語学習	73
(2) 詠帰舎での交遊録	76
第二節 中国へ進出する日本人—上海、漢口	80
第三節 日中提携の気運—四川	
(1) 現地僧侶たちとの交流	87
(2) 訪日視察団と能海寛	89
(3) 領事と幕僚の交流	95
第四節 同窓との再会—二度目の成都	100
おわりに	106
第四章 仏教徒の探検	
はじめに	108
第一節 「活発」な仏教徒を訪ねて—対中国仏教	
(1) 中国仏教への期待	108
(2) 中国仏教に触れて	113
第二節 仏教盛んな地を目指して—対チベット	
(1) 探検前のチベット理解	119
(2) 探検中のチベット情報	125
第三節 明治青年僧の探検	136
おわりに	140
終章	143
付録資料	
1 探検行程地図	146
2 壮行会参加者リスト	147
3 成都地図	148
4 重慶城内地図	151
5 見聞録「甘肅論」	152
参考文献	165

凡例

- 1 句読点は適宜修正、補った。読解不能な文字は●にした。
- 2 本文中の（ ）はそのまま（ ）で、筆者注は〔 〕で示した。
- 3 漢字は常用漢字のあるものはおおむねこれを用いた。
- 4 記述の一部に今日の視点からすれば差別的な表現、叙述があるが、一次資料の紹介という趣旨から原文のままとした。

序章

はじめに

本稿は明治 31(1898)年から 34 年にかけて中国大陸からチベットを目指した日本人僧侶・能海寛 (1868-?) (のうみゆたか) に注目し、彼が生涯をかけて追い求めた「探検」とは何だったのかを考察するものである。これまで十分に活用されてこなかった資料を使うことで、探検をより立体的に描出しようとする。

明治元年真宗大谷派浄蓮寺に生まれた能海は、普通教校、慶應義塾、哲学館へ進学し、反省会や経緯会といった仏教革新を目指すグループに参加した。その中で能海は世界規模の仏教徒の連携を提唱する。特に世界で広く利用される英語の影響に注目し、仏教経典を英訳することで国際的な連携を目指した。音訳の漢訳経典よりも釈迦の説いた言葉に近いと言われていたサンスクリット語経典に注目し、チベット探検を志すようになった。そして明治 31(1898)年中国に上陸すると、いずれも失敗に終わったものの、チベットに向けて三度の探検を行った。第一次(四川)、第二次(青海)、第三次(雲南)の各探検である。第三次探検で消息が途絶えるまで日本に書簡や日記、スケッチなどを送り、その一部は昭和 61(1986)年に生家、浄蓮寺から発見された。

能海はチベットを目指す途上消息を絶ったものの、チベットに入ったほかの日本人とともにこれまで入蔵者として一括りにされてきた。また探検中の貴重な資料が発見されたにも関わらず、これらを使い探検を改めて問い直すという研究も行われてこなかった。本稿は新たに発見された資料を使い、どのような背景で探検が生まれ実行されたのかを追いながら、能海が目指した仏教徒による探検について考察しようとする。

第一節 能海寛の略歴

先行研究を概観する前に、隅田正三氏の『新仏教徒運動の提唱者 求道の師 能海寛』(波佐文化協会 2018 年)を参照しながら、能海の経歴について簡単に紹介する。

明治元(1868)年 5 月 1 日に中国山地の山間にある島根県那賀郡波佐村(現在の浜田市金城町長田)の真宗大谷派天頂山浄蓮寺に生まれた。浄蓮寺住職第十一世徳言が逝去し、刈屋形村(現在の広島県山県郡北広島町)の専光寺から第十二世として入院した実父・法幢も、明治 8 年に逝去する。その後浄蓮寺では第十三世謙信を迎え、能海には異なる父を持つ者を含めた 6 人の兄弟がいた。

実父法幢が逝去すると、専光寺で伯父・安本円海師のもと養育され、明治 10(1877)年広島小教校へ入学し三年間漢書を学んだ。明治 11(1878)年 11 歳の時京都本山で得度する。明治 14(1881)年から浄蓮寺で将来の住職として義父・謙信から漢籍・宗乗の教育を受ける。しかし遊学への気持ちが強かった能海は、檀家や伯父の協力を得て明治 19(1886)年京都の西本願寺派普通教校(現在の龍谷大学)へ入学する。普通教校では反省会や海外布教会といった仏教の改革を目指す学生団体に加わる。このような活動的なメンバーの中でやがてチベット探検の必要性を唱え始めるようになる。

その後、明治 23(1890)年東京の慶應義塾へ一時進学するが、檀家の要請などを受け哲学館（現在の東洋大学）へ転入学し、明治 26（1893）年に修了する。この間、普通教校出身者とともに新仏教徒運動の母体グループ経緯同盟会（後に経緯会へ改称）を立ち上げる。また明治 26 年には哲学書院から能海の唯一の著書となった『世界に於ける仏教徒』を出版している。

その後浄蓮寺に戻るが、チベット探検の気持ちを抑えきれず、明治 29（1896）年再び上京する。南条文雄宅に寄留しサンスクリット語を学ぶかわら、宮島大八の詠帰舎で中国語官話も学び始める。明治 31（1898）年大谷派本山から「西藏探検」の許可が下り神戸港から上海へ旅立つ。中国渡航後、四川省ルート（上海-バタン（巴塘）-ダルツェンド（打箭炉）：1898 年 11 月 21 日-1899 年 10 月 22 日）、青海省ルート（ダルツェンド-タンカル（丹噶爾）-重慶：1900 年 5 月 17 日-11 月 14 日）からチベットへ入ろうとするも、いずれも成功しなかった。そして次に選んだ雲南省ルートの途上、大理から明治 34（1901）年送られた書簡を最後に消息不明となっている。

第二節 先行研究

能海がチベットを目指し探検を行ったこと自体は、すでいくつかの研究で紹介されてきた。ここではこれまでの研究蓄積を整理することで、残された課題を示したい。なお各章の内容と近い先行研究については、各章、節の冒頭で個別に改めて取り上げる。

まず本稿と同様に個人史的アプローチをとった研究から見てみたい。これまで主に『能海寛著作集』の編纂出版を行った故郷波佐の能海寛研究会を中心に進められてきた。補論「資料の来歴」でも述べるように、同研究会は郷土の偉人として注目し資料の発掘や整理が主に行われ、平成 7(1995)年以降は機関誌『石峰』が刊行された。会の発展に伴い、能海や同時期チベットを目指した日本人、そしてチベットに関心を持つ地元の人々や研究者が参加するようになった。中でも能海個人の事績については、隅田正三氏の『チベット探検の先駆者求道の師「能海寛」』（波佐文化協会 1989 年）という先駆的研究がある。昭和に入って波佐で能海資料の発掘や整理を行い、また『能海寛著作集』の編纂に関わった隅田氏は、同書の中で新資料の整理を通じて明らかになった事績や資料を紹介している。以降この研究は能海についての手引き書のような存在となっている。例えば江本嘉伸『能海寛-チベットに消えた旅人』（求龍堂 1999 年）や村上護『風の馬-西藏求法伝』（佼成出版社 1989 年）等能海の自伝を対象にしたものは、隅田氏の研究を多く参照している。隅田氏からはじまるこれらの著作は、探検中に訪れた場所などは言及しているものの、能海が探検先で何をし、どんな人物と会ったのか、またどういった考えを持っていたのか等は明らかとされていない。つまり個人史研究において、社会情勢との接続や同時代史の中への位置づけがまだ充分に行われているとは言い難く、今後の更なる発展のためには社会性や時代性、または能海自身がどのような人物であったかなどを含めた複合体として能海を捉えていく必要がある。

能海はチベットを目指して約四年間中国大陸を歩いたが、雲南省大理からの知らせを最

後に消息が途絶えたため、実際にチベットに辿りついたかどうかは未だに不明なままである。しかしこれまで能海は必ずと言って良いほどチベットとともに語られてきた。それは先に紹介した能海を個人史として取り上げる研究のタイトルにチベット（または「蔵」）という言葉が見えることから明らかである。このような傾向は、他の研究分野で能海を取り上げる際にも見られる。

個人史的アプローチをする研究に次いで能海が最もよく取り上げられているのは、チベットと日本人の関わりに言及する研究においてである。例えばチベットの概説書とも言える山口瑞鳳『チベット 上・下』（東京大学出版 1987 年）を皮切りに、チベットに入った日本人を複数人取り上げた江本嘉伸『西藏漂泊 上下』（山と溪谷社 1993-94 年）、そして明治以降の日本社会とチベットとの関わりを追った高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房 2010 年）が挙げられる。また中国でも日本人とチベットの関わりをまとめた秦永章『日本涉蔵史—近代日本与中国西藏』（中国蔵学出版社 2005 年）がある。これらの研究では能海が最初の探険で同行した大谷派僧侶寺本婉雅や日本人で初めてチベットに入った河口慧海、そしてその後チベットに入った青木文教や多田等観など「入蔵者」と呼ばれるチベットを目指した日本人の中の一人として取り上げている点で共通している。能海は黎明期の入蔵者の一人として取り上げられている。

この研究領域で注目すべき点は、入蔵者がチベットを目指した背景に大乘非仏説があったと指摘していることである。この大乘非仏説とは当時西欧の仏教研究者が支持した説で、大乘経典は仏陀が説いたものではないという、いわば日本仏教を否定するものだった。西欧の仏教研究に触れた日本の仏教青年の中には、原典を見つけ出すことで漢訳大乘経典も仏陀の口から出た「金口」からの漢訳であることを示そうとする者が現れた。彼らが注目したのは漢訳大乘経典の原典となったサンスクリット経典であり、そのサンスクリット経典からの忠実な翻訳とされるチベット経典だった。つまり大乘非仏説への反証をチベットに見いだそうとしたのである¹。このようなチベットを目指す気運の高まりは、一種の病に例えて「入蔵熱」と呼ばれ、能海はこの熱におかされた青年僧の一人として捉えられる。その結果、入蔵熱罹患者たちがチベットを目指した動機がすべて大乘非仏説に収斂されるように、能海の動機もその中に回収されている²。

このような捉え方は近代仏教史においても引き継がれている。能海がいた明治仏教界の様相を対象とする近代仏教史研究では、大学制度やメディアの展開、国際交流などについて

¹ 白須浄眞「20世紀初頭の国際政治社会と日本-大谷光瑞とスヴェン・ヘディンとの関係を中心として」（田中和子編『探険家 ヘディンと京都大学-残された60枚の模写が語るもの』京都大学出版社 2018年）。

² 例えば次の研究が挙げられる。白須浄眞「大谷探検隊に先行する真宗青年僧の英領下セイロンへの留学」（『シルクロードと近代日本の邂逅—西域古代資料と日本近代仏教』勉誠出版 2016年）、高本,前掲書。

実証的研究が進められている。特に反省会や海外宣教会、学問対象としての「仏教」の登場など、能海が関わった団体や事象についても明らかにされてきている。しかしそこで描出される能海は、かつての中国へ悟りや教えを求めて渡った「求法」僧とは一線を画したものとされながらも、入蔵者の中の僧侶たちとともに「仏教本来の姿を求めての行動」とった人物として、である。そして彼らがチベットを目指した背景には、大乘非仏説があると説明されている³。

確かに不惜身命とも言える能海の行動は一見病的に映るだろうし、多くの先行研究が参照している能海唯一の自著『世界に於ける仏教徒』（1893年哲学書院）からは大乘非仏説を明らかに意識していたことが窺える。例えば同書の中で大乘非仏説について「この問題や仏教徒の最も膽を嘗めて探究を凝すべきもの⁴」と位置づけていることから充分に確認できる。しかし入蔵熱羅患者たちの動機をひとくくりに大乘非仏説に帰結してしまうことは、彼らの多様性や他の大小様々な動機があったとしても、それらを排除してしまう可能性を孕んでいるように思える。能海に即して言えば、大乘非仏説に能海がいかにして触れ、そしてどのような経緯や背景の下探検という実践へと結びついたのか、ということが具体的に明らかになっているとは言いがたい。また近年近代仏教史研究では能海が関わった団体や事象に関する研究が進んでいるが、探検との関係について論じられることは無かった。つまり現在のところ、能海の探検の背景には大乘非仏説の影響があったことは論じられているが、それがいつ、どのように探検へ影響を及ぼしたのかという具体的な内容は明らかとされていない。その結果、近代仏教史において、能海やその探検の位置づけが充分に行われていない現状を招いていると言えるだろう。

最後に他領域や現在に至るまでの能海の捉える角度に影響を与えた研究について言及しておきたい。先の日本人とチベットとの関わりで紹介した山口瑞鳳氏の研究である。能海が探検先の中国から日本へ送った書簡を引きながら次のような評価をしている。

日清戦争にあげた国威を背負うこともなければ、己れのみを元来尊しとして、他の価値を知る前から見下すような濁りがない。〔筆者注：能海は〕一事を見るだけでも、このような正当な評価ができた⁵。

³ このような視点は藤井健志「仏教者の海外進出」（末木文美士編『新アジア仏教史 14 近代国家と仏教』佼成出版社 2011年）で確認できる。他にも大谷栄一『近代仏教という視座 戦争・アジア・社会主義』（ペリかん社 2012年）、大谷栄一、吉永進一、近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもう一つの近代』（法蔵館 2016年）等がある。

⁴ 能海寛『世界に於ける仏教徒』（哲学書院 1893年）p54（以下、他の能海関連書籍と区別するため同書は『世界に於ける仏教徒』と記載する。）

⁵ 山口瑞鳳『チベット』（上下東京大学出版 1987年）p75。

ここで山口氏が参照しているのは、自分たちの文字で経典を残すチベットを賞賛する能海が四川から師、南条文雄に宛てた書簡である。この一通の書簡をもとに書かれた評価は、当時の日本人が抱いていた「国威」や先入観といったものを能海は持たず、「正当な評価」ができたという、まるで俗社会に関わりのない純粋に仏教だけを求めたイメージを与えるような叙述である。しかし経歴でも見たように、かつての学林とは異なる近代的な学校教育を受け、その傍ら反省会や経緯会といった仏教革新を志向するサークルに参加していたことを考えると、純粋な僧侶として仏教だけに関心を持ち、俗社会から影響を受けていないかのように能海を捉えるのはあまりに断片的に思えてならない。

こうした特定のイメージが先行した能海に対する叙述は、例えば探検史の中でも散見される。長沢和俊『日本人の冒険と探検』（白水社 1973 年）や『日本の探検家たち 未知を目指した人々の探検史』（平凡社 2003 年）は日本人の探検と目される行為を一通り網羅した著書である。これら著書は、『能海寛遺稿』に収録された探検先から日本に送られた書簡を参照しながらその足跡を追っている。そして前者の研究では明治期に中国・満蒙を探検した日本人の一人として、そして後者ではチベットを目指した僧侶の一人として描かれている。両者は文脈こそ異なるが、中国に上陸した日から消息が途絶えるまでの書簡を参照している点で共通している。そして描出されるのは「純粋な学問的興味から中国大陸に取り憑かれた学者⁶」など、軍事探偵や大陸浪人などとは一線を画す領域においてである。

山口氏による評価や探検史、また先に見たチベット研究では、いずれも主に『能海寛遺稿』が参照されてきた。補論「資料の来歴」で後述するように、この『能海寛遺稿』は消息不明後の大正 6 (1917) 年に寺本婉雅や南条文雄を中心に編纂されたもので、探検中に能海が翻訳した経典をはじめ、寺本や南条に宛てた書簡、一部の行程表などが収録されている。時系列に沿って整理された収録資料は、能海の探検中の動向が確認できる資料として非常に便利ではある。しかし第三者によって編纂されたことを考えると、ある程度の偏りがあることも考えられるだろう。実際、昭和の終わりに生家から発見された資料と比べると、『能海寛遺稿』に収録された資料は、能海が中国から送った資料のごく一部に過ぎず、日記や親族へ送った書簡など、よりプライベートなものは収録されていない。言い換えれば、新資料も含め閲覧可能な資料を付き合わせることで、これまで描かれてこなかった能海寛像が浮かび上がる可能性がある。また、これまで能海が仏教という特定の領域でチベットとともに語られてきたのは、こうした『能海寛遺稿』が抱える資料自体の限界が一つの背景として挙げることができるだろう。

以上先行研究を概観してきたが、改めて整理すると次のように言える。能海が存在を有名にした探検は、大乘非仏説によって実行されたものと指摘されてきた。ただ能海が大乘非仏説からどのようにして影響を受けたのか等踏み込んで探究されてこなかった。その結果、社会的影響を受けない仏教だけを追い求めた人物というイメージが形成、継承されてきた。こ

⁶ 長沢和俊『日本人の冒険と探検』（白水社 1973 年）p283。

うした状況は、参照できる資料を可能な限り付き合わせることで克服できるものと思われる。特に昭和の終わりに生家から発見された資料が、基本的な経歴を明らかにした研究以外ほとんど使われていない状況こそ、イメージが先行し全体像がぼやけて見える要因だと考えられる。つまり先行研究によって残された課題とは、参照可能な資料を可能な限り参照し、能海から時代性を引き出すことだと言えるだろう。

第三節 問題設定

課題を設定する前に、能海が探検を目指し実行した時代背景を簡単に見ておきたい。

能海が誕生してからチベット行きを志し実行に移すまで過ごした日本仏教界は、欧米文化の脅威が宗教や精神の問題として意識されていた。特に1860年代生まれの「明治の青年」第二世代は、政府の欧化政策に対して国学や漢学といった学問の復興運動や、日本仏教の革新運動を展開した。こうした危機感是中国の知識人にも共通して見られ、日本を「同文・同種・同教」と捉える考え方が広まった。そして百日維新失敗後の新政改革の展開にあたって、改革の手本を日本に求め、留学生派遣や日本人教習（顧問）の招聘が相次いだ。日本でも中国人留学生を受け入れる学校の開設や日中の連盟をうたう諸団体が設立された⁷。さらに下関条約によって新たに開かれた中国の開港地や内地には、様々な目的を持つ日本人が進出していった。かつて実藤恵秀氏は1896年から1905年の日中関係を「純粋な親日時代」と呼び⁸、またDouglas R. Reynolds氏は98年から07年を「黄金十年」と呼んだように⁹、日中間の交流が発展した時期として位置づけられている。

さらに西に目を向けると、シッキム経由の通商路を求めて18世紀後半からチベットに関心を抱いていたイギリスが、通訳官の殺害事件を機に中国との間で芝罘（煙台）条約（1876年）を締結し、調査探検隊のチベット通過の承認を取り付けた。これに対しダライラマ政権の官僚や僧侶などは反発し、チベット人は中国に対して疑心暗鬼となった。また四川総督丁宝楨のように通商の容認がチベットや四川の喪失へと繋がると危機感を抱く中国官僚も出てくるようになっていた¹⁰。能海はこうした日中間の往来が頻繁であった時期に中国に渡り、中国の辺境が問題化されつつある中長く四川省に滞在し、チベットに入ろうとしたことになる。

そしてイギリスと中央アジアの覇権を争ったロシアは、1881年イリ条約締結、カシュガル領事館の設置を経て、地図上の空白を埋めるべく探検家を派遣しインドまでのルートを調査させた。後にイギリスの作家ラデヤード・キプリングの小説『キム』の中で「グレート

⁷ 藤谷浩悦『戊戌政変の衝撃と日本-日中聯盟論の模索と展開』（研文出版2018年）。

⁸ 実藤恵秀『明治日支文化交渉』（光風館1943年）p359。

⁹ 任達著、李仲賢訳『新政革命と日本-中国,1898-1912』（江蘇人民出版社2006年）。

¹⁰ 平野聡『清帝国とチベット問題-多民族統合の成立と瓦解』（名古屋大学出版会2004年）。

ゲーム」と呼ばれるイギリスとロシアによるこの抗争は、1890年のバウアー文書の発見以降、探検隊による発掘競争という側面も有するようになっていく¹¹。繰り返しになるが、このような当時の時代背景が能海の探検にどのような影響を与えたのかを踏まえることは、能海寛の探検をより明確に位置づける一助となるだろう。

本稿の問題を設定するために、ここでは上記の時代背景のうち当時地図上の空白から発掘競争へと移行しつつあった探検に注目する。このような探検の移行は、福島安正のシベリア単騎横断や郡司忠成の端艇による千島行きを熱烈に歓迎した日本でも模索されていく。当時の探検の変容に注目した鈴木康史氏は、従来殖民とともに使われていた探検が、二人の冒険行を機に概念の変容が始まり、明治43(1910)年白瀬轟が南極探検に挑む頃には、探検という言葉は学術という新しいあり方を獲得していたことを指摘している。特に日清戦争前後には、アフリカ大陸を探検したリヴィングストンやスタンレーこそが真の探検だとする言説が登場し、戦後には国威の発揚の言説とともに学術探検を振興する声が上がりはじめた¹²。また同書の中で高嶋航氏が指摘するように、近代の冒険や探検を受容することは、帝国主義、社会進化論、ナショナリズムなど付随する諸概念も必然的に受容することだった¹³。つまり福島と郡司という二人の日本人の探検を機に、日本の中で欧米の探検を参照しながら、探検の意味がより拡大していったのである。そしてその背景には、高嶋氏の指摘するようなイデオロギーの力学が働いていたと考えられる。

こうした探検の持つ意味が変容しようとした時期に、能海はあえて「探検」という言葉でチベット行きを表現した。明治26(1893)年能海は『世界に於ける仏教徒』の中で、次のように説明している。

探検の言は今日社会の流行語一大風潮物なるか、此業や豈唯社会のみの専有物ならんや。又以て今日仏教徒の業に移し得べきものなり¹⁴。

能海は探検を「今日社会の流行語一大風潮物」と捉えていた。先に見た鈴木氏等の当時の探検に関する議論を思い出すと、まさに日本社会で探検が議論された時期に、能海は「仏教徒」が「探検」を行うことに意味を見出していたことが窺える。能海が考える仏教徒による探検とは、一体どのようなものだったのか、また地図上の空白を埋める探検から学術的な探検へと移行する探検のメインストリームとは、異なるものだったのか。このように能海が考えた「仏教徒」の行う「探検」を問い直すことで、従来注目されることのなかった近代にお

¹¹ 金子民雄『西域 探検の世紀』(岩波新書2002年)。

¹² 鈴木康史編『冒険と探検の近代日本-物語・メディア・再生産』(せりか書房2019年)p36-80。

¹³ 前掲書,p125。

¹⁴ 『世界に於ける仏教徒』p54。

ける宗教家、仏教徒の行う「探検」を提示することができるのではないか。

そこで能海の探検に注目する本稿は、次の課題を設定する。まず能海の探検から時代性を引き出すことが一つめの課題である。多くの先行研究が参照してきた『能海寛遺稿』や『世界に於ける仏教徒』に加え、『能海寛著作集』に収録された新資料や雑誌投稿文章などを使い、能海がどのような環境の下、探検を志し実行していったのかを具体的に明らかにする。そして二つめに探検の多義性を示すことである。仏教徒の探検を提唱した能海自身の探検前から探検中までの考えを追うことで、地図上の空白から学術探検という近代日本における探検の系譜では網羅されていない第三の探検を示したい。特に仏教徒という立場と近代的な探検との関わりを考察する。これら作業を通じて、明治の青年僧能海寛が追い求めた探検が何であったのかを考察する。

第四節 本稿の構成

上記の課題に取り組むため、本稿は以下のような分析を行う。

第一章「明治二十年代の仏教青年とチベット探検」では、チベット探検を志すようになった背景を追う。本章第二節で先行研究を概観する際に触れたように、これまで能海のチベットへの探検の動機に触れる多くの先行研究は、仏教的側面とりわけ大乘非仏説の存在を指摘するにとどまっている。チベット探検を目指す過程で重要な影響を与えたと考えられる反省会や海外宣教会などの諸団体、また海外布教や他仏教徒との連合といった能海が理想とした仏教にありようについては、個別の言及はあるものの、これらを踏まえたうえでチベット探検の動機を相対的に捉え直すものは無かった。そこで本章では、探検を呼び掛けた『世界に於ける仏教徒』に加え、明治30(1897)年に能海が探検動機を書き付けたメモ「予と西藏」と、明治33(1900)年に書かれたメモ「思想の変遷」を使いながら、動機の形成過程とそれに与えた影響について整理し描出する。岐路に立たされた仏教界、学術界で、いかにしてチベット探検が生まれたのかを具体的に示すことができたらと思う。

第二章「四川に集まった日本人とチベット」では、最初の第一次探検の中でも四川省での動向を整理する。第一探検で能海は、同行者寺本婉雅とともに四川省西部のバタン(巴塘)まで進んだが、「土人の為に遮断せられ¹⁵⁾」という理由で断念し引き返した。これまで先行研究では引き返した原因について、能海が日本に送った書簡の記述に従うだけで、特段注目されたり、掘り下げられたりしてこなかった。しかしそれは当地の政治状況に起因したもので、決して単に役人や兵の個人的な障害ではなかった。また最初の探検で得た名刺や中国の地方政府内の公文書が金城町歴史民俗資料館に残されているが、これら資料の解明や探検の失敗との関係は明らかにされていない。本章ではこれら資料に加え、同行者や協力者の日記と外務省報告を使い、第一次探検の顛末を明らかにし、能海の探検が様々な社会や国際情勢

¹⁵⁾ 能海寛追憶会『能海寛遺稿』(五月書房 1917年) p117 (以下、他の能海関連書籍と区別するため同書は『能海寛遺稿』と記載する)。

に巻き込まれていく過程を描く。また四川省は三回の探検を通して最も長く滞在した土地であり、第一次探検は同地で形成された人間関係のうえに成立した探検でもあった。

第三章「探検における交遊録」では、探検中の能海の交遊録に注目する。先行研究を概観する際にも触れた通り、能海は大陸浪人などとは一線を画した純粋な仏教徒という特定の領域において語られてきたが、探検中の能海の周辺にどのような人物がいて、どのような関わりを持っていたのかという点はほとんど明らかにされてきていない。しかし先述したように、能海が探検を行った当時の中国には、日本人の進出や招聘、また日本へ関心を示す中国人が多くおり、重層的な交流が行われていた時期にあたる。能海も様々な人物と関わる中で情報を集めていた。第二章、第三章を通じて、従来行程だけが注目されていた探検に、情勢や人間関係といった横の広がりを持たせることを目指す。

第四章「仏教徒の探検」では、探検中の認識や目的に注目する。これまで探検中の能海の思想的変容に注目した研究はないが、当時の日本でチベットに関する情報が少なかったことを考えると、探検先や探検に対する認識が変わっていくことは十分に考えられるだろう。そこで探検前と探検中にそれぞれ書かれたメモや書簡などの記述から、各時期の認識を捉え、第三次探検に出かける前に構想した計画を新しい目的と位置付け、両者の関係性を考察する。

終章では各章の分析結果を踏まえて、能海寛が提唱した仏教徒の探検について考察する。

また本章に続く補論「資料の来歴」では、明治期に中国から送られた「荷物」が昭和の終わりに「資料」として発見されるまでの過程を追った。本稿にとって能海の資料は基礎資料として重要であるが、本稿の問題設定にとって、やや二次的な内容となると考え補論とした。

そして付録資料として、能海が第二次探検後に書いたと考えられる見聞録「甘肅論」を収録する。能海が中国西北地方での探検で関心を持ったこと、伝えたいと思ったことがまとめられた本資料は、地理、風俗、歴史、宗教、政治の他、新疆や青海、チベットに対する言及までである。実際に明治 34 (1901) 年 2 月 20 日に本山へ送られたことが確認でき¹⁶、現存資料の中で比較的内容がまとまっている資料である。

¹⁶ 能海寛研究会『能海寛著作集 第 9 巻』（USS 出版 2009 年）p190（以下、他の能海関連書籍と区別するため同書は『著作集（巻号）』と記載する）。

補論 資料の来歴

はじめに

能海の資料は主に三つある。一つは明治26(1893)年哲学書院から出版された能海唯一の出版物『世界に於ける仏教徒』である。これは「西藏国探検の必要」という『反省雑誌』第7号(1893年)などで発表された論文を含む全18章から構成された文章で、宗派、国、地域を越えた全仏教徒の団結を呼びかける能海の仏教改革思想がまとめられている。

二つめに、能海寛追憶会『能海寛遺稿』(私立真宗大谷大学内1917年)がある。同書は消息不明から17年が経って開かれた追弔会にあわせて、寺本婉雅や南条文雄が中心となり編集出版された。中国から南条文雄に宛てた書簡やダルツェンド(打箭炉)で翻訳した梵蔵漢英対照訳の「般若心経西藏文直訳」などの能海寛の探検に関する資料や、消息不明後寄せられた関係者の言葉が収録されている。

そして最後に、能海の日記や書簡、スケッチなどの諸資料である。これら資料の多くは昭和61(1986)年と平成8(1996)年の二度にわたり能海の生家浄蓮寺から発見されたもので、現在浄蓮寺からほど近い金城町歴史民俗資料館で保管されている。これら資料を発見したのが現能海寛研究会理事である隅田正三氏で、劣化が進んだ資料群の保存を目的に2005年から2010年にかけて影印版の『能海寛著作集』(全15巻,USJ出版)が出版された。

本論が主に扱う探検中に書かれた資料は、主に『能海寛遺稿』と『能海寛著作集』に収録されたものである。ではなぜこれら二冊の文献に収録された探検中の資料が現在でも見ることができるのか。どうして雲南省大理周辺で消息を絶った能海の荷物が日本に送られ、さらに昭和の終わりの発見に至ったのか。現在能海「資料」と呼ばれるものが、かつて「荷物」として中国から日本に送られ、日本で保管されてきた経緯を系統的にまとめた研究はない。唯一、ある時期の資料の状態に言及した隅田正三氏「水野斎入書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」(能海寛研究会『石峯』24号2019年)がある。そこで本補論では、能海の資料や隅田氏の研究に加えて、資料発見者であり、能海と同じく波佐で生まれ育った隅田氏へのインタビューも踏まえて、可能な範囲で資料の来歴を整理する。

(1) 中国から送られた「荷物」

資料発見時の様子を隅田氏は自著の中で次のように述懐している。

昭和六一年八月三十一日、浄蓮寺の別宅の回春堂(当時借家)が空家となり、「開かずの間」と言われていた押入れの調査の許可を得て、日曜日の早朝より資料の捜索を行った。八十年間も借家のため押入れは、釘付けされており、開かずの間であった関係で、重要文献が死蔵されていたのである。石炭箱十箱に資料が約八百点、鼠の糞や八十年間の粉塵で取り付く島もない有様であった。〔～中略～〕そして十年後の平成八年十一月十日、再び能海寛新資料が浄蓮寺本堂裏の書庫から二千点にもものぼる大量の資料の発見であった。上海の櫃にギッシリと詰め込まれた中国大陸での記述された日記資料、地

図類、地誌、翻訳文献、四川の草鞋、書籍類などであった。累計で三千点にも上る点数となった¹⁷。

「開かずの間」と本堂裏の書庫から見つかった石炭箱や「上海の櫃」の中から、のべ 3000 点の関連資料が出てきたという。ここで参考までに発見後発表された資料の内訳を挙げる。

幼年期 (M1-14)	帰郷1 (M14-18)	京都時代 (M19-22)	慶応義塾 (M23)	哲学館 (M24-26)	帰郷2 (M26-28)	東京寄留 (M29-31)	帰郷3 (M31)	探検 (M31-34)	浄蓮寺図 書	その他	計
11	9	116	51	84	84	151	32	157	1934	210	2839

(隅田正三「能海寛関係歴史資料分類表」『チベット巡礼探検家 求道の師能海寛』p194 をもとに筆者作成)

図からも分かる通り、3000 点もの資料数のうち大部分を占めるのが「浄蓮寺図書」である。この「浄蓮寺図書」とは、探検へ旅立つ前に能海自ら目録を作成し浄蓮寺に置いていった宗乗関係著書である¹⁸。一方そのほかの資料を見てみると、幼少期や進学のため上京した京都や東京時代のものも含まれており、各時期のものが一応は残っていることが分かる。このうち探検期間のものは、書簡をはじめ日記、地図、スケッチなど探検で使ったと思われる物品や仏具などの将来品をも含めて 157 点あるという。

ではこれらの資料はいかにして日本に送られたのか。まず書簡についてである。能海は中国渡航後、本山へ提出していた上申書その他、南条や浄蓮寺、実弟水野斉入をはじめ、友人、知人に書簡を送っていたことが日記から確認できる。特に浄蓮寺と水野へ出した書簡は浄蓮寺で発見された新資料の中に含まれており、現在でもその内容が確認できる。この日本へ送られた書簡の切手と消印から配達ルート特定した千葉氏によれば、第一次探検で訪れた上海や漢口などの日本郵便局が開設されていた所からは、日本郵便内で逋送され、上海から汽船で運ばれた。そして日本郵便局が開設していない重慶では、大清郵政局を介して上海で日本郵便に逋送された。当時中国は万国郵便連合には加盟していなかったが、1897 年に各国との郵便物交換取扱協定が成立していたため、大清郵政と日本郵便の業務関係がとれたのだという¹⁹。

さらに書簡や日記からは、能海の手を離れてから郵便局に至るまでの間、書簡や荷物が様々な人々によって運ばれていたことが分かる。例えば成都に滞在していた時には、「加藤

¹⁷ 隅田正三『新仏教徒運動の提唱者 求道の師 能海寛』（波佐文化協会 2018 年）p48。

¹⁸ 能海が作成した「浄蓮寺蔵書目録」は、『能海寛著作集 第 15 巻』p274-400 にある。

¹⁹ 千葉正史「清末中国奥地の郵便事情-能海寛の手紙より探る」（『アジア文化研究所研究年報』第 53 号 2018 年）。

氏に托し武田、堺両氏への書面一通、水野宛、本山及国元（静同封）へ二通書面出す²⁰と、重慶へ戻る加藤義三領事に重慶領事館にいる知人宛の書簡と一緒に日本の本山や家族に宛てた書簡を托している。さらに領事館もないダルツェンドやバタンなどの奥地では、知人や兵に重慶領事館まで送るよう托していた。例えばダルツェンドとリタンの境界の町河口（駐屯地名は中渡）で、ダルツェンドに戻る兵士に書簡を托した際に次のように記録している。

七月十四日在中渡汎（又名河口、蛮名ニヤチュカ）中発信。帰爐兵士に托す。

書面	在爐	羅氏托	成田氏宛	一本
	在爐	朱氏宛	一本朱氏	
			一本重慶	本山上申第十三回（在中寺托）
				南条
				国元 ²¹

兵士に渡した「爐」つまりダルツェンドにいる二人の人物に宛てて書かれた書簡には、更に別の人物に宛てた書簡が入っていた。「羅氏」宛てのものには「成田」、つまり第一次探検で当初同行する予定だった成田安輝への書簡が一通入っていた。一方「朱氏」に宛てた書簡には、重慶へ送る書簡が入っており、その中には本山上申書、南条文雄、浄蓮寺に宛てた書簡が入っていた。つまり日本へ向けて出した書簡は、まず重慶まで送られていたことが分かる。この重慶とは、単に地名ではなく、他の書簡がそうであるように重慶の日本領事館を指すと思われる。こうした他の人物へ宛てた書簡を同封し、受け取った人物に更に転送してもらうという手順を繰り返しながら日本各地に書簡を送る方法は、能海の日記からしばしば確認できる。こうして中国奥地からでも、能海は自身の近況を日本に伝えることができたのである。

では、逆に日本から能海に寄せられた書簡はいかにして受け取ることができたのだろうか。第一次探検を終えてダルツェンド滞在時に書かれた水野宛書簡に「返信は清国重慶日本領事館轉文打箭炉能海寛宛にて相届き候²²」とあるように、重慶領事館で転送してもらうよう伝えていたことが分かる。発送・受信ともに重慶領事館が転送場所として一時期機能していたことが分かる。

また書簡ほど頻繁ではないが、能海は荷物を中国から日本に送っていたことが日記と書簡から窺える。資料が豊富に残る第一次探検では、重慶、峨眉から送っていることが分かる。成都に向けて重慶を出発した日記には、「荷物を仕舞、支那カバン及西洋カバンを一団とし

²⁰ 『著作集 第15巻』p188。

²¹ 『著作集 第5巻』p40。

²² 『著作集 第9巻』p175-177。

て、井戸川氏に托し、本国へ好便に送りかへさることを約す²³とあり、重慶領事館に滞在していた井戸川辰三大尉に「好便」で日本に送るよう頼んでいる。また峨眉で従僕等が体力の限界を迎え途中重慶に引き返すことになった際には、自身の荷物を重慶に持ち帰らせている。この荷物には「石摺十四五枚、皆有名のもの、西藏仏十四体、西藏にかんずる要書等も入れ置し候²⁴」と仏教関係のものが含まれていた。更に第一次探検失敗後、ダルツェンドから帰国する寺本には地誌『西藏図考』（黄沛翹輯）を南条に、そして「荷物」を京都か浄蓮寺に送るよう頼んでいる²⁵。これらは第一次探検中の荷物の発送に関する一例だが、現存する資料には第二次探検のものが含まれていることから、現存資料からは確認できないが更に荷物が送られていたことが考えられる。また一例に過ぎないが傾向を見ると、帰国する寺本にそのまま持ち帰ってもらった場合を除いては、重慶領事館に滞在していた井戸川辰三に「好便」があり次第送ってもらうよう頼んでいたことが分かる。つまり井戸川が日本へ送る荷物に便乗させてもらっていたと言える。

しかし、「好便」で送るよう頼んだ荷物は、すぐに日本に届いたわけではなさそうである。明治 34(1901)年 1 月 21 日第三次探検へ出発する前に、重慶にいた能海が妻静子に宛てた書簡を見てみたい。

昨年頃送り出しの荷物の事、近頃よく問合せで見れば、みな上海の本願寺に預けある由、三十二年に貳個、(壺個は支那の竹籠、壺個は支那カバンと西洋カバン^(ママ)とまとめ)、三十三年に三個(一個は西藏經典、一個は西藏仏像画、一個は皮行李の麻布包)以上五個也。〔～中略～〕近頃上海別院の松林氏より好便あれば京都の池田屋(宿屋)へ届くると申来り候。右五個の外に、小包●個と西藏經典沢山(凡そ二個半)は南条先生へ預け置きたれば、小生帰国の上受取候。南条先生よりの手紙にも已に届きたるよし通知有之候²⁶。

この書簡を書いた能海は、すでに日本に届けられていると思っていた荷物のうち5つが、実は上海別院で保管されていたことを知り驚いている。そして上海から京都の定宿池田屋へ送るよう上海別院に頼んだようである。またチベット經典などはすでに南条のもとに届いており、能海が帰国するまで保管してもらう約束をしていたことも分かる。

この書簡で伝えられた5つの荷物と同一のものかはわからないが、明治 38(1905)年チベット探検を達成した寺本婉雅が、インドからの帰国時に上海に立ち寄り、能海の荷物を上海別院で見ている。能海の情報不明後、自身も編纂出版に携わった『能海寛遺稿』の中で寺

²³ 『著作集 第 15 卷』 p157。

²⁴ 『著作集 第 9 卷』 p105-109。

²⁵ 『能海寛遺稿』 p113-115。

²⁶ 『著作集 第 9 卷』 p163。

本は次のように回顧している。「君〔筆者注：能海〕が遺品の行李は尚上海東願寺別院に保管せられたる趣を輪番蓮氏より伝聞し、始めて亡友の生死不明なる事情に驚き、其の遺品を奉持して帰朝す²⁷」と述べている。そして「白色支那靴」、「黒色支那靴」、「古皮子」、「竹製「カワゴ」」とその中にあった「手匣」の四つの「遺品」を持ち帰ったとある。上海本願寺で保管されていた能海の荷物は、寺本によって発見され、そして日本へ渡ったのである。

以上見てきた通り、能海は中国から書簡や荷物を日本へ送る際、新たに成立した国際郵便を用いると同時に、郵便制度が未整備な土地では個人的に運搬を依頼していた。場所や時に応じて様々な人の手を経て日本に届けられたのである。そして日本に届いた荷物は、浄蓮寺の他、南条文雄や京都の定宿で保管された。能海は帰国後自らそれらを整理しようと考えていたようである。特に仏像や経典などの仏教関係のものは南条のもとに送られ、帰国後研究に役立てようと考えていたのだろう。本稿では主に第一次探検時の記録を参照したが、現存資料に第二次探検に書かれた文章や読んだ著書等が含まれていることを考えると、第二次探検後少なくとも一回は荷物を日本へ出したものと思われる。また日本へ届けられたと思っていた荷物が上海本願寺で保管されていたように、能海の手元を離れた後、日本へ送られなかった可能性も考えられる。

（２）日本国内を巡った「遺品」

その後日本に届いた能海の「荷物」に大きな転機が訪れるのは、その一部を収録した『能海寛遺稿』が出版される大正 6(1917)年である。『能海寛遺稿』出版の経緯については、隅田氏「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」で、実弟水野斉入宛て書簡をもとに系統的に整理されているため、ここでは本研究を参照しながら整理していく。

明治 34(1901)年 4 月 21 日付けの妻・静子宛の書簡を最後に能海は消息を絶った。そして明治 38(1905)年波佐から出兵していた岡田喜利太が同郷の小林久太郎に送った軍事郵便をきっかけに「能海横死訛伝騒動」が起る。岡田は従軍先で書いた軍事郵便で、「軍務署長の井戸川少佐」が前年「チベット」からの帰りに通りがかった宿屋の壁に、「土人」に殺害されるという意味の歌と「日本帝国島根県石見国那賀郡波佐村出身能海寛」と書きつけられているのを見たという話を聞いたことが伝えられた。ちょうど同年静子の夢枕に能海が立つなど、郷土波佐では能海の安否を心配し始めていた時期とも重なり、この岡田の軍事郵便が伝えた「訛伝」は瞬く間に広がった。

能海の父謙信は南条文雄へ手紙を出し「訛伝」の内容を伝え、更に南条はマスコミに情報を公開した。その結果明治 38(1905)年 7 月 25 日の『東京朝日新聞』を皮切りに、各新聞は能海の横死情報を報じた。この横死情報は能海の友人たちにも伝わった。その内の桜井義肇は、北京の順天時報社で勤める友人の松島宗衛に調査を依頼した。そして 7 月 26 日浅草本願寺で能海の追弔法会が開かれた。散会后、生死について諸説ある中、報道の訛伝説を尊

²⁷ 『能海寛遺稿』 p221。

重することとなった。またこの時能海の命日は、最後に南条に宛てられた書簡が書かれた明治34年4月18日とされた。実は最後に書かれた書簡は静子宛て4月21日であるため、浄蓮寺は同日を命日とするよう求めたが、本山は南条宛ての書簡の日付18日を採用したという²⁸。

そしてこの追弔会で、中国から送られた能海の荷物が「遺品」として分配された。一つは能海の母校哲学館、二つめに南条が学長を、また後に寺本が教授を務める大谷大学、そして浄蓮寺である。浄蓮寺に渡された「遺品」の目録は、同年7月29日付で南条から静子に送られた書簡から確認できる²⁹。隅田氏によれば、経典が大部分を占めるこの「遺品」と一緒に、「上海櫃」が浄蓮寺に届けられたという³⁰。この「上海櫃」こそ、平成8(1996)年に浄蓮寺本堂裏の書庫で発見された新資料を長年守ってきたそれである。

やがて8月12日になると井戸川に照会を出していた北京の松島から、横死情報が誤報であるという連絡を桜井が受け取る。桜井が受け取った誤報という連絡は、南条を介して浄蓮寺に伝えられた。知らせを受け取った父謙信は、南条に対して帰国を待つことにしたと伝えている。

しかし能海の話が分からないまま、大正6(1917)年寺本や南条を中心に十七回忌追弔法会が浄蓮寺と大谷大学で執り行われた。そしてこの追弔法会にあわせて『能海寛遺稿』が出版された。同書の奥付には、「編輯兼発行人」として「能海寛追憶会」とあり、その代表として寺本婉雅の名前がある。また出版に際して南条、本山から出資があり、残額は出版物の販売と寺本の負担でまかなうことになった。そしてこの時浄蓮寺には、50冊程の販売が割り当てられたという³¹。このことから『能海寛遺稿』の発起人の中でも、南条や寺本が比較的中心的存在であったことが窺える。

ここまで隅田氏の研究を参照して消息が途絶えた後の日本の様子と残った遺品について見てきた。この時出版された『能海寛遺稿』は、能海による経典翻訳「心経蔵梵日漢四体合璧」の他、本山へ提出した上申書を元にしたと思われる『宗報』掲載記事や、『東洋哲学』や南条、寺本に届いた一部の書簡をまとめた「来信集」、そして第一次探検から第三次の大塚までの能海の見聞をまとめた「進蔵行程」などから成る。いわば能海の探検で評価すべき功績と、公にしても構わないと判断された記事や書簡などが大部分を占めると言える。

このうち「進蔵行程」内の「重慶成都間路程略」は、明治32(1899)年4月1日重慶を出て4月28日峨眉山下山までの行程が記録されている³²。そして『能海寛著作集』の収録資

²⁸ 隅田正三「水野斉入宛て書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」(能海寛研究会『石峰』24号2019年) p82-90。

²⁹ 『著作集 第15巻』p522-524。

³⁰ 隅田, 前掲論文。

³¹ 同論文。

³² 『能海寛遺稿』p201-221。

料の中には、この「重慶成都間路程略」と内容が一致する日記「第七号 甲第十一日誌（重慶成都間記）³³」がある。これら二つの資料は小さな村の名前や、路程表に書き込まれた細かいメモ書きに至るまで驚くほど一致しており、『能海寛遺稿』出版に際してこの日記が参照されたものと思われる。

実はこの「第七号」は、他の探検中の日記とは違い、波佐から見つかったものではない。『能海寛著作集』に収録されているが、大谷大学図書館で保管されているものを撮影したものである。その日記の表紙には「宗丙 235 5-3」と書かれたシールが貼られており、また一ページ目の右上に「大谷文庫」、右下には「大谷大学図書」と篆書体の捺印がある。大谷大学には他にも能海が持ち帰った経典が保管されているというが、このような資料とともに、『能海寛遺稿』で参照された日記が現在でも大谷大学に残されている。これは『能海寛遺稿』が現大谷大学の関係者の手によって編纂されたことを物語っているとも言えるだろう。

ここまで見てきたように『能海寛遺稿』は、能海の消息が途絶えた後、その事実を受け入れる過程で編纂出版されたものである。その過程で行われた法要や「遺品」の分配、命日の決定などは、親族ではなく本山や南条などが中心に行っていた。そして『能海寛遺稿』は、発起人に複数の人物があげられているものの、出版費用や大谷大学に残された日記からも分かるように、その中心には南条や寺本などがいた。彼らによって編纂された『能海寛遺稿』は、当時能海の探検において評価に値するものと考えられた内容が収録されているのではないだろうか。

（3）波佐に伝わる「資料」

昭和 61（1986）年に発見された資料は、かつてこの地の主幹産業だったたたら製品を一時保管していた土蔵を回収した金城町歴史民俗資料館に保存されている。そこでは一部の資料が展示され見学することができる。これらの管理を長年続けてきたのが、隅田正三氏である。これまで新資料の発見者として、また先行研究者として何度も隅田氏に言及してきたが、ここでは隅田氏へのインタビューを通じて、「遺品」から「資料」への過程を辿る。隅田氏はおりに触れて能海寛研究会の事績などをご自身で振り返っておられるが、ここでは筆者が隅田氏との会話を通じて感じた「波佐人」としての隅田氏に注目したい。

隅田氏は昭和 17（1942）年に波佐の浄蓮寺門徒の家に誕生した。明治 14（1881）年生まれの祖父は信仰深く、幼い頃から隅田氏は祖父と朝晩念仏を唱えて育った。祖父は「昔、チベットへ行った偉いお坊さんがいた」こと、そしてその人の名前は「寛院家さん」であることを話してくれたという。隅田少年の中に漠然と「寛院家さん」という「偉いお坊さん」の名前が残った。

やがて郵便局で働く傍ら、地元で根付いた社会教育に関心を持つようになる。昭和 27（1972）年生涯学習による町おこしを目指して有志二人と波佐文化協会を立ち上げ、夜間

³³ 『著作集 第 15 巻』 p155-237。

の成人学級や町の歴史や身近な情報を題材としたコミュニケーション誌を季刊発行した。波佐の農家が耕運機を使い始めた昭和 43 (1968) 年には西中国山地民具の会を立ち上げ、農家から不要となった民具の回収・保存を始めるようになるなど郷土史に本格的に取り掛かっていった。この年、島根県の偉人百名を選出する「島根の百傑」という企画があり、波佐からは新劇運動家の島村抱月とともに「寛院家さん」が当然選ばれるだろうと思っていた。しかし結果は島村だけが選出された。そこで隅田氏は「寛院家さん」に関心を持ち、郷土史としての調査を始めた。

波佐で調査を進めていくと、古くからの浄蓮寺門徒の家に箱に入った一冊の本が残っていることが分かった。これこそ大正 6 (1917) 年に出版された『能海寛遺稿』だった。『能海寛遺稿』出版の際に浄蓮寺が販売を請け負った 50 冊のうちの一冊だったと思われる。隅田氏はこの『能海寛遺稿』を読み進める傍ら、自身が運営していた波佐文化協会の文化祭特別展として「能海寛遺品展」を催した。また浄蓮寺に能海の「遺品」が他に残っていないか探し始めた。すると浄蓮寺の法蔵庫に 100 点ほどのチベット経典があるほか、人に貸している家に「開かずの間」があることを聞いた。昭和 50 年代の話である。そして昭和 61 (1986) 年、ちょうど住人がいなくなった貸家の開かずの間が開かれた。

この時の様子については、隅田氏は(1)冒頭の引用文のように振り返っているが、この時祖父が他界する数日前の話が思い出されたという。明治 14 (1881) 年生まれの祖父は、「寛院家さん」がチベットに旅立つときに村人大勢で、広島との県境にある大佐山まで見送ったときの様子を突然話し始めたという。能海も県境まで見送りがあったことを、探検最初の日記「渡清日記」に書きつけている³⁴。隅田氏の中で、祖父から聞いた「寛院家さん」と目の前にある日記やスケッチなどを書き残した能海寛が完全に一致した瞬間だった。

その後平成 7 (1995) 年に波佐文化協会から郷土の偉人に特化した研究会として能海寛研究会を立ち上げた。この会の活動の一環として平成 10 (1998) 年に『能海寛遺稿』を、平成 14 (2002) 年には『世界に於ける仏教徒』を再び出版した。これら出版された能海の著作は、これまで繰り返し述べたように能海に関する先行研究が必ずと言って良いほど参照しており、それ無くしては研究ができないほどの重要書となっている。また能海寛研究会では、年に一度開かれる研究会や機関誌『石峰』を通じて、波佐の偉人としての能海寛に関心を持つ地元の人や、チベットなどを専門とする研究者が集まり、交流が行われている。そして昭和の末に発見された資料の多くは、『能海寛著作集』として出版した。このように能海寛研究会は、能海研究において欠かすことのできないプラットフォームを提供してきた。

現在波佐を訪ねると、島村抱月と能海の略譜が刻まれた「郷土の傑人顕彰板」の向かいには金城町歴史民俗資料館がある。そこでは急須や硯などの展示がある。これは隅田氏が浄蓮寺から発見した新資料ではなく、浄蓮寺の門徒の家から資料館に提供されたものだという。もともとは能海が中国から浄蓮寺に送ったものだが、それを浄蓮寺「住職」(父・謙信か?)

³⁴ 『著作集 第3巻』p240。

から譲り受けた門徒が大切に保管していたものだという。探検に旅立つ「寛院家さん」を見送った門徒は、中国から届いた急須や硯を眺めながら、能海のことを思い出していたのかもしれない。当時390もの檀家を抱えた浄蓮寺の将来の住職として期待された「寛院家さん」は、隅田氏の祖父や急須や硯を保管し続けた門徒のように波佐の記憶として今でも語り継がれている。

以上見てきたように、能海が中国から送った「荷物」は、紆余曲折を経て、現在「資料」として広く目にすることができるようになった。しかし中国から「荷物」として、そして日本国内で「遺品」として移動してきた「資料」は、その途中で散逸した可能性も極めて高く、実際に日記などにタイトルが確認できるものの現存しないものもある。そもそも能海が第二次探検以降、第一次探検ほど記録を残さなくなったことも考えられるが、特に日記については、資料が豊富に残る第一次探検中に書かれたものと異なり、第二次探検では僅か一冊、続く第三次では一冊も残っていない。

そして本稿でも扱う『世界に於ける仏教徒』と『能海寛遺稿』は、能海の故郷波佐で見つかり、そして再版された。中でも『能海寛遺稿』は、親族ではなく本山や南条、寺本などが中心となり消息不明後の処理が進められた時期に編纂出版されたことから、関係者の意向が反映されていたことが考えられる。言い換えれば、『能海寛遺稿』は編纂関係者が捉える、あるいは見せたい「探検」の一側面や能海像が収録されたものと言える。前節で先行研究について言及したように、純粋な仏教徒という固定化したイメージや「探検」の動機が仏教的領域に限定されているのは、本節で見た『能海寛遺稿』が出版された経緯を見れば当然の帰結と言え、同時に同書だけを頼りにした限界点とも言える。本稿はこのような資料の来歴により、従来使われていた『能海寛遺稿』に加え、『能海寛著作集』に収録されたものをはじめとする新たに発見された資料を使うことで、能海の探検を描出していく。

第一章 明治二十年代の仏教青年とチベット探検

はじめに

本章は、能海寛がどのようにしてチベットへ探険しようと思いついたのか、その形成過程に注意しながら述べる。これまで能海の動機は主に大乘非仏説が大きな影響を与えたとの指摘があり、近代仏教史では「仏教本来の姿を求めて」チベットに入った日本人の一人として位置づけられてきた³⁵。確かに明治 26(1893)年に哲学書院から刊行された能海唯一の著書『世界に於ける仏教徒』では、大乘仏教の正統性を訴えることが強く意識されている。この『世界に於ける仏教徒』は、明治 26 年に『反省雑誌』(第 8 年第 7 号)や『天則』(第 6 編第 1 号)、『海外仏教事情』(第 36 号)³⁶の三つの雑誌で発表された論文「西藏国探検の必要」が含まれ、これまで能海の探検動機は主にこの文章をもとに解釈されてきた。明治 26 年時点で発表された動機が、生涯をかけて挑戦したチベット探検の動機と見做されてきたのである。ただ近年、中西直樹氏が『新仏教とは何であったかー近代仏教改革のゆくえ』(法蔵館 2018 年)において、明治二十年代から三十年代の新仏教運動の中でようやく能海を当時日本仏教界内で連携を呼びかけた人物として注目し始めている³⁷。従来チベット探検を行った僧侶としてしか見做されてこなかった能海に、仏教改革を目指した人物として光を当てた中西氏の研究は画期的である。しかし当時の仏教界内に主眼を置く中西氏の研究では、能海の仏教思想と探検との関わりは言及されていない。当時の仏教界の動きを踏まえて能海に軸足を置きながら、探検を志すようになった経緯を見てみるという試みはこれまで行われてこなかったと言える。

また、これまで多くの先行研究が参照してきた『世界に於ける仏教徒』が、仏教改革にあたって新仏教徒がとるべき方策をまとめたという資料自体の性格を考えると、そこからは仏教界と関連した背景しか読み取れないのではないかという資料が抱える限界もあると思われる。普通教校、慶應義塾、そして哲学館で学んだ中で、能海は他領域に脇目も振らずただひたすらに仏教だけのことを考え続けるような少年だったのだろうか。『世界に於ける仏教徒』に書かれていないものの、仏教界以外の領域がチベット探検への思いに影響を与えた

³⁵ 例えば高本康子『近代日本におけるチベットイメージの形成』(芙蓉書房 2010 年)は『世界に於ける仏教徒』をもとに大乘非仏説が入蔵動機であったと指摘した。この解釈は藤井、前掲論文のように、河口慧海や寺本婉雅などと併せて「本来の姿を求めて」チベットへ行った日本人としての位置づけへと繋がっている。

³⁶ 海外宣教会の機関誌『海外仏教事情』の目録は、同会英文雑誌『THE BIJOU OF ASIA (亜細亜之宝珠)』とともに、中西直樹、吉永進一著『仏教国際ネットワークの源流-海外宣教会(1888 年~1893 年)の光と影』(三人社 2015 年)で公開されている。

³⁷ 中西直樹『新仏教とは何であったかー近代仏教改革のゆくえ』(法蔵館 2018 年) p121-122。

ことは無かったのだろうか。

これまで能海研究では、隅田正三「能海寛西藏探検行の源流を探る」(『石峰』11号2006年)が、『世界に於ける仏教徒』の他に、幼少期から探検出発までの資料をもとに、現存資料と経歴に対する詳細な整理を行っている。同論文から本稿も多く情報を得たが、能海の関心事や動機形成において受けた影響については考察の余地がまだ残されている。また本章の趣旨とは異なるが、同じ資料を利用した研究として、能海の理想とした一統宗教に言及した飯塚勝重氏「新仏教徒能海寛と一統教」(『アジア文化研究所研究年報』第50号2016年)がある。両氏の研究は、従来使われてきた『世界に於ける仏教徒』に、新たに探検前に書かれたメモ「予と西藏」と、第二次探検と消息が途絶える第三次探検の間に書かれたと思われるメモ「思想の変遷」を加えることで、探検出発までの能海を考えを、その過程をも含めて捉えようとしている。ただこれら研究では、仏教界以外の領域が探検に与えた影響については言及されていない。

本章はこれら先行研究の成果を参照しながら、能海がチベット探検を決意するまでの経緯を整理する。さらにこれまで十分に言及されてこなかった仏教界ではない領域からの影響についても述べる。これらを通じて、明治という時代に形成された探検への動機を整理するとともに、本章以降見ていく能海寛という人物についても確認しておきたい。

なお本章で扱うメモ「予と西藏」は、ノートの中央が大胆な虫食いに遭っており判読不能な箇所が多く存在する。そこで資料引用時、単純に判読不能な字は、引き続きその字数ごとに「●」で示し、劣化、破損により字数すら判読不能な箇所は「■」で示す。

第一節 「宇内一統教」の「準備」としてのチベット探検

本節は、これまで多くの先行研究が探検動機を確認する際に参照してきた『世界に於ける仏教徒』(哲学書院1893年)を使って、能海にとってのチベット探検の位置付けを確認する。まずこの『世界に於ける仏教徒』がどのような趣旨で書かれたのか見てみたい。さっそうく同書冒頭の緒言をひく。

- 一、此書は欧州における宗教革命の時代に際して我仏教は將に世界に於ける仏教たらんとす。故に仏教徒は之に対するの一大準備を要すべきことを論じたり。
- 二、此書に論ずる所は著者か数年来事に接し時に感して心潜かに計考せる所の意見をは今一冊として編輯せるものなり。
- 三、此書の題号に就き新仏教徒論と題せしか他人の勧告により且つ意義に於ても大差なければ敢て世界に於ける仏教徒と名けたり³⁸

(下線と番号は筆者による加筆)

³⁸ 『世界に於ける仏教徒』緒言。

一、二から、同書はヨーロッパが迎えようとしている「宗教革命の時代」に、仏教が「世界の仏教」となるために必要な「準備」を書いたもので、それはかねてより能海が考えてきたものであることが分かる。「宗教革命の時代」について、同書第一章「宗教の革新」で詳述している。そこでは、欧米においてキリスト教信仰が衰退を迎え、欧米人の宗教思想が満たされなくなってきたこと、それにとって代わる新たな信仰が求められているという認識に基づく宗教の転換を指していることが分かる。能海がこのような認識を持つのは、キリスト教が「偏頗」で「浅近」であるという教理自体の問題や、哲学や科学といった近代学問と対立関係にあるといった理解、さらに政治に利用され信仰が伴わない、また戦争を繰り返してきたことや交通の発達により他宗教の存在を知ってしまったという解釈から来ている。そして、欧米人の宗教思想を満たす宗教は仏教だと主張し、今こそ仏教徒が奮起する好機会だと論を展開する³⁹。

是れ東洋に於ては旧仏教徒に対して新仏教徒の興らさるべからざる所なり。新仏教徒出て始めて此宗教大革命の波乱を鎮め、宇内一統宗教の大業を成就することを得べし。今日の要は唯新仏教徒の勃興是のみ⁴⁰。

一方、東洋では「旧仏教徒」に代わって「新仏教徒」が必要であり、彼らこそがこの革命の混乱を鎮め、さらに仏教を「宇内一統宗教」とすることができるという。つまりヨーロッパにおけるキリスト教の衰退に乗じて、世界的に仏教の影響力を強める、更に「宇内一統教」とするには、仏教徒の中でも「新仏教徒」が必要だということになる。この中で注目したいのは、キリスト教へ対抗する仏教という位置付けであり、仏教の中でも「旧仏教徒」から「新仏教徒」への進化が呼びかけられていることである。そして「世界」や「東洋」とあるようにその舞台が決して日本国内に限定されていないということである。

まず一つ目の新旧の仏教徒について考えてみたい。最初に挙げた緒言の三を見てみると、能海は当初「新仏教徒論」をタイトルにしようと考えていたところ、「他人の勧告」を受けて「世界に於ける仏教徒」へと改めたと説明がある。その際、能海は「意義に於ても大差」が無いと思ったようである。同書本文の中でも、「新仏教徒の定義を下すに於て敢て世界に於ける仏教徒なりと謂はんと欲す⁴¹」とある。では、「世界に於ける仏教徒」、「新仏教徒」とは、どのような仏教徒だと説明しているのか。能海は「宗教革命論の著者中西牛郎氏」の新仏教の説明を引きながら、「実に其意を得たるものなり⁴²」と賛同している。

「中西氏」とは、明治22(1889)年に『宗教革命論』(博文堂)を発表した中西牛郎を指す。

³⁹ 同書, p1-6。

⁴⁰ 同書, p10-11。

⁴¹ 同書, p12。

⁴² 同書, p12。

『宗教革命論』を中心とする中西の「新仏教」の議論を検討した星野氏によれば、中西はキリスト教神学の概念である自然教と顕示教を使ってこれらを宗教の二大要素とし、更に自然教に多神教、一神教そして汎神教という進化論的枠組みを設定した。そして汎神教を基礎とした顕示教の「純然成る宗教」と仏教を位置付け、一神教のキリスト教批判をしつつ、仏教の勝利を論じた。加えて、仏教自身も現状維持するのではなく進化することを要請し、「新仏教」構想を提示した。星野氏は、比較宗教と宗教進化論的な枠組みに基づいて「新仏教」の構想を示した点で同時代的な意義があり、また影響力を持った所以だと言う⁴³。その新仏教と旧仏教の七つの違いを中西は次のように書いている。「旧仏教は保守的にして新仏教は進歩的なり」、「旧仏教は貴族的にして新仏教は平民的なり」、「旧仏教は物質的にして新仏教は精神的なり」、「旧仏教は学問的にして新仏教は信仰的なり」、「旧仏教は独自のにして新仏教は社会的なり」、「旧仏教は教理的にして新仏教は歴史的なり」、「旧仏教は妄想的にして新仏教は道理的なり」⁴⁴。これらの違いは、能海が『世界に於ける仏教徒』で引用し、「実に其意を得たるものなり⁴⁵」と賛同した箇所である。七つの差異についてそれぞれ説明はしないが、自身のいる仏教界と教理以外に関心を持たない、釈尊が説いたものではない仏説まで含む教理を無批判に学び続ける仏教界の現状を、中西は旧仏教批判を通じて批判したのである。この批判に賛同した能海もまた仏教界の現状を問題視していたと考えられる。

国粋主義が勃興した明治二十年代は、欧米の哲学や理学などによる仏教の新解釈が進み、仏教革新が唱えられるようになった。それに伴い啓蒙活動を行う人物が出てきたが、代表的人物が井上円了である⁴⁶。仏教の哲学的基礎付けを行い仏教の再興を呼びかけた『仏教活論序論』等の井上の著作は、「明治初頭の神仏分離・廃仏毀釈、政府の神道国教化政策によってダメージを受け、沈滞していた仏教界を勇気づけ、当時のベストセラーとなった⁴⁷」という。井上からの影響も受けた中西は、井上に代表される「廃仏毀釈後の仏教革新復興の波に乗った」人物として位置づけられている⁴⁸。

中西の議論を支持した青年層については大谷氏の研究がある。大谷氏が『宗教革命論』を読み受容した層として取り上げているのが反省会である⁴⁹。普通教校在学時の能海はこの反

⁴³ 『宗教革命論』については星野靖二「星野靖二「新仏教」のゆくえー中西牛郎を焦点として」(2017年『真宗総合研究所研究紀要』35号 p47-68)を参照した。また『宗教革命論』は国会図書館デジタルコレクションで公開されている。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/814860/71> (2020年11月12日最終閲覧)

⁴⁴ 中西牛郎『宗教革命論』(博文堂1889年)p171-192。

⁴⁵ 『世界に於ける仏教徒』p12。

⁴⁶ 吉田久一『近現代仏教の歴史』(筑摩書房1998年)p89。

⁴⁷ 大谷, 前掲書 p49。

⁴⁸ 吉田, 前掲書 p94。

⁴⁹ 大谷, 前掲書 p47-51。

省会に参加し、同会について「当時予の精神たり⁵⁰」と振り返っている。反省会はそのスローガンである「禁酒進徳」の実践や普及に加え、それを通じた仏教改革を目指した。革新的な青年仏教徒が集う反省会の機関誌『反省雑誌』では、中西の「新仏教」論に共感した文章が投稿された⁵¹。『世界に於ける仏教徒』で能海が中西に賛同していたことを考えると、反省会にいた能海もまた他のメンバーと同じように、沈滞した仏教の再興を志向し、「新仏教」へと呼びかける中西を支持していたと言える。特にキリスト教に仏教が取って代わるという認識と、その大業を「新仏教」に托している所は、特に中西からの影響が確認できるだろう。

中西が示した「新仏教」議論の影響を受けた『世界に於ける仏教徒』は、「新仏教徒」が行うべき準備を具体的に紹介している。この時能海が中西の「新仏教」論にアレンジを加えたとみることができるのが、「新仏教」を世界の仏教徒の問題へと拡大したことである。『宗教革命論』は世界の知識人や歴史を挙げながら仏教の勝利を示そうとしているが、「新仏教」に関しては国外仏教への言及がない。対して『世界に於ける仏教徒』は、そのタイトルや先の引用で新仏教徒が「東洋」で必要だとあったように、明確に世界が対象として想定されている。「旧仏教」についても国外仏教も共通する問題として捉えている。

かかる旧仏教は固より日本のみならず、朝鮮、支那皆尔かり。暹羅、印度などの仏教徒も甚だ精神に乏しく、特に印度、緬甸、安南の如き英に征せられ、或は仏に領せられ悲惨の境に沈めり⁵²。

程度の差こそあれ、少なくとも能海にとって「新仏教」と「旧仏教」は日本仏教だけの問題ではなかったことは明らかである。能海は中西の「新仏教」論を世界の仏教徒にも共通する課題だと捉えたのである。能海は仏教の革命を志向しつつ、『世界に於ける仏教徒』ではその革命の担い手となる「新仏教」を世界で勃興することを望んだのである。

次に、『世界に於ける仏教徒』の主題である新仏教徒が行うべき具体的な「準備」を見ていく。同書は下に示すように全十八章から構成される。第一、二章ではすでに述べた宗教革命や新仏教徒に対する説明がなされ、第三章から第九章までは宇内一統教となるために新仏教徒が行うべき準備が各章で詳述される。そして第十章以降は宇内一統教となるために必要と考える国外仏教徒との連合の「方策」が示されている。

⁵⁰ 『著作集 第6巻』pL89。

⁵¹ 大谷、前掲書 p50。

⁵² 『世界に於ける仏教徒』p14。

第一章 宗教の革新 第二章 新仏教徒 第三章 宗教学上の仏教 第四章 哲学上の仏教 第五章 歴史上の仏教
 第六章 道徳上の仏教 第七章 比較仏教学 第八章 散斯克(梵学) 第九章 仏教国の探検 西藏国探検の必要
 第十章 仏教徒の聯合 第十一章 仏跡回復 第十二章 総会議所 第十三章 巡礼 第十四章 海外宣教
 第十五章 仏教学校 第十六章 仏典翻訳 第十七章 本山政論第一 第十八章 本山政論第二

能海寛『世界に於ける仏教徒』(1893年哲学書院)をもとに筆者作成。

新仏教徒が行うべき準備として挙げられた七つの項目は、宗教学、哲学、歴史、道徳、比較仏教学、サンスクリット語、そして探検である。本稿の主題である探検が見えてきたところだが、もう少し遠回りをして探検以外の準備についても簡単に見ておきたい。そうすることで探検という行為を能海の革命観の中で相対化し、「探検」という言葉につきまとういわゆる突飛さを取り除いてみたい。

組織宗教学	
考	7 実際の宗教学
究	6 宗教進化学
の	5 宗教歴史学
順	4 宗教哲学
序	3 比較宗教学
	2 宗教の分類
	1 宗教の種類

『世界に於ける仏教徒』
 p19-21 を参照し筆者作成。

まず七つの準備のうち宗教学に注目したい。能海は、宗教学によってこそ、仏教とキリスト教の勝敗を判断すべきだと言う。続けて宗教学の考究を左の図の1から7の順序で行うべきだと説明する。

能海の説明によれば、1から7は当時欧米で行われていた宗教学の内容であるが、それでは足りないと言う。そして上部に示した組織宗教学を新たに加えている。それは「真正なる理想的の宗教をば、宗教学上より組織」し、「宗教の進歩」を図り、「宗教上の問題」を判断する基準にしたいと考えるからだ⁵³。つまり宗教学に基づいて、真正で理想的な宗教を作り、まだ解決できないでいる宗教上の問題を、宗教学という学術の力で解決しようというのである。当時は「仏教」概

念とともに「宗教」概念が、日本仏教界では模索されていた時期でもある⁵⁴。能海が「宗教」を作り上げるとした「組織宗教学」とは、かなり抽象的ではあるが、欧米由来の学術の結果を総合的に検討して、改めて「宗教」を問い直す学問だったと思われる。このような学問を「手段」として捉える見方は、中西が挙げた七つの新仏教徒の特徴の一つと重なる。「旧仏

⁵³ 同書, p21。

⁵⁴ 例えば、原坦山、吉谷覚寿、村上専精を通じて、東京大学という官学アカデミズムで行われた「仏教」再考に注目したオリオン・クラウタウ「近代日本の仏教学における“仏教 Buddhism”の語り方」(『ブッダの変貌-交錯する近代仏教』法蔵館 2014年 p68-86)がある。また中西牛郎がキリスト教神学の概念を借りて「宗教」を定義しようとしたことも、模索の一つと考えられるだろう。

教は学問的にして新仏教は信仰的なり⁵⁵」と両者の差異を言った時、「真正なる信仰は学問を要すと雖も、学問は実に其手段に過ぎざるなり⁵⁶」と説明している。つまり新仏教は知識を獲得して満足するのではなく、信仰を篤くするための手段として学問を捉えていたのである。

『世界に於ける仏教徒』で紹介される他の準備においても共通して見られる。例えば宗教哲学については、先述した井上円了がすでに哲学的に仏教の優位性を示していたが、能海は次のように言う。理論上の説明や学者等に真理を理解してもらうには宗教哲学は有用だが、たとえ哲学上真理であっても、仏教は宗教である限り信仰が伴うため、哲学的考究だけでは不十分だ、と。つまり信仰こそが最終的に重要なのである。歴史に関しても、能海は釈迦の伝記を作ることや歴史上仏教が国や人心、社会にいかにも有用だったかを明らかにすべきと言いつつも、最終的には仏教への信仰へと帰結する。つまり学問という手段をとりながらも、その先には仏教への信仰を見据えていたことが確認できる⁵⁷。

これら宗教学や歴史学といった学問と共に、能海は新仏教徒が行うべき準備として、殺生から禁酒論、廃娼論など社会上仏教的実践の問題を扱った道徳と、比較仏教学、サンスクリット語、そして探検を挙げる。特に注目したいのは、各地の仏教を比較する比較仏教学である。能海は比較仏教学を行わなければ、仏教徒が互いに知ることができず「今日此多^(ママ)多端に分かれたる仏教の統合期すへからず⁵⁸」と言っている。繰り返しになるが、『世界に於ける仏教徒』の主役とも言える新仏教徒とは、国内だけの問題ではなく、国外の仏教にも共通する問題として設定されていた。中国や朝鮮、インド、ベトナム等仏教国を具体的に挙げて、次のように言う。

此等仏教徒の元気を鼓舞し、各仏教徒同盟して、進みては宗教革命の大業を成就し、釈尊の聖地仏陀伽耶を回復して天下の仏徒を一堂の下に会せしめ、仏教万歳を称ふる所の大責任を有するものは日本仏教徒を除きて他に求むべからず⁵⁹

⁵⁵ 中西牛郎, 前掲書 p180。

⁵⁶ 同書, p181。

⁵⁷ 『世界に於ける仏教徒』 p22-36。こうした態度は、日本で初めて仏教に対する実証的歴史研究を行った村上専精(1851-1929)が歴史的仏教研究を信仰確立のため、「実用的布教」のために行ったことと類似するのではないかと思われるが、本稿では時間と能力が及ばないため取り扱わない。井上円了と村上専精という哲学的研究から歴史的仏教研究への移行については、江島尚俊氏の「哲学的仏教研究から歴史的仏教研究へー井上円了と村上専精を例として」(『大正大学大学院研究論集』34, 2010年, p244-234)がある。

⁵⁸ 同書, p48。

⁵⁹ 同書, p14-15。

「宗教革命の大業」を成就するには、世界各地の仏教徒の元気を鼓舞して、彼らと同盟しなければならないという。つまり能海は「新仏教徒」論の対象を世界の仏教徒に拡大しただけでなく、彼らが団結することまで呼びかけていたのである。

ちなみに比較仏教学、宗教哲学、歴史学のために博物館、図書館を設け関係図書や仏具、建築、美術品を保管すべきだという意見も同書の中では述べられている⁶⁰。博物館や図書館といった当時日本でようやく取り入れられつつあった設備を、日本国内ではなくインドのブッダガヤに設けようという能海の考えからも、国内外の仏教徒との共有、ひいては団結という姿勢が窺える。遠回りをしたが、能海は学問という手段を通じて信仰の確立を唱えており、またそのために各地の交通が途絶えていた仏教との団結をも呼びかけるという、文字通り「世界に於ける仏教」を見ていた仏教青年だったことが分かる。

最後に探検について見ていく。『世界に於ける仏教徒』第九章「仏教国の探検」は、文字通り仏教国を探検する必要性を述べた後、明治 26(1893)年に三つの雑誌で発表した「西藏国探検の必要」が収録されている。まず「仏教国の探検」では、教家の探検を、布教法を講じるための「伝道開教」の探検と、今日急務と位置付ける「仏教国の探検」の二つに大別する。後者について次のように説明している。

仏書の原本を得んと欲し、又古今仏教伝播の状況、及び仏教の正史を探らんと欲せば、是非古来より仏教の伝りたる国々に向ひて探検を試みざるべからず⁶¹

經典の原書、仏教伝播の状況、正史を求めるなら、仏教国に探検せよと言うのである。より詳しく能海の説明を見てみたい。

何となれば先輩高僧の足跡を訪ふ古来未だ明かならざる歴史を探究し、加之ならず従来仏教国互に隔離して久しく団結せざりしものも、彼此相ひ通し仏陀五億の教徒をして揉て一丸となし、古代高德の大胆勇壯の精気を再起し、万国伝道に怠らず仏教徒組織的運動をなすに於ては、仏教をして世界に於ける一統宗教たらしめんことを敢て難事とする所にあらざるなり⁶²

仏跡を訪ねて仏教の歴史を考究することと、長らく交流の無かった仏教徒の団結を、探検が必要な理由としている。そして五億の教徒が一丸となって、かつての高僧たちのような精気を再び持つことができれば、伝道、運動はおろか仏教を「世界に於ける一統宗教」とすることも難しいことではないと言うのである。つまり能海が唱える仏教国探検とは、歴史的考

⁶⁰ 同書, p48。

⁶¹ 同書, p55。

⁶² 同書, p56-57。

究と仏教徒の団結という目的があったことが分かる。

そして能海はネパール、カシミール、中国、インドなど複数の探検先を挙げるが、中でも「急務」としたのがチベットだった。続けて収録された「西藏国探検の必要」では、チベットがアジアで最も仏教が盛んであること、そして留学生が派遣されていない地域であることに触れ、インドから直接仏教が伝わったとされるチベット仏教の研究と、経典、正伝といった原本の探索などをチベットへ探検しなければならない理由として説明している。続けて同じ大乘仏教を奉じ、また人種も近いにも関わらず連絡が無いのは「不都合千万」だとし、探検し「隠者民」「閉鎖国」を開発、世界に紹介することは、日本仏教徒の責任だと言う。「隠者民」「閉鎖国」と認識していたチベットもまた、団結する対象として捉えていたことが分かる。加えて、まだ誰も足を踏み入れたことのないチベットに入ることは、人類学歴史学社会学の材料となるといった学術的意義も強調している。

更に「急務」で探検すべき理由として、これまで述べてきたような目的や理由とはやや異なる内容が最後に書かれている。能海は「東方問題」と表現しているが、ロシアの南下やヒマラヤ諸国に進出するイギリスといった大国に挟まれたチベットがいつ戦禍に巻き込まれるか分からないという時勢の影響を受けた理由が挙げられている。つまり能海がいくつかある探検すべき場所の中でもチベットを選んだのは、仏教が盛んで、インドから伝わった経典などが期待できることに加え、当時まだ外国人が足を踏み入れたことのない場所であり、それは仏教徒の団結を謳う能海にとって「不都合千万」だったからということがまず言えるだろう。それは能海にとって是が非でも探検すべき場所に映ったはずである。しかし当時中央アジアから東に移りつつあった英露の対立、いわゆるグレートゲームの展開によって、探検すべき場所から「急務」として探検すべき場所へと変わった。

以上、唯一の著書である『世界に於ける仏教徒』をもとに、能海にとっての探検の位置付けを確認しようとしてきた。沈滞する仏教界の再興を志向し、仏教を宇内一統教とするために世界の新仏教徒が行うべき準備を呼びかけた『世界に於ける仏教徒』において、探検はそのための準備の一つとして宗教学や哲学、歴史学などとともに提唱された。あくまで仏教を宗教として捉えた能海は、信仰に重きを置き、当時日本に入りつつあった欧米由来の宗教学等の諸学問をそのための手段と位置づけた。そして探検もまた手段の一つだった。そのため探検には、歴史の考究と仏教徒との団結という、いずれも宇内一統教へとつながる意義が見出されていた。能海にとって探検とは、仏教が世界の宗教となるためのいわゆる革新プランにおいて新仏教徒がとるべき「準備」の一つだったのである。また現在能海の名を有名にした探検先であるチベットは、いくつかある探検先候補の一つであり、チベットに行くこと自体が能海の最終的目的では決して無かったのである。つまり探検を提唱していた能海は、仏教国を探検するという営み自体に明確に宗教革命上の意義を見出していたと言えるだろう。

第二節 「思想の変遷」による述懐

明治 26(1893)年時点で書かれた『世界における仏教徒』から、チベット探検は新仏教徒

が行うべき準備の一つだったことが分かった。しかし能海のこうした考えがいかにして形成されていったのか、詳しい過程は同書だけでは確認できない。そこで本節ではチベット探険を決意するまでの経緯を見るために、一つのメモに注目したい。

タイトル通り自身の思想の移ろいをまとめた「思想の変遷⁶³」は、明治33(1900)年12月22日、つまり二度目の探険である青海省からのチベット入りに失敗し、重慶に戻ってきた頃にかかれたと考えられる。メモの冒頭に「学問に付きて」と但し書きがあるように、「学問」に対する変遷を九つの段階に分けて整理している。

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 一 学問は何の為に学ぶべきもの歟 | 二 普通学の必要 |
| 三 欧米布教策 | 四 英文研究時代 |
| 五 翻訳には梵学の必要を感じたること | 六 梵文經典の不足を感せし時代 |
| 七 自動的東洋学研究必要 | 八 西藏行の感念 |
| 九 西藏学の必要 | |

「思想の変遷」をもとに筆者作成。

メモには具体的な時期は明記されていないが、付記された説明と能海の経歴から、(一)と(二)は普通教校進学前の時期を指し、(九)は探検出発後のことだと考えられる。そして(三)から(八)の期間が、普通教校時代から探検出発までの期間に該当するとみられる。

(三)から(八)を見てみると次のように整理できる。まず欧米への布教のため經典の翻訳を思いつき、英語を学び經典の英訳を始める。すると、サンスクリット語を学ぶ必要があると気づき、サンスクリット語の經典を探すようになる。その過程で欧米の研究が東洋人や仏教徒より進んでいることに気づき、東洋学を東洋人、仏教徒が行うべきだと考えるようになる。これに「中央亜細亜問題」という情勢が加わり、自ら「東洋の秘密文庫」「世間未知の図書館」と期待されるチベットに自ら行くことを決めた、という経緯である。次節ではこの順序に従ってより詳しく過程を見ていく。

第三節 布教からチベット探検決断まで

欧米への布教からチベットへの探険までの過程とその背景について詳しく見ていく。この間能海は、普通教校退学、東京への上京(明治22年12月)、慶應義塾入学(23年2月)、哲学館へ転入学(24年1月)、修了(26年7月)、帰郷、再上京し南条文雄宅に寄留(29年2月)、結婚(30年10月)と身辺がめまぐるしかった。

まず能海が普通教校在学時に参加した反省会と海外宣教会に注目したい。それはこれらの会の機関誌『反省雑誌』と『海外仏教事情』に、「西藏国探検の必要」が掲載されていた

⁶³ 『著作集 第4巻』p229-233。

からだ。さらに明治 25 (1892) 年に書いたメモ「予と西藏」には、「海外宣教会、反省会は当時予の精神たり⁶⁴」とあり、これら二つの会は能海にとって極めて大きな存在であったことが窺えるからだ。

先に第一節で少し触れた反省会から見ていく。反省会は前説で見た布教からチベット探検への過程との直接の関わりは薄いですが、チベット探検を新仏教徒が行うべき準備として捉えた背景として欠かせないと考える。反省会は明治 19(1886)年に京都にある本願寺派普通教校（現在の龍谷大学）の有志によって発足した。禁酒、進徳をスローガンに掲げ、当初より仏教改革を主張した。明治 20 (1887) 年『反省会雑誌』の刊行を契機に、女子教育、仏教文学、宗門教育から海外宣教にまで活動範囲を拡大し、宗派問わず会員数も増加した。明治 29(1896)年には拠点を京都から東京に移し、総合雑誌としての色合いを強め明治 32(1899)年に『中央公論』へと改名し現在に至る⁶⁵。明治 19(1886)年普通教校に入学した能海は、同年発足したばかりの反省会に加わった。会員には、後に東京帝国大学でサンスクリット語やパーリ語を教授する高楠順次郎⁶⁶（当時沢井洵）や経緯会を立ち上げる古河老川（当時古河勇）などがいた。

『反省雑誌』上に、中西牛郎の「新仏教」論を支持する文章が掲載されていたことについては、第一節で述べたが、その時参照した大谷氏の研究は、反省会に参加した普通教校時代から探検までの能海を知るうえで非常に参考となる。特に反省会から経緯会、そして仏教清徒同志会へと繋がる先鋭的な仏教改革を志向した青年たちの系譜に注目したい。仏教清徒同志会は大正初期まで続く新仏教運動の中心的団体であり、経緯会は同運動の発生源と見做されている⁶⁷。

こうした系譜において改革策は徐々に変容を遂げている。経緯会機関誌『仏教』の初代主筆古河老川による「懐疑時代に入れり⁶⁸」（『仏教』83号）は、独断、懐疑、批評という三段階を経て思想は発達するという見方に立ち、批評時代に入った国内キリスト教に対して、仏教はようやく懐疑時代へ突入したと論じる。注目すべきは、独断時代のように仏教を最上無比の教え、唯一真理を説いた説、高尚な道徳と信じて疑わない態度から、歴史や教義発達の

⁶⁴ 『著作集 第6巻』pL89。

⁶⁵ 福嶋寛隆,藤原正信,中川洋子編『反省（會）雑誌 I』（龍谷大学仏教文化研究所、2005年）「序」。同書は『反省会雑誌』の「社説」をはじめとする諸記事のうち本山経営関係を中心にした一部記事が収録されている。

⁶⁶ 高楠順次郎(1866-1945)普通教校出身。反省会設立時からの会員。明治 23 年(1890)オックスフォード大学でマックス・ミュラーに師事。97 年帰国以降、教育活動に奔走した。

⁶⁷ 大谷,前掲書 p82。

⁶⁸ 古河老川（勇）著『老川遺稿』（仏教清徒同志会 1901 年）p106-111。『老川遺稿』は、国立国家図書館デジタルコレクションで公開されている。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/899791/8> (2020 年 10 月 14 日最終アクセス)

過程を研究し、経論を批判検討する段階へ入ったと呼びかけていることである。大谷氏の指摘を借りれば、「中西の影響から離れ、仏教思想・教理の批判的再編に、仏教革命の姿を眺望した⁶⁹」と、中西のように仏教を無条件に最上のものとするのではなく、思想、教理面に対しても批判的姿勢をとるようになったと言える。その後の仏教清徒同志会では、内面的な「信仰」を重視し、それによって社会改善をめざすべきこと、「自由討究」という態度による批判・研究姿勢、宗教の迷信性や伝統仏教の外形的な制度や儀礼の否定、政治権力からの自立といった「新しい仏教」のイメージが提示されるようになったという⁷⁰。つまり、反省会から経緯会、仏教清徒同志会へ継承される過程で、仏教に対する自己批判・検討の対象が拡大し、それに伴い改革政策もより具体的に示されるようになったと言えるだろう。

次にこのような仏教革新運動の系譜と能海の接点について見ておきたい。古河と能海の日記を照合した隅田氏の研究によれば、能海は上京後の明治 23(1890)年 2 月から 6 月にかけて東京三田の龍源寺で古河と共同生活を送ったという。この年 1 月には古河などの普通教校出身者と仏教青年サークル日本仏教青年会のメンバーで仏教の改革を目指す「経緯同盟会（後に経緯会へ改称）」を立ち上げ、明治 31(1898)年島根に戻るまでの間、会是や会員誓約書などを作り運営に携わったという指摘がある⁷¹。つまり先に見た「懐疑時代に入れり」を発表した古河とともに、能海は経緯会の立ち上げから関わっていたことになる。更に、反省会から経緯会、そして仏教清徒会へと母体を変えながら新仏教運動へと進んだ青年たちは、探検へと旅立つ能海のために壮行会を開き激励した。付録資料の 2 壮行会参加者リストは明治 30(1897)年一時上京した能海のために宝亭で開かれた壮行会の参加者をまとめたものである。一部特定することができなかった人物もいるが、16 名の参加者のうち普通教校や哲学館という場で、反省会や経緯会の活動を通じて新仏教運動をすすめるようとした若者の中に能海がいたことが確認できる。

次に仲間達が志向した仏教の革命と、能海と能海が目指すチベット探検の関係を見ておく。実は古河老川もまた明治 28(1895)年に「西藏仏教の探検」という文章を『密厳教報』（3 月）で発表している⁷²。能海と同じく国際的な情勢や未踏の地へ行くことが諸学問に与える影響などとともに、大乘非仏説への反証と期待されているサンسكريット経典があること等の理由が挙げながら、チベット探検の必要性を謳っている。つまりチベットへの探検の必要性自体は、決して能海一人が唱えていたわけではなく、仲間内である程度共有されていたことが分かる。ただ、能海の話が途絶えた後、明治 38(1905)年『新仏教』（第六巻第

⁶⁹ 大谷, 前掲書 p 56。

⁷⁰ 同書, p 58。

⁷¹ 隅田正三「能海寛（石峰）と古河勇（老川）の新仏教運動」（『石峰』第 23 号 2018 年 p53-59）は、古河の「自炊」（『青年文学』1892 年 3 月）と能海の「春秋日記」（1890 年）を通して、明治 23 年 2 月から 6 月にかけての共同生活の様子を明らかにしている。

⁷² 古河, 前掲書 p180-186。

九号)で組まれた「能海寛君について」で、高嶋米峰(高嶋大円)が能海について「能海君というよりは、寧ろ「西藏」という方が通りのよかった位」と言っているように、仲間内でもとりわけチベットに対して強い探究心を持っていた人物とみられていたことが窺える。

以上見てきたように、反省会から経緯会、そして仏教清徒同志会へと進んだ仏教革新運動のメンバーの傍に能海はいたのである。ただ明治 31(1898)年に探検へ出発したことを考えると、能海が関わったのは長く見積もっても経緯会までだと考えられる。一時的だったとは言え、こうした仏教革新運動を志向するメンバーの間でもチベット探検は必要なものとして認識されていたのである。

次に能海が「西藏国の探検」を発表したもう一つのサークル海外宣教会を見て行く。同会は反省会と近い関係にあり、文字通り海外への布教を目的とした。日本仏教が海外で初めて布教を行おうとしたのは、明治 6(1873)年真宗大谷派の小栗栖香頂による中国渡航とされる。しかし教団は日清戦争後日本人の海外進出が本格化するまで海外布教に本腰をあげることはなかった。これとは対照的に世界の仏教者との交流と海外布教を目指した団体が海外宣教会である。同会は欧米の神智学関係者との交流を契機に、普通教校の教員と学生を中心に結成され 26 (1893) 年まで続いた。当初海外との文通は『反省会雑誌』に掲載されていたが、明治 21 (1888) 年に『亜細亜之宝珠(Bijou of Asia)』が創刊され、翌年には海外宣教会が発足した。また国内向けに日本語による『海外仏教事情』も発刊された。

中西氏と吉永氏はこの海外宣教会について詳細な研究を進め、反省会が結成された明治 20 (1887) 年から『海外仏教事情』が休刊される 26 (1893) 年までを「仏教の国際化の時代」と位置づけている⁷³。そして同会の方向性を三つあげている。一つめに宗派の枠を越え、日本仏教界としての結束を目指した点、二つめに海外に仏教勢力との連絡・提携を志向した点、そして海外布教の実施を日本仏教の改革と一体のものと認識した点である⁷⁴。彼らが交流した相手の中でも代表的なのが 1875 年にニューヨークでヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー(Helena Petrovna Blavatsky, 1831-1891)とヘンリー・スティール・オルコット(Henry Steel Olcott, 1832-1907)を中心に設立された神智学協会である。二人はセイロンで仏教の俗信徒となり仏教徒神智学協会を設立すると、セイロンの仏教復興と仏教改革に注力した⁷⁵。彼らの仏教解釈は、東洋思想や西洋オカルティズムなど既存思想との折衷的なものだったが、『海外仏教事情』や『反省会雑誌』では彼らの手紙や刊行物が翻訳、紹介された。そして中でも注目されたのは、オルcottの南北仏教連合の提言だったという。オルcottは明治 22 (1889) 年に来日し講演会を行ったり、政府高官に会ったりしている。欧米仏教徒の

⁷³ 中西,吉永,前掲書 p5。また同書では、国際化を通じて伝わった欧米仏教の影響を与えた青年の一人として能海の名前が挙げられている。同書, p97。

⁷⁴ 同書, p16-17。

⁷⁵ 同書, p171。

来日として空前絶後の大事件だったようだ⁷⁶。

能海はこの海外宣教会に明治19(1886)年には関わり初めている。普通教校の授業でも、最初に神智学関係者へ手紙を送った普通教校教員松山松太郎(?-1906)から翻訳の授業を受けている⁷⁷。また明治22(1889)年9月の能海の日記には次のような記載がある。「英文会の為来、土曜日会にて話し、アジアの宝珠及び十二宗綱要を人をわけて翻訳⁷⁸」。この「英文会」とは同志と立ち上げた「英作文会」を指すと考えられる。「英文会」の仲間と海外宣教会の機関誌『亜細亜之宝珠』と「十二宗綱要」を手分けして翻訳していたことが分かる。この「十二宗綱要」は小栗栖香頂ら大谷派僧侶が中心に執筆した『英文十二宗綱要(“A short history of the twelve Japanese Buddhist sect”)』(1886 仏教書英訳出版舎)と思われる。同書は南条文雄により英訳され1886年に出版されている。1889年時点でなぜ能海たちが翻訳したのかは分からないが、同書がアメリカで初めての仏教誌を出版したカール・カッソー社へ送付されたことから、日本仏教を英語で伝える代表的な本であったと考えられる⁷⁹。これらのことから少なくとも、能海は英語を使って海外の仏教徒と交流する環境の中にいたことは確認できる。能海が『世界に於ける仏教徒』で示した準備の先に捉えていた一統教に見られるような通仏教的思想は、宗派の枠を越えた連携を目指す反省会や海外宣教会からの影響を受けたものと考えられる。

また先に触れた「英文会」は『文学』という英作文集を毎週作成していたが、こうした活動は東京に移った後も続き、『智慧と慈悲(Wisdom and Mercy)』という英文集を毎週作成し、その傍らで経典を翻訳した⁸⁰。このように英語を重視する理由を『世界に於ける仏教徒』内第十六章「仏教翻訳」で、次のように説明している。

オルコット氏の仏教問答の如き、英文を以て成る故、已に十五六カ国の文に翻訳せられたり。此の如く一度仏典も英文に訳せらるるときは、日ならずして又諸国の語に訳せらるべし⁸¹

⁷⁶ 同書, p76-79。日本での熱烈歓迎ぶりや、日本仏教へ及ぼした影響について佐藤哲朗『大アジア思想活劇』(サンガ2008年) p231-275でも詳細に描出されている。またオルコットとともに来日したアナガーリカ・ダルマパーラは、滞在中病で入院していたが、隅田氏によれば、これを看病したのが能海や高楠順次郎だったという(隅田正三『新仏教運動の提唱者-求道の師-能海寛』(波佐文化協会2018年)p10)。

⁷⁷ 『著作集 第3巻』 p11-19。

⁷⁸ 同上。

⁷⁹ また宜昌へ向かう船内で欧米の宣教師と宗教談に及んだ際、能海は『英文十二宗綱要』を渡し、日本仏教について紹介している(『著作集 第3巻』 p309)。

⁸⁰ 隅田, 前掲書 p10。

⁸¹ 『世界に於ける仏教徒』 p83-84。

オルコットによる『仏教問答 (A BUDDHIST CATECHISM)』が英語で書かれたことで世界各地に広がったことを例に挙げ、英語の発信力に注目している。同書は明治 19 (1886) 年に翻訳出版されている。能海が布教のために経典を翻訳しようとしたのは、こうした英語の持つ影響力を認識していたからだろう。

しかし欧米への布教に対する関心とそれに伴う翻訳を進める内に、能海はある課題に直面する。この時の様子を「思想の変遷」で「少しにても英文に仏教経文を訳せんとせば、必ず梵音出て来り。梵語を解せずは、第一其綴すら困る。是非此学は少しく学ばずは、目的達し難しと考へし⁸²」と説明している。つまり経典を英訳するにあたって、漢訳経典にあるサンスクリット語の音訳が障碍となったのである。そして「今日之を欧州文に翻訳せんと欲せば是非原本に由ること必要なり⁸³」と考えるようになり「経典原本」を探し始めるのである。

さらに新たな課題が浮上した。「思想の変遷」内「六梵文経典の不足を感せし時代」では次のように説明している。

少しにても梵語を学び、梵文経を見れば、益々其原文の多からんを望む。然るに甚数甚少し。又欧米梵学の大儒梵本を以て、漢訳経を批判す。自ら進んで彼を圧倒するに非ずんば、欧米に仏教の伝教困難なりと考へ、予に伝ふ原書はニポールより多く出て、印度には已に多く絶へたり。然らば西藏に入らば古来数多年来伝来せる梵本経なしとせず、宜しく行て探さくすべしと⁸⁴。

サンスクリット語の習得と原本を求めた能海は、その数が充分ではないことを知る。また欧米の学术界において漢訳経典が批判されていることも知った。これこそ先行研究で指摘されてきた大乘非仏説であるが、続く一文に注目したい。能海は欧米の研究を圧倒しなければ欧米に仏教を伝えることは難しいと考えていたとある。つまり大乘非仏説に衝撃を受けながらも、能海は布教が困難となることを問題視していたのである。さらに読み進めると、仏教生誕の地インドでは経典原書は消失してしまっていたが、チベットに行けばサンスクリット語の経典が見つかるのではと考えたようだ。つまり仏教を広める目的で経典を探し始めた能海は、その過程で欧米のサンスクリット研究、宗教研究に出会った。この時能海にとって問題となったのは、彼らが漢訳経典、つまり日本仏教の経典を否定してしまうことで仏教を広めるといふそもそもの目的に支障をきたすことだった。こうした経緯から能海は経典のあるチベットに注目したのである。

能海は明治 24(1891)年から南条文雄(1849-1927)からサンスクリット語を教わり始めた

⁸² 『著作集 第4巻』 p230。

⁸³ 『世界に於ける仏教徒』 p50。

⁸⁴ 『著作集 第4巻』 p230-231。

と回顧している⁸⁵。南条文雄は明治9(1876)年オックスフォード大学でマックス・ミュラーのもとサンスクリット語や比較宗教学、文献学を学び、帰国後東京帝国大学で梵語学を教えた。いわば、西洋の仏教学を日本に持ち帰った人物である。能海は『世界に於ける仏教徒』でマックス・ミュラーについて次のように言及している。

英国の大儒マ^(マ)クスミューラー氏の如きは深く梵学を研究し、多く梵本の経典を出版し翻訳し仏学上に於いても其功績至大なり。〔～中略～〕然るに氏尚お大乘非仏説を懐かるるやに聞く、此問題や仏教徒の最も肝を嘗めて探求を凝すべきものにして、此等の疑難を明かに解かずんは将来欧米仏教の伝道は期すべからざるなり⁸⁶。

仏教学の「大儒」であるマックス・ミュラーでさえ、大乘非仏説を支持していることを、深刻な問題として捉えていることが分かる。

また欧米の学术界を知った能海に、新たな感情が生まれたことにも注意しておきたい。「思想の変遷」内の「七自動的東洋学研究必要」では、欧米の「東洋学」の研究者は、仏教徒よりも熱心にサンスクリット語を学んでいることを知り、「自動的東洋学研究必要なり」と考えるようになったとある。明治30(1897)年「石峯」名義で投稿した「東洋学に就きて」(『東洋哲学』第四編第五号)では、もう少し具体的に能海の東洋学に対する考えが披露されている。キリスト教伝道や通商、略地経営のために西洋で研究されるようになった東洋学の発展を振り返り、「東洋人は殆ど東洋にありて東洋学を知らず唯西洋学あるのみ」という状況を「情けない」と述べる。そして次のように主張する。「東洋の先覚者を以て自ら任し、東洋の覇権を云々する日本人たらば、亜細亞大陸の各地に向ひて各種の専門家を派遣して各自任する所に従ひて研究せしむるは当然の事のみ」と。つまり、東洋学は東洋人、あるいは日本人こそが行うべきだと呼びかけているのである。能海が言う「自動的」とは、西洋人から研究される対象に甘んじるのではなく、東洋学という舞台に研究する主体として自ら打って出ることだと言える。また「思想の変遷」の「六梵文経典の不足を感せし時代」の中で、「自ら進んで彼を圧倒するに非ずんば」と言っているように、「彼ら」つまり欧米の東洋学を「圧倒」するような研究を東洋人が行うべきだと考えたと思われる。

では探検前に能海はどのようなチベット研究に触れていたのか。この「自動的東洋学研究必要」の時代が具体的に何年を指すのかは分からないため、ここでは探検出発までに触れた研究を挙げることにしたい。より詳しくは第四章で見て行くが、日清戦争後になると古河老川や渡邊海旭をはじめとする能海と友人関係にあった者たちが欧米のいわゆる東洋学研究的概要を紹介し始める⁸⁷。能海も1896年『反省雑誌』に無記名で「西藏喇嘛の分派」(第11

⁸⁵ 『著作集 第6巻』pL89。

⁸⁶ 『世界に於ける仏教徒』p53-54。

⁸⁷ 例えば渡邊海旭「西藏仏教一斑」(『浄土宗学友会会報』)、古河老川「西藏仏教の探検」

年第8号)と題するチベット仏教の九派を紹介する文章を投稿している。これはドイツのシュラーギントヴァイト(Emil Schlagintweit 1835-1904)の「^(マ)西藏仏教」(“Buddhism In Tibet”(1863)か?)を参照したうえで書いたものという。チベット探検を目指す能海の周辺では、遠く欧米の東洋学の学知を取り入れ、雑誌という媒体を介して仲間内で情報が共有されていたと考えられる。どのような研究に触れたのかは年代が特定できないが、少なくともチベットに関する国外の研究に触れることで、能海の中で東洋学に対する「自動的」な、つまり研究する側に立ち、さらに国外の研究を「圧倒」するような結果を出さなければならないという意識が芽生えたと言えるだろう。

ここまで能海がチベット探検を目指すようになった過程を、当時能海を取り囲んでいた環境、特に仏教界に注目しながらみてきた。最後に、能海はいつチベットに行くことを決意したのか確認しておきたい。「予と西藏」冒頭には、次のような記述がある。

(一) 明治二十一年東温讓印度留学の為出発、其送別会に於て入蔵の必要を述べて彼れの行を送る。

(二) 明治二十五年十二月 (●) 自身入蔵ノ任に当らんと決す⁸⁸。

(一)の明治21(1888)年にインド留学へ旅立つ同窓東温讓⁸⁹の送別会でチベット行きの必要性を唱えたとあるが、(二)では明治25(1892)年に自らチベットに向かう決心をしたと書いてある。このことから、英訳に必要な経典を求めてチベットに行くことを提唱していたものの、自身がチベットに行くという考えは当初は無かったことが分かる。

ではなぜチベットへ自ら行くことにしたのか。「予と西藏」には、タイへ留学した生田得能⁹⁰やインド留学する日本人学生などがチベットを目指したがいずれも叶わなかったこと

(『密厳教報』(古河,上掲書 p180-186 に収録)、渡邊海旭「西藏仏教の二大本尊」(『仏教』第122号)の他、『反省雑誌』にも紫微山人「西藏談(一)」(『反省雑誌』10(1))、秦敏之「西藏国の起源及同国に於ける仏教の弘通」(『反省雑誌』11(4))、高楠順次郎「西藏語及び巴利語の研究に就て」(『反省雑誌』11(9))、藤井直正「西藏国の六字大明呪に就きて」(『反省雑誌』13(4))などが探検出発前に刊行されたものの中にある。

⁸⁸ 『著作集 第6巻』 pL89。

⁸⁹ 東温讓(1867-1893)とは、浄土真宗本願寺派の僧侶で、1888年から1893年にかけてコロombo、マドラス、ボンベイに留学していた。能海とは、普通教校の同窓である。(奥山直司「明治印度留学生—その南アジア体験をめぐって—」(『印度學仏教学研究』第64巻第2号 2016年 p1042-1035)。

⁹⁰ 生田得能(織田得能)(1860-1911) 真宗大谷派僧侶。東本願寺高倉寮で宗学を学び、さらに南方仏教への関心から88年から90年にかけてインドや対へ岡倉天心とともに仏教視察に赴いた。1901年には北京に留学し、十数年かけて「仏教大辞典」を編纂し1917年に刊行

から、「爰に於てか予は果して蔵に入ることを得らるるや否、問題を実地に解せんと欲して支那四川省の道より試みんと遂に決心せるに至れり⁹¹」とある。つまり現在「入蔵熱」と呼ばれる、チベット行きに関する盛り上がりがあったにも関わらず、実際にそれを実現できた者はまだいなかった。この状況を鑑みて、能海は自らがチベットに向けて旅立つ決意をしたのである。

少し注目したいのが、この時すでに四川省からチベットへ入ろうと決めていることである。能海と同じくチベット探検の必要性を唱えた古河老川は「西藏仏教の探検」で、チベットへ入る四つのルートを紹介し、中でも中国から入るルート「東路」と、インドから北上する「南路」が「比較的平易」だと紹介している⁹²。しかし中国本土からチベットへ向かうルートは、後に能海自身も辿るように、四川省の他に青海省と雲南省から入るものもあった。このうち四川省からは、ラサに駐在する駐蔵大臣（アンバン）が北京へ向かう際に通過する道で、中国ではラサへ続く公的なルートだった。能海にサンスクリット語を教えた南条文雄は、明治 20(1887)年上海から嘉興、杭州、紹興を経て最澄修行の地天台宗園清寺まで訪れた際、実は更に歩を進めて四川からチベットへ向かう予定だった。しかし養父発病の知らせにより南条は帰国している⁹³。なぜ能海が四川からのチベット入りを考えたのかを確認できる資料は見つかっていない。しかし南条がかつてチベットに行こうとしていたことを考えると、南条がチベット入りを断念した話を聞き、同じルートを選んだのではないかと考えられる。

再び能海のチベット探検の決意に戻ろう。「予と西藏」で能海はチベットに自ら向かう決意をした頃について続けて次のように書いている。

予の此決心せし頃、已に在印度川上君、蔵行の企てありしことなれとも、予は当時是を知らず。二十六年五六月●の反省雑誌に依て之を知れり。若し已に予か決心の前に、氏こと知れおりしならば、予は■或は成ささりしやもしれず。兎に角知らずして決心せり⁹⁴。

同窓の川上君、つまり川上貞信がチベットに行くことを聞いていたら自らチベット行きを実行しなかったかもしれないと言っている。川上は、オルコットの帰国に伴い明治 22 (1889) 年にスリランカに渡っている。能海は、様々な媒体で「急務」としてチベット探検

した（柏原祐泉他監修『真宗人名辞典』（法蔵館 1999 年）p61-62）。

⁹¹ 『著作集 第 6 巻』 pL89。

⁹² 古河、前掲書 p186。

⁹³ 小川原正道編『近代日本の仏教者-アジア体験と思想の変容』（慶應義塾大学出版会、2010 年）p159。

⁹⁴ 『著作集 第 6 巻』 pL89。

の必要性をうたっていたが、実際にそれを実現してくれる者がいないという周囲の状況から、自ら実践することにしたことが分かる。

能海が命をかけて挑戦したチベット探検とは、もともと宗教革命に向けて新仏教徒が行うべき準備の一つだった。こうした考えは、普通教校で参加した反省会や海外宣教会、そして探検出発まで関わった経緯会など日本仏教の改革をうたう青年グループの中から生まれたものだった。「仏教の国際化の時代」の中にいた能海は、欧米の仏教徒の情報に触れ、海外伝教の必要を認識するようになり、経典の英訳に着手した。そして経典原本を求めようになった能海は、国外のサンスクリット語研究、宗教研究、つまり東洋学に出会う。そして彼らが大乘非仏説を支持していることを知ったのである。そこで反証するためにチベットにあると言われるサンスクリット語経典に目をつけたのである。こうして能海の視界にチベットが現れたのである。ただ、最後に確認したように、チベットへ行く必要性は唱えていても、能海自ら行くことは当初考えておらず、チベットに入ろうとする者が頓挫する様子を見て自ら行くことを決意した。

ここまで見てきた能海に関心がチベットへ向かっていく過程で、国外の東洋学が及ぼした影響は見逃せないだろう。欧米の東洋学で大乘非仏説が支持されていることを知り、反証を求めてチベットへ行かなければならないと考えたことは、能海なりの欧米の東洋学に対する反応の現れだったと捉えることができるだろう。

第四節 仏教外からの影響

ここまで「学問」について書かれたメモ「思想の変遷」と『世界に於ける仏教徒』を通して、仏教的側面における探検動機の形成過程を概観してきた。本節では、ここまで述べてこなかったいくつかの背景を見ておく。本節では明治30(1897)年5月9日に書かれた「予と西藏」というメモを主に参照する。同章ではこれまですでに部分的に参照しているが、改めてこの資料について説明しておきたい。

「予と西藏」は、サンスクリット語を学習する際に使われたノートの一部に書かれた若干3ページのメモである。冒頭に日付が明記されていることから、探検へ出発する年にチベット探検を決意した理由を整理したものと思われる。そして末尾に「此外種々の念願より此決心なせしことあるべきも、主因大略如是八理なり⁹⁵」と説明がある。当初能海は8の項目が挙げたようだが、現在中央が大胆な虫食いにあってしまった同資料からは7項目しか読み取ることができない。その7項目とは、1 経典原本の取得、2 相次ぐ入蔵の失敗、3 地理や旅への関心、4 仏教、僧侶の評価回復、5 チベットをとりまく国際情勢、6 人類学への興味、7 日本国内の気運、である。

⁹⁵ 『著作集 第6巻』p91。



「予と西藏」第一、第二ページ 筆者撮影 金城町歴史民俗資料館所蔵

7項目のうち1, 2, 4, については前節で触れたので、本節では3, 5, 6, 7について重点的に述べたい。

まず3の地理や旅への関心について見てみたい。

次に予が諸科学、特に地理書を愛読し、地図を好んで観、如何なる地も、大となく小となく、細となく粗となく地学を好むことは、予の一の道楽とも云ふべきにして、従て旅行を好み、東京に來りし已來は別して毎夏近縣十一ヶ国を旅行し、危険を蹈み、奇勝を拔渉し、古跡を^(マブ)桑する、予の最も快とする所なり。是か為には生命も忘るる程なり。苦勞も少しも厭はざる所なり。尔り而して世界の地学上最闊なる阿弗利加の中央と亜細亜の中央たり。而して阿弗利加の中央は探險せられて、其声世界にひびきわたる時なるに■中央亜細亜西藏国の尚最闊なるは予の最■所なり。是れ此決心をなす所以なり⁹⁶。

地理書を愛読し、地図を好んで眺め、地学を「道楽」と呼んでしまう能海は、危険を冒しても奇勝や古跡を歩くことが「最も快」と感じ、命も忘れ苦勞も厭わないほど好きだったことが分かる。日本における旅行は、明治元年の関所廃止、四年の国内旅行自由措置化、さら

⁹⁶ 同書, p91.

に鉄道の開通に伴い、明治から昭和にかけて大衆化が進んだ⁹⁷。現存資料には、哲学館時代に学業の合間を縫って、伊豆大島と北関東を訪れた際の旅行記が残されている⁹⁸。これら旅行記には、その日に起こったことや使った金額、歩いた距離などが記録されている。また伊豆大島の旅行記にはその土地の温泉や産業、風俗についても記録と自身の考察が書き付けられている。こうした記録の残し方は、次章以降参照する探検中に書かれた日記にも見られるスタイルである。

そして旅好きの能海は、探検にも関心を示す。能海はアフリカとともにチベットを「最闇」と形容しているが、前節で見たような経典原本が残された場所という仏教的角度によるチベット観とは異なり、地図上の空白地帯として同地を認識していたことが分かる。実はこの資料の別の場所で「西藏国は欧米学者の探検せんと欲して好積●ざる所、是を明にするは、世界学問上の光明なり⁹⁹」と書いている。「好積」の後ろが判然としないが、「ざる」とあることから、チベットに探検しようとしているものの、いまだ好ましい成果が出ていないといった文意だと推測される。少なくともここから分かるのは、欧米の学者によってチベットが探検されようとしていること、そして「世界学問上の光明」と書いているように探検が学問に与える影響を能海がすでに認識していたことである。

このメモを能海が書く前年の1896年には、スウェーデンのスウェン・ヘディンがホータン地方の砂漠から古代都市跡を発見した。またハンガリー出身のオーレル・スタインはヘディンが発見した古代遺跡はダンダン・ウィリクと呼ばれた古代仏教遺跡だったこと、そしてさらに東方の砂漠からニヤの遺跡群を発見した。これら発見された遺跡はガンダーラの仏教が栄えていた頃に建設されたものだった¹⁰⁰。能海が探検を志し、実行に移そうとした時代は、まさに中央アジアでヨーロッパの探検隊が学問上重要な発見をし始めた頃にあたる。しかしチベットに関しては未だ好ましい成果が出ていなかった。

さらに能海は、このようなヨーロッパ人による探検の背景にある国際情勢にも言及している。

東方問題又はパミル問題、英、露、東洋衝突等の問題は益々西藏国の危急を告ぐるものにして、佛者●●たる西藏国を此危急より救済するは、佛徒中日本佛教徒の業務なり、

⁹⁷ 赤井正三『旅行のモダニズム-大正昭和前期の社会文化変動』（ナカニシヤ出版、2016年）p15-22。

⁹⁸ 二つの紀行文「東京南島紀行」（明治25年）、「東北紀行」（明治23年）は、『著作集 第1巻』p77-97、p21-73に収録されている。

⁹⁹ 『著作集 第6巻』p90。

¹⁰⁰ 金子民雄「英露対立から英露協商期における国際政治社会—チベット問題を中心として」p4（白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版2011年）。

責任なり。到底闇黒●●者国として長く閉す能はずとせば、日本佛者●起●ざるべからず。〔～中略～〕（英、露、佛、支等●衝突するに至りては、此国か滅亡するの不幸なるのみならず、此ち古の重宝を世界の珍書を失する佛教の為め、豈遺憾ならずや、是れ入蔵着手の急を認むる所なり）¹⁰¹。

チベットの「危急」を告げるものとして、「東方問題」「パミル問題」などを挙げている。後半の括弧内にイギリス、ロシア、フランス、中国が衝突してしまえば、チベットは滅亡すると言っていることから、「グレートゲーム」と呼ばれる 19 世紀中央アジアを舞台に展開した抗争を指すと考えられる。インドに植民地を持つイギリスと、北から南下するロシアによるこの抗争は、内陸アジアの西方から東方へと移動しチベットにまでまきに及ぼうとしていた。先に触れた探検隊は、学問的目的がある反面、こういった大国間の情報戦という側面も有していた¹⁰²。

そして能海は、このような大国に挟まれたチベットを救済するのは、日本の仏教徒の「業務」であり「責任」だと言っている。伏せ字が多く判読しづらいが、「闇黒●●者国」とは恐らくチベットを指すと思われるが、チベットに対して日本の仏教徒が何かをすべきだと言っている。それは、前節で述べたような旧仏教から新仏教へという移行言っているのか、あるいは当時チベットが行っていたいわゆる鎖国を指すのか、どういった行動を指しているのか判然としない。そして続く括弧内の後半では、チベットにある「珍書」が無くなってしまうことは、仏教徒にとって惜しむべきことで、同地へ急いで行かなくてはならないと言っている。国際情勢よってチベット行きを急ぐのは、第一節で見た「西藏国探検の必要」でも理由の一つとして挙げられている。大国の抗争に巻き込まれようとしているチベットには、未だ中に入れた者がいないという状況が、本来日本でチベットから将来される経典を待つつもりだった能海の足をチベットに向かわせた要因だと考えられる。

そして次に注目したいのが、次の一節である。

予は人類学を哲学館に於て少しく学び、其^(ママ)境味を感じ、人類学的感念より西藏国研究の^(ママ)念^(ママ)生したるも、又一原因なり。

第一節で見た「西藏国探検の必要」では、誰も足を踏み入れているチベットへの探検は歴史学や社会学とともに人類学の材料となることが説明されているが、ここでは探検動機の一つとして人類学への「境味」からチベット研究の「念」が生じたと書いている。能海は明治 26 (1893) 年 1 月から 2 月にかけて哲学館でイギリス留学から帰国して間もない坪井

¹⁰¹ 『著作集 第 6 卷』 p90-91。

¹⁰² 金子、前掲書。

正五郎の「人類学大意」という三日間の講義を受けた¹⁰³。たった三日間の講義であるが、チベット探検の要因の一つとしてわざわざ挙げられていることは注目すべき点だろう。

哲学館で坪井の講義を受けた際の授業ノートは現在も残っており、人類学の定義や方法、対象といった人類学の入門とも言えるような内容が教授されたことが窺える。またこのノートの末尾には、留学帰りの坪井正五郎の研究室にニューギニア等南洋諸島の民芸品をはじめとした資料や書籍が所狭しと並んでいる様子が書かれ、紹介されたと考えられる人類学の洋書の複数の書名が書き込まれている¹⁰⁴。

当時坪井はイギリスから帰国したばかりで、東京大学での講義はまだ始まっていない。ただ「予と西藏」が書かれた明治30(1897)年当時は、日本の新たな植民地となった台湾に人類学者が派遣され、帝国日本の領土内の人間をいかに表出するかという「日本人種論」が課題として浮上りつつある時期に当たる。この日本の人類学が当時直面した課題について分析した富山氏は、それまで西洋から観察される客体だった日本が、自らを観察する主体として設定し直し、アイヌや琉球などの新たな領土を観察の客体として捉えようとしたという、いわば観察の客体の構造的転換を日本人類学が目指していたと指摘する。この時富山氏は、人類学者白井光太郎が、外国人による日本国内の調査に嫌悪を示し、国内の人類学会設立を賞賛したことを挙げながら、次のように叙述している。「これまでに指摘された白井自身のナショナリストとしての人格の問題ではなく、「西洋」によって語られてきた「自国」ではなく、自らが語る「自国」という自己言及的な祖国(=日本)を表出しようとする」と白井の言動を捉え、そこに日本人類学の出発点を看取しようとする¹⁰⁵。このようなナショナリストという個人の人格の話に回収するのではなく、近代の学知に対する主体の獲得への動きと読み取ろうとするのは、本稿にとって示唆的である。

ここで出た主体という言葉は、前節で欧米の東洋学を知った能海が「自動的東洋学研究必

¹⁰³ 川村伸秀は『坪井正五郎-日本で最初の人類学者』(弘文堂 2013年)で井上円了と坪井の関係性を述べる中で能海の授業ノートに言及している。川村氏によれば哲学館で帰国間もない坪井が講義を行ったのは、井上と東京大学予備門の同窓であったことと、坪井の最初の著書『工商技芸看板考』が、井上が設立した哲学書院から出版されたことから、両者の関係性が深かったためだと推測している。

¹⁰⁴ 講義ノートは『著作集 第11巻(上)』p284-312に収録されている。また能海が受講した「人類学大意」は明治26年1月から8月にかけて『東京人類学会雑誌』で「通俗講和 人類学大意」として断続的に計5回掲載された。しかし同誌の連載は講義内容が終わる前に終了してしまっただけである(川村,前掲書)。

¹⁰⁵ 富山一郎「国民の誕生と「日本人種」」(『思想』845 岩波書店 1994年 p37-56)。この他当時の人類学については、富山『暴力の予感-伊波普猷における危機の問題』(岩波書店 2002年)、坂野徹『帝国日本と人類学者-1884年—1952年』(勁草書房 2005年)を参照した。

要なり」と感じたことについて述べた際にすでに出てきた。能海は東洋人こそが東洋学を進めるべきだと主張した。同じ頃『反省雑誌』では、パリで開かれた万国東洋学会について書かれた「万国東洋学会と仏教者」（『反省雑誌』12(8)）が発表された。この論考でも、東洋学に対する日本人の立場に関する言及がある。無記名の文章であるため筆者は特定できないが、当時の一つの意見として参考までに見ておきたい。

我党が多年一日仏学研究法の刷新を説くも、宗教学者の無能を罵るも、梵語学の必要を勧むるも、西藏探検の急務を論ずるも豈他志あらんや、日本今後の仏教をして世界の仏教たらしめ、宗教的感化を世界に進出せしむると同時に、少くとも東洋文学の中心として欧州学者の手より我国に奪い廻へさんと思へはなり

この文章の筆者によれば、仏教学の研究法や学者について、またサンスクリット語をすすめチベット探検の急務を呼びかけたのも、日本で今後形成される仏教を世界に広めるためだけでなく、東洋文学の中心を欧米学者から奪い返すためでもあるという。まさに先に述べ近代的学知に対する主体の獲得といった態度がはっきりと読み取れる。当時の人類学が置かれた立場は、能海のような仏教青年にとっても共鳴するような状況だったと考えることも可能ではないだろうか。能海が人類学に関心を示したのは、これまで見たような地図や旅を好んだという個人的嗜好からくる学問内容に対する関心も当然あるだろうが、ここで見たような自ら研究する側として打って出るという「自動的」態度が同じく求められている学問として捉えていた可能性も充分にあると筆者は考える。『世界に於ける仏教徒』で、チベット探検が人類学や歴史学、社会学の材料を提供しうると言及したのは、こうした仏教界だけでなく日本の学術界の状況を把握したうえでの発言だったと考えられ、その意味で能海の仏教だけに留まらない視野の広さが窺える。

続いて「予と西藏」に書かれた最後の「原因」を見てみたい。分量が多く、劣化が著しく判読できない箇所も多いため、写真を一緒に掲載する。

又最後に二十年已来の日本人の気力の●加はり、大に憤起せんとするの■となり。予も一は其氣に喚ひ起されたるの感するなり。■遠征旅行郡司氏航艇千島行の如きも火■將に噴火せんとするものの、僅かに一●部に向て発■如きなり、予は此二件を見■にあらず、接心せり、尚時は此に至りて■かる事ありしなり。又此二氏を歓迎■人皆●●其方に向ひし●●るべく日く東■間、日く東^(マ)方協會等如き事の●●せる時機たるし●り、此大機運は遂に日清の戦争となりし●、是れ朝鮮事件によると雖も、是れ只導火のみ、日本国の精神も●●より●気力内々居ればなり。故に日本新聞なども当時優しく戦争論をなし、国民の元気をこぶしおれり。征韓論尊たしきりにほめおりし如き、又当時南洋熱の盛なりしが如き是なり。此氣力以て又清国に勝を得しものなり、此氣機を見て



「予と西藏」第三ページ 筆者撮影
金城町歴史民俗資料館

とう遂に開戦となり。予も一は●
気遂に感動されたるものなりか
如し¹⁰⁶

ここでは、「原因」の一つとして当時の日本国内の社会的気運、特に日清戦争へ向けての盛り上がりや、戦勝によって受けた「感動」が挙げられている。中でも「郡司氏航艇千島行」とあるように、郡司成忠(1860 - 1924)の千島探検も当時の日本国内における盛り上がりの一つとして捉えていることに注目したい。能海が探検に出かける前の日記には、郡司の探検の他、シベリア単騎横断を成功させた福島安正(1852-1919)

を訪ねた記録がある。そこでは中国内地のことだけでなく、ビルマやペルシャの旅行話を聞いたようだ¹⁰⁷。このように、国内で報じられる日本人の探検にも関心を持ち、それは実際に訪問するほどの強いものだったことが窺える。

また前後が判読できないが、明治24(1891)年に設立した東邦協会の名前も確認できる。同会は東南洋の地理、商況、兵制、殖民、国交、歴史、統計などの探求を目的とし、日清戦争前の明治27(1894)年には977名の会員がいたという。発足者の一人は「支那内地の探検」に従事した小沢豁郎であり、事業の一環として探検員が派遣された¹⁰⁸。繰り返しになるが、この東邦協会がどのような文脈で出てきたかは分からない。そのため同じ日本人による探検事業という文脈で東邦協会が書かれたかは判然としない。少なくともここから読み取れるのは、日本人による対外進出という社会的動きにも注目していたということである。引用文後半に日清戦争開戦へ向けての国内世論の盛り上がりと戦勝によって「感動」したとあることを踏まえると、こうした日清戦争前後の日本国内の気運は、能海のチベット探検に直接的に影響を与えたとは言いがたいかもしれないが、少なくとも探検へ挑もうとする能海の背中を押した一つの要素と捉えることはできるだろう。

¹⁰⁶ 『著作集 第6巻』p91。

¹⁰⁷ 『著作集 第2巻』p72。

¹⁰⁸ 朝井佐智子「日清戦争開戦前夜の東邦協会-設立から1894(明治27)年7月までの活動を通して」(2013年愛知淑徳大学博士論文)。

以上、メモ「予と西藏」を通して、これまで言及のなかった4つの影響を概観した。本節では、前節まで見てきたような仏教の改革を求め、さらに宗派や国を越えた通仏教的な連合を唱える姿とは異なった能海の横顔が垣間見えたように思う。旅や地図を好み、地理や探検にも注目しており、さらに哲学館では人類学に出会った。坪井の研究室や探検を経験した福島安正を訪ねるなど、そのためなら行動力も発揮するような人物だったようである。またチベット探検に対しては、仏教学だけでなく歴史学、人類学、社会学等他学問における意義も意識していた。当時日本で誕生し始めた学問に触れていた能海は、宗教革命から端を発したチベット探検に別の意味を見出したのである。さらに、はるか中央アジアで外国人によって行われていた探検や、同じく探検と呼ばれる挑戦に成功した日本人の活躍は、日清戦争前後の国内の盛り上がりも相まって、チベット探検を目指す能海の背中を押ししたものと考えられる。

おわりに

本章は能海がチベットへの探検を志すようになった過程を見てきた。能海はチベット探検を、宗教学などの諸学問と同じく信仰のための手段として捉えていた。こうした考えは、普通教校で参加した反省会や海外宣教会、そして経緯会など日本仏教の改革をうたう青年グループの中から生まれたものだった。仏教革新を志向する青年たちの中にいた能海は、チベット探検だけでなく、さらに国外仏教徒との連携も呼びかけた。こうした考えに至ったのは、まさに中西氏等が言うところの「仏教の国際化の時代」のまっただ中で、反省会や海外宣教会などを通じて欧米の仏教徒の情報に触れたからだった。そして海外伝教の必要を認識するようになり、経典の英訳に着手し、そのために経典原本を求めるようになった時期に、経典のある場所としてのチベットが現れたのである。ただ当初能海は探検の必要性は唱えていても、当初自ら行くことは考えておらず、チベットに入ろうとする者が頓挫する様子を見てようやく自ら探検に出ることを決意した。

このような能海がチベットに関心を持ち始めるようになる経緯、あるいは仏教革新プランにおけるチベット探検の位置付けについては、チベットとセットで能海を語ってきた研究者はあまり注目してこなかった。しかし能海個人に焦点をあてる本稿にとっては重要である。特に今後探検という行為を通じて、チベットに対する考えや位置付けがいかに変わっていったのかということを考えるうえで参照軸として必要となる。

また、仏教革新運動とは異なる事柄も探検出発の背景にはあった。地理学や人類学、探検といった仏教以外の諸学問への関心や、チベットを取り巻く国際情勢が不安定であるという認識、さらに戦勝に沸き立つ国内の気運といった仏教界とは一見関わりが無いように映る領域から受けた影響も、「予と西藏」というメモにあるように確かにチベット探検へ向かう能海の背中を押しした事柄だった。

1880年代の日本の初期の仏教学における仏教の語りとその思想史的意義を検討したオリオン・クラウタウ氏は、この時期を“仏教が Buddhism になる”物語として語る事が可能

だと言う。現代的意味を持つ「宗教」概念が当時定着するに伴い、国内仏教ではその枠組みで自らを語り直すプロセスが展開された¹⁰⁹。本章で確認した能海が仏教革新運動の中でチベット探検に出会い、実行へ移そうとする時期は、まさに宗教としての仏教が模索されていた時期にあたる。能海が欧米由来の宗教学を踏まえながら、信仰に重点を置いたことは、宗教学という国外から入ってきた新しい枠組みで、仏教徒の立場から仏教を語り直そうとしたと見ることができる。また、欧米の東洋学に出会った能海が、「自動的東洋学研究の必要」に気づきその反証として経典を求めたことも該当するだろう。能海の表現を借りれば、国外から入ってきた新しい枠組みを「自動的」に取り入れ、仏教徒の立場から仏教を問い直そうとしたのである。

では、仏教を問い直す中で実行された探検は、能海にいかなる影響を与えたのだろうか。仏教徒を新仏教徒と旧仏教徒に二分し、新仏教徒の勃興を望んだことと、探検との関係性はいかなるものだったのだろうか。中国に渡って四川省へ向かう船内で探検を始めたばかりの能海は次のような一文を日記に書き留めている。

予か遊蔵は一は此無人の境に於て、大に天地の如き究め、新仏教を起し、此新世紀を救はんが為なり¹¹⁰。

チベット探検の目的として、「無人の境」で新仏教を起して新世紀を救うことがあり、じきに訪れる二十世紀にそなえてチベットにも新仏教徒を、と考えていたことが分かる。本章で見たような、探検に対する思いを持っていた能海がどのような探検を実行したのか、次章以降見ていく。

¹⁰⁹ オリオン・クラウタウ「近代日本の仏教学における“仏教 Buddhism”の語り方」(『ブツダの変貌-交錯する近代仏教』法蔵館 2014年 p68-86)。

¹¹⁰ 『著作集 第3巻』p310。

第二章 四川に集まった日本人とチベット

はじめに

明治 32 (1899) 年 8 月 11 日能海寛は、中国四川省のバタン (巴塘) に到着した。バタンからさらに西に進みチベットのラサに入り、経典を日本に持ち帰ろうと考えていた。しかし同年 10 月 1 日には西へ進むことを諦め、同地を去っている。

能海は中国大陸から三度チベットを目指した探検を試みたが、バタンで入蔵を断念した最初の挑戦は第一次探検と呼ばれる。この探検では、大谷派僧侶の寺本婉雅や外務省から派遣された成田安輝という入蔵を目的とする者たちと同行あるいは接触していた。

この期間に書かれた資料は、能海的全探検の中で最も多く、日記の記述も最も詳細に書かれている。しかしバタンで書かれていた日記「第参号」は 9 月 18 日以降書かれておらず、なぜ同地で探検を断念せざるを得なかったのか知ることができない。またバタンを離れた 10 月 1 日からダルツェンド (打箭炉) へ戻るまでの経緯も日記による記録は残っていない。後に能海はバタンでの断念の理由を「土人の為に遮断せられ¹¹⁾」と述べており、これまでの研究は能海の言葉をそのまま継承し、それ以上探求することはなかった。

またこの時期に能海が使い、日本へ送った資料として「傳牌」がある。この「傳牌」については、これまで中国で取得したものとして「護照」とともに紹介され、「傳牌」に対して「旅行許可書」という誤った説明が散見される。しかし本章で述べるように、この「傳牌」こそ、日記などの資料が欠落した時期の能海たちの動向を示す資料だった。

本章ではバタンで断念したという動向は明らかとなっているものの、その経緯の細部については不明な点が残されていること、また「護照」や「傳牌」という資料に対して十分な分析が行われてこなかったという先行研究の空白を埋めることを目指す。そのため能海の日記や書簡、そして「護照」や「傳牌」といった諸資料を、同行者や協力者の資料や重慶やバタンなどの地方志と照合することを通して、その経緯をより具体的に描出したい。

第一節 同行者寺本婉雅と成田安輝そして護照

(1) 重慶領事館の護照

明治 31 (1898) 年 10 月 4 日島根県波佐にある生家浄蓮寺を発った能海は、京都で渡航の手続きを済ませ、11 月 12 日神戸港から上海へ渡った。そして上海から漢口、宜昌、三峡を経て翌明治 32 (1899) 年 1 月 7 日夜八時半頃重慶に到着した¹¹²⁾。翌日上陸すると日本領事館を訪ねた。その時の様子を実弟水野齊入に次のように伝えている。

己に領事館内には東京にて支那語学校にて友人の井戸川大尉及原田の二氏あり。其他

¹¹¹ 『能海寛遺稿』 p117。

¹¹² 『著作集 第 5 巻』 p389-390。

の人々も已に東京の時事、日々、朝日、日本等各新聞にて小生の来ること知る居り、皆うわさ中へ参り、非常に好都合に候¹¹³。

また麦生富郎に宛てた書簡にも領事館に到着した様子を伝えている。

領事館には、領事家族、子供共十二人にて、余及蔵同行の成田氏、及び警部、書記、翻訳官、陸軍大尉、及同人書生、七人は一食堂に会して食し、互に談話し、又領事之所に時々御馳走に招かれ、支那人よりも御馳走に招かれ候¹¹⁴。

明治 29 (1896) 年 5 月に設置された重慶の日本領事館¹¹⁵には、領事家族の他、能海と同行する予定の成田安輝や、詠歸舎で既知となっていた井戸川辰三や原田鉄等、数人の日本人と中国人ボーイがいた。日本の新聞報道を通じて能海が来ることは重慶領事館に伝わっていた¹¹⁶。

重慶では小梁子街（現在の民族路）にある日本領事館に身を寄せた能海は、領事館の日本人たちとコミュニケーションをとっており、チベットへの探険に必要な情報を集めたと思われる。それは単なる道案内というよりも、現地の情報を細かく集めなくてはならなかったからだと思われる。重慶に到着した当時は、ちょうど近郊の大足県で余棟臣（又は余蛮子）率いる反キリスト教運動の教案がまさに起こっていた。重慶は光緒 17 (1891) 年に海関ができ、光緒 21 (1895) 年に開かれた当時としては新しい開港地であった。しかしキリスト教の宣教師たちは明代から四川省で布教を始めており、光緒 15 (1889) 年には 82 人（最多の江蘇の 99 人に次ぐ）で、宣統元 (1909) 年には 180 人と中国全土の中で最も多くの外国籍宣教師を抱える省だった¹¹⁷。同省へ宣教師が進出するに伴い 1840 年代以降、宣教師や教会そして中国人信者をも対象にした教案が各地で勃発した。中には光緒 21 (1895) 年の成都教案のように、周辺地域をも巻き込み、英米仏各国政府が中国官吏の処分を求め、長江や中国沿海に軍艦を派遣するといった外交問題へ発展するものもあった¹¹⁸。

当時重慶から能海が送った書簡には、宣教師たちが内地から避難していることや、フラン

¹¹³ 『著作集 第 9 巻』 p82。

¹¹⁴ 同書, p336-337。

¹¹⁵ 外務省外交史料館蔵『外務省警察史』 50 巻（不二出版 1996 年） p293。

¹¹⁶ 例えば 1898 年 11 月 15 日付の『朝日新聞』は「邦人の西藏探検」という見出しで、能海寛が 12 日に神戸港を出帆し四川省からチベットに入る予定と報じている。また同時に陸軍省から派遣された人物と同道する予定であるとも報じられている。これは成田安輝を指すと思われる。

¹¹⁷ 呉康零主編『四川通史 卷六』（四川人民出版社 2010 年） p139。

¹¹⁸ 隗瀛涛主編『四川近代史稿』（四川人民出版社 1990 年） p170-172。

ス人宣教師が捕虜となっていること¹¹⁹、そして重慶・成都間の道が通行できなくなってしまうことが伝えられている¹²⁰。能海が伝える通り、宣教師の拘束により、フランス川東司教、重慶領事、公使はそれぞれ中国政府に対して宣教師の解放を求め、中国政府も官吏を送り余棟臣との交渉を開始していた¹²¹。能海が初めて見た重慶は、このような混乱の様相を呈していた。そもそも重慶の情勢は、能海の中国渡航自体にも影響を与え¹²²、さらに後で見るように重慶道台はじめ清朝政府が対応に追われる状況が第一次探検にも影響した。当地の人々の間では、外国人が誘拐した子供の眼球から薬を作るという噂が広まっていたり¹²³、宣教師が神の逆鱗に触れたから異常気象が起こったという迷信が通ってしまっていたり¹²⁴という状態だった。四川省はキリスト教が比較的進出していた地域ではあったものの、同時に現地の雰囲気は「洋人」すなわち外国人に対しては極めて排外的でもあったと言える。

このような教案の嵐が吹き荒れる重慶で、能海は入蔵の準備を進めていく。上陸した翌日の日記には、「九日 井^(マ)氏の語話により、護照願書、又居住届を二通宛出し¹²⁵」とあり、井戸川からアドバイスを受けて護照の願書と居住届を提出したことが分かる。護照は中国内地を遊歴する外国人に交付される書類で、咸豊 8 (1858) 年に英清天津条約が締結されたのを機に始まった。日本人には、日清戦争後の明治 29 (1896) 年に締結された日清通商航海条約第六条に基づき交付が始まった。護照の交付にあたって申請者は領事館で申請し、領事館は護照を作成し、それを清国の地方官に送り副署を貰う必要があった¹²⁶。つまり護照は領事

¹¹⁹ 重慶から水野に宛てた書簡には「成都府とて四川の都と重慶間余蛮子の暴徒の為に殆んど交通断ち、仏国宣教師一名捕人（トリコ）となり、一度支那政府より二万両にてとりかへしも、再びトリコになり、加之支那の講和談判委員まで合せて捕へおる由、来春（旧の）平定の見込に御座候。余蛮子の為に耶蘇教信五六万人殺害せられたり」とある（『著作集 第 9 卷』 p83-84）。

¹²⁰ 『能海寛遺稿』 p46。

¹²¹ 隗瀛涛,前掲書 p178。

¹²² 渡航前に京都で書かれた日記には、それまで能海の渡清を延引させた日清戦争などと並んで「特に近来支那重慶に余蛮子騒動に付、渡清に影響せり」とある（『著作集 第 3 卷』 p247）。

¹²³ 呉康零主編,前掲書 p96-98。

¹²⁴ 同書,p318-322。

¹²⁵ 『著作集 第 5 卷』 p390。

¹²⁶ 日清通商航海条約第六条は次の通り。「日本国臣民ハ、自国領事ヨリ下付シ地方官ノ副署シタル旅券ヲ携帯スルトキハ、遊歴又ハ商用ノ為メ清国内地ノ各部ニ旅行スルコトヲ得、而シテ該旅券ハ旅行地方ニ於テ検査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキトシ、該旅券ニ不正ノ点ナキニ於テハ携帯者ハ進行ヲ許可セラレ、且其旅行用ノ為メ又ハ携帯品商品運搬ノ為メ人夫、畜類、車輛船隻ヲ雇入ルルニ故障アルヘカラス、若シ旅行者ニシテ旅券ヲ携帯セス、又ハ法律ヲ犯ストキハ、之ヲ処分スル為メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ、但シ其

館から交付される書類であったが、中国の地方官吏の副署が無くては成立しない書類だった。重慶に到着してすぐの9日に護照を申請した能海は、12日付の南条文雄宛の書簡に護照を受け取ったことを次のように報告している。

四川、雲南、貴州省、及西藏への護照（旅行免状）も已に得、成田氏と凡そ三月十日前後同道、打箭爐に向て出発之予定に御座候。西藏書入の護照は至りて難得由に御座候。

127

この時点の能海の計画では、3月10日頃にダルツェンドに向けて成田と出発する予定だったようだ。チベット行きが認められることは極めて珍しかったことは、この南条宛書簡の翌日に書かれた水野宛の書簡からも分かる。「已に四川、雲南、貴州省及西藏への護照とて旅行免状を得候。是は実は西藏へ入ることは公然得ることは六ヶ敷様子に候へ共、重慶道台の懇意にて調印致呉れ候¹²⁸」とあり、チベットへ入ることは難しいにもかかわらず、重慶の地方官である道台の「懇意」で調印してもらえたと報告している。

現存の能海資料の中に護照はあるが、この重慶で交付されたものは残っていないようである¹²⁹。しかし後にバタンまで同行する寺本婉雅の『蔵蒙旅日記』には、「重慶にて渡せし護照左の如し。能海君も多分余同様の護照を得しならん¹³⁰」と記し、重慶で交付された自身のチベット行きの護照が抄出されている。そこでまず寺本が抄出した護照を確認しておく

ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ、決シテ之ヲ虐待スヘカラス、旅券ハ之ヲ発シタル日ヨリ清曆十三箇月効力ヲ有スヘシ、日本国臣民旅券ヲ携帯セスシテ内地ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セサル罰金ニ処スヘシ」（海関総署『中外旧約章大全』編纂委員会『中外旧約章大全 下』中国海関出版社 2004年 p1248 - 1249）。

¹²⁷ 『能海寛遺稿』 p46。

¹²⁸ 『著作集 第9巻』 p84。

¹²⁹ 能海の資料のうち現存する護照は、明治31(1898)年11月22日に上海領事小田切万寿之助から交付された上海、湖北、湖南、四川行きのもので、現在金城町歴史民俗資料館で保管されている。この上海で交付された護照は、末尾に「限壹年繳銷」とあることから、本来であれば一年間の期間内に使用しその後返納しなければならなかったことがわかる。能海は11月18日に上海領事館で護照を申請したが、21日の日記には「護照はすりおきなきに付、明日漢口へ郵送の約束」（『著作集 第3巻』 p291）とあり、護照を持たず上海を後にしたことがわかる。しかし漢口通過後の宜昌・重慶間で書かれた日記には、「護照はなく訴ふる所なく」（同書, p322）とあることから、結局漢口でも護照を受け取ることなく重慶へ向かったものと思われる。したがって現存する上海領事館で交付された護照は未使用のものだと考えらえる。

¹³⁰ 横地祥原編『蔵蒙旅日記』（芙蓉書房 1974年） p84。

たい。

大日本欽命駐劄重慶管理通商事務領事官加藤為給發護照事、照得日清通商行船条約第六款内載、日本臣民准聽持照前往中国内地各所遊歴通商執照由日本領事館發給由中国地方官蓋印、經過地方如飭交出、執照應隨時呈驗無訛放行、所有備用車船人生牲口裝運行李貨物不得攔阻、如查無執照、或有不法情事、就近送交領事官懲弁、沿道止可拘禁不可凌虐等、因現拋我国人寺本婉雅、華音得拉磨托巖阿稟称由重慶前赴四川、雲南、貴州及西藏等處遊歴、請領護照前來、拋此本領事查該人素称妥練合行發給護照、應請大清各處地方文武員弁驗照放行、務須隨時保衛以礼相待、經過関津局卡幸毋留難攔阻、為此給与護照須至護照者

右照給寺本婉雅 収 執

明治三十二年五月

光緒二十五年四月初八日 給

大清欽命署理四川分巡川東兵備道監督重慶関兼弁通商事宜 夏加印

限回日繳 銷¹³¹

この抄出によれば、重慶領事加藤義三から明治 32 (1899) 年 5 月 (寺本は重慶に 5 月 9 日から 18 日滞在) に、日清通商航海条約第六条に基づき交付され、分巡川東兵備道という重慶、夔州、綏定などを管轄する道台の夏が副署したことが分かる。行き先が四川、雲南、貴州そしてチベットで、能海が南条や水野に宛てた書簡の内容と一致することから、能海が重慶から南条や水野に報告した護照は、上記の寺本が抄出した護照と凡そ同じものと見て

¹³¹ 横地編,前掲書 p84-85。概要は次の通り「大日本欽命駐札重慶管理通商事務領事官、加藤(義三)より護照を發給する件について。日清通商行船条約(日清通商航海条約)第六条には次のようにある。日本臣民は日本領事館が發給し、中国地方官の副署がある執照を持てば、中国内地各所で遊歴、通商できる。通過する地方で書類の検査を求められた際には示し、不正が無ければ進行が認められる。また携行品や貨物運搬のために車輛、船、人夫、畜類を雇うことを阻害してはならない。もし書類が無い、または不法行為がある時は、罰するために最寄りの領事官へ送り届けるが、その際には必要な拘束を加えるだけで、決して虐待してはならない。この条文に照らして、今我国人、寺本婉雅、中国語音テラモトエンガが、重慶より四川、雲南、貴州及びチベット等への遊歴のため護照を申請している。本領事は該人を品行能く經驗に富むと見、護照を發給するに相応しいと考える。清国各處の地方文武員には検査し通行を認め、隨時礼を以て接し、通過する関所では引き留めることのないよう求める。この護照を、護照を求める者に与える。この書類は寺本婉雅が受け取る。明治三十二年五月、光緒二十五年四月初八日与える。大清欽命署理四川分巡川東兵備道監督重慶関兼弁通商事宜夏が加印する。返納された際に無効とする」。

間違いないと思われる。では、なぜ寺本は自身の日記に、能海が同様の護照を持っていたと書くことができたのだろうか。また本来受領することが難しいはずの護照を、どうして日本人 2 人は受け取ることができたのだろうか。次節では、能海の子ベツト行き護照がどのような経緯で進められたのか見てみたい。

(2) チベツト行き護照交付の経緯

チベツト行きを認めた護照の発給過程を追うために、本節では成田安輝に注目したい。成田は確かに能海たちと同行することはなかったが、重慶領事館で進められた能海護照発給作業は、成田護照と共に進められたからだ。すでに明らかとされている通り、成田は外務省からチベツト探検を命じられ当時重慶に滞在しており、外務省外交史料館資料「成田安輝西藏探検関係一件」には、成田の入蔵に関連する外務省や領事館等の往来文書が収められている。以下同資料を参照しながら、重慶領事館における護照の発給過程を見ていきたい。

(i) 加藤領事と任道台との交渉-1898年7月

明治 32 (1898) 年 2 月成田は 5 年間の入蔵探検計画で、重慶に滞在しながら語学を習得しようとしていた¹³²。加藤義三重慶領事は、成田のチベツト探検にあたって護照の交付は困難だと考え、同年 7 月に同地道台任錫汾に成田の入蔵について打診した。任道台は当初四川からチベツトまでの道のりは険しく、盗賊が出没することに加え、外国人未到の地であることを挙げ、断る姿勢をとっていた。これに対し加藤領事は、成田の探検は、チベツト仏教視察のため他意はないこと、そしてすでに中国人の服装へ改めているため欧米人と誤認されることは無いと説明し、ひとまず任道台から護照への副署の約束を取り付けた¹³³。

加藤が任道台との交渉で、仏教視察であることや、欧米人に誤認されることは無いと説明したのは、前章で述べたような当時の四川省における排外的気運が関係しているだろう。能海が重慶領事館で会った成田はすでに「支那服」を着用していたようで、能海自身も重慶で中国服を作る予定であることを水野宛の書簡で伝えている¹³⁴。傍から見て外国人だとわかる恰好だと直ちに身の危険につながると考えてのことだろう。まして成田の場合は日本の政府機関が背景にいることが明らかとなれば、護照どころの話ではないことは明らかであった。そこで加藤領事は成田の目的はあくまで仏教視察であり他意はないと説明したと思われる。

そして加藤領事は外務省小村寿太郎次官に対して任道台との交渉を伝えると同時に、成田の「仏教視察」という名目に信憑性を持たせるために、実際に本願寺法主からダライラマ

¹³² JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B03050316600(第 7 画像目)、成田安輝西藏探検関係一件(外務省外交史料館)。

¹³³ JACAR:B03050316600 第 18、19 画像目。

¹³⁴ 『著作集 第 9 巻』 p84。

に宛てた親書を持たせることを提案した¹³⁵。そして本願寺法主大谷法瑩がダライラマに宛てた書簡は11月に重慶に送られた¹³⁶。

(ii) 加藤領事と矢野公使間の往来文書-1899年1月

加藤領事は、明治32(1899)年1月北京の矢野文雄公使に成田の護照交付について書簡を送っている。成田を中国人の服装へ改めさせ、任道台に対しては「仏教修問」と目的を伝え、それを証明するための親書も日本から送ってもらったこと、そして任道台からは護照への副署と相当の補助を与える旨の回答を得たことを説明している。そしてそのうえで、いざ護照の副署を求める照会を出す時になって、任道台が拒絶するようなことも考えられるため、その時は公使館から中国の外交を掌る総理衙門に対して副署の許可を与えるよう依頼した¹³⁷。

依頼を受けた矢野公使がいる北京には、当時入蔵の機会を窺いながら滞在していた寺本婉雅がいた。『藏蒙旅日記』には、明治32(1899)年1月理藩院主事がチベットへ赴任することを聞きつけ、公使館から総理衙門へ同行を申し出る照会を出してもらったことが記録されている。この照会に対する総理衙門の回答は、「西藏行甚難、我官吏と雖、途中にて行衛の知れざる事往々これあり。西藏風氣未開、衙門亦意の如くならず、然れども同行敢て拒絶する所にあらず、よくよく熟慮せらるべし¹³⁸」というものだった。そして矢野公使からはチベットにいる駐蔵大臣(アンバン)の往来の時期を待つよう言われたことから、寺本は北京で機会を窺うことにしたようである。

そして寺本が入蔵の機会を探っている北京に、加藤領事からの依頼が届いた。しかし矢野公使はこの依頼を断った。それは過去にチベット行きの護照交付について総理衙門に打診したが、明治29(1896)年8月に出した四川辺境とチベットへの遊歴に対しては十分な保護を与えかねる旨の照会を出したことを根拠に断われたからだった。矢野は加藤が求めるような後援はできないと伝えると同時に、寺本の護照も重慶で発給するよう依頼した¹³⁹。ここで三人の護照が重慶で発給されることが決まったのである。この四川省辺境とチベッ

¹³⁵ JACAR:B03050316600 第19画像目。

¹³⁶ 前掲資料第25画像目。同資料は木村肥佐夫「成田安輝西藏探検行経緯(上)-外交資料に見る東チベット経由入蔵挫折記」(『アジア研究所紀要』8 亜細亜大学,1981年 p33-87)で紹介されている。成田の親書と法衣を送る準備を進めていた鳩山書記官から加藤領事に送られた書簡内の「早速本願寺へ交渉致候処同法主より喇嘛への親書及成田安輝着用の法衣一揃差越候に付親書は在中」という個所を、木村氏の論文では「在中国公使館の意か」と解釈されているが、親書「同封」という意味だと思われる。

¹³⁷ JACAR:B03050317700(第5、6画像目)。

¹³⁸ 横地,前掲書 p45。

¹³⁹ JACAR:B03050317700(第8画像目)。

トへの遊歴に対する中国政府の態度については、寺本が公使館で聞いた話を日記に書き残している。

明治二十九年林公使の時、総理衙門より公文の通知によれば、去る年英人主従十五人西藏に入り、遂に蛮人に殺される。因て英政府より総理衙門に照会し来りしを以て、護照を発給せし大臣が責任を負ふこととなりたり。故に其後露国公使より、打箭炉を遊歴せんことを請ひ来りしかど、前例に懲りて護照を与へざりき¹⁴⁰。

イギリス人 15 人がチベットへ入り現地で殺害されたことで、護照交付に関わった大臣が責任を負うことになったのである。そしてその後ロシア公使がダルツェンドまでの遊歴を願い出たが護照は発給されなかった。つまり、護照発給とその所持者たちの旅の安否は、単に旅人個人の問題ではなく、外交問題へと発展する可能性があったため、総理衙門は護照交付に慎重になっていたと考えられる。

筆者はまだこのイギリス人殺害を受けて四川省辺境、チベットへの遊歴を禁じた総理衙門発の照会文を確認できていないが、ロシア人の遊歴が断られたことから、チベットはおろか、ダルツェンドさえも外国人の遊歴が受け入れられていなかったことがわかる。ただイギリスは 1876 年の芝罘条約で四川、青海、インドからチベットへ入ることが認められており、入蔵するイギリス人がそこで殺害された場合、大きな外交問題になったはずである。

矢野公使と加藤領事との間で交わされた護照に関するやりとりは、かねてより入蔵の機会を窺っていた寺本の耳に入る。日記には 2 月 21 日北京公使館の石井書記から、成田と能海の護照請求について重慶の加藤領事から矢野公使に連絡があったことを聞き、同行を願い出たとある¹⁴¹。そして寺本の同行申し出は受け入れられ、24 日には重慶領事館からダルツェンドまで来るよう返電が届き、3 月 4 日に寺本は北京を発った¹⁴²。つまり先に能海と成田の同行が決まっていたのに対して、寺本は後からそれを聞きつけ加わったということになる。また寺本の同行について能海は、2 月 23 日に「日本人僧」が同行することを公使からの電報で知り¹⁴³、28 日にそれが寺本婉雅であることを知ったようである¹⁴⁴。

寺本は北京を発つ前に、矢野公使に対して総理衙門を通じて理藩院の添書を貰えないか

¹⁴⁰ 横地,前掲書 p46。

¹⁴¹ 同書 p45。

¹⁴² 同上。

¹⁴³ 『著作集 第 5 巻』 p23。

¹⁴⁴ 2 月 27 日と 28 日にわたって書かれた南条宛書簡「第四信」には、27 日時点では「在北京日本僧一名（姓名不詳）」と書かれている。そして 28 日の日付とともに、公使から寺本婉雅という日本僧が北京から重慶へ向かっていることを伝える電報が届いたことが書き足されている（『能海寛遺稿』 p50）。

依頼している。総理衙門が中国の外交関係を取り扱う機関であるのに対して、理藩院はチベットや新疆等を含む藩部を掌る機関である。寺本が理藩院の添書を求めたのは、理藩院であればチベットまでの遊歴を担保してくれると期待したのかもしれない。寺本の依頼に対して矢野公使は添書を貰える可能性は低いと断りながら、一応は掛け合うと答えた。しかし後日、予想通り断られたと告げられている。この時矢野公使は、駐蔵大臣文海¹⁴⁵へ宛てて矢野自身が書いた親書を寺本に渡した。この親書が渡された3月2日当初は、矢野の公使としての肩書きが一切書かれておらず、疑問を抱いた寺本が指摘すると、意図は十分に伝わると矢野は回答した¹⁴⁶。しかし『蔵蒙旅日記』に収録された親書の写真には、3月3日の日付で矢野の名前の前に「北京駐劄日本欽差全權大臣」と肩書きが書かれている¹⁴⁷。つまり3月2日と3日の間に、何者かによって親書に矢野の肩書きが書き加えられたと考えられる。いずれにせよ、寺本が親書に矢野の公使としての肩書きや理藩院の添書を求めたことから、寺本がチベット入りにあたってより確かな安心材料を欲していたことが窺える。北京で機会を窺い続け、公使館が諸手続に骨を折っていたことを見ていた寺本は、チベット入りが困難であることを認識しており、護照が重慶で交付されると聞いても、親書や添書といった更なる担保を求めたのだと考えられる。

寺本が能海と成田の同行に加わるのが後から決まった経緯に触れたが、能海と成田の同行はいつから決まっていたのだろうか。管見の限りそれを特定する資料は無いようだが、成田との同行について言及する能海の記録で最も早いものは、明治32(1899)年1月12日重慶から南条に宛てた書簡「第三信」だと思われる¹⁴⁸。しかしこの南条への書簡よりも早い段階で、外務省は能海と成田を同行させる考えがあったことが確認できる。能海が日本を発った数日後の11月15日に南条は青木周蔵外務大臣に対して能海のチベット探検に対する「保護願」を出したが、青木代務大臣は同日には重慶領事に対して二人を同行させるよう指示を出している¹⁴⁹。また、能海は渡航前から成田の入蔵計画を知っていた。明治31(1898)年10月7日日本願寺事務所を訪れた際の日記には、「外務省機密よりか成田安輝探蔵す計画ある由¹⁵⁰」とあり、「外務省機密」でありながらもすでにその動向を把握していたことが確認できる。また11月7日に訪れた外務省では、「二橋氏」と面談し入蔵について話をし

¹⁴⁵ 文海(?-1900)字は仲瀛、満州鑲紅旗人。光緒二十二年駐蔵大臣となるが、二十六年病気により四川へ戻る(吳豊培編、趙慎応校対『清代蔵事奏牘 下』(中国蔵学出版社1994年) p1043)。

¹⁴⁶ 横地,前掲書 p46。この時矢野が駐蔵大臣文海へ宛てて書いた添書は JACAR:B03050317700 第9画像目にある。

¹⁴⁷ 和田大知「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」(『史滴』41,2019年 p225-203)。

¹⁴⁸ 『能海寛遺稿』p46。

¹⁴⁹ JACAR: B03050317700(第2画像目)。

¹⁵⁰ 『著作集 第3巻』p243。

いる¹⁵¹。これらのことから、渡清前より能海の成田との同行は決まっていた、あるいは話としてすでに浮上していた可能性が考えられる。加えて、重慶で成田がダライラマ宛ての親書を受け取った同月に、能海は京都で親書を受け取っている¹⁵²。両者の親書が本願寺本山でどのように用意されたのか不明であるが、能海が現地を訪れる前から両者の探検の準備が同時に勧められていたことは極めて興味深い。さらに言えば、加藤領事が道台に護照について打診した時、成田にチベット視察を目的とした僧侶へ偽らせることを思いついたことも、かねてより日本で進めていた能海の入蔵準備と何かしらの関係があったのかもしれない。両者の邂逅については未だ不明な点が山積しているが、少なくとも寺本含めた三人の巡り合わせの背景には、外務省、公使館、領事館の動きがあったことが指摘できる。

(iii) 加藤領事が出した副署依頼の照会-1899年1月

前節で述べた通り、矢野公使は加藤領事からの報告を受け、チベット行き護照について総理衙門にかけあうことは難しいと回答した。しかし加藤領事は矢野の回答を待たずに道台へ副署依頼の照会を出している。加藤の明治32(1899)年6月に青木外務大臣に対する報告では、次のように伝えられている。

然るに先之〔筆者注：矢野公使からの返信〕本年一月中当港任道台留任の件に付、各国領事共同して運動せしも、遂に成功せず。不日其更迭を見るべき場合に立至り候に付、任道台の事務引継前を好機とし、一月十日に於て公文を以て右護照蓋印の事を照会し、併せて地方官への紹介書等を依頼候処、従来との関係もあり、旁々以心伝心にて直ちに之を承諾し蓋印致呉れ、尚打箭爐劉知府宛^(ママ)の添書迄送附有之候。其後現在夏道台に於ても前例に照らし、本願寺僧能海寛、寺本婉雅両人の進蔵護照にも蓋印致候¹⁵³。

加藤領事が護照について事前に打診していた任道台は、余棟臣への対応の責任を負い、前年12月には免職することが決まっていた¹⁵⁴。そして重慶道台が任錫汾から夏岬へ引き継がれるタイミングを狙って、加藤領事は護照への副署を依頼し、同時に地方官への紹介状を求

¹⁵¹ 同書,p273。

¹⁵² 同書,p277。一方寺本も同じく親書を持っていた。北京を発つ3日前の3月1日に本山から書留で届いたと、それを抄出している。この親書の末尾には、寺本が石井書記官から成田、能海の入蔵を聞いた2月21日より前の2月13日が日付として書かれている(横地,前掲書 p46)。

¹⁵³ JACAR:B03050316800(第11、12画像目)。

¹⁵⁴ 朱金甫主編『清末教案 第2冊』(中華書局,1996年) p801。1899年2月13日任道台の離別の宴に、加藤、井戸川、堺、成田、中村と共に能海は参加している(『著作集 第5巻』 p308)。

めた。要求は通り、副署のある護照とダルツェンドに駐在する同知劉廷恕（字：仁齋¹⁵⁵）に宛てた添書が返って来たというのである。この時副書された護照は成田のものと考えて差支えないと思われるが、このチベット行き護照に重慶道台が副署したことで、その前例に倣って能海や寺本の護照にも副署されたのである。またこの時書かれた劉同知へ宛てた添書は、成田と能海ついでに紹介状だった¹⁵⁶。

以上見てきたように、能海のチベット行きを認めた護照は、成田の護照が前例となり交付されたものだった。また北京からやってきた寺本の護照も能海と同様に成田を前例に交付されたため、寺本は日記で能海も同様の護照を持っていたことを示唆するような記述ができたのだろう。そして本節で見たように、これらチベット行き護照が発給されたのは、当時四川省で起こっていた余棟臣の対応に官吏たちが追われていたことと関係があった。それは外国人が四川省の辺境へ足を踏み入れることに慎重な態度をとっていた総理衙門のある北京で入蔵の機会を窺っていた寺本が、能海と同行することになった一要因だったとも言えるだろう。能海たちが重慶で受け取った護照は、重慶という土地、そして当時の混乱が無ければ発給されなかったとも考えられ、それは確かに能海が言うように「珍しい」ものだった。能海は3か月程重慶に滞在し、その後成都、ダルツェンドへと向かうが、重慶領事館で一緒に過ごした面々と再会することになる。

第二節 重慶領事館の人々とダルツェンド

能海は明治32（1899）年4月1日に重慶の通遠門から井戸川等に見送られながら、成都までの遊歴経験のある語学教師游顕甫と従僕彭春亭と出発した¹⁵⁷。この出発の数日前に書かれた南条宛ての書簡には次のような報告がある。

重慶領事加藤氏は去る二十二日出発、四川総督へ面談之為、成都に向け旅行中に御座候。又在重慶、井戸川大尉は同書生原田氏を同道、不遠之内、成都、打箭爐、並に雲南、貴州へ旅行之筈に御座候。〔～中略～〕又成田氏は一度成都、打箭爐に至り、進蔵之模様

¹⁵⁵ 能海の日記には、「劉仁齋」と書かれているが、実名は劉廷恕。光緒25年から32年まで雅州府同知を務めた。当時雅州は同知をダルツェンドに置いていたことから劉も同地に駐在していた。またこの頃編んだ『光緒打箭廳志』は、乾隆年間『打箭爐志略』に次いで古い同地の地方志である。

¹⁵⁶ JACAR:B03050316700(第29画像目)。

¹⁵⁷ 『著作集 第15巻』p157。能海は出発前に重慶領事館で游、彭と記念写真を撮っている。この写真では、游について「游氏は小生在重慶中重慶語教師にして、嘗て成都府立外国語学校に学び、今回小生成都及峨眉山を經、打箭爐に至り雇ひ同行致す」と説明書きがある。彭については「在重慶中従僕今回旅行に連行、嘗て成都峨眉山に至りたることあり。年二十八才」とある（『著作集 第15巻』p486）。

取調べ之為、本月上旬出発、来月末帰慶之筈に御座候¹⁵⁸。

能海が重慶を出発する前後のタイミングで、重慶領事館の面々も重慶を発っている。特に加藤と成田は成都で四川総督と面会し、その後ダルツェンドを訪れている。そしてダルツェンドから重慶へ戻る際に立寄った成都で、加藤は能海と再会した。能海が成都に到着した翌日の11日には、加藤と共に四川総督幕僚の江瀚を訪ねている。その日の日記には「打箭爐地方左程の騒動なきことを聞く」とあり、次の目的地であるダルツェンドの様子を聞いている¹⁵⁹。また成都を発つ前日の23日には井戸川と原田、そして重慶領事館付警部の中村善次郎と再会している¹⁶⁰。3月から4月に向けて季候が良くなるのを待って出発したものと思われるが、重慶で同じ領事館で過ごした面々が、同じような時期に、近い場所を往来していたことは極めて興味深い。

実はこの頃四川から初めての留学生を日本に派遣する話が挙がっていた。当時井戸川や加藤領事が成都を訪れたのは、こうした背景とも関わるのだが、これについては第三章に譲り、ここでは成都の次に訪れたダルツェンドについて見ておきたい。同地は重慶や成都と比べ、チベットとの繋がりが強く、同地の複雑な情勢が能海の第一次探険失敗に大きな影響を与えたと考えられるからだ。能海は同地滞在時に「西藏国地誌略」という地誌をまとめており、その特異性を指摘している。

古来西藏所属の地たりしも、現今支那に属し、支那の治下にありと雖も、地理、人種、言語、衣食住、宗教、風俗、全く西藏本地と異なることなく、而し支那本国とは全く其れ各状を異にする¹⁶¹。

中国の統治下にありながら、中国本土とは異なり、人種や言語などの点でチベットに近いと書いている。またダルツェンドの同知劉廷恕は自身が編纂した『光緒打箭廳志』の中で同地について次のように説明している。

爐廳以石為城、漢番雜處、凡駐藏使臣及換藏兵丁、均經爐出口、自爐以往、夷多重茶、悉由內地負販為茶市總匯、設郡丞一員以理夷情、兼司糧務、向有監督權稅課¹⁶²。

¹⁵⁸ 『能海寛遺稿』 p51。

¹⁵⁹ 『著作集 第15巻』 p180。

¹⁶⁰ 同書, p206。

¹⁶¹ 『著作集 第4巻』 p295。

¹⁶² 劉廷恕纂『光緒打箭廳志 上巻』（巴蜀書社1992年）p3。概要は次の通り「ダルツェンドは石でもって城となし、漢族とチベット族がともに暮らす。凡そチベットに駐在する使臣及び交代の兵丁はみなダルツェンドを経て出て行き、同地より向かう。夷〔筆者注：チ

漢族とチベット族が住むダルツェンドは、駐蔵大臣や兵がチベットへ向かう際の要路で、また両地間で行われる茶交易の経済的要地でもあったことが分かる。つまり中国内地とチベットをつなぐ結末点として機能していたのである。こうしたダルツェンド特有の事情は、外国人が通過する際にも影響を与えた。

能海に先行してダルツェンドを訪れた加藤と成田は、先に引用した同知劉廷恕から次のように言われている。

実際の所今日中国人は蔵中に実力なく、駐蔵大臣すら其実賓客として彼地に滞在するか如し。且つ蔵人は道理を解せず、理を以て説く可らず。同種と雖とも、其外国人たるを知れば一切入蔵を拒絶す。假令官吏の入蔵に際し、同行せらるるも、彼蛮官等其外人たるを察知せば、目的を達する能はさるへし。只当地に於て喇嘛僧となり多少言語をも研究し進蔵せば或は可ならんと、少しとしても外国人たるを知るときは覺束なし。且山路崢嶸、夏尚ほ氷雪を冒して進む、其辛苦名状すへからず如かず。今回は巴塘辺より南下し、雲貴を遊歴し、他年英国西藏に鉄路開通の日、進蔵せらるるの容易ならん¹⁶³。

中国内地から派遣される駐蔵大臣ですら賓客として扱われ実権を握っていないこと、そしてたとえ成田が官吏と同行したとしても、一度外国人と分かれば入蔵することはできないであろうと伝えられた。愕然とした成田であったが数日後再び劉を訪ね、入蔵後の書簡や金の取り次ぎ、そして後から訪れる能海と寺本への便宜を依頼した¹⁶⁴。

引用文から、劉は統治が行き届いていない地域へ外国人が入ることを予め防ごうとしたのだと考えられる。このような劉の意図を理解するため、同地の政治情勢を見ておきたい。15世紀に成立したチベット仏教の一宗派のゲルク派が、青海ホシュートの軍事支援を受けて中央チベットにダライラマ五世を最高権力者とする政権を樹立すると、勢力は寺院建立や改宗等を通してこの地域まで及んだ。一方、18世紀初頭以降の中国の清朝勢力の拡大に伴い、清朝の影響力も同地に入ってくるようになった¹⁶⁵。もともと明朝にならって各地の首長に官職を与え名目的な君臣関係を築く土司制度を実施していた清朝は、康熙42(1701)年昌側集烈の乱平定後、明正土司(明正長河西魚通寧遠宣慰司)を設置し¹⁶⁶、四川の中でも

ベット族]の多くは茶を重んじ、内地からの行商は茶市を作り上げ、同知は夷地方を管理し、糧務も司り、元來課税の監督権も有していた」。

¹⁶³ JACAR:B03050316700(第27画像目)。

¹⁶⁴ JACAR:B03050316700(第28画像目)。

¹⁶⁵ 小林亮介「ダライラマ政権の東チベット支配(1865-1911)」(『アジア・アフリカ言語文化研究』(76),2008年 p51-85)。

¹⁶⁶ 劉廷恕纂,前掲書 p2。

最大規模となる「打箭鑪関」を設け交易を監督した¹⁶⁷。さらにジュンガル戦争時清兵はダルツェンドからリタン、バタン、チャムド（昌都）を経てチベットへ入ったが、その際軍糧府（糧台）を設置した¹⁶⁸。道の修復や軍が駐在し安全が担保されたことで、ダルツェンドにはチベットとの交易を行う漢民族の商人たちが集まるようになり漢蔵交易の中心地として発展していった¹⁶⁹。また四川提督周瑛等の調査をもとに、雍正5(1727)年にはバタン西方のマルカム山（寧静山）に界碑が置かれ、ダルツェンドからバタンまでの界碑より東の地域は四川省に組み込まれた¹⁷⁰。康熙、雍正年間を通じて形成されたこの地域は、ダルツェンドを中心に茶馬交易を中心に発展し、雍正8(1730)年には「打箭鑪庁」が設けられた。

ただチベット仏教徒が多く住むこの地では、寺院が土地や属民を持つ権力者であり、その寺院管理者の任免権を持つのはダライラマ政権であったため、チベットとのつながりは依然として強く残った。特に寄進などを通じて各首長との間に宗教のみならず経済政治的関係を維持していた。つまり実質的な支配者である首長・寺院の僧俗相互の補完関係を基礎とし、そこに清朝・ダライラマ政権という二大政権の権威・権力がそれぞれ土司制度と宗教管理権を主要な媒介として覆いかぶさるという複合的な政治構造を有していた¹⁷¹。

さらにこうした清朝康熙、雍正年間に形成されたチベットと中国内地の間に形成された緩衝地帯にも、18世紀以降チベットに関心を抱くようになったイギリスの進出の影響が始まる。シッキム経由の通商路を求めたイギリスは、光緒2(1876)年の芝罘（煙台）条約でイギリス調査探検隊のチベット通過の承認を取り付けた。これに対してチベットでは、イギリスによるシッキムやブータンの蚕食と相まって「仏教を奉じない集団による未曾有の危機」として認識され、芝罘条約へ猛反発した。この反発を受けて、駐蔵大臣は一時総理衙門に対して、外国人のチベット遊歴を当面控えさせるよう各国に照会を出すよう依頼までしている¹⁷²。

しかしカトリック宣教師たちはすでに、ダルツェンドをはじめとする中国・チベット間のこの緩衝地帯に入っていた。かつて入蔵を試みた宣教師たちは、インドからシッキムやブータンを経てチベット南部のシガツェの険しい道のりを通ってチベットを目指したが、途中命を落とす者が多かったため、道光6(1846)年以降は四川省駐在の宣教師たちが中心となり東方からの接近方法を研究するようになった。そして翌年ダルツェンドに司教がおかれたことで、同地は入蔵の機会を窺う最前線となった。しかし同治12(1874)年に雲南省奔里やバタンで相次いで教案が起こった。このように教案は、ダルツェンドなどを含む当該地

¹⁶⁷ 呉康零主編、前掲書 p392。

¹⁶⁸ 常明等修、『嘉慶四川通史 八卷』（鳳凰出版社,2011年）p473。

¹⁶⁹ 四川省康定県志編纂委員会『康定県志』（四川辞書出版社 1995年）p236-237。

¹⁷⁰ 常明等修、前掲書 p373。

¹⁷¹ 小林、前掲論文。

¹⁷² 平野、前掲書 p229-233。

域でも起っていた¹⁷³。先に引用した同知劉廷恕の言葉は、こうした背景の中で捉えるべきであろう。このような現状にあることを当然知っていたはずの劉は、ダルツェンドからバタンを経由して入蔵することが不可能に近いことや、当地で抱かれた外国人への強い警戒心があることを示唆したと考えられる。

また外国人が反発にあっていたことは、能海自身も認識するようになっていた。この頃の日記には、チベットに入ろうとした西洋人の消息が絶えたことを伝える 1899 年 1 月 9 日付の“North China Herald”（『北華捷報』）の記事“THE DISAPPERANCE OF MR. RIJNHART IN TIBET”を書き写している。欄外には「我も巴塘にて今日下記の不運に逢う 三十二年九月七日 能海」と書き加えており¹⁷⁴、入蔵が一筋縄ではいかない状況やそれに苦戦する旅人について情報を得、自身の第一次探検の失敗と重ね合わせている。

能海の資料からは成田が劉から言われた内容を聞いていたかは確認できない。ただこれまで紹介したように新聞などからの情報を得ていた能海が、何も知らなかったとは考えづらい。能海は 4 月 24 日に成都を発ち、峨眉山を経て 5 月 12 日ダルツェンドに到着し、25 日から 29 日の間に井戸川と原田と再会を果たし、チベットの様子を聞いている¹⁷⁵。また同地で知り合ったキリスト教徒の周徳喜からチベット語を学び始めている。周は自身が入りする教会にチベット族の知人が多くいることからチベット語を 15 年程学んでおり、チベット族の知人を能海に紹介している¹⁷⁶。このような日記から確認できる能海の動向から見ても、リタン、バタン、そしてチベットについて情報を得ていたと考えられる。さらにダルツェンドで井戸川たちと再会した際にチベットの様子の他に、成田が劉から言われた内容を伝え聞いたかもしれないし、また能海も自身が得た情報を教えたかもしれない。ダルツェンド以西が重慶や成都とは異なり、官吏の他に土司やラマ等の複数の権力が混在した地域であることは当然共有されていたと思われる。

また先に引用した「西藏国地誌略」からは、ダルツェンドや今後向かうことになるリタンやバタンに関する地理的、歴史的情報を集めまとめていたことが分かる。明治 32 (1899) 年 6 月 15 日以降ダルツェンドで書かれた「西藏国地誌略」は、全文で 9000 字足らずで、多くがダルツェンドなどの地域の歴史や地理的情報に紙幅が割かれている。飯塚氏がすでに指摘しているように、「西藏国地誌略」は王世睿『進藏紀程』や杜昌丁『藏行紀程』など清代

¹⁷³ 徐君「近代天主教在康区的傳播探析」『史林』第 3 期 2004 年 p61-68。

¹⁷⁴ 『著作集 第 5 卷』 p18-22。

¹⁷⁵ 『著作集 第 4 卷』 p90-92。日記には「井氏〔筆者注：井戸川〕宅に行き西藏の模様及ターヂリンより前蔵之道並に入蔵出蔵の手續を聞く」とある。

¹⁷⁶ 『著作集 第 4 卷』 p92-93,98,100-103,106 等には朱が能海の宿を訪ね語学を教えに来たことが記録されている。また 7 月 7 日朱は重慶領事館へ能海の荷物や書簡を取り次いでいる（同書,p118-120）。

の諸文献を参照して書かれたが¹⁷⁷、筆者が確認した限りでは全文の半分以上が文献から引用している。また、その半分以上の文献がラサへ向かう中国官吏の書いた出使日記で、これらはすでに探検に出る前に読んでいる。ただ唯一重慶で購入した黄沛翹『西藏圖考』全八巻は、風俗や名勝、歴史などが系統的にまとめられたチベットの地誌であり、能海は同書から最も多く引用している。内容は、能海の表現を借りれば「古属地」という清代以降四川や雲南に組み込まれていったダルツェンドやバタンなどの地域の歴史的経緯に関する箇所が多い。一方で、文献に基づいたとは考えられない記述も散見される。軍糧府や土司などの統治機関や電報局などインフラ設備に加え、清真寺やラマ寺、福音堂など宗教施設が列挙されている。またダルツェンドに関しては、交易で扱われる物産や土司の管轄する規模なども書き加えられている。このような記述には典拠が明記されておらず、「北門外」や「僧三十」というように、大まかな地理情報やその施設の規模が書かれ、日本語による記述も散見される。これらの記述は、能海が現地で見聞きした情報を書き込んだものと考えられる。またダルツェンドの市街地の地図もいくつか作成している¹⁷⁸。

繰り返しになるが成田が劉同知から言われたことを能海が聞いたかは分からない。しかしここまで見てきたように、ダルツェンドからチベットにかけて広がる地域について能海がある程度把握していたことは分かる。探検前から出使日記を通して地理情報を把握し、探検中も文献を通じてチベットと中国の間の地域の複雑な歴史的経緯について知り、さらに現地で見聞きした情報を織り込んで、独自の地誌を作っていた。ダルツェンドでこうした情報に触れていたことは、以降の探検の顛末を追ううえで留意しておきたい点である。

そして6月20日に自身は当分ダルツェンドへ向かえないため寺本と二人で先発するよう伝える書簡が成田から届き¹⁷⁹、6月27日に北京から寺本が到着する¹⁸⁰。

¹⁷⁷ 飯塚勝重「浄蓮寺蔵書目録と西藏関係書目－御堂用書のなぞ－」（能海寛研究会『石峰』第22号2017年、p1-16）。「西藏国地誌略」執筆時に参照された文献と、能海が該当文献に触れた時期をまとめると次の通り。

参照文献	読んだ、あるいは購入した時期
王世睿『進藏紀程』乾隆年間 雍正10 (1732)	明治26年(1893)7月読了 於日本
杜昌丁『藏行紀程』康熙年間 康熙59年(1720)	明治26年(1893)7月読了 於日本
黄楸材『西?日記』全四巻 光緒四年(1878)	明治31年(1898)7月までに読了 於日本
黄沛翹『西藏圖考』全八巻 光緒十二年(1886)	明治32年(1899)2月購入 於重慶
董祐誠『皇清地理圖』咸豊六年(1856)	不明

¹⁷⁸ 『著作集 第15巻』p231-233

¹⁷⁹ 『著作集 第4巻』p107

¹⁸⁰ 同書, p110。

第三節 入蔵の方針をめぐる衝突

ダルツェンドで合流した寺本と能海は、同じ大谷派に属していたが初対面であったようである¹⁸¹。寺本が到着すると 30 日には劉廷恕、まさしく成田が面会した人物と面会した。この間能海は日記に寺本と意見の不一致を書いている。28 日には「寺本君と意見合せず¹⁸²」とあり、7 月 1 日の日記には次のように書かれている。

寺本君は各地支那官吏の保護に由りて行かんとし、又予は支那僧風にて入らんとし、夜は大に議論合せず。予は爐軍糧〔筆者注：ダルツェンドの同知〕に面するの意なし。只寺^(マ)君〔筆者注：寺本〕に誘はれ、若も文海駐蔵大臣に添書をも得は、好都合と思ひしも、万事不得。実に考想外なり¹⁸³。

能海はそもそも日本人であることを隠して進むことを望んでおり、同知に会う必要もないと考えていた。一方寺本は、中国官吏の保護の下進むことを望み、中国から派遣される駐蔵大臣の添書を得ることができれば、ラサへの道のりも確保されると能海に話したようだ。しかしそうはいかなかった。駐蔵大臣の添書やラマの紹介等は断られ、兵丁二名によるリタンまでの護送と四頭の馬牛が与えられただけだった¹⁸⁴。寺本の意見に従い劉同知と面会した時の様子をより詳しく知るため、成田が外務省に提出した報告を見てみたい。実は面会を終えた能海は成田に電報を送っている¹⁸⁵。電報によれば、二人は重慶で交付された護照を見せチベット入りの正当性を示そうとしたが、劉同知からは次のような言葉が返ってきた。

護照中遊歴の地方を記する内、西藏なる文字あれとも、元来西藏遊歴を許可する筈なし、西藏内地遊歴は護照を與へ保護する能はさること明瞭なり。此に記載する西藏なる文字は、西藏内地を意味すること秋毫も認る能はず。是普通西藏とも称する裏塘、巴塘までの事ならん。」両僧〔筆者注：能海と寺本を指す〕争ふに、「是在重慶なる我領事を経

¹⁸¹ 寺本は「余は君の令名を聞いていたが、本国に在ては未だ面晤の機を得なかった」と能海とのダルツェンドでの邂逅を振り返っている(『能海寛遺稿』p253)。一方能海も寺本を渡清前から知っていた可能性がある。1898 年 9 月 3 日付『教学報知』には、「西藏宗教視察」のため寺本が北京滞在中であることが報じられている。浄蓮寺に読み終えた同紙を転送するほど同紙を愛読していた(『著作集 第 3 巻』p253,255,256 等) 能海は、寺本の入蔵計画を知っていた可能性がある。

¹⁸² 『著作集 第 4 巻』p110。

¹⁸³ 同書,p113。

¹⁸⁴ 同書,p111。『著作集 第 9 巻』p132。

¹⁸⁵ ダルツェンドには、光緒 22(1896)年に内地との電報局ができている(四川省康定県志編纂委員会,前掲書 p249)。

由して道台より公然許可を得たる件、何そ其理由あら等を弁明すれとも、結局職責を以て之を非認すとの事、然し巴塘までの遊歴は可なり。且つ豫て成田氏より聞及もあれば、馬及兵等を貸與護送せしむへし、夫より以内は察木多の管轄に属し、別に切符を所持せざるものは通行を禁す¹⁸⁶。



能海資料に残る劉廷恕の名刺（金城町歴史民俗資料館所蔵）

劉は護照を見て、そこに書かれた「西藏」とはせいぜいリタン、バタンまでであり、それより西のチャムドの管轄領へ進むことについて許可が下りるはずがないと思ったようだ。つまり劉はあくまでマルカム山（寧静山）に置かれた界碑より東の領地内までだと解釈したのだ。そして先にダルツェンドを訪れた成田のこともあり、馬や兵丁が与えられたと報告されている。寺本の報告には、劉と面会した際に遊歴はラサまでではなくバタンまでであるなど「言を左右」にしたことで許可を得たとあり¹⁸⁷、要領を得ないが、交渉がかなり苦戦したことは確かであろう。

能海たちがダルツェンドを出発したのは7月8日で、リタン管轄に入った最初の町河口でダルツェンドの兵たちは引き返して行った¹⁸⁸。20日に到着したリタンには北京から帰国するネパールの朝貢使節が先に到着しており、能海たちにまわってくる荷駄馬や人夫は簡単に見つからなかった¹⁸⁹。当初軍糧府にこの相談をしていたものの、要領を得ないと感じた二人は個人で荷駄馬等を雇うことを決める¹⁹⁰が、ラマ僧から二倍の金額をとられる等ここでもかなり苦戦した¹⁹¹。そして8月3日ネパール使節団の後ろを続くようにしてリタンを出発した。大所帯の使節団の後方には宿などまわってくるはず

¹⁸⁶ JACAR:B03050316800(第22画像目)。

¹⁸⁷ 『能海寛遺稿』p79。またこの時能海は、ダルツェンドに戻る兵に成田と朱宛の書簡を取り次ぐよう依頼している。朱氏宛の書簡の中には、本山上申書、南条と浄蓮寺に宛てたものも入っていた（『著作集 第5巻』p40）。

¹⁸⁸ 『能海寛遺稿』p82。

¹⁸⁹ 『著作集 第5巻』p27, p41-42。

¹⁹⁰ 同書, p36。

¹⁹¹ 同書, p27-42。『能海寛遺稿』p83-85。この時能海の日記には、リタンの印象を書き付けた記述が散見される。同地の雰囲気や「気質粗悪」と記録し、ラマ僧を「ゴーマン〔筆者注：傲慢〕」、「生意気粗暴なり、根性よからず」と形容し、また「ぶんなぐりたく〔筆者注：ぶん殴りたく〕」といった感情的なものである。

もなく連日テント泊を続け 11 日にバタン到着した¹⁹²。

バタンでは軍糧府官の武文源と面会した。当初武は二人の入蔵を許可したようだが、結果から言えばバタンより先に進むことはできなかった。「進蔵通信」にはその顛末を次のように説明している。

江卡地方土人等全く予を欧米人^{キンクイズ}¹⁹³と誤想し、一犬虚を吠えて万犬実を伝へ、土人八百人許りは金沙江辺及び審靜山^{ママ}¹⁹⁴、其他要所要所に配置せられ、此奥へ一步も踏入るならば予は直に彼等の捕虜ともならん有様にて、巴塘駐屯の支那官吏武糧台もかつて一度は予の護照^{フチキョウ}（旅行券）を見て進蔵を許可し、二名の兵を以て護送致さんと申しながら、又次回には巴塘より雲南に出づるを許しながら、再三再四語を渝へ約を違へて、終に他の線に一步も行くことを許さず、又官の手を離れて予一人単独道を選ばんとするも応ぜず、もと来し道へ引返すべきことを命ぜり¹⁹⁵。

リタンから同行したネパール使節団は、能海たちのことを「洋人」と吹聴した。それはバタンから更にチベット方面へ進んだジャンカ（江卡）まで伝わり、能海たちを「欧米人」と見做す噂が広がっていった。現地の人々はバタン近郊にあるチベットと四川の境界に流れる金沙江や界碑が置かれたマルカム山といった要所で、能海たちが来るのを警戒していた。そして最終的には他の道に出ることも、単独で移動することも許されず、ダルツェンドへ戻るしかなかったようだ。軍糧府官の武が一度は入蔵を認めたにもかかわらず、ダルツェンドへと戻るよう意見を変えたのは、次に引くジャンカから届いた上申書が理由だった。本稿では上申書を能海資料からひいたが、寺本の『蔵蒙旅日記』にも抄出がある。しかし両者で異なる箇所や書き誤ったと考えられる箇所もあるため、脚注には両資料から推測される訳と『蔵蒙旅日記』内の抄出を載せる。

大皇上委命王法王子巴塘剖本武大人台前，爲具夷事，江卡滿康僧俗衆人等爲具稟事。緣近聞得巴塘現抵有洋人貳名，由省隨帶牌票欲要進藏等語。小的僧俗人等現已議結阻滯俄等界內，不能前進。傷害黃教佛門外國之人，壹概不前行。自今以前，外國洋人及教民人等，若要進藏之人，均已阻擋，并所行各事均所共知，想必巴塘有案可查。至今該等雖帶省牌票前來，我等萬不能叫他人前行一步，盟誓之實。武大人乃是管轄地方官掌，如何向

¹⁹² 『著作集 第5巻』 p41-43。

¹⁹³ 「欧米人」にふられた「ヤンクイズ」というルビは、蔑称である「洋鬼子」を指すと思われる。耳から入ってくる「洋鬼子」を能海は「欧米人」だと理解していたのだろうか、能海の理解や当地の対応が窺える極めて面白い記述である。

¹⁹⁴ 「審靜山」は「寧靜山（マルカム山）」を指すものと思われる。

¹⁹⁵ 『能海寛遺稿』 p103-104。

他人吩示，向祈早爲吩示施行，而該等不應吩諭，任意前行者，其時或好或互，無怪我等乎。

八月十三日到

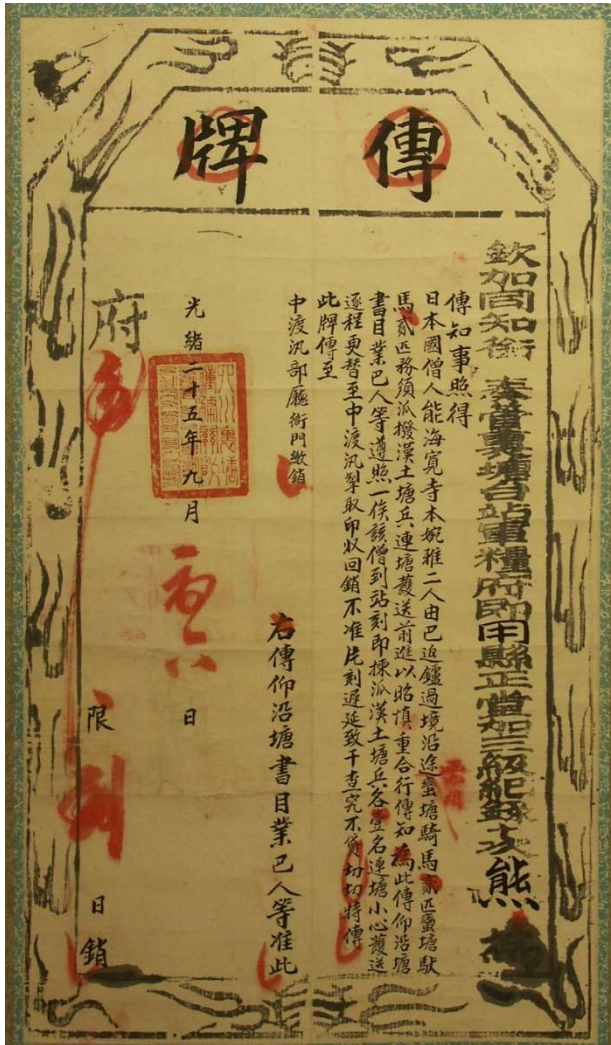
光緒二十五年八月 日

交界僧俗衆人等同具¹⁹⁶

上申書を送ったジャンカの「僧俗衆人」は、入蔵のためバタンに滞在する「洋人」二人、即ち能海と寺本をバタンで足止めすることを決めたと伝えている。それまでも「チベット仏教を汚す」外国人などの入蔵希望者を足止めしてきた前例もあったようで、武に対してはバタンの官吏として能海たちに引き返しを命じるよう求めている。この訴えを受け取った武は、二人の入蔵を阻止したと返答している¹⁹⁷。特に資料には記載されていないが、どのよう

¹⁹⁶ 同書 p104-105。概要は次の通り。「大皇上委命王法王子、満康江卡の外事を担当する武様に、江卡満康僧俗衆人等が申し上げます。近頃省より牌票を持ち入蔵しようとする洋人2名がバタンに到着したと聞きます。私たち僧俗人はこの度領内で足止めし前進できなくすることを決めました。黄教仏門を傷つける外国人は皆前進させません。これまでも外国洋人及教民人など、もし入蔵しようとする者がいれば皆阻止し、行った事は全て周知しており、バタンでも前例があり共有し調べられるでしょう。現在彼等は牌票を持ってやってきたと言っても、私たちは決して彼を一步も前進させません。武様は地方を管轄する官吏として、彼等に命令を出し、早く指示を出し実行されることを祈っております。命令に従わず望んで前進しようとする者には、何が起ころうとも、我々は関係がありません。」寺本の記録は次の通り。「大皇上委命王法王子剖立、武大人台前爲具夷稟事、江卡満康僧俗衆人等爲具稟事、縁近聞得巴塘現抵有洋人二名、由省随帶牌票、欲要進藏等語。小的僧俗人等現已議結阻帶我等界内、不能前進傷害黄教仏門、外国之人一概不前行、自今以前外国洋人及教民人等、若要進藏之人、均已阻擋、並所行各事均所共知、想必巴塘有案可查。至今該等雖帶有牌票前來、我等万不能叫他前行一步、盟誓是實、武大人乃是管轄地方官、掌如何向他人吩示、尚祈早、為吩示施行而該人等不聽吩諭、任意前行者、其時或好或反、無怪我等乎。 光緒二十五年八月 日 交界僧俗衆人等同具」(横地,前掲書 p79。)

¹⁹⁷ 『能海寛遺稿』 p105 には「巴塘糧臺の返書」として次のような抄出がある。「爾満康僧俗人等具來票帖，本府已看過了，洋人貳名欲進藏朝佛，本府早已攔擋，他不準進去，爾等既又具稟前來本府，再行吩示，洋人急速轉回可也。爾各安住牧不得多事。此諭。八月十八日諭」。(概要は次の通り。 その満康僧俗人等が申してきた票帖を本府はすでに見た。入蔵し朝仏を望む洋人二名を、本府はすでに足止めし、進むことを認めなかった。汝らはすでにまた本府に上申してきたが、再び命じて洋人は急いで帰るので良いのだ。汝らは各々暮らし多事をしてはならない)。



リタン軍糧府の傳牌
(金城町歴史民俗資料館所蔵)

傳至中渡汎部廳衙門繳銷。右傳仰沿塘書目業巴人等准此

光緒二十五年九月[●●(●六?)]日

府[●] 限[刻]日銷¹⁹⁹

¹⁹⁸ 『能海寛遺稿』 p254

¹⁹⁹ 金城町歴史民俗資料館所蔵。概要は次の通り。「リタン軍糧府熊〔筆者注：熊廷権〕から伝える。さて、日本の僧侶能海寛と寺本婉雅の二人は、バタンからダルツェンドの境界地帯で蠻塘騎馬2頭と蠻塘駄馬2頭が必要となり、ぜひとも漢人、土人の兵を派遣し護送するように。これをもって慎重を示し、まさに伝えるべし。よってこの知らせを以て、沿道の塘書目業巴人等は〔筆者注：本命令に〕従うように。該僧侶が站到着次第、すぐさま漢土塘兵をそれぞれ一名派遣し、注意して護送し、程〔站〕ごとに交代し中渡汎〔河

な経緯で能海と寺本はジャンカから届いた文書を書き写したのか、その状況自体が興味深い。その後能海たちは10月1日にバタンを出発しダルツェンドへ戻っている。バタンで書かれた日記は9月16日で終わっており、当地を去るまでの期間やダルツェンドまでの道中に書かれたものは、管見の限りほとんど無い。寺本は後に編纂に携わった『能海寛遺稿』で「蠻人兵四騎の監視の下に還送せられた¹⁹⁸」と当時の様子を振り返っている。現在金城町歴史民俗資料館に保管されている「傳牌」はその際使われたと思われる。

欽如同知銜奏管裏塘台站軍糧府、即用縣正堂加三級紀錄丞熊為傳知事、照得日本國僧人能海寛、寺本婉雅二人由巴返鑪、過境沿〔需要〕途蠻塘騎馬貳匹、蠻塘駄馬貳匹、務須派撥漢土塘兵連塘護送前進、以昭慎重、合行傳知。為此傳仰沿塘書目業巴人等遵照。一俟該僧到站、刻即揀派漢土塘兵各壹名、連塘小心護送、逐程更替至中渡汎、掣取印収回銷、不准片遲延致干查究不貸、切切特傳此牌

□：赤字で書き加えられた個所を指す

これはリタン軍糧府が河口までの沿道の兵に宛てた通達書のようなものである。河口はバタンへ向かう際にダルツェンドから同道した兵たちが引き返した場所であり、ダルツェンド領に隣接するリタン管轄下の町である。この傳牌から、バタンの軍糧府官武が言った通り、ダルツェンドへ引き返す二人に護兵が同行していたことが分かる。10月1日バタンを出発した二人は22日ダルツェンドに帰り、能海の第一次探検は終わった。

おわりに

本章は重慶からバタンまでの探検の行程を、これまで十分に活用されることのなかった資料を使いながら追ってきた。能海と成田、寺本のチベットに挑む三人は、北京公使館や重慶領事館を通じて、北京では交付されないチベット行き^(ママ)の護照に引き寄せられるかのように重慶に辿り着いた。そして教案の混乱に乗じて交付された護照を手にした。重慶からダルツェンドまで通過した時期は異なるものの、様々な人物を介して三人は関わりを持ちながら歩を進めた。そしてダルツェンドで能海と寺本は邂逅するが、日本人であることを明かさかどうかを巡って意見が対立した。能海は寺本の意見に従ったが、それまでの地域と異なりダルツェンド以西の地域では、護照を持っていても外国人が入ることは許されなかった。しかし日本人と公言した以上それを撤回するわけにもいかず、チベットと四川の境を示す界碑の傍のバタンまで進んだところで断念した。この失敗に終わった第一次探検を能海は振り返って日記に次のように書いている。

実に爐城〔筆者注：ダルツェンド〕にて寺君〔筆者注：寺本〕の為に大に失敗す。即ち余の本心たる支那僧として入蔵之路^(ママ)表^(ママ)等を得んとしたるに、日本人たることを明かし、爐城糧台^(ママ)に面したること也。これ予等の一大事を誤りたる初めなり。後悔するも詮なきも、人の為に我大業を大に誤れり。嗚呼天仰ひて長歎息するの外無し²⁰⁰。

中国人僧に扮してチベットへ入ることを望んでいた能海は、ダルツェンドで日本人だと明かしたことが間違いだったと後悔している。本章で見てきたように、当初重慶から南条や水野に宛てて送った書簡を想起すると、重慶で護照を受領した時とダルツェンドで寺本と

□〕へ至り、印を受け取り回収するように。少しも遅れることは許さない。もしそのようなことがあれば調査究明のうえ、厳しく処する。この傳牌は必ず中渡汎衙門に到り伝えたい。この傳牌は無効とするように。沿道の塘書日業巴人等はこの知らせに従うように。光緒二十五年九月●●日 府 期限は●●日とする。」(光緒二十五年九月は1899年10月4日から11月1日まで。)

²⁰⁰ 『著作集 第5巻』p51-52。

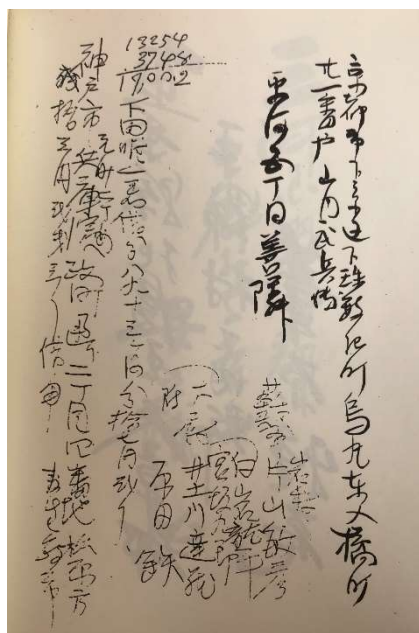
意見が対立した時とでは、探検方法に対する考えに変化があったことが窺える。当初は日本人であることを隠さずに入るつもりだったが、寺本と対立したように、ダルツェンドで能海は日本人としてではなく、中国人僧侶としてチベットに入ろうと考えるようになっている。こうした考えの変化には、当時能海が接した情報が関連すると思われる。能海は寺本より先に到着したダルツェンドで、過去にチベットに行った官吏たちの出使日記やチベットの地誌を通じて、現地の歴史的経緯や地理的情報を把握していた。そしてこうした情報に、現地での自身の見聞も織り込む形で「西藏国地誌略」を書き上げた。寺本と合流する前にこうした独自の地誌作成を行っていた能海は、重慶で護照を受領した頃よりも遙かにダルツェンドなどのチベットと中国の間に広がる地域の複雑さについて理解を深めていたと思われる。このような情報収集の結果、合流後の寺本との対立を招き、さらに能海の意向に反して護照を使い日本人として進むことを選んだ。そして最初の探検は、それが原因で失敗に終わったのである。

当時中国内地を遊歴する外国人に交付された護照は、それが交付されたことで一見目的地までの旅の成功が約束されたようにも思える。しかし外国人にしか交付されない護照は、チベットと隣接する四川省西部などの地域では、自ら外国人だと示すものであり、そのことで通行が阻まれる事態を招いた。入蔵への強い思いを抱く能海にとって、護照は厄介な書類となり、ダルツェンドで日本人と公言したことは以降の第一次探検において足枷となったのだろう。

第三章 探検における交遊録

はじめに

能海寛資料のなかで探検後最初に書かれた日記「渡清日記²⁰¹」は、明治 31 (1898) 年 10 月 4 日生家浄蓮寺を出た日から、重慶へ向かう途中にある三峡の町酆都州の船内で書かれた



た 12 月 31 日までで、日々の出来事やメモが書き付けられている。特徴的なのが、日記帳冒頭 12 ページにわたり知人の名前と住所（一部名前だけの者もいるが）が書かれていることだ。この記録には、境野哲海（黄洋）や渡辺海旭など、普通教校や哲学館で知り合った友人の名前が見える。一方で、そのような友人関係とは異なる人物の名前も書かれていることに気づく。例えば「白岩龍平、宮坂九郎、大尉井戸川達^(ママ)蔵、附原田鉄²⁰²」といった書き付けがそれである。彼らの名前は、能海が中国経由でチベットに入る実際的な準備段階に入った頃から日記に登場するようになり、中国に渡ってから書かれた日記を読むと、実際に会っていることが確認できる。

従来の研究で能海の交遊録については、普通教校の同窓に関する断片的な言及はあったが、探検後の交際については明治 32 (1899) 年四川省から挑戦した第一次探検で同行した寺本婉雅や、同行予定だった成田安輝の存在が指摘されてきたに過ぎない²⁰³。ただ能海が寺本や成田とどのような関係性にあったのかという点は、第二章

「渡清日記」の一部。中央下に白岩、宮坂等の名前が確認できる（『著作集 第 3 巻』 p 234）。

である程度明らかとなったので、本章ではこれまで言及すらされていない交遊録に迫りたい。そこで日記や書簡などをもとに、探検中にどのような人物に会い、彼らから受けた影響の有無などを可能な限り明かにする。同時に、当時漂っていた空気感ともよべる時代性の中

²⁰¹ 『著作集 第 3 巻』 p 223-329。

²⁰² 同書, p 234。

²⁰³ 例えば隅田 (1989 年) 前掲書や、江本嘉伸『能海寛-チベットに消えた旅人』(求龍堂 1999 年) などが挙げられる。また日本政府から派遣された「密偵」として成田に注目した木村肥佐生「成田安輝西藏探検行経緯-外交資料に見る東チベット経由入蔵挫折記-」(上・下) (『アジア研究所紀要』8 号 p33-87)、澤田次郎「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——八九〇年代から一九一〇年代を中心に」(一、二) (『人文・自然・人間科学研究』第 40 号 2018 年 p1-42、第 41 号 2019 年 p1-24) でも、部分的ではあるが周辺にいた人物として能海存在に言及している。

で能海やその探検を捉え直すことを目指す。

なお、本章は第一次探検の交遊録に偏らざるを得ないことを先に断っておきたい。現存する能海資料のうち、第一次探検で多くの日記やメモが残るのに対して、第二次探検中の日記はわずか一冊しかない。加えて日記や後に書かれた書簡などを見ても、第二次探検中能海は単独で行動しており、第一次探検のように各地で日本人や知人を訪ねるような行動はとっていない。こうした資料が限られていることや探検のスタイルの変化により、本章は主に第一次探検中の交遊録を主に扱う。また第一節で見ると、渡航の約1年前の準備期間も対象に入れた。それはこの時期に通い始めた詠帰舎において、それまでの普通教校から始まる交友関係とは異なる人脈が形成され、それが渡航後の交遊録とも連結するからだ。

第一節 「中国」との出会い-詠帰舎

まず探検へ出発する一年前に東京で通った詠帰舎時代の交遊録から見ていきたい。能海と詠帰舎の関係については、万代剛氏「官話事始め」-能海寛のチベット行と中国語学習（『石峰』10号2005年）で、入塾から渡航後までの中国語学習の過程を整理する際に言及されている。本稿では、詠帰舎と中国語学習について簡単に述べ、渡航後の人脈へとつながる交友関係について確認する。

(1) 詠帰舎と中国語学習

能海寛は中国へ渡る前、東京麹町区下二番町（現一番町）の南条文雄宅に寄留し、サンスクリット語を学んだ。この頃の能海について南条は次のように述懐している。

二十九年三月十日、遂に意を決して東京に來り。余の寓居に住して梵語を研究し、日夕必ず善隣書院に到り、宮嶋^(ママ)大八氏に就て支那語を學習せり。爾來二年間、余は君と起居を同うし、常に其堅忍不拔の志に感激せり²⁰⁴。

明治26（1893）年に哲学館を修了した能海は一度島根へ帰るが、明治29（1896）年に再び上京した。そしてサンスクリット語を南条から教わりながら寄留した。またこの頃宮島大八が開いた善隣書院に通い始めた。上の南条の文章は、大正6（1917）年に書かれたもので、「善隣書院」と書かれた私塾は能海が通っていた当時は「詠帰舎」と呼ばれていた（明治31年6月「善隣書院」へと改称）。

詠帰舎は宮島大八が東京麹町区平河町の私宅で漢学と中国語を教えるために開いた私塾である。後に興亜会を起こす宮島誠一郎のもとに慶応3（1867）年生まれた宮島大八は、明治14（1881）年に興亜会附属の支那語学校に入学するも、翌年同校が廃校となり東京外国

²⁰⁴ 「能海寛君略傳」（『能海寛遺稿』所収）。また同文の原稿は『著作集 第15巻』p570-577に収録されている。

語学校漢語科に転学する。この時の転学組の中には、後に能海が上海で出会う小田切万寿之助（上海総領事代理）や、また漢口で出会う瀬川浅之進（漢口二等領事）がおり、東京外国語学校の上級に在籍した。そして宮島は明治 20（1887）年自費で中国留学へ旅立ち、数か月の北京滞在の後、保定蓮池書院の張裕釗²⁰⁵のもとで学び始める。その後張裕釗は武昌の兩湖書院、襄陽の鹿門書院の主講として各地を移動したが、宮島もこれについて行き、25（1892）年に陝西省西安で張が隠居生活を始めると、そこに寄寓した。しかし張が他界した年に日清戦争が勃発し、宮島は帰国する。帰国後の明治 28（1895）年 5 月には先述の通り詠歸舎を開き、同年 9 月には東京帝国大学文学部漢文科で講師を務めるようになる²⁰⁶。

宮島が開いた詠歸舎は、明治 30（1897）年に設立された東京外国語学校と並んで、日清戦争後の国内において中国語教育の中心的存在とされる。出身者は陸軍士官学校・陸軍大学校・東京高等師範学校その他私立大学・学校などの中国語教師などの道に進んでいる²⁰⁷。

能海が明治 30 年に書いた日記（「使用日記」）には、4 月 1 日付けで詠歸舎へ入学したことが記録されている²⁰⁸。また同日に書いたと思われるメモには、次のようにある。

宮嶋大八氏明治二十年四月十日、支那山^{（ママ）}西省内地●●長安留学（^{（ママ）}僧 国藩の友を師としつかゆ）、日清戦争に際し帰国。今は帝国大学支那語教授たり。所謂「チヨウジボウ」のあとを補うもの歟。帰化劉雨田毎日来舎教授、関口氏豫科教授。暫く支那に行きし人と云ふ。親切なる人なり。本舎は明治二十八年九月頃より創立せりと云う²⁰⁹

当時能海の耳には、宮島の経歴が上記のように入っていたのであろう。約 7 年間中国にいた宮島は、曾国藩の友（実際には子弟関係にあたるが）である張裕釗に師事しながら日清戦争まで長安に滞在し、詠歸舎を明治 28（1895）年 9 月頃に創立したとある。また講師の

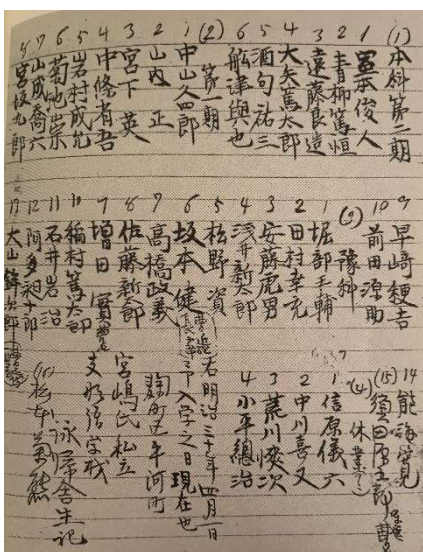
²⁰⁵ 張裕釗（1823 - 1894）字は廉卿、号は濂亭。1846 年郷試に合格、1850 年内閣中書に任用され、また曾国藩の幕友となる。また李庶昌、薛福成、吳汝綸と並んで曾門四弟子と呼ばれる。1883 年李鴻章の招聘を受け保定の蓮池書院の主講となり、1892 年西安で隠居を始めるまで各地の書院の主講を務めた。

²⁰⁶ 宮島大八については、東亜同文会編『続対支回顧録 下』（原書房 1973 年）p1309 - 1315、六角恒廣『中国語教育史の研究』（東方書店 1988 年）を参照した。

²⁰⁷ 六角，前掲書 p210。

²⁰⁸ 『著作集 第 2 卷』 p59。

²⁰⁹ 『著作集 第 6 卷』 p81。



能海が作成した詠帰舎学生リスト(『著作集 第6巻』p80)

劉雨田²¹⁰が毎日教授し、予科で教える関口²¹¹には親切にしてもらったとも書いている。4月の入学以降の日記からは、南条からサンスクリット語の経典について指導を受けながら、その合間に詠帰舎にも通っていた様子が窺える。そして上記引用したメモ書きの隣には、「右明治三十年四月一日予入学之日現在也」と、「本科第一期」「第二期」「予科」ごとに学生の名前を記録しており、予科のところに能海の名前が確認できる²¹²。

では詠帰舎の予科で能海はいったいどのような学習をしていたのか。六角氏の研究によれば、詠帰舎で使用された教材は主に初級から中級学習者に対応した廣部精の『亜細亜言語集』が使われ、他には同じく中級者までを対象とした御幡雅文『華語跬歩』や呉啓太・鄭永邦編『官話指南』があったという²¹³。能海の4月1日入学時の日記には「言語集」という記載が確認できるが、前後の文字が崩れておりここからは判然としない。しかし同年7月26日の日記には、「亜細亜言語集第一巻、四月一日始め今日漸く終る²¹⁴」とあり、入学時に取りかかった教科書は初級、中級者を対象に使われていた『亜細亜言語集』であることが分かる。また同日第一巻を終えた能海は第三巻「問答編」に取りかかり第二巻は後回しにしている²¹⁵。第二巻が「散語」つまり散文であるのに対して、第三巻が「問答」であることを考えると、当時の能海は実践会話を重視していたことが窺える。

さらに六角氏の研究では、明治9(1876)年9月に日本で北京官話の教育が始まったことを契機とし「近代的性格の中国語教育が開始された」と位置づけている。それまで日本の中国語教育は、近世江戸時代の唐話教育の継承として南京語教育が行われていた。しかし日清修好条規締結後の明治7(1874)年北京に公使柳原前光が赴任した際、北京官話を学んだ通弁がおらず急遽北京在住の日本人を採用せざるを得なかった。これを機に東京外国語学校の漢語科では明治9年9月以降、南京語教育から北京官話へと切り替えていく。

能海が使った教科書『亜細亜言語集』も、作者の広部精が東京外国語学校で教える中国人

²¹⁰ 遼東の金州首蘭店の豪族で日本に帰化し詠帰舎で中国語を教えていた(六角, 前掲書 p206)。

²¹¹ 明治28年5月以降の詠帰舎入学者の中に関口精一の名前がある(同書, p206)。

²¹² 『著作集 第6巻』p80。

²¹³ 六角, 前掲書 p206-207。

²¹⁴ 『著作集 第2巻』p117。

²¹⁵ 同書, p118。

から北京官話を学んでいた時期に、ウェード(Thomas Francis Wade,1818-1895)が1867年ロンドンで出版した『語言自邇集』を底本に作成した日本初の官話教科書である²¹⁶。したがって、能海が受けた中国語教育は、明治日本が必要に応じて生み出した「新しい」教育であったことが分かる。能海が重慶滞在中に使った中国語練習ノート「官話記一号」には、比較的平易な会話文が書かれ、漢字の四方に圈点が打たれており、最後に「有号のごとく二字上声の重るときは上の字は下平となるなり²¹⁷」とあることから、現代中国語で言うところの声調を学んでいたことが窺える。『亜細亜言語集』では中国語特有の発声の上下は、圈点を添えることで示しており、この点でも能海が明治期に誕生した新しい中国語を学んでいたことが確認できる。

このように当時最先端とも言える中国語学習を日本で受け探検の準備を進めた能海であったが、中国に上陸すると言語に苦戦した。重慶から友人子安善義にあてた書簡には、「言語風俗交通の不便は殆んど幽界の旅路の如く、上海地方より漢口地方以上は幸に言語少しく通ぜるを以て大に喜び候。又漢口宜昌間は支那通弁兼小使一名雇来り、萬事彼れに問合せ致候²¹⁸」と、重慶に近づくにつれて歯が立たなくなり通訳を雇ったことがわかる。また同じく重慶で書かれた本山寺務所に宛てた上申書には、三つの不便な事柄を「三難」とし、通貨、交通と並んで言語を挙げ次のように伝えている。「今重慶に於いて読書人游氏に就いて重慶語を学ぶ三ヶ月。其口音の異なる、其名詞の異なる、其成句の異なる、上海語に比して大に相近き重慶語尚殆ど最初より学ぶか如し²¹⁹」。能海は重慶に到着すると、現地で重慶語を学び始めた。この頃に使われたノートが先にふれた「官話記一号」である。能海は中国の地方間の言語の違いに戸惑いながら、新たな言語を学ぶ気持ちで重慶語を学んだのである。

(2) 詠歸舎の交遊録

さてここまで詠歸舎と能海の関わりと中国語学習について確認したが、能海自身は詠歸舎に通ったことをどのように思っていたのだろうか。中国に渡った能海が、宜昌から重慶までの船内で書いた日記に一文だけであるがその思いを述べた箇所がある。

宮島氏の講述は詩文言語より歴史書目等至りて懇切なりき²²⁰

短い宮島からは詩文や言語といった内容に加え、歴史書目などについても教わっていたことが分かる。能海は中国に渡る数日前に東京に行き南条など知人を訪ねているが、この

²¹⁶ 六角,前掲書 p120-124,138。

²¹⁷ 『著作集 第4巻』p14。

²¹⁸ 『能海寛遺稿』p48。

²¹⁹ 『著作集 第12巻』p554。

²²⁰ 『著作集 第5巻』p386。

時宮島のもとを訪れている。当時の日記には、ただ清国の状況を聞いたとあるだけで、具体的にどのような情報を得たのかは書かれていない。しかし「規則書を和漢四十部預り、重慶其地支那へ配分を頼まる²²¹」と重慶などでの配布を宮島から頼まれたことが窺える記述がある。この「規則書」とは何を指すのか能海の他の資料からも確認できない。ただ能海が渡航前に宮島を訪ねた5ヶ月前の6月に詠帰舎は善隣書院へと改称され、9月には儒教的考えに基づき中国語・漢語教育を行う決意表明である「善隣書院主意書」と「創設善隣書院啓」が日本語・中国語で発表されるなど、能海が訪ねた時期はいわば詠帰舎の変革期に当たる。そして実現こそしなかったが、当時増えつつあった日本へ来る中国人留学生の受け入れも計画していたようである²²²。このことを考えると、善隣書院へと変わるにあたって作成された主意書と、能海が受け取った「規則書」が同一のものである可能性も考えられる。しかし善隣書院の二種の主意書が確認できないことと、能海の現存資料の中にも「規則書」が残されていないことから、このことを確かめることはできない。ただ、少なくとも、能海が詠帰舎で歴史や中国の状況といった語学以外の情報も得ていたことと、探検出発後も宮島へ書簡を出し続けるなど宮島を慕っていたことは窺える。

また詠帰舎では中国へ進出する日本人との接点も得たようである。明治30(1897)年5月28日の日記には、「詠帰舎宮坂九郎、支那行送別大会あり²²³」とある。この宮坂九郎の名前は、先に挙げた能海が詠帰舎入学時点の学生が書かれた一覧表の「本科第一期」の箇所を確認でき、このことから宮坂も当時詠帰舎で学ぶ学生だったことが分かる。

『続対支回顧録』には、宮坂は明治8(1875)年長野県に誕生し、荒尾精門下の井上雅二に呼ばれ京都で中国語を学び明治30(1897)年に白岩龍平に伴われ上海へ渡ったと説明がある。渡航後は白岩の大東新利洋行に勤め、郵便物の通送係や江西、湖南地方の水路調査等を行ったようである²²⁴。つまり能海は宮坂が明治30年に実業活動のため上海に渡る際の送別会に居合わせていたことになる。

この宮坂の送別会から1年後の明治31(1898)年11月7日から10日にかけて、能海は東京に行った。この探検出発を間近に控えた頃の日記には次のようなメモがある。

漢口 安藤、宮坂九郎 上海 小田切領事、瀬川浅之進 沙市 横田三郎(書記官) 漢口の向辺在武昌木野村政徳、張之洞に紹介を得んこと²²⁵

中国の都市とともに日本人の名前が書かれている。詠帰舎の同窓だった宮坂は、漢口で

²²¹ 『著作集 第3巻』 p276。

²²² 六角,前掲書 p207-210。

²²³ 『著作集 第2巻』 p87。

²²⁴ 東亜同文会編, 前掲書 p400-405。

²²⁵ 『著作集 第3巻』 p274-275。

「安藤」という人物とともに名前が挙げられている。他にも上海の小田切万寿之助や明治31年8月から漢口、沙市の都市でそれぞれ領事館に赴任したばかりの瀬川浅之進と横田三郎の名前²²⁶が並び、最後に漢口近郊の武昌にいる木野村政徳に張之洞を紹介してもらった内容が続く。このメモは日記中に突如現れるため、いつ、誰から得た情報かは不明である。ただ、東京滞在中に書かれた日記の中に書かれていることから、東京で得たものと考えられる。さらに実際に中国へ渡った後の能海の行動と照らしあわせてみると、次節以降見ていくように、ここで名前が挙げられた人物を訪ねていることが分かる。小田切は上海で、瀬川は漢口で、そして武昌の木野村には張之洞からの便宜を求めている。能海は日本にいる時から予め渡航後に訪ねる人物をあらかじめ決めていたのである。

すでに第二章で名前が挙がっていたが、詠歸舎の同窓で能海の探検にとって欠かせない人物について触れておきたい。明治32(1899)年1月7日に到達した重慶で、期せずして再会した井戸川辰三と原田鉄である。1月13日重慶から実弟水野齊入に宛てた書簡で能海は次のように伝えている。

日本領事館に安着仕り、已に領事館内には東京にて支那語学校にて友人の井戸川大尉及原田の二氏あり²²⁷。

重慶に上陸すると日本領事館を訪ねた能海は、「支那語学校」、つまり詠歸舎で既知となっていた井戸川、原田と再会している。能海が4月1日時点で書いた在学生の名前の中には井戸川の名前は無いが、同じく明治30(1897)年に詠歸舎に入学している²²⁸。井戸川は明治2年宮崎生まれ、16歳の時陸軍士官学校幼年生徒となり、歩兵少尉、中尉を経て、日清戦争では台湾に出向した。30年に大尉になると参謀本部出仕となり、川上操六参謀部長により四川駐在官に任命され、31(1898)年重慶に到着している。重慶では加藤義三領事とともに成都で日中提携を提案し、視察員を連れて帰国している。以降井戸川は約七年間四川に駐在し、大正5(1916)年まで中国に関わり続けた²²⁹。また井戸川と同じく四川で再会した原田は、後に能海について次のように振り返っている。

²²⁶ 瀬川は文久二年備中に誕生し、外国語学校支那科に学ぶ。明治16年より外務省留学生第一期で北京へ留学し、明治20年より天津、釜山、サンフランシスコ等を経て明治31年8月二等領事として漢口領事館へ赴任していた(東亜同文会編,前掲書 p248-254)。また横田は文久元年豊前に誕生し、文部省給費生として外国語学校で中国語と算術を学ぶ。後私費で北京へ留学し、明治23年以降、京城、芝罘、上海の領事館に勤め、明治31年8月より沙市領事事務代理として赴任していた(同書, p428-429)。

²²⁷ 『著作集 第9巻』 p82。

²²⁸ 黒龍会編『東亜先覚志士記伝 中』(原書房1966年) p735。

²²⁹ 東亜同文会編, 前掲書 p445-453。

余が初めて師〔筆者注：能海〕を知りしは、東京詠歸舎に支那語を研究せる時にてありき、爾後余は師に先だちて支那に入り、三十一年冬四川省に於て師と再会す。次で三十二年六月頃、西藏の境に近き打箭爐に於て三たび相会ふ。而して師が此方面より入蔵の途中、官吏の阻止に会ひて志を果す能はず、道を変じて甘肅の青海に出るや、久しく消息を絶ちしが、師は不幸にも又土民の迫害に遭い、三十三年十一月四日飄然喇嘛装のまま四川に引上げ来りて、余が寓に入れり。師は此処に静養すること三箇月、健康旧に復し、準備も整ひければ、三十四年二月更に路を雲南に取りて入蔵を試みたり²³⁰。

詠歸舎で知り合った能海とは、四川で再会を繰り返していたことが分かる。明治31(1898)年第一次探検中の重慶とダルツェンドで、そして第二次探検を失敗して引き返した重慶では原田のもとで静養した。この井戸川と原田は、能海の探検中最も多く会った人物だと考えられる。詠歸舎時代の日記には二人の名前は出てこないが、「渡清日記」冒頭には名前があることから、渡航前から二人が中国にいることくらいは把握していたと思われる。

そして探検中何度も会った二人は、能海にとって重要な協力者であった。補論「資料の来歴」でも触れた通り、成都やダルツェンドなどから書簡や荷物を日本へ送る際に、能海は井戸川等を頼っている。また二人は情報の窓口としての役割も果たしていた。明治33(1900)年青海省で盗難に遭った能海が重慶に戻ると、義和団事件の余波を受け領事までもが上海に引き揚げ日本領事館は閉館していた。甘肅省平涼でチベットに向けて歩いてきた能海は、北京で外人が「攘斥」されたとしか事態を把握できていなかった²³¹。そして重慶に残っていた井戸川と原田に再会することで、事態の重大さを初めて知ったという²³²。また同じく33年末に書かれた「在渝日記」には、明治33年12月18日付『官報』第5240号「外報」内の「西藏拉薩状況」の書き写しがある²³³。当時重慶領事館が閉館していたことを考えると、日本国内で刊行された『官報』を重慶にいた能海が読めたということは、領事館以外に日本と連携していた人物が能海のそばにいたことになる。それができたのは、参謀本部から派遣され、義和団事件勃発後も重慶に留まった井戸川と原田しか考えられないだろう。こうした断片的な情報をつなぎ合わせていくと、詠歸舎で知りあった井戸川と原田の二人は、探検中の能海にとって、自身と日本をつなげてくれる存在だったと見ることができる。

ここまで見てきたように、明治日本の中国語教育において、南京語から北京官話への転換がまさに始まったばかりの時期に能海は詠歸舎の門を叩いた。これは当時の日本で受けられる最先端の中国語教育であった。そしてこの最先端の教育を求めて詠歸舎には後に中国

²³⁰ 『能海寛遺稿』 p247。

²³¹ 『著作集 第2巻』 p 323。

²³² 『能海寛遺稿』 p131。

²³³ 『著作集 第4巻』 p 255-259。

で活動する実業家や軍人が集まっていた。それは能海にとってそれまでの交際関係とはまた異なった背景を持つ人々であり、中には宮坂九郎や井戸川辰三など、渡航後も関係が続く人物がいた。消息不明となるまでの能海の人生において、詠帰舎に足を踏み入れたことは、それまで学んだ漢学の世界の中国から、「生身の中国」に一步近づいた時期だったと言える。

第二節 中国へ進出する日本人-上海、漢口

本節では引き続き「渡清日記」を参照しながら、従来言及されることのなかった上海と漢口における交遊録を見ていく。

本題に入る前にまず上海に向けて神戸港を出発した頃の日記に書かれたメモを見てみたい。4ページにわたって書かれたメモには、能海自身の旅券や上海別院の住所の他、中国の貨幣事情など、中国上陸に当たって必要な情報がとりとめのない状態で書きつけられている。その中に「日清協和会」と「東亜同文会」について書かれたページがある²³⁴。内容は、東亜会と同文会の合併によって東亜同文会が発足した際の発会決議の内容と、藤沢南岳をはじめとする関西実業家、政治家が発起した日清協和会の5つの趣旨である。これらの会の成立はいずれも能海が神戸を発った11月に国内の新聞で報じられている²³⁵。このようなメモや報道から窺えるように、日清戦争後の日本国内では日中の連盟をうたう団体が設立し、中国への関心が高まっていた。このメモ書きは、能海自身このような日本国内の動きに注視していたことを示している。

日清戦争の後に締結された下関条約は、明治3(1871)年に締結された日清修好条規に基づく両国の平等な関係性から新たな関係の構築を意味し、当時の日中関係はまさに転換期を迎えていた。特に能海が立ち寄った上海や漢口、重慶には、領事館が設置(漢口の場合は再設置)され、日露戦争以降と比べると規模こそ小さいが、日本人による長江流域の経済活動に対する参入が始まろうとしていた。このような日本人の進出が始まろうとしていた黎明期に、能海が同地で出会った日本人は、どのような人物だったのか。

まず上陸後11月17日から21日までの上海滞在期間中の能海の動向を要約したものを見てみたい。

17日 午前、領事館・大井丸に行く。東和洋行を経て大東新利洋行に行く。白岩氏と会う。橋本君に会い、蘇州・杭州航路について聞く。午後甲斐寛中君が来て会う²³⁶。

²³⁴ 『著作集 第3巻』 p281-282。

²³⁵ 例えば次の記事が挙げられる。「大阪協和会、保守中正派関西事務所」(1898年11月16日付『朝日新聞』東京)、朝刊。「東亜同文大会」(1898年11月5日付『朝日新聞』東京、朝刊)。

²³⁶ 『著作集 第3巻』 p287。

- 18日 総領事代理小田切万寿之助氏と面会。漢口、重慶領事への紹介状をもらう²³⁷。
- 19日 午前諸井副領事に両替、服装、重慶での送金手続きについて質問する。甲斐氏と橋本君と三人で話す²³⁸。
- 20日 宿で中国語を学習する²³⁹。
- 21日 漢口に向けて出発届けを出す。大東汽船会社に行き白岩氏に会う。夜八時天龍川丸に乗船。大東の橋本君と甲斐君に見送られる。書物を託され紹介を得る。佐野氏が見送りに来る。午前2時出航²⁴⁰。

神戸港から上海に向けて出発した能海は、同地まで本山留学生と同行している。この本山留学生は、杭州、南京、蘇州へそれぞれ数名ずつに分かれて向かう計画だった。実は能海が渡航する3ヶ月前には大谷派の係累（連枝）である大谷勝信（慧日院）と大谷瑩誠（能浄院）がそれぞれ中国へ渡り、明治18（1885）年以来中国で続けられてきた大谷派の布教事業にてこ入れする計画があった。勝信は杭州で後に杭州日文堂と呼ばれる教堂を開設したが、これは従来の在留邦人を対象とした布教活動とは異なり、中国人青年を対象に日本語、仏教、普通教育などを行った学堂である。能海とともに上海に上陸した本山留学生たちは、杭州日文堂をはじめとする各地で布教事業にその後携わった²⁴¹。

上海に上陸した能海たちを出迎えたのは上海別院の佐野即悟で、一行はひとまず乍浦路にある本願寺へ入った。乍浦路のある虹口地区は後に「日本人街」と呼ばれるエリアであるが、この頃はそれまで英、仏租界に散らばって居住していた日本人居留民が、日本領事館と別院を中心に集まり居住し始めていた²⁴²。上海別院を後にした能海は、領事館を訪れ、上海から重慶までの護照を申請した。また18日、19日の日記からは、この後訪れる漢口や重慶の領事への紹介状や今後の旅を進めるにあたっての質問していたことが確認でき、まさに手続きと併せて情報収集を行っていたことが分かる。さらに領事館訪問以降の動向をたどっていくと、別院や領事館関係とは違う場所を訪れている。例えば東和洋行という日本旅館

²³⁷ 同書, p 288。

²³⁸ 同書, p 289-290。

²³⁹ 同書, p290。

²⁴⁰ 同書, p291。

²⁴¹ 小島勝・木場明志『アジアの開教と教育』（龍谷大学仏教文化研究所1992年）。また同書の中で留学生の経費が本山勸学局の「留学生費」として出されていたのに対して、能海には布教局開教費項目中の「探險費」から拠出されていたことが指摘されている。これは本山が布教事業に携わる留学生たちとは一線を引いて能海の探險を見ていたことが窺える点で興味深い指摘である。

²⁴² 大里浩秋・孫安石編著『中国における日本租界-重慶・漢口・杭州・上海』（御茶の水書房2006年）p206-207。

²⁴³や大東新利洋行といった貿易会社がそれである。中には何名かの在留日本人の名前が具体的に挙げられている。

中でも、白岩龍平は能海と間接的に接点があった人物である。前節で確認したように、詠歸舎時代能海は宮坂九郎の送別会に参加しているが、宮坂が上海に渡るきっかけは白岩と同行するためだった。そして能海が訪れた大東新利洋行とは、白岩が立ち上げ、宮坂が勤めた会社だった。能海が白岩と会った11月17日の白岩の日記には、「河本、宮坂と内陸部の旅行に出発²⁴⁴」とあり、能海に言及した記述はないが、宮坂と一緒にいたことが分かる。そこで能海と宮坂は再会したかもしれない。

明治3(1870)年岡山で生まれた白岩は23(1890)年荒尾精が上海に開設した日清貿易研究所に入所し、26(1893)年卒業している。日清戦争中は広島大本営で通訳として活動したが、終戦後はすぐ上海に戻り姚文藻と日支合弁の汽船会社大東新利洋行を立ち上げ、29(1896)年には上海蘇州間を始め、杭州を加えた三地点の航運業を展開した。また本節冒頭の能海のメモに書かれた東亜同文会の創立にも関わった人物である²⁴⁵。日清戦争で日本が得た新開港地である杭州・蘇州と上海間の航路拡大に目をつけて白岩は同地で航運業を行っている。能海はこのような日中間の経済環境の変化に敏感な実業家を訪ねていたのである。

白岩との具体的な会話の内容は日記、書簡には書かれておらず不明だが、同じく新利洋行の「橋本」と会った際には、「蘇州・杭州航路」について聞いたとあり、まさしく新利洋行が展開していた航路と重なる。加えて先の触れた本山からの留学生たちの目的地である杭州、蘇州とも一致する。能海にとって目的地ではないものの彼らの目的地について「橋本」に尋ねたものと思われる。

また白岩に関して見過ごすことができない点が、その人脈の広さである。中村氏の研究で示されている通り、日本の政治家や軍人から中国の改革、革命を目指す人物に至るまで広く交際している。例えば本章第一節で触れた井戸川は上海から四川に向かう前に白岩と会い、また四川から視察団と帰国する際に再び訪ねている。さらに次節で触れる四川省の周善培に関しては、白岩から『亜東時報』を四川まで送ってもらっている²⁴⁶。能海が白岩とどのような会話を交わしたかは定かではないが、中国に広い人脈を持つ人物に上海到着後のかなり早い段階で会っていたことは興味深い。

²⁴³ 1886年鉄馬路と北蘇州路が交わるあたりに開業した。1891年樂善堂創業12周年記念宴会が催されたり、1894年朝鮮独立党の指導者金玉均が宿泊中に殺害されたりするなど、当時の上海日本人社会の中でも名実ともに上等旅館であった(陳祖恩著『上海に生きた日本人 幕末から敗戦まで』(大修館書店2010年) p105-115)。

²⁴⁴ 中村義『白岩龍平日記-アジア主義実業家の生涯』(研文出版1999年) p272。

²⁴⁵ 東亜同文会編,前掲書 p338-350。

²⁴⁶ 中村,前掲書 p103。

上海に5日間滞在した能海は、領事館での手続きなど事務的な用事をこなしながら、現地に居留する日本人から情報を集めていた。上海滞在時に発送された書簡は探検中に滞在した他の地域と比べて多い。だが内容は自身の動向を伝えるものが主で、後に送られる書簡と比べるとその土地に対する感想めいた文章は少ない。それは本節でも触れたように、東本願寺があったり、運航会社があったりと、中国の都市の中でも比較的多くの日本人が進出していたため、街の様子は能海をふくめた当時の日本人の耳に入っていたからだろう。

次に漢口での交遊録を見る前に、上海を出発した翌日22日に船内で書かれたメモを見たい。

北方氏より武昌 柳原氏へ紹介名刺を得。又同氏より漢口支店長森氏へ紹介を得。岩崎君より武昌木野村へ張●〔筆者注：徳か？〕に関し紹介状を得。漢口支店長（交代新前原氏）²⁴⁷。

次の目的地である漢口や武昌の在留日本人へ宛てて紹介状を書いてももらったことが分かる。「柳原氏」と「漢口支店長森氏」の紹介状を「北方氏」に、そして「木野村」の紹介状を「岩崎君」から書いてもらったとある。紹介状を書いた二人の人物のうち「北方氏」とは明治31(1898)年に中国に渡り南京の金陵東文学堂の堂長を務めた北方心泉を指す。北方心泉は真宗大谷派僧侶で、明治を代表する書家であるが、明治10(1877)年から16年にかけて清国布教事業掛として上海別院に勤務し布教事業に従事しており、明治31(1898)年にはまさに能海と一緒に神戸から出発した留学生たちを率いて南京に渡り、金陵東文学堂を立ち上げている²⁴⁸。もともと能海と北方は京都で面識があり、北方が留学生とともに渡航することを聞いた時も、「氏は肥満四十五六の年業支那通を以て任じ、本山渡清生を率ひらるる²⁴⁹」と書いており、北方のことを「支那通」と認識していたことが分かる。そして京都で「共に大に支那事情を談ず²⁵⁰」と日記にはある。

その北方から紹介してもらった「柳原氏」と「漢口支店長森氏」とは、先に見た明治32(1899)年「春秋日記」によると「武昌 武備学堂 柳原」、「商船会社長 森常太」とある。また北方とともに能海に紹介状を書いた「岩崎君」は、同じく「春秋日記」には「岩崎董」

²⁴⁷ 『著作集 第3巻』 p 292。

²⁴⁸ 北方心泉については小川原正道、小山聡子ほか著『近代日本の仏教者 アジア体験と思想の変容』（慶應義塾大学出版会2010年）、川邊雄大「明治期における東本願寺の清国布教について-松本白華・北方心泉を中心に」（篠原啓方、井上充幸、黄蘊、氷野善寛、孫青 編著『文化交渉による変容の諸相』関西大学文化交渉学教育研究拠点2010年p153-222）を参照した。

²⁴⁹ 『著作集 第3巻』 p 250。

²⁵⁰ 同書, p 252。

とあり、金陵東文学堂の立ち上げに携わった人物と思われる。南条に上海から出した手紙では、岩崎を「通弁」と紹介している²⁵¹。つまりこの「岩崎君」とは、本願寺から通訳として南京へ派遣された岩崎董であることが分かる。そして北方と岩崎の目的地は南京までだったため、能海は天龍川丸の船内で二人と分かれる際に紹介状をもらい受けたと思われる。

紹介状を持った能海は、蕪湖、九江を経て25日に漢口に到着した。到着日の日記を見てみたい。

二十五日 午前二時漢口着。船中にねる。朝七時起、荷物を仕舞、八時上陸。商船会社に至る。朝食をなす。午前十時、東肥洋行に行き、緒方氏に面し、色々相話す。又同居にて日本人十人あり。其人に付き、重慶行を聞く。二三日重慶より警部帰れりと云う。今行くに差支なきか如し。午後領事館行、瀬川氏に面し、色々相話す。張への紹介、公然たるより懇意をよしとす云々。二時東肥に行、劉ボーイを借り武昌に行き、城内を通り、武備学堂に行き、木野村、村山両氏に面し、色々話を聞く。張へのことをたのみ、五時帰へる。往復車及舟なり。此夜前原氏、当支店長新任の宴を洋楼に開かれ、予も招かる。凡そ十四日間支那料理なり。(耄人一両)²⁵²。

上海での五日間の動向と比べると、たった一日で様々な場所を訪れていることが分かる。まず26日まで滞在した「商船会社」、北方から紹介された森が支店長を務める大阪商輪公司に行き朝食をとっている。この「大阪商輪公司」とは大阪商船会社のこと、先に挙げた白岩の大東新利洋行と後に合弁し日清汽船を立ち上げるが、明治31(1898)年当時はイギリスと清国の独占状態だった長江航路への参入にちょうど名乗りを上げた時期だった²⁵³。その支店長が北方から紹介された森常太で、能海は27日に東肥洋行に移るまで滞在した²⁵⁴。

大阪商輪公司の後能海が訪ねたのは東肥洋行で、そこで緒方二三に会っていることが分かる。緒方二三は、慶応三年熊本県に生まれ、濟々鬢に学び、荒尾精が漢口に楽善堂支店を設けると聞き、漢口に渡った。経営が厳しくなり楽善堂が閉まると、同郷の宗方小太郎と日清貿易研究所出身者と共に東肥洋行を立ち上げた。漢口に本店を置いた東肥洋行は、日清戦争中一度事業を中止したが、明治29(1896)年には復活し、上海、沙市に出張所を出し、営口、熊本に支社を設けた²⁵⁵。日記には緒方と「色々」話したとしか書かれていないが、長年

²⁵¹ 『能海寛遺稿』 p43。

²⁵² 『著作集 第3巻』 p296-297。

²⁵³ 大里・孫編, 前掲書 p63-95。

²⁵⁴ 『能海寛遺稿』 p43。

²⁵⁵ 東亜同文会編, 前掲書 p319-330。また東肥洋行については野口宗親「明治期熊本における中国語教育(2)」(『熊本大学教育学部紀要 人文科学』第51号, 2002年, p65-83)を参照した。

漢口に関わってきた緒方から同地について教わることは多かったであろう。また東肥洋行にいた日本人からは、これから向かう重慶から「警部」が戻ってきたことなどを聞き、今後の道のりに対してやや安心したような記述をしている。

日記の続きを見てみると、午後には領事館に行き瀬川氏と「色々」と話をしたとある。この「瀬川氏」とは二等領事瀬川浅之進を指し、渡航前の明治31(1898)年11月に東京で書かれたメモに名前が確認できる人物である。また宮島大八が興亜会附属の支那語学校から東京外国語学校漢語科に転学した際に、ともに転学した人物である。そして瀬川には「張」への紹介状について相談し、快諾を得たと書かれている。その後東肥洋行に再び立ち寄り、ボーイを連れて武昌へ向かっている。そして武備学堂へ行き「木野村、村山両氏」に会い、ここでもまた「張」のことを頼んでいる。「木野村」、「張」のいずれも瀬川同様、東京で書かれたメモに名前が挙がっている。

漢口での能海はしきりに「張」という人物に何かを頼もうとしている。この「張」とは一体誰を指し、何を頼もうとしたのだろうか。結果から言えば、この「張」とは湖広総督張之洞を指し、能海は入蔵の便宜を求めていた。25日に「張」のことを頼んだ「木野村」が27日来訪し、「張之洞の頼みのこと、両三日中不定」と伝えてきたという記録が日記にある²⁵⁶。そしてこれを聞いた能海は翌日出発しようとしていたところを、滞在を数日延して返事を待つことにした。当時の様子を本山上申書(「別報第一第二」)では次のように報告している。「二十五日長江を渡りて武昌に行き、道台^(ママ)に入蔵の便宜を得んことを願置、今日に至るまで其返信を待つ為に在漢致候²⁵⁷」。つまり能海は湖広総督張之洞に対してチベットへ行く自身に便宜を与えてくれるよう求め、その返事を待つため数日漢口に滞在したのである²⁵⁸。

そして能海がその依頼を直接頼んだ「木野村」とは、岩崎から紹介してもらった人物として、上海を出た船内で書いたメモにあった木野村政徳を指す。また本章第一節で引いた東京で能海が得た在留日本人情報の中にも名前がある。木野村は文久元(1861)年小田原に生まれ、明治9(1876)年外国語学校に入学後、12(1879)年北京に留学した。その後士官学校外国語教官、陸軍助教となり中国語の教授に当たった。31(1898)年大原武慶が湖広総督張之洞の聘に応じて武昌に赴任するに伴い、通訳として同行し武備学堂で大原の講述を助けていた²⁵⁹。明治29(1896)年に張之洞が武昌で開いた武備学堂は、湖北軍をドイツ式に改める目的で創設されたが、31(1898)年には大原武慶をはじめ日本の下士官を招聘し軍備改

²⁵⁶ 『著作集 第3巻』p302。

²⁵⁷ 『能海寛遺稿』p44。

²⁵⁸ 本文で引用した通り、本山上申書には「道台」と書いているが、便宜を求めた張之洞は湖広総督であるため道台ではない。これは能海の書き間違いなのか、それとも張之洞から道台にチベット行きの便宜を与えるよう指示してもらうことを考えていたのか定かでない。

²⁵⁹ 東亜同文会編、前掲書 p230-231。

良が進められていた。能海自身も「武昌武備学堂翻訳官木野村氏²⁶⁰」と書いているように、通訳として武備学堂におり、張之洞の比較的側にいた日本人を通じて便宜を依頼したのである。しかしこの依頼は29日木野村から「六ヶ敷出来ぬ」という返事が届き、能海は翌日重慶に向かう船に乗っている。つまり25日から30日にかけて滞在した漢口は、本来そこまで長く滞在する予定ではなかったが、チベットへ行くための「便宜」を期待して、数日滞在を延ばしたということになる。

張之洞からの返事を待ちながら能海は漢口でどのように過ごしていたのか。上海よりも比較的充実していた様子が窺える。例えば漢陽の帰元禅寺に行き金剛経を購入したり、東肥洋行で緒方はじめとする在留日本人で仏教談に花を咲かせたり、名刺を作ったり、本や地図を購入したりなどしている。また領事館に呼ばれ瀬川領事や大阪商船会社の森などと一緒に食事をとったりしている。漢口の日本領事館は明治31(1898)年に再開し(1886年に開設したが日本人が少なかったため一度閉館)、同年には「漢口日本居留地取極書」が締結されているが、実際に日本人が漢口に本格的に進出するのは日露戦争前後のことであり²⁶¹、能海が訪れた当時の漢口の日本人社会はまだ小規模だったと思われる。実際に能海の同地での動向を整理すると、登場する人物自体は決して多くとは言えない小さなコミュニティの中で滞在していたことが窺える。

ここまで見てきたように、本節では上海、漢口で能海が会った人物を辿り、従来言及されてこなかった交遊録の一部を示した。明らかとなったのは、東京を出た時にあったメモが領事官などの政府関係者だったのに対し、実際に紹介を受けて訪ねた人物の中には現地で経済活動に従事する日本人も多くいたことである。それは日清戦争によって日本人に経済的有利な条件が規定されたことで、日本人の中国進出が始まりつつあった背景があるからだろう。とりわけ経済活動を担ったのは、戦前の日清貿易研究所関係者が多く、彼らは中国に関する豊富な知識を使って事業を中国で始めていた。能海が訪れた時期は、ちょうど戦後彼らが中国に足場を固め事業を展開し始めた頃にあたる。特に日清戦争によって獲得した権益の中でも長江流域の航行権(上海-蘇州・杭州間、宜昌-重慶間)は、早くも日本人実業家たちの進出先となっていた。そして上海から長江に沿って重慶まで遡上した能海のルートは、ちょうど彼らの進出先と重なり、彼らを訪ねながら、目的地の情報を集めて探険の歩を進めていったのである。

次節では漢口から船で三峡を越えて到着した四川省について見ていくが、これまで見てきた都市と異なり同地へ進出した日本人は極めて少なく、ほぼ領事館しか無かったと言って良い状態だった。その中で能海は一体どのような人物と会ったのだろうか。

²⁶⁰ 『能海寛遺稿』p44。

²⁶¹ 大里・孫編著,前掲書 p63-95。

第三節 日中提携の気運-四川

本節では舞台を四川省に移し、そこでの交遊録を通して能海の周辺にどのような人物がいたのか見ていく。前節で見た上海、漢口を後にした能海は、明治 32 (1899) 年 1 月 7 日重慶に到着した。そして 4 月 1 日に出発するまでの約 3 か月間、重慶領事加藤義三はじめ、成田安輝や井戸川辰三とともに重慶での時間を過ごした。そこでの関係性はバタンまでの厳しい道のりにおいて協力してくれる存在であったことは第二章で述べた。そして重慶を後にした能海は 4 月 11 日から 24 日まで成都に滞在した。本節では成都での交遊録から見て行く。

(1) 現地僧侶たちとの交流

もともと能海は、成都での滞在日数を実際より短く計画していた。しかし「着都後見聞する所、予定の日数にて到底一応を見物する能はず候に就き、近日井戸川大尉、中村警部、原田学生、遊歴来都の日まで滞在看物致すことに改め候。就ては当地滞在は十余日と相成候²⁶²」という理由で滞在期間を延ばしたのである。

能海は北打金街の萬有店に滞在し連日「見物」している²⁶³。日記を見る限り「見物」は主に寺院に集中している。実際に訪れた寺院は、青羊宮、草堂寺、文殊院、喇嘛古寺、昭覺寺、宝光寺、二仙庵、武侯祠、大慈寺で、仏教寺院もあれば道教寺院、祠堂など多岐にわたる。そしてこれらを訪れた感想を次のように述べている。「重慶地方に比しては万事進歩致居候²⁶⁴」と、それまで滞在した重慶よりも盛んだと感じたようだ。

では能海はこれら寺院を訪れて何をしていたのか。まず「寺院に於ては至る所梵文經典の有無相尋候所、一も無之候²⁶⁵」と報告しているように、各寺院にサンスクリット語經典が無いか尋ねていたことがわかる。中には住職と比較的長い時間会話をしていたり、宿泊していたりする場合もある。例えば 4 月 13 日の日記には、通称草堂寺と呼ばれる杜甫の草堂の傍の梵安寺²⁶⁶を訪れた時の様子を次のように日記に記録している。「知客堂に於て日清佛教異同、現今教界の状況等を談し、飯を食す。于時加藤領事来られ、共に方丈に面し、又梵經の有無を問うも、無き由を聞き、日清佛教徒の通信を致事を約し²⁶⁷」とある。そして日本に送

²⁶² 『能海寛遺稿』 p59。

²⁶³ 付録資料の 3 成都地図には、能海が書いた成都地図と光緒 29(1903)年の計 4 枚の地図を載せた。前二枚は訪れた寺院が書かれた能海による地図と、それを打ち直したもの。後二枚は光緒年間に作成された地図である。画質が良くないため、能海が宿泊した北打金街の位置だけ示すことにした。周囲には按察使司や布政使司などがある。

²⁶⁴ 『能海寛遺稿』 p53。

²⁶⁵ 同書, p54。

²⁶⁶ 四川省文史研究館著『成都城坊古跡考』(成都時代出版社 2006 年)p308。

²⁶⁷ 『著作集 第 15 卷』 p183。

った報告では、「知客堂にて日清仏教の異同、現今教界の状況を談じて、午餐を喫し、方丈心太和尚に面す、六十一歳の高齢温厚篤実なる人なり、四川各大寺の状況、ラマ教の有無、梵文經典の有無等より耶蘇教の侵入等のことを談じ、彼我益する所あり²⁶⁸」とあり、さらに「将来日清仏教僧徒互に通信して親睦せんことを談ぜしに、喜んで承諾致候²⁶⁹」とも伝えている。また昭覚寺では、住職と会い一泊して護摩法会を見学している。この時の様子を南条に宛てた手紙では次のように伝えている。「其他将来日清仏教徒和睦致し、通信往復致し、又支那僧の日本渡来あらんこと等談話致候処、皆喜んで相諾し候間日本よりも今後は往復通信相成様申上候²⁷⁰」と、具体的に日本人と中国人の僧侶の交流を提案していたことが分かる。そして唐代から続く大慈寺を訪れた 21 日の日記には次のように書き留めている。「東門内、大慈寺に至り、方丈円澄氏に面す。学識あり。二時間斗り。いきもきらず話す。大に好知己を得たり。學術上の談話をなす。伝法のこと、梵文のこと、目今の状況等なり²⁷¹」と、息も切らず話をしたとある。光緒年間の官僚周詢による『芙蓉話旧録』によれば、文殊院、大慈寺、昭覚寺の三寺は数百の僧侶を抱える成都を代表する寺院で、その住職である方丈はみな有名な高僧が務めたという²⁷²。能海が対話した人物はいずれも学識のある高僧だったと考えられる。特に昭覚寺や梵安寺の僧侶が能海の泊まる宿を訪れていたりすることから、僧侶との交流は単に能海の一方向的なものではなく、双方向的なものだったと思われる。

このように成都で様々な寺院を訪れた能海の日記や書簡からは、サンスクリット語經典を探したことと、現地の僧侶たちと対話をしていたことが分かる。そこでの話題は、四川にあるチベット仏教や日中間の仏教の違いなどの現地の仏教事情から、仏教徒の往来や通信、そしてキリスト教についてまで様々な内容だったことが窺える。

エリック・シッケタンツ氏は、清末民国期の中国仏教の自己認識に日本仏教が与えた影響に関する論考の中で、小栗栖香頂など明治期に中国を訪れた日本仏教徒が荒廃した寺院を中国仏教そのものの衰退の証拠として捉えたことが、中国仏教は墮落しているという中国仏教觀の基礎を形成したと指摘している²⁷³。しかし能海の日記や書簡には、荒廃した寺院に関する記述や中国仏教の衰退ぶりを惜しむ記述よりも、「彼我益する所あり」や「いきもきらず話す」などの表現のように、交流したことや今後交流をしていく約束をしたことへの喜びや興奮が目立つ。

当時中国仏教は、キリスト教の進出や、寺院を学校に転用し近代的教育制度を確立しよう

²⁶⁸ 『能海寛遺稿』 p56。

²⁶⁹ 同書, p56-57。

²⁷⁰ 同書, p54。

²⁷¹ 『著作集 第 15 卷』 p202。

²⁷² 周詢『芙蓉話旧録 卷四』（四川人民出版社 1987 年） p52。

²⁷³ エリック・シッケタンツ『墮落と復興の近代中国仏教-日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』（法蔵館 2016 年） p29-81。

とする廟産興学、そして洋務振興の高まりに伴い仏教不要論の台頭など諸問題を抱えていた²⁷⁴。こうした中国仏教の問題のうち、キリスト教の存在については、明らかに日本仏教も同様の問題に直面していた。またそのほかの問題も、変わりゆく国家体制に対して仏教がいかに貢献できるかという点で、明治維新以降日本仏教界が存続のために直面した問題と相似している。先に触れたエリック・シッケタンツ氏の研究では、当時日本仏教徒が中国仏教を見るまなざしとして、当時の日本仏教にとって進行中、またはすでにくぐり抜けた改革過程が反映されていたことが明らかとなっている²⁷⁵。こうしたまなざしを当時の日本仏教徒が持っていたという指摘は、能海にも当てはまるだろう。

第四章で詳しく見るが、能海は『世界に於ける仏教徒』で世界の仏教徒が団結する方策を紹介した際に、朝鮮や中国を「好友」と位置づけていた²⁷⁶。これは同じ課題に直面し、同じ方向に向かっているという前提に立っているからであって、それは当時の日本仏教界の経験や課題が尺度となっていることは明らかである。ただ、同氏はそれが中国仏教を後進的な存在として捉える機能をもったと指摘しているが²⁷⁷、能海の場合はこのようなまなざしが連合への気持ちをより強くさせたのではないか。類似、共通する課題の共有によって、中国仏教を後進的に捉えることよりも、共有した課題の対策の一步として往来や通信を始める事の方がはるかに大きな意味を持っていたと考えられる。

また当時の中国仏教について触れておかなければならないこととして、当時中国にとって深刻な課題であった「亡国」に関する言説の中で、仏教が救国策の一つとして注目されていたことがある。多くの研究が明らかにしているように、仏教を国家の革新強化のために動員しようとする思想は、仏教に本来ある末法思想を列強国に瓜分される危機に直面する中国の現状に重ね合わせて語られ、それは当時の仏教徒も共鳴したという²⁷⁸。こうした仏教界の言説に能海が触れたかどうかは、現存資料から直接確認することはできない。しかし次節以降見ていくように、中国が直面する「亡国」に対する危機感から新たな政治や学び、そして言論を求めた人々が、能海の探検を支えたのである。

(2) 訪日視察団と能海寛

(1) では能海が成都で様々な寺院を訪れていたことに触れたが、この間に能海は一度災難に巻き込まれている。20日深夜二時能海の泊まる宿屋の近くで火事が起こったのだ。「火

²⁷⁴ 塚本善隆「中華民国の仏教」(『塚本善隆著作集 第5巻 中国近世仏教史の諸問題』1975年大東出版社)、村田雄二郎「孔教と淫祠-清末廟産興学思想の一側面」(『中国 社会と文化』第七号 1992年 p199-218)。

²⁷⁵ エリック・シッケタンツ,前掲書 p76。

²⁷⁶ 『世界に於ける仏教徒』 p71。

²⁷⁷ エリック・シッケタンツ,前掲書 p76。

²⁷⁸ 同上。また葛兆光『西潮又東風』(上海世紀出版 2006年)p54,96を参照した。

事だ」という声を聞いて飛び起きた能海は、火事が近くで発生していることを確認すると、重慶から一緒に来ていた游頭甫と人足二人の四人で、それぞれ荷物を抱えて宿屋から飛び出した。しかしどこに逃げれば良いかわからず、周囲をうろうろとしている内に火事は鎮まり結局元の宿屋へ戻った。逃げようとした時の心中を日記には次のように記録している。「文殊院、草堂寺、周氏の宅尚遠し。江氏の宅も近けれとも、又火事に近し²⁷⁹」。いくつか逃げるあてがあったようで、文殊院や草堂寺の他、「周氏」と「江氏」の家へ逃げることも考えたようである。このような危機的状況に逃げ込む先として頭に思いつく場所は、よほど近しい関係の者ではないのか。

実は成都滞在中の日記を読むと、この「周氏」は最もよく会っていた人物であることがわかる。以下、「周氏」が登場する日記の記述を抜粋する。

4月14日「十時まで語り、氏は成田氏に面し、明年日本に行くと云う。日清の話になす²⁸⁰」。

4月15日「夜周氏等来訪、談話す²⁸¹」

4月18日「夜周兄弟来遊。十時頃まで談話す。²⁸²」

4月19日「予は夕方獅子巷に周氏を訪ふ。兄弟二人と大に東洋の大勢、目今急務談をなす。彼れ日本に二三年の内に行くと云へり。談話凡そ三時間²⁸³。」

4月20日「周氏外一人来り、東洋談あり²⁸⁴。」

4月21日「周王三氏と日本仏教の組織等のことを話せり²⁸⁵。」

上記抜粋から、まず「周氏」とは兄弟で、日本に行こうと考えている者だと分かる。そして二人（あるいは三人）の話題は「日清の話」や「東洋の大勢」、「東洋談」など、日中間の時勢が多いことが伺える。加えて、初めて日記に登場した14日には、翌日「成田氏」、つまり成田安輝に会うと話していたことが確認できる。

能海に先行して3月1日に重慶を出発した成田は、同月10日から19日に成都に滞在し、4月2日から9日までダルツェンドにいた。そして同月25日には重慶に戻っていることが外務省外交文書から把握できる²⁸⁶。「周氏」が能海に会った日は4月14日であるため、成

²⁷⁹ 『著作集 第15巻』 p199

²⁸⁰ 同書, p186。

²⁸¹ 同書, p189。

²⁸² 同書, p195。

²⁸³ 同書, p197。

²⁸⁴ 同書, p201。

²⁸⁵ 同書, p203。

²⁸⁶ JACAR:B03050316600, 第53画像目。

田はちょうどダルツェンドから重慶までの帰路にいたと考えられる。重慶に向かう成田に「周氏」は会いに行ったと推測することができる。

では、日本行きを希望する「周氏」は、なぜ成田に会おうとしていたのか。この答えを探するために成田の動向に注目したい。先行して重慶を出て成都に到着した成田は、四川総督奎俊を訪ね日本への視察団派遣を提案していた。既に木村肥佐夫氏が紹介しているように²⁸⁷、3月16日総督との面会が叶わなかった成田は「緊急時務九条」という四川経営に必要とされる九つの項目をまとめた文書を渡した。この九つの項目とは、1 視察員の派遣、2 学生の派遣、3 師範学堂教師と翻訳官の招聘、4 武官の招聘、5 鉱務技師の招聘、6 警察官の招聘、7 河川対応式の大砲艦の用意、8 少数民族の文明化、9 チベットの経営（1 チベットの人才教育 2 道路の開通 3 電信の架設 4 兵の訓練 5 農工商務の振興）である。各項目について述べることはしないが、1と2の提案の要点だけ確認しておきたい。

四川如能揀派文武諳練事勢者各一員、或但派一文員、前往日本、遍覽各處、以察其如何立法、如何辦事、一一條記、苟其善者、大人採而行之、則今日之四川雖遜於東南諸省、異日可以超出日本之右²⁸⁸。

近日南洋、兩湖、皆資送學生、遊於日本、誠折衷取善之法也、窃謂四川如能精選敏而有志之士、送赴日本、分學文武農工商各學堂、三四年後學成而歸、令成本省大小學堂教習、又予之保獎、以勸其志、則人孰不奮興、群然思振哉²⁸⁹。

一つめの引用は1の視察員派遣について、そして二つめの引用は2の学生の派遣に関する成田の提案である。方法は異なるものの、人を日本に送り出し、彼らに日本の法制度や軍事、農工商など様々な分野を学ばせ、さらにそれを四川省に持ち帰らせることで、同省の発展に生かそうというものである。翌日秘書官を通じて渡された提案に対する総督の返書に

²⁸⁷ 木村,上掲論文。

²⁸⁸ JACAR:B03050316700,第14画像目。概要は次の通り。「四川から時勢に詳しい文官、武官一名ずつ、あるいは文官一名を選び日本へ派遣させる。彼らに各所を遍覧させ、立法がいかに行われ処理されるのかを観察させる。そして一つひとつ箇条書きにさせる。もし良いものがあれば、総督が採用、実行する。そうすれば今日の四川は東南諸省にひけをとっていますが、他日日本の右に出ることになります。」

²⁸⁹ 前掲資料。概要は次の通り。「近頃南洋（公学）、兩湖はそれぞれ学生を日本に送り出しています。これは良いところをとる折衷の方法です。四川が賢く志のある者を選び、日本の武農工商の各学校でそれぞれ学ばせ、彼らが3、4年後に帰ってきた時には、四川の大小学堂で教授させる。更にそれを奨励することでその志を促すと、誰が奮興しないでしょうか、いえ皆するでしょう。」

は、学生を送ることについて「徐々に之を図るべし」と答えている。ただ変法をとらえた他省の官僚が左遷されたことや、省内の軍を洋式に変えようとするも周囲の反対に遭っている現状を伝え、「維新」を志すものの実行に移せない、または慎重にならざるを得ない環境にあることも付言されていた²⁹⁰。

成田が総督に会う前年の明治 31 (1898) 年 6 月から 9 月にかけて光緒帝の支持の下康有為や梁啓超など変法派による政治改革運動が展開されたが、西太后の訓政復活によって挫折し、変法派の主要人物は処刑、亡命した。この改革運動の挫折の影響が四川まで及んでいたことが窺える。

その後四川省から視察員が日本に派遣される。明治 32 (1899) 年 8 月 26 日に重慶に集まった視察員たちは、10 月 1 日図らずも能海が渡清時に乗船した西京丸に乗って上海から日本へ渡った。そしてこの視察団に重慶から同行したのが、第一節で登場した詠歸舎の同窓で、重慶領事館で再会した井戸川辰三大尉²⁹¹だった。総督への視察団派遣の提案は、この井戸川を中心に、加藤義三重慶領事と成田の三名が交代で成都を訪れ行っていた²⁹²。

能海が重慶滞在以降頼った加藤領事や成田、井戸川は、このような四川省からの視察団派遣に関する交渉を行っていたのである。日清戦争の敗北やドイツによる膠州湾の占拠により、当時の中国は中体西用を基盤とした洋務自強運動が失敗したと捉え、振興策を模索していた。そして官僚の外国視察がその一つとして白羽の矢が立った。これは四川に限ったことではなく他地域でも行われた。例えば能海が武昌で訪ねた木野村政徳は、1898 年湖広総督張之洞が軍事制度視察のため日本へ派遣した姚錫光によって湖北省へ招聘された人物である²⁹³。その後中国官民では日本視察、留学ブームが起こるが、張之洞が派遣した視察団はそ

²⁹⁰ 返書は次の通り。「奎制台云西藏事、是西藏大臣專夷、総督権不足、恐不易弁。至於送学生等事、尚可徐徐図之。惟中国朝廷現在禁言変法、(不久湖北巡撫曾劼因奏請変法革職)。四川即要拳弁新政、只能暗中為力不能章明較著。制台求江蘇多年、本是維新之人。昨日送去之信、与他意思甚合、甚為感激。現在便血故不能約定見面之日、請江先生来拜面譚。(奎制台在南洋常来武官二人到川、将变洋操、人多不願、即此一事可見他的意思本是維新、苦無人知道耳)」JACAR:B03050316700,第 21 画像目。

²⁹¹ 防衛省資料によると、1898 年 1 月 25 日井戸川は近衛歩兵太尉から参謀本部へと異動となっており (JACAR:C07082243000)、同年 6 月 28 日には清国出張の届け出が出されていることが確認できる (JACAR:C10070982900)。そのため参謀本部からの指令を受けて重慶に来ていたことが窺える。

²⁹² JACAR:B07090025600 第 15 画像目。また視察団派遣を決定した総督が総理衙門に出した文書には、提案者として井戸川の名前だけが記載されているが、「既経該国派員来川一再陳請未便却其敦睦之意」とあることから、提案自体は複数回行われたことが伺える。(中国第一歴史檔案局『光緒朝硃批奏摺』第 105 輯 (中華書局 1995 年) p939。)

²⁹³ 藤谷, 前掲書 p208。また姚錫光等の湖北視察団を日本軍事制度視察の嚆矢とする見方

の先駆けであり、これに続く形で派遣された四川省の視察団は相対的に見れば、かなり早い段階で行われていた²⁹⁴。

ではこの視察団派遣と「周氏」はどのような関係にあるのか。成都で能海が書いた日記には「日本遊学志望者 成都」という、日本への遊学を希望する中国人の名前が書かれたメモがある。そこには「周嗣^(ママ) 倍」「江少爺」、「王棧」、「陳」、「李」と五名の名前が書かれている²⁹⁵。字がつぶれて不鮮明であるが、「周嗣^(ママ) 倍」について、「周善^(ママ) 倍 弟 北門内 父知府を致す 武昌 十八才」と説明があり、このメモに書かれた「周嗣^(ママ) 倍」には周善培という兄がいることが分かる。

この周善培は四川から初めて日本に派遣された視察団に「遊歴学生」として朱必謙と参加している。本節冒頭でひいた能海の日記には、「周氏」や「周兄弟」とあり、兄弟のどちらと会ったのか判然としないが、4月23日付けで能海は「一時半獅子巷、周善^(ママ) 倍 氏へ行き、慷慨話²⁹⁶」と日記に書いており、確かに兄周善培とも交際していたことが確認できる。

また周善培とともに「遊歴学生」として日本に渡った朱必謙（朱蘊章）は、重慶領事館で成田と井戸川から日本語と英語を学んでいた²⁹⁷。領事館で二人が教えていたことは能海も書簡に書いている²⁹⁸。

当時の様子について『四川文史資料選輯』で朱自ら振り返っている。朱によれば、明治31(1898)年頃から重慶の日本領事館で学び、日ごろより井戸川から日本に行き明治維新の「好績」を見ることを勧められていたという。そして明治32(1899)年春に井戸川から視察団の話聞き加わることにした。翌年春に日本から重慶に戻ると、井戸川が再び訪れ、四川省から派遣する留学生に加わらないかと誘われた。この時の定員は20名で井戸川はすでに幾人かを推薦していた。そしてその中には周嗣培、つまり能海のメモ「日本遊学希望者」で挙げられた人物が含まれていた。つまり、能海が成都で親しく交際した「周氏」とは、周嗣培または周善培の兄弟どちらかを指すと思われるが、いずれも後に日本に実際に訪れていた。

特に日本から四川に戻った周善培は、日清戦争以降始まる四川省の新政運動において活

は、熊達雲『近代中国官民の日本視察』（成文堂1998年）に従った。

²⁹⁴ この四川省の視察団派遣については、前掲熊の研究の他、佐藤三郎『中国人の見た明治日本-東遊日記の研究-』（東方書店2003年）、包曉嬌「清末中国文武官員「東遊軍事考察記」研究-以丁鴻臣『東瀛閱操日記』、沈翊清『東遊日記』為中心」2014年復旦大学修士論がある。

²⁹⁵ 『著作集 第15巻』p205-206。

²⁹⁶ 同上, p206-207。

²⁹⁷ 朱必謙「対「四川官費留日考訂」之商榷」（中国人民政治協商会議四川省委員会四川省省志編纂委員会『四川文史資料選輯』第15輯、四川省新華書店1964年）p218。

²⁹⁸ 『著作集 第9巻』p83。

躍した人物である。警察官育成や消防団設置、そして成都に商業エリアを設けるなど実に多岐に渡り²⁹⁹、周の功績は四川史の中では欠かせない人物として今でも紹介されている³⁰⁰。

また、周嗣培とともに井戸川の推薦を受けた陳崇功は、明治 32(1899)年 5 月 30 日成都に到着した寺本を訪ねている。寺本の『蔵蒙旅日記』には「江爾鵬・陳崇功の両氏来訪。共に少しく日本語を操る³⁰¹」とある。もしかしたら陳崇功もどこかで成田や井戸川から日本語を学んでいたのかもしれない。後に陳崇功と朱必謙は中国同盟会重慶支部となる公強会を結成し、保路運動へと繋がる革命運動を重慶地区で推進していく³⁰²。また第一次探険失敗後、帰国すべく能海と分かれ重慶に一次滞在した寺本は、周善培と文書のやりとりをしている³⁰³。

当時四川を訪れた日本人の周囲には、後に四川を舞台に活躍した人物がおり、彼らは当時日本とりわけ明治維新以降の変貌ぶりに関心を示し、能海と日中や「東洋」の話を連日のようにしていた。彼らはその後日本へ留学するが、その背景には明治 30 (1897) 年川上操六参謀次長が張之洞のもとに派遣した参謀本部の神尾光臣を皮切りに、日本への視察や留学が中国各地で提案されていったことがある。熊氏が指摘するように、当時直接中央政府ではなく各地方の実力者の総督などに向けて視察派遣を持ちかけることが多く、井戸川も同じような使命を受けて四川に派遣されていたのである³⁰⁴。

最後に視察団派遣と能海の「探検」との関連で一つ成田が書いた書簡を見ておきたい。第二章で見たように、能海はダルツェンドで寺本と一緒に同知劉廷恕と面会し、そこで重慶領事館で受領した護照を持っていてもチベットへ入ることはできないことを知った。そして電報で成田に事情を伝えていた。そして電報を受け取った成田は、ダルツェンドの劉へ書簡を送っている。その一部を見てみたい。

晚近我佛教與貴國關係最親密，今春我本願寺大法主自行北京，與貴國親王及駐京大喇嘛會見懇談情誼甚親睦。現在上海、蘇州、南京等地既創設學校，傍從事佛教布教，蓋唇齒輔車之實，各宜因事力踐也。故開校式之日，地方朝野之紳士羣臨式場，吐露滿腔之熱血而表翼贊之忱。是雖時勢相維使然，仰亦朝野有識諸士之盛情致可感也。同種相親交固結而後種可保也，今敝國於貴國以此意相交、故軍事外交之機微，他人不得見聞者，於貴國

²⁹⁹ 吳康零主編，前掲書 p203-204、四川省文史研究館著，前掲書 p 353-354。

³⁰⁰ 吳康零主編，前掲書 p203。

³⁰¹ 横地，前掲書 p61。

³⁰² 重慶における中国同盟会から保路運動への動きについては隗瀛涛、沈松平『重慶史話』（社会科学文献出版社 2011 年）を参照した。

³⁰³ 高本康子、三宅伸一郎「寺本婉雅『新旧年月事記』翻訳」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』31 号 2014 年 pp143-186）。

³⁰⁴ 熊，前掲書 p 79。

特別許之、此誼想蒙諒督焉。此次能海寺本兩僧人入藏非有他意³⁰⁵。

日中仏教界の交流が現在友好的な関係にあることを具体的に述べた後、下線で示したように、日本は他国に対して行わないことを中国に対して特別に認めており、その「友誼」を察してほしいと求めている。そして能海と寺本がチベットを目指す理由が学術的、仏教的側面から説明され、最後に二人に対してどうか寛大な対応をしてくれるよう求める形で書簡は終わる。明言こそしていないが、日本は中国に対して特別な対応をとっているのだから、今回の能海と寺本のチベット行きは特別に許してほしいと言わんばかりの流れである。この手紙の追記には、「視察員派遣の件はすでに裁定し、この秋丁提督と沈觀察は東京に向かい東洋の賀を受けるでしょう（派遣視察員之事既裁定、今秋以丁提督、沈觀察向東京可為泰東賀也）」と、四川から視察団が派遣されることが決まったことを伝え、『東瀛学校挙概』という張之洞から日本へ派遣された姚錫光が書いた報告書(1898年)を書簡に添えている。能海や寺本のチベット行きを後方から支えようとした成田は、当時四川省で進められていた視察団派遣という一大プロジェクトを交換条件として、二人に便宜を図るように促したのではないだろうか。しかし成田の後援も虚しく、第二章で詳述した通り、能海たちはバタンまで進んだものの、そこからチベットへ入ることはできなかった。

(3) 領事と幕僚の交流

次に火事の際に能海が咄嗟に逃げ込もうと思いついたもう一人の知人「江氏」について見とおきたい。能海が成都に到着した翌朝4月12日、「江氏」が来訪し、面談したと日記にある。そして同日「九時江氏宅を加藤氏同道訪問す。打箭爐地方左程の騒動なきを聞く³⁰⁶」とあり、加藤領事とともにダルツェンドの様子を聞いている。翌日重慶に戻る加藤領事に托した水野齊入宛て4月14日付けの書簡には、「本日は四川總督秘書館^(ママ)江氏に招かれ、加藤氏共馳走に相成候³⁰⁷」とあることから、「江氏」とは四川總督の秘書官であると確認でき

³⁰⁵ JACAR:B03050316800 第24, 25画像目。概要は次の通り。「ここ数年我が仏教と貴国の関係は最も緊密となりました。この春我が本願寺法主は自ら北京へ行き、貴国の親王と北京の大ラマと会見、懇談しました。情誼は甚だ親睦です。現在上海、蘇州、南京などの地に学校を創設し、まさしく唇齒輔車の関係です。開校式の日には地方の朝野の紳士たちは式場を訪れ満腔の熱意を示し協力の意を表してくれました。これは時勢と関わりとともに、また朝野有識諸氏の厚情からも感じられます。同種が互いに親しく結束することで種を保てるのです。今我が国は貴国においてこの意をもって交わるがゆえに軍事、外交の機微を示しています。他人が見聞できないことを、貴国に特別に許していることで、我々の友誼を諒察して頂きたいのです。この度の能海と寺本の両僧の入藏には他意はありません。」

³⁰⁶ 『著作集 第15巻』p180。

³⁰⁷ 『著作集 第9巻』p96。

る。更に成田と能海の二人のために書かれたダルツェンド同知劉廷恕宛ての紹介状には、「四川総督秘書江瀚」とあり、江が書いた紹介状が書き写されている。更に欄外には「江氏は開進主義の学者にて奎総督の顧問秘書の如きものなり」と説明が加えられている。これらことから先に見た成田が四川総督に「緊急時務九条」を提出した際に取り次いだ人物と同一であること分かり、また「開進主義の学者」だったことが窺える。

ではこの江瀚とは一体どのような人物なのか。結論から言えば、江瀚は後に京師図書館や故宮博物院等の教育、学術の分野で活躍する人物である。江瀚の日記は現在『江瀚日記』（国家図書館出版社 2016 年）として刊行されているが、残念なことに能海たちが成都にいた 1898 年の日記は収録されていない³⁰⁸。

まず同書を参考に、能海や成田と知り合うまでの経歴を概観しておきたい。江瀚(1857-1935)字は叔海、号は石翁、石翁山民で福建長汀の人。光緒 11 (1885) 年 28 歳の時に四川布政使の易佩紳の幕僚となる。しばらくして易佩紳が江蘇布政使へ移動となると、江も蘇州藩署に移った。光緒 14 (1888) 年四川に戻ると前後して四川按察使黄雲鵠、川東道張華奎と遊び、雲鵠やその子に学問を教えた。18 (1892) 年四川布政使龔照瑗の幕僚となる。19 年には川東兵備道黎庶昌の聘により、重慶東川書院山長となる。22 (1896) 年には致用書院の教師も兼任する。24 (1898) 年湖南学政江標の求めで湘水校経学堂の教師となるが、長沙につくと新旧両派の対立を目の当たりにし辞職する。上海に赴き江蘇巡撫聶緝槩の幕僚となり、農学会章程等の草稿に携わる。同年四川に戻り四川総督奎俊の幕僚となる³⁰⁹。

日清戦争後の中国では戊戌変法が起こり、民間では新聞雑誌や、学会の創設が主張された。中でも梁啓超が主筆を務めた『時務報』が 1896 年に創刊されたのを皮切りに、学会の設立や新聞雑誌の刊行、そして翻訳出版が全国的なブームとなった。そして『農学報』は、汪康年をはじめとする『時務報』の協力を得ながら宣伝、販売を行った中国初の農学に特化した雑誌として 1897 年に創刊された。創刊後の『農学報』はほどなくして長江中下流域を中心とした地域においてかなりの反響を呼び起こした³¹⁰。

上海で農学会章程の草案に携わった後四川に戻った江瀚の日記からは、『農学報』等の革新的なメディアの代行販売に携わった様子が窺える。例えば、江瀚が汪康年に送った書簡には、本や雑誌の輸送依頼や支払いについて、また重慶での『時務報』の販売価格に言及して

³⁰⁸ 『江瀚日記』のうち、能海等が中国に滞在した明治 31 (1898) 年 11 月から消息を絶つ 34 (1901) 年の間に書かれた日記は、光緒二十五年七月から十二月 (1899 年 8 月 6 日 - 1900 年 1 月 1 日) のみとなる。しかし江瀚の日記が始まる 8 月 6 日には能海はすでにリタンからバタンへ移動しており、バタンからダルツェンドに戻って同地を離れる 5 月までの間は江瀚と会った形跡はない。実際に江瀚の日記には能海の名前は出てこなかった。

³⁰⁹ 江瀚著、馬学良整理『江瀚日記』（国家図書館出版社 2016 年） p 1-2。

³¹⁰ 錢鷗「羅振玉における「新学」と「経世」」（『言語文化』11 号 1998 年 p71-103）。

いることが挙げられる³¹¹。

また汪に宛てた書簡には日本への関心が窺える箇所もある。一例を挙げる。

亜細亜教會初次章程已見、尚有續議、亦望賜觀。頗願入會、並擬胥及門諸子共之。捐款交何所？會董舉何人？統乞示及。一、欲學東文、其道何由？曩在東川掌教、與駐渝日本領事加藤義三交誼甚厚、故極樂與東人交³¹²。

江が書簡内で言及した「亜細亜協會」とは1883年に「興亜会」からの改名を経て、1900年に「東亜同文会」に吸収される団体で、日清の提携や商業的發展をうたっていた。江は同会に関心を持ち寄付金まで支払おうとしているが、会長の名前を尋ねていたり、「續議」を求めていたりすることから、同会の草案か何かを見たのではないか。また自ら「東文」すなわち日本語を習得しようとしていたことも窺える。そしてこの書簡で江瀚は、加藤義三の名前を挙げながら日本人と交際していると伝えている。このことから、江にとって加藤が身近な日本人であったことが推知できる。また同じ書簡には次のような日本人への見方が述べられている。「私の考えでは、四川の振興一切に関しては、すべからく日本人に助けをもらうところが多いでしょう（蓋鄙意欲在川振興一切、須東人相助處甚多也）³¹³」と自身の見解を示し、日本人との交流に期待を寄せていたことが分かる。江瀚は上海から送られてくる媒体をこまめにチェックしながら、それらを四川で販売し、日本の日中聯盟論や日本人との交際に興味を持っていた人物だった。

そして江瀚が交際した加藤義三は、これまで何度も登場したように能海の探検において欠かせない存在だった³¹⁴。明治29（1896）年5月22日加藤は重慶に到着するとすぐさま

³¹¹ 例として一つ上げる。「月初曾致牋并銀、定已入覽。字模務望速購寄渝、至懇至懇。請代購之新譯西書及有關時務者、憑尊意酌買可也。價若干、隨即補呈、決不致誤。蓋敝學正以此提倡故也。冗次泐此、即頌台祺、統唯珍重不宜。世小弟瀚頓首。再、重慶所售『時務報』、均照貴館定價、劃一不二、俟収有成數、即行匯滬、將來尚可暢銷也。又及」（上海図書館編『汪康年師友書札 一』（上海古籍出版社1986年）p260）この書簡がいつ書かれたのかは不明だが、字模、つまり鋳型を四川に取り寄せたいことや、翻訳された洋書や関連書を汪康年に頼んで購入してもらっていたことが分かる。

³¹² 同書, p263。概要は次の通り。「亜細亜協會の最初の章程はすでに見ました。続議があればまた見たいです。とても入会したいと思います。寄付金はどこに支払えば良いですか？会長はどなたですか？併せてご教示ください。一、日本語を学びたいのですが、どうすれば良いですか？以前東川書院で教鞭をとっていた時、重慶に駐在していた日本領事加藤義三と親しくしておりました。そのため喜んで日本人と交際するのです。」

³¹³ 同書, p264。

³¹⁴ 明治32年1月21日以降書かれたと思われるメモには、探検にあたって能海が借用、

領事館を開くが³¹⁵、その前後を迫えるまとまった資料は管見の限り見当たらず³¹⁶、江瀚との付き合いもいつから始まったのか特定できない。『江瀚日記』に収録された日記も重慶領事館が開設された光緒 22 (1896) 年がちょうど欠けており、両者が知り合った時期を確定することもできない。

しかし翌年の光緒 23 年正月以降の日記には加藤についての記述が散見されるようになる。例えば加藤や書記高橋橘太郎等のもとを訪れた記録や加藤の妻、娘を交えて観劇に出かけたこと³¹⁷、そして一時帰国していた加藤が重慶に戻ってくるのを喜ぶ記述³¹⁸等である。時には加藤との交流において、日中の文化的相違からか江瀚が戸惑った様子が窺える記述もある³¹⁹。また江瀚は光緒 30 (1904) 年に日本へ教育視察に向かうが、「加藤領事に誘われ日本へ行くことについて長く話した(見加藤領事面邀作東洋之遊晤語良長)³²⁰」とあるように、すでにこの頃から日本行きのお話を加藤としていることが分かる。

このような江瀚と加藤との関係は、チベットを目指して四川を訪れる能海や成田等の探検にも影響を与えた。成都に着いたばかりの能海に対して、加藤が江瀚を最初に紹介していることや、ダルツェンドへの紹介状を江瀚が書いたことも、こうした加藤との関係性が背景にあったからと考えられる。

最後に江瀚と加藤の二人の関係と、チベットを目指した日本人との関わりについてももう少し述べておきたい。先に見た江瀚の経歴には、重慶の東川書院で山長を務めていたとある。付録資料の 4 重慶城内地からも分かるように、東川書院は日本領事館のある小梁子から比較的近い場所にあった。実は重慶に到着したばかりの成田は、この学校で中国語を学んだ。

または受領した金銭を書き付けたものがある。「自分」や「本山」「国元」と並んで、「金弍元 加藤氏布施」とある(『著作集 第5巻』p420)。このことから探検における加藤の便宜は金銭的な面もあったことが窺える。

³¹⁵ 外務省外交史料館蔵, 前掲書 p293。

³¹⁶ 筆者が現在把握できている経歴は次の通り。1874年に陸軍郷山形有朋が文部少輔田中不二麿に宛てた中国語通訳者候補の中に「東京府平民新造長男 加藤義三 十七年一ヶ月」とある(JACAR Ref. C09120198700(4画像目))。そして1881年には清国特命全権副使張斯桂が砲兵工場を内覧する際に通訳を務めるようになり(JACAR Ref.C09120818700)、すでに外務省関係の仕事を行っていることが分かる。そして芝罘領事館で事務代理を務めた後1900年まで重慶に駐在した。

³¹⁷ 江瀚著, 馬学良整理, 前掲書 p178。

³¹⁸ 同書, p159。

³¹⁹ 「加藤領事面語携婣屬讌其家、婉●辞之、蓋以中外之礼不同」とある。加藤が婦人を連れてくることに対して戸惑う江瀚の様子が窺える。同書, p90。

³²⁰ 二月初六日(1897年3月8日)の日記(同書, p104)。

外務省が成田を派遣するにあたって、一年間重慶で語学を習得させる計画³²¹であることを聞いた加藤領事が答えた対応策を見てみたい。

預期一年の短期を以て語学を講習することになれば尋常の方法にては其効を見る容易ならずと雖とも、幸に当地に東川書院及致用書院と称し青年秀才をして經学文章等を専修せしむる官立の学校あり。故に不取敢同東川書院の校長へ寄宿のことを依頼し、秀才等と同居して語学を研究せしむる様取計之置候³²²

計画を聞いた加藤領事は成田の就学先としてかつて江が山長をつとめた東川書院を候補に挙げている。そしてすでに校長と話をつけていたことも分かる。この校長とは江瀚を指すと考えられる。

また第二章で見たように、能海と成田、そして寺本と、三人の日本人が同時期にチベットを目指すことになった重慶で、加藤は中国側から嫌疑を招くのではないかと考えた。そこで四川総督から「公文書」を書いてもらえないか相談している。この相談相手も「江山長³²³」すなわち江瀚だった。この「公文書」は総督から断られたため実際に書かれることはなかったようだが、日本人のチベット行きに奔走した加藤が頼ったのは、個人的に交流があった江瀚だったと捉えることができるだろう。

以上、本節では四川省で書かれた資料をもとに、当時能海の周辺にいた人々について取り上げた。成都で多くの寺院を訪れた能海の日記や書簡には、現地の僧侶たちと交流したことが書かれていた。この時の話題は、日中間の異同から仏教界が直面する現代の問題まで実に多様であったが、仏教徒の往来や通信を行う提案もしていた。また成都に滞在した能海は、現地の中国人青年たちと連日のように日中間の時勢について話し、彼らに留学を勧めた。後に彼らは実際に日本へ行っているが、その背景には成都や重慶で邂逅を繰り返した重慶領事加藤義三や井戸川辰三等が進めていた四川省初の視察団派遣があった。そして日本人であることを公にして挑んだ四川からの挑戦は、護照や紹介状など領事館による援助を得たうえで行われた。この背景には、重慶領事と四川総督幕僚の個人的な交流があった。

このように四川における能海の周辺環境を改めてみると、やはり日清戦争後の日中両国における風潮から能海は無関係では無かったことが分かる。日清戦争後の日本からは政府や軍人だけでなく、民間団体や実業家などが中国に渡った。一方、敗北に大きな衝撃を受けた中国では、日本の明治維新に対する関心が高まり、改革の必要性が痛感された。能海はまさしくこのような日清戦争後に起こった両国の地殻変動の中で探検を行った。井戸川が留学希望の青年に「明治維新の好績」を自分の目で見るよう勧めたことや、成田が四川総督に

³²¹ JACAR:B03050316600 第7画像目。

³²² JACAR:B03050316600 第8画像目。

³²³ JACAR:B03050316800 第12画像目。

対して「緊急時務九条」を提出した行動はその最たる例だろう。

第四節 同窓との再会—二度目の成都

第一次探検で寺本婉雅とバタンまで至ったものの、これ以上チベットに近づけないと分かった能海は、明治 32 (1899) 年 10 月 22 日ダルツェンドに戻った。寺本は 11 月 2 日一度帰国するため同地を離れたが、能海は留まり経典翻訳やチベット仏像をスケッチした³²⁴。そして 5 月 17 日青海省からのチベット入りを目指すことにした。第二次探検である。ダルツェンドを出た能海は 5 月 27 日から 6 月 1 日までの数日を再び成都で過ごした。能海の交遊録をたどる本章では、最後にこの二度目の成都滞在で、能海が再会した「同窓」について述べる。同時にこの「同窓」を通じて、能海の帰国を日本で待つ友人達の様子についても触れておきたい。

ダルツェンドを離れ青海省からのチベット入りを目指した第二次探検中の資料には、ダルツェンド出発から重慶に戻るまでの第二次探検期間の行程記録「進蔵朝佛記」がある。この記録は四川で書かれた日記ほど詳しくはないが、行程だけでなく途中で見たことや調べたことを書き込んでおり、後に重慶で書いた「甘肅論」執筆時に参照されたと思われる資料である。さらに、第二次探検後重慶に戻ってきてから出された 10 通ほどの書簡が、行程記録には書かれなかった動向情報を補う役割を果たしてくれる。このうち本節では「進蔵朝佛記」に書かれた成都滞在記の記述に注目する。

まずこの頃の記述を見てみたい。「華陽県廳の前に泊し、二十八日中島君の校に●〔泊？か〕宿³²⁵」とある。ちょうど日記張の縦線と重なり一部見えづらい部分もあるが、28 日から「中島君」の学校に宿泊していたことが分かる。そして重慶に戻った後に谷了然に送った書簡では次のように伝えている。「成都にては同窓の友中島裁之君の務本学堂に至り、十二年目に中島君に面し、四日間滞留談話、始めて日本現時政教界の状況を聞く³²⁶」とある。また実弟水野齊入に宛てた書簡にも「元^(ママ)と京都にて同窓の友中島君開校の務本学堂に滞留数日³²⁷」とあり、成都では同窓の中島が開いた「務本学堂」に滞在していたことが分かる。

この同窓の「中島君」とは、普通教校出身の中島裁之を指す。中島は明治 34 (1901) 年

³²⁴ この頃の書かれた翻訳に加筆校正を加えたものが『能海寛遺稿』に収録された「般若心経西藏文直訳」(p3-36)である。また仏像スケッチは明治 32 年 11 月に書かれた「丙第五号」(『著作集 第 5 巻』p93-116)が残っている。

³²⁵ 『著作集 第 5 巻』p184。

³²⁶ 『能海寛遺稿』p118。

³²⁷ 『著作集 第 9 巻』p124。なお同書簡の末尾に「明治三十二年十二月三日 四川重慶卓家花園 能海」とある。しかし明治 32 年末時点で能海はまだ第一次探検を終えてダルツェンドに滞在しており、第二次探検の様子を伝えることはできないはずなので、「明治三十三年」の誤りではないかと思われる。

北京東文学堂を開設した。そのため中国人を対象に中国で開校した学校、東文学堂の研究の中で、呉汝綸を通じて李鴻章や肅親王ら支配階級の支持を得た学校の創立者として注目されてきた³²⁸。ここでこれら先行研究を参照して中島の経歴を見てみよう。

中島裁之は明治2(1869)年熊本県八代郡の雑貨販売を営む両親のもとに誕生した。両親が篤い真宗の門徒であったため、中島は京都の普通教校に入学し、明治24(1891)年23歳の時に卒業した。しかし卒業前に母が逝去してしまい、中島は供養のための大施餓鬼会を行うことを思い立つ。そして友人からモンゴルの牧畜業で一攫千金を得る話を聞き、同地を目指すことにした。長男である中島は家族から許可はおりないと考え、明治24(1891)年4月夜逃げ同然で神戸から上海へ渡る。上海到着後、岸田吟香の楽善堂の援助を受け、売薬行商をしながらモンゴルを目指した。しかし天津で家畜屠殺場の凄惨な光景を目にし、行商を行いながら仏教遺跡を巡拝することにした。翌25(1892)年外務省の第二期留学生に採用され中国国内を視察した。中島本人曰く16,500里を踏破したという。やがて一時帰国し、日清戦争では通訳として従軍した。そして明治30(1897)年再び中国に渡り、保定で呉汝綸の蓮池書院に入った。呉の薫陶を受けながら呉の子弟に日本語と英語を教えた。やがて呉が当時保定に設立を考えていた新式の農工学校の計画立案への協力を求められるほど信頼を得るようになる。しかし中島は家庭の事情により帰国した。

帰国後明治31(1898)年から32年にかけて柏原文太郎とともに、福島安正大佐が張之洞から委託された中国人留学生の教育にあたる。これは一時的な仕事であり、中島は従軍時に知り合った大迫尚敏中將、福島安正少將を通じて、近く四川に赴任する井戸川辰三を紹介される。そして井戸川から成都の四川東文学堂に教習として勤務する話を持ちかけられ、中国へ渡った。しかし1900年義和団事件が起こると、その余波は四川まで及び、四川東文学堂は経営難に陥り中島は辞職した。その後北京で保定から避難していた呉汝綸に再会し、新教育の理想を北京で実現しようと意気投合し、1901年「北京東文学堂」を開設した。学生から学費を一切徴収しなかった北京東文学堂は、厳しい財政問題を抱えながら1906年直隸総督袁世凱に譲渡するまで続いた。

以上の経歴を見ると、能海と中島の最初の接点は普通教校時代と思われる。普通教校閉校時に作成された『普通教校人士』には、学生として能海とともに中島の名前が確認できる³²⁹。

³²⁸ 例えば主に次の研究がある。佐藤三郎『近代日中交渉史の研究』(吉川弘文館1984年)、汪向荣著、竹内実等訳『清国お雇い日本人』(朝日新聞社1991年)、小川博「柏原文太郎と中島裁之—中国留日学生史の一齣」(『社会科学討究』35巻第1号1989年p1-28)、劉建雲『中国人の日本語学習史』(学術出版会2005年)、任達著、李仲賢訳、前掲書。

³²⁹ 『普通教校人士』(非売品 1890年)(能海寛研究会『石峰』第14号2009年p23-41所収)。また同校のサークル反省会の機関誌『反省雑誌』に、「支那の伝道」(1892年7(6))、「支那伝道策」(1895年10(8))などの文章を投稿し、明治24年上海上陸から北京までの移動をまとめた「万里独行記」は同誌で三回にわたって掲載されている(『反省雜

また同校在学時の明治 22 (1889) 年の能海の日記には、中島が部屋でランプを壊して畳と床板を燃やし 7 日間の謹慎と罰金を言い渡されたと記録がある。能海は「予は之不当と存す」と中島が受けた処分に対する不満を書き残している³³⁰。このように青年たちが暮らす宿舍の賑やかな様子が書かれた日記から中島と能海の接点を確認できる。

また先に見た経歴には、呉汝綸のもとを離れ日本に戻った明治 31 (1898) 年から翌年にかけて柏原文太郎とともに中国人留学生の教育にあたったとある。柏原文太郎は後に衆議院議員となり私立教育で実績を残す人物であるが、明治 31 (1898) 年に設立した東亜同文会設立の立役者でもある³³¹。そして柏原とともに中島があたった中国人留学生の教育事業の現場には、日華学堂があったと考えられる。日華学堂は明治 31 (1898) 年 7 月上旬に外務省の依頼を受けた当時東京帝国大学講師だった高楠順次郎等が設立した学校である。帝国大学や各高等専門学校に入学しようとする中国人留学生のための予備教育機関として文科を学ぶ者を受け入れた。日華学堂の日誌を公開した柴田氏がすでに言及されているように、日華学堂の堂監や教員の多くが西本願寺の文学寮や普通教校の出身者である。普通教校出身の中島もわずか 2 ヶ月ほどであるが初代堂監を務めた。そして続いて宝閣善教、高島米峰が堂監を引き継いだ。また地理・歴史を桜井義肇が、日本文法・読書・作文を海野詮教が、そして物理・化学・会話・読書を梅原融が担当した³³²。

チベット探検に出発する 5 日前、能海はこの日華学堂を訪れている。「日華学堂により、高楠、秦、桜井に面し」と日記にある³³³。ここで第一章でも紹介した東京での壮行会の参加者（付録資料 2 壮行会参加者リスト）を見てみたい。すでに述べた通り、壮行会には反省

誌』8(12),9(1),9(3))。能海と中島は普通教校の同窓のみならず、反省会という同じグループにも参加していたことが分かる。

³³⁰ 『著作集 第 3 巻』 p19, 24。

³³¹ 柏原と能海に接点があったかどうかは定かではない。しかし東京での送別会について記録した日記には、仏教会や反省会、哲学館と並んで柏原文太郎の名前がある。どのような意図でメモ書きされたのか不明だが、中島の経歴にもあったように、一時帰国した中島とともに柏原は中国人留学生の教育にあたったことから、少なくとも間接的には認識はしていたものと考えられる。

³³² 柴田幹夫「『日華学堂日誌』 1899-1900 年」(『新潟大学国際センター紀要』第 9 号 2013 年) p23-85。同論文はタイトルの通り『日華学堂日誌』を公にしたものであるが、これに先駆けて同日誌を初めて公開したのはさねとうけしゅう『中国留学生史談』(第一書房 1981 年)である。柴田氏が全文をそのままに公開しているのに対して、さねとう氏は省略箇所が散見されが、宝閣善教の明治 31 年、32 年の個人日記を必要に応じて書き加えるなど両者の研究には違いがある。

³³³ 『著作集 第 3 巻』 p 273。この日の『日華学堂日誌』には、「八日 火曜 小雨 梅原、桜井出勤。高楠来堂」とあるだけで、能海が訪ねてきたことは特に書かれていない。

会や経緯会などのメンバーが参加した³³⁴。そして表内に「★」で示したメンバーが、先に述べた日華学堂関係者である。表からも明らかなように、能海のチベット探検を見送る友人の中には、かつて能海と反省会でともに多感な時期を過ごし、壮行会時日華学堂の運営に携わっていた人物もいたことが分かる。

ただ表に名前がないことから分かるように、この頃中島はすでに堂監を辞退していた。しかし中島に代表されるように、渡航前の能海の周辺では、普通教校からの友人たちが当時増えつつあった中国人留学生の教育を支援していたことが確認できる。これを踏まえて、前節で見た四川省で能海が周善培などから日本留学について相談を受けていたことを考えると、能海はわけなく留学を勧めたわけではなく、日本における留学生の受け入れ事情についてある程度は把握したうえで勧めたと考えられる。

そして中島の経歴に再び目をやると、日清戦争の従軍時に知り合った福島安正を通じて井戸川辰三と知り合い、成都で「四川東文学堂」で勤務したとある。本節冒頭で見た能海の日記にあった成都での滞在先「務本学堂」とは、まさに「四川東文学堂」だと考えられる。中国における東文学堂について研究した劉建雲氏によれば、同校は正式には「協立四川東文学堂」と言い、1900年4月8日に中島が成都に赴任した直後に開講されたのではないかという³³⁵。

現在、四川東文学堂での中島の様子を伝える日記などの資料は見つけだせていない。ただ中島が明治33(1900)年3月に宜昌から成都まで移動した記録がまとめられた「四川紀行」(『東亜同文会報告』13 明治33年12月)からその一端が窺える³³⁶。中でも冒頭の编者による紹介文は比較的具体的に成都で活動することになった経緯をまとめている。それによれば、中島は教育顧問として成都に招聘され、到着後提督丁鴻臣と周善培に学校を作らせるよう進言したという。実はこの提督丁鴻臣とは、四川から初めて送られた視察団の団員であり、それについては第三節(2)で見たように、井戸川が加藤領事とともに交渉を勧めていた。また提督丁と学校建設の提言を受けた周善培は、先にも述べた通り、能海が最初に成都を訪れた際に連日日中間の情勢について語り合った人物で、この頃すでに日本から帰国していた。つまり、第一回の視察団を送り出した四川では、引き続き井戸川を中心に四川の教育開発が進められており、その一環として中島は教習として招かれたのである。そしてその際に学校設立を進めたのは、日本視察経験のある提督丁鴻臣と周善培だったということになる。さらに、第二次探検に出かけた能海がそこに立ち寄ったのだ。

またこの『東亜同文会報告』の記事は、中島の宗教思想を垣間見ることができるので、引き続き確認しておきたい。四川東文学堂で教鞭をとる中島は、四川の各府州に学校設立や、日本も含め海外から技師を招き鉱山・農工業の開発を勧めたという。僧侶に対しては次のよ

³³⁴ 『著作集 第3巻』 p275-276。

³³⁵ 劉, 前掲書 p110-111。

³³⁶ 高木宏治編『東亜同文会報告 2巻』 ゆまに書房 2011年 p336-356。

うなアドバイスをしたという。

現今の支那は全く宗教の統一を欠くを以て各州に宗教学校を起し大に学生を収容し之れに日新の学及び比較宗教学を教授し其の卒業の暁には之等を卒ひて自ら改革に当るべきを勧告せり³³⁷

中島は近代的な教育を提唱しつつ、僧侶たちには宗教学校を設立するよう伝えたという。「日新の学」とは具体的にいかなる学びを指すのかは不明だが、比較宗教学という中島や能海が普通教校時代に触れたであろう新しい宗教学を学ぶことを勧めていることや、宗教学校卒業の暁には「自ら改革に当たる」とあることから、本章第三節(1)で言及したような、日本仏教界の経験や課題を尺度とする見方があったことが分かる。つまり反省会から自分たちが追い求めてきたような仏教運動を四川でも展開した方が良いと考えており、この点で能海の中国仏教に対するまなざしと共通する。

こうした教育、宗教思想を持って成都を訪れた中島だったが、四ヶ月足らずで四川東文学堂は閉校し中島は北京へ移動している。その後能海と中島が再会したことは確認できない。ただその後中島は能海と成都で再会した時のことを、『東洋哲学』で振り返っている。「二十八日、弊校を訪はれ候へば、十二年^(マテ)ブリの面も異域の地に同窓の友同信なる徒と相会合することの嬉しさに、毎日の余暇は談話に費し居り候³³⁸」と、能海との再会を喜び、多くを語り合ったことが窺える。そして第二次探検のため陝西省へ向かう能海を、成都の東門途中まで見送った。1905年慶應時代の同窓と思われる「龍北學人」による「西藏探検家能海寛氏の事」(『慶應義塾学報』(93))にも、能海が訪れた時のことを伝える中島の書簡が引かれている。この書簡には次のように成都から出発する能海を中島が幫助した様子が窺える。

発程に臨んで官衛の耳目を避くべき事情あり、小生〔筆者注：中島〕は氏〔筆者注：能海〕を反対の方向に導びき東門より出でて城壁に沿ひ、成都の東北方に至り、堀河を渡り、避難渡などと命名し、無事対岸に上陸し田畝を横ぎり、漸く道を得て此にて相別れ、後影より氏の大志の成就せんことを祈りつつ帰校致候而して校友一人の之を知るものなし今に能海氏は重慶へ向へりとのみ申居候云々³³⁹

第二章で見たように、日本人であることを隠さず失敗した第一次探検を踏まえて、官吏たちの眼を避けて陝西省へと向かう能海を、中島は人目につかぬよう東門から城外へ出られ

³³⁷ 同書, p339。

³³⁸ 『東洋哲学』第7編第8号(明治33年8月5日発行)。同記事は『能海寛遺稿』p115-116にも収録されている。

³³⁹ 『慶應義塾学報』(93)(明治38年8月) p39。

るように導いたことが分かる。そして周囲には重慶へ向かったことにして、能海の「大志が成就」するよう祈った。異郷で再会した友人の成功を願う中島の姿が窺える。

実は、先に参照した『東洋哲学』は、計四回能海の探検について記事を載せている。この雑誌の主筆を務めた高嶋米峰は、先に触れた壮行会に参加した日華学堂の関係者でもある。渡航前から寄稿するなど能海と接点のあった『東洋哲学』では、成都とダルツェンドで能海が執筆した紀行文を掲載した³⁴⁰。このうち三回目の記事が先に紹介した中島の記事である。この明治33(1900)年8月に掲載されたこの記事は、もともと中島が重慶にいた菅真海に送った文書を転載したものだ。そして、この後掲載された能海の探検に関する記事が、能海が実弟水野齊入に宛てた書簡³⁴¹だったことと合わせて考えると、第一次探検時に送られてきた通信が、第一次探検以降途絶えたことを心配し、少しでも能海の消息を捉えようと奮闘する友人たちの姿が浮かびあがる。そして彼らに第二次探検に挑戦する能海の姿を伝えたのが、ちょうど教習として成都を訪れていた中島だったのである。

このように第一次探検失敗以降、通信を送ってこなくなった能海の情報を提供した中島は、その後も日本で帰りを待つ友人たちにとって貴重な情報提供者となった。明治38(1905)年6月能海と同郷岡田利喜太が従軍先で知った情報として同じく同郷の小林久太郎に軍事郵便で送った能海横死情報はたちまち能海と関わりのある人たちに伝わり、やがて新聞報道を通じて日本中に広まった。この顛末についてはすでに序章「資料の来歴」で述べた。この横死情報は、友人たちにも伝わり彼らに動揺を与えた。先に紹介した『東洋哲学』の主筆でもあった高嶋と境野哲海(黄洋)が発行した『新佛教』9月号では、「哭能海寛君」という特集が組まれた。その中で高嶋は「能海寛君果して死せるか」というタイトルで一文書いている。この中で能海の横死情報を聞いた高嶋等友人たちの反応を垣間見ることができる。

先日、中島裁之君に逢った時に、「井戸川少佐がこれこれしかじかで能海君の死は、殆ど確実であるとまでになったのだが、君はどう思う。」と尋ねたら、中島君の言うには、「井戸川君が、或任務を帯び、或る地方から北京に帰って来た時に、僕は逢った。そして能海君の話もしたが、四五年も便りが無いのだから、或は土人にでも殺されたのではなかろうか、というような想像をした丈で、一向話も、宿屋の話もなかった。それから考えて見ると、井戸少佐の話として、伝えられた事、それ自身が既に頗る怪しむべきである。」との事であって、実は僕等も、何が何だか、ちっとも要領を得ずに居たのである³⁴²。

³⁴⁰ 『東洋哲学』第6編第6号(明治32年6月5日発行)、第7編第5号(明治33年5月5日発行)。これらはそれぞれ『能海寛遺稿』p55-57, p103-113にも収録されている。

³⁴¹ 『東洋哲学』第8編第2号(明治34年2月5日発行)。『能海寛遺稿』p138-144に収録。参照したと思われる書簡は『著作集 第9巻』p123-128。

³⁴² 新佛教徒同志会『新佛教』第六卷第九号(明治38年8月)。

能海の横死情報が流れた明治 38 (1905) 年当時、中島は北京で東文学堂の運営にあっていた。一時帰国した中島に会った時に交わした話の内容を高嶋は『東洋哲学』に載せた。この記事によれば、横死情報で宿屋の短歌などを見たときされる井戸川本人と北京で会った中島は、連絡が途絶えた能海について「土人」に殺されたのではないかという話をしたという。しかしこの時、横死情報のそもそもの発端である宿屋で短歌を見たなどという話は井戸川の口から出てこなかった。中島は横死情報に対して誤報ではないかと疑っていたという。このような中島の話を高嶋が載せたのは、まだ能海は生きてると信じたかったからだろう。

この記事が載った特集「哭能海寛君」の最後で高嶋は次のように述べている。

兎も角、一時世上を驚した事件であるのだから、能海君が無事で帰って来た時に、この雑誌一冊投げ出して、「こんな事もあったのだ」と言って、笑い話をする料にもなろうかと、強いてそのままにして置いたのである³⁴³。

頻繁に探検先から送られてきた通信が途絶えたことで、日本の友人たちは能海の安否を案じるようになった。特に横死情報が流れると、彼らはより動揺した。その中で、中国で活動し渦中の人物である井戸川辰三に会った中島の言葉は、彼らを慰める貴重な証言となったのである。

おわりに

本章は日記やメモなどを手がかりに、これまで注目されてこなかった探検中の交遊録を明らかにしようとした。当時最先端の中国語教育が受けられる詠帰舎に入った能海の同窓には、その後実業家や軍人として中国へ渡り活躍する人物たちがいた。そこで人脈も形成した能海は、上海に上陸して以降は、中国各地に滞在する日本人からの紹介を受けながら長江に沿って重慶へ向かった。新たに開港したばかりの重慶には、領事の他、同じくチベットを目指す成田や参謀本部から派遣された井戸川などがいた。そしてその周囲には、日本に関心を持つ幕僚や留学希望生がいた。彼らの中には、加藤領事を介して協力的だった江瀚や視察団派遣と探検を交換条件にするような発言をした成田のように、能海の探検を支えようとする人物がいた。

本章を通じて探検に関わった人物を辿っていくと、日本と中国の連盟を唱えて設立した団体や戦後獲得した有利な条件を利用した中国市場への進出など、日清戦争後の日本国内で高まった中国に対する関心が背景としてあったことが分かる。また戊戌変法の挫折を経て外国視察や雑誌ブームが起こった中国では、日本や日中連盟論へ関心を示す知識人や青

³⁴³ 同上。

年が現れた。このように、日本と中国がそれぞれの背景を抱えながら、互いに関心を持ち往来がより盛んになった時期に、能海は中国に入りそこからチベット入りを狙ったのである。さらにこのような日中間の動きは、日華学堂で中国人留学生の支援を仲間たちが行っていたり、普通教校の同窓の中島裁之が四川東文学堂の教習として赴任していたりしたように、能海が探検に出る前にいた仏教界も無縁では無かった。

このように見てくると、能海とその探検は日清戦争後の日中両国における風潮から無関係ということなかった。むしろこうした時代背景に後押しされるかのように探検を進めていたことが分かった。本章で明らかとなった交遊録は、社会的影響を受けない仏教だけを追い求めたというナイーブな人物像を否定しただろう。ただ交遊録から浮かび上がる人間関係だけが能海個人の資質を左右するわけでは当然ない。次に問うべきは、こうした環境の中で、能海がどのようなことを考えながら探検を実行していたのかということだ。そこで次章は探検中の能海の思想面に注目する。

第四章 仏教徒の探検

はじめに

本章は探検中の能海の思想面に注目する。仏教革新の一準備として提唱した探検を実行することで、能海にいかなる認識や目的の変化が訪れたのかを見ていきたい。その際、第一章で『世界に於ける仏教徒』（哲学書院 1893 年）から読み取ったような、探検に対して見出していた歴史的考究と仏教徒の団結という意義あるいは革新運動に対する考え方へ、探検という経験が及ぼした影響の有無についても考えてみたい。

そこで本章は、探検前と探検中にそれぞれ書かれたメモや書簡などの記述から、各時期の認識を捉える。そして第三次探検に出かける前に構想した計画を新しい目的と位置付け、探検前と探検後における認識の関係性を考察する。能海は新仏教徒が行う準備として「仏教国の探検」を提唱した際、チベットだけでなく中国も探検先として挙げていた。そのため本章は、探検で実際に触れた仏教として、チベットに加え中国仏教も考察対象として取り上げる。そしてそれぞれの仏教に対して探検前に抱いていたイメージと実際に接触して感じたこととのギャップに直面することで生まれた対応として、「西藏研究倶楽部」構想について見ていく。探検前、探検中、二度の探検経験後という三つの時期の思想を見て行くことで、決して予定通りには進まない探検の中でも、チベットとの関わり方を模索し続けた能海の姿を描けたらと考えている。

これまでこのような角度から能海の探検を取り上げた研究は無い。ただ、各論点において重要な先行研究があるため、その都度紹介、検討していくことにしたい。

第一節 「活発」な仏教徒を訪ねて－対中国仏教

(1) 中国仏教への期待

ここではまず探検前の能海が持っていた中国仏教に対する認識について確認する。しかし第二節で見るチベットと異なり、能海は中国仏教に関する専論をいくつも発表したわけではない。そのため『世界に於ける仏教徒』を使い、提唱された仏教革新プランの中から中国仏教へのイメージを抽出することにしたい。

第一章ですでに確認したことであるが、『世界に於ける仏教徒』で能海は仏教を宇内一統教とするための準備として仏教国へ探検することを提唱した。そして次のように探検先を挙げている。

今仏教国探検に於て如何なる国か急務なる。固より東洋諸国皆仏教の伝播せる所なれば、各地皆必要なり。然れども前後あり、順序あり。予か最も急務と感ずるものは西藏国なりとす。此外ニポール、カシユミル、支那、印度の内地、暹羅、緬甸等の諸国何れも仏教徒の探検を要する最も値ある所なり。仏教国の探検、豈仏徒の大に着眼すべき者

に非すや³⁴⁴。

「急務」で探検すべきと挙げているチベットの他に、ネパールやカシミールとともに中国もまた仏教徒の探検が求められる「最も値ある所」と捉えていることが分かる。ここでまず中国を探検すべき仏教国と認識していることが確認できる。では、能海はなぜ中国を探検することが必要だと感じたのか。中国仏教に対してどのような期待を寄せていたのか。以下、能海の仏教革新プランや探検観と関わる二つの期待に注目したい。

第一章で確認したように、能海は『世界に於ける仏教徒』で、仏教の革新を志向し、その担い手である新仏教徒の勃興を日本仏教単独の問題ではなく世界の仏教に共通する課題として捉え、彼らが互いに団結することまで呼びかけていた。『世界に於ける仏教徒の』第十章以降はその団結を実現させる「方策」をいくつか挙げている。このうち第十一章「仏蹟回復」の一部を見てみたい。

新仏徒第一着の業として、先づ仏蹟回復の輿論を喚起し、啻に日本のみならず、日本仏徒将来の好友たる支那、朝鮮に於ける仏教徒を起し共に此事業に加勢せしむべし³⁴⁵。

新仏教徒が仏蹟回復の世論を起し、「将来の好友」である中国、朝鮮の仏教徒に呼びかけて、彼らにも加わってもらおうと言っている。いくつかある仏教国の中でも、中国と朝鮮は将来的に日本仏教と仏教改革論を共有する、あるいは共有することが可能な相手として認識していたと読み取ることができる。それは日本仏教が中国、朝鮮と同じ大乘仏教であることや、他の仏教国と比べ歴史的に往来があったことに加え、日清戦争前の1893年に『世界に於ける仏教徒』が出版されたことを考えると、仏教徒を含む日本人が中国、朝鮮へ進出し始め両国に関して情報が豊富にあったことも一背景としてあるだろう。いずれにせよ、宇内一統教となるために必要な仏教徒の団結を実現するにあたって、中国仏教と朝鮮仏教は、ともに運動を展開する「好友」として他の仏教国とは一線を画す位置付けをしており、あるいは協力してくれるであろうと期待を寄せていたことが分かる。

次にもう一つの期待を見てみたい。先に見た「仏蹟回復」と同じく、『世界に於ける仏教徒』で仏教徒が団結する「方策」として提唱している第十三章「巡礼」に注目する。

若し広く仏教の靈蹟を踏み、天竺に入りては釈尊の尊蹟を拜し、或はカピラバツツ〔筆者中：カピラバストゥ〕の旧趾を尋ね、或は仏陀伽耶ベナレスの靈地を訪ひ、靈鷲山に詣てて往昔の化導を思ひ、其他支那に出ては、天台山或は五台山の靈嶺を訪ひ、三蔵入竺の難路を過くる時は幾許の感想そや必ずや又言はん。実に是等の仏蹟を訪ひ靈嶺

³⁴⁴ 『世界に於ける仏教徒』 p57。

³⁴⁵ 同書, p71。

を越ゆれば真に三千年前を現出せしむる想ひあり。今日幾億の信徒を有し、將に五大州に普及せんとする我仏教の濫觴を求めは、実に此外国属領の憐れなる國中、此險山の間より出たりと思はは、感想は一層甚しく懐旧の情禁し難しと³⁴⁶。

(下線は筆者による)

インドの仏跡に続いて、天台山³⁴⁷や五台山、そしてインドへ向かう高僧たちが通った道のを中国での巡礼先として挙げている。特にインドへ続く険しい道のを訪れた時には、「幾許の感想そや必ずや又言はん」と感慨深く思うだろうと言っている。これら仏教ゆかりの地を抱える中国は、仏教発祥の地インドと並んで「仏教の濫觴」の巡礼先として挙げられていることが確認できる。

この仏教ゆかりの地を訪れる巡礼という行為について、別の箇所では能海は次のように説明している。能海は自らが浄土真宗開闢の地稲田（現茨城県笠間市）などを訪れ感涙した経験に基づき次のように言う。

巡礼により教徒は益々従来の信仰を堅ふし、教主高僧の恩徳を知り、護法の精神を喚起すべきなり。是れ又仏教徒彼此の情に通し益々仏徒の団結連合の基礎を作るものなり³⁴⁸。

つまり巡礼を実践することに信仰をより篤くする作用を見出しており、それはひいては仏教徒同士の団結へと繋がると考えていたのである。第一章で確認したように、仏教国の探検において、歴史的考究と並んで仏教徒の団結という意義があると考えられていたことを思い出すと、巡礼であれ探検であれ名称は違っても、仏教ゆかりの地を訪れるという行為が篤い信仰へと繋がると考えていたことが分かる。

ただインドや中国の巡礼先を具体的に挙げた先の引用文は、こうした宗教実践的な意義とはまた異なる巡礼地やその歴史に対する能海の思いが読み取れるように思う。能海は巡礼先とともに各地の謂われを簡潔に挙げ、そこを訪れることの意義として「現出せしむる想ひあり」と目の前に当時の様子が現れたかのような気持ちになると言っている。加えてそうした感情とともに「此外国属領の憐れなる國中、此險山の間より出たり」ことを思えば、「懐旧の情」がますます抑えられなくなるとも言っている。外国領となったインド、そして険しい山に囲まれる中国の靈跡やインドへ繋がる道のことを指すと思われるが、いずれも仏教

³⁴⁶ 同書, p75。

³⁴⁷ 「天台山勝境全図」という木版画が金城町歴史民俗資料館に所蔵されている。能海が中国から送った資料かと思われるが、能海自身は天台山には行って居らず、誰かからもらい受けたものと思われる。

³⁴⁸ 『世界に於ける仏教徒』 p75。

にとって重要な地であるにも関わらず、容易には到達できない場所として描かれている。このように「仏教の濫觴」が遠くにある状況を考えて「懐旧の情」がますます抑えられなくなる心境は、仏教徒としての歴史上の華々しい仏教への憧憬とも言えるのではないだろうか。このような過去の仏教への感情は、探検の必要性を提唱する際にも見られる。

古代の仏徒何そ夫れ活発なる、今日の僧侶は交通自由なる上に、且つ欧米に於て求て止まざる仏教の弘通に尽力せず、僅かに宗派内の争ひに汲々として、或は何宗の紛議、或は堂班位階の競争瑣細なることに齷齪し、虚偽の野蛮的無精神無気力の事業に空しく日月を費す。嗚呼末代なる哉。五濁悪時悪世界なる哉。彼等旧仏教の腐敗せる脳髓を撃破し真正なる仏陀の光明を發揮する新仏徒生せずんば此教界の乱世を如何にせん。新仏徒の世界に対するや、宇宙は掌小的也。探検敢て難事となさず。仏陀か一度天竺に法輪を転し玉ひし以来、諸の賢聖、或は雪山を越えて西藏に入り、或はゴビの大砂原を渡りて支那に入る、其困難実に謂うへからず。玄奘三蔵法顕三蔵等の入竺数十年の星霜を費し、高山大川物の数ともせず、遂に大業を成就せしか如き、鑑真和尚か十二年の日月をは波浪の間に送り遂に日本に渡りて戒律を伝へ玉ひしか如き、東洋諸国の文明は多く仏徒の生み出せし所なりしにあらずや³⁴⁹。

(下線は筆者による)

引用文前半では、旧仏教徒と新仏教徒が登場し、「腐敗」した「脳髓を撃破」するなど、後者は前者を正す者として位置づけられている。ここで改めて思い出したいのが、第一章で見た旧仏教と新仏教の二分法である。能海は中西牛郎の「新仏教」論に賛同し、仏教の現状をなぞらえた旧仏教に取って代わる新仏教徒の大業を『世界に於ける仏教徒』で具体的に紹介しようとした。上記引用文で登場する旧仏教徒とは、交通が開け欧米では仏教を求める声が上がっているにも関わらず、依然として仏教を広めようとせず、宗派内や宗派間の争いごとばかりしている現在の仏教徒を指すと思われる。一方、第一章の議論に基づけば、旧仏教徒を正す新仏教徒は、能海が仏教革新運動において求める理想的仏教徒となる。つまり開かれた交通を使い、仏教を広めようと尽力する仏教徒こそ、能海が求めていた姿だったと言える。ただ、上記引用文の後半では、インドで発祥した仏教が各地に伝播する様子を、インドへ向かった玄奘(602-664)や法顕(337-422)、また日本に戒律を伝えた鑑真(688-763)の具体的人物名を挙げながら述べ、東洋の文明の多くは仏教徒によって生み出されたものだと、東洋の歴史における仏教徒の働きを強調する³⁵⁰。「古代の仏教徒何そ夫れ活発なる」と始めて

³⁴⁹ 同書, p55-56。

³⁵⁰ 東洋史上の仏教徒の働きを振り返る言説は、他にもみられる。例えば桑原隲蔵は1897年2月以降『反省雑誌』で「仏教の東漸を歴史地理学上に於ける仏教徒の功勞」(全四回)を連載している。地理学上仏教徒が果たした功勞を振り返ったもので、特に漢末から

新仏教徒の必要性と説き、玄奘など具体的人物名を挙げるという文章の流れから、新仏教徒の目指すべき姿として、玄奘をはじめとする東洋の歴史に貢献した仏教徒を設定していると読み取ることができる。このような仏教徒は、先述したような開かれた交通を使い仏教を広めることに尽力する能海が求めた新仏教徒の姿と一致する。つまり能海は旧仏教と新仏教という二分法に歴史上の仏教徒を登場させ、仏教徒が目指すべき具体的な姿として歴史上の仏教徒を提示したのである。このように歴史上の仏教徒を理想とするのは、「懐旧」という彼らが行った伝道に対する憧憬が根底にあり、能海が求める仏教の姿を重ねたのだろう。

そして能海はこのような過去の仏教徒が持っていたと考える「活発」さは、探検によって獲得できると説く。十九世紀をキリスト教が花開き仏教徒が眠りから目覚めた時代として、そして来たる二十世紀は両教間で精神的戦争が起こると位置付け、二十世紀にそなえて仏教徒の「活発なる精神」を発揮する必要があると説明する。そしてそれには探検こそが最も必要なのだと呼びかける³⁵¹。つまり二十世紀の仏教徒には、かつての仏教徒のような「活発な精神」が必要で、探検はそのような精神を与える作用があると考えていたのである。能海は続けて次のように仏教徒が探検を行うことの意義を説明する。第一章ですでに探検の二つの意義を読み取る際に引用した文だが、ここで改めて引いておきたい。

何となれば先輩高僧の足蹟を訪ふ古来未だ明かならざる歴史を探究し、加之ならず従来仏教国互に隔離して久しく団結せざりしものも、彼此相ひ通し仏陀五億の教徒をして揉て一丸となし、古代高德の大胆勇壯の精気を再起し、万国伝道に怠らず仏教徒組織的運動をなすに於ては、仏教をして世界に於ける一統宗教たらしめんことを敢て難事とする所にあらざるなり³⁵²。

(下線は筆者による)

高僧の足跡を訪ねて歴史を探求することと、仏教徒が団結することによって、「古代高德の大胆勇壯の精気を再起」し、さらに伝道と組織的運動を行うことで、仏教を世界の「一統宗教にできるのだ」と言っている。この「古代高德の大胆勇壯の精気」とは、先の引用文で挙げた玄奘や法顕、鑑真のようなかつての仏教徒たちの「活発」な精神を指し、それは能海が新仏教徒に求めたものだったと考えられる。つまり能海にとって探検とは、かつて仏教を各地に広めた高僧たちのような「精気」の獲得へと繋がる行為だったと言える。

以上、『世界に於ける仏教徒』から中国仏教に対する探検前のイメージを抽出しようとした。仏教国の探検を提唱した際、チベットほど急務ではないものの中国もまた訪れるべき探

唐代にかけて中国国内外で活躍した僧侶について紹介している。

³⁵¹ 『世界に於ける仏教徒』 p56。

³⁵² 同書, p56-57。

検先の一つとして挙がっていた。中国仏教に対しては、能海が思い描く仏教革新プランを共有しうる相手として捉えており、朝鮮とともに他の仏教国とは一線を画す位置付けがなされていた。つまり、ともに運動を展開する「好友」としての期待があった。またこれとは別に、巡礼先としての中国もあった。巡礼をすることで仏教徒の信仰をより篤くするという作用とともに、今後の仏教徒が目指すべき姿として当時仏教を広めることに尽力した高僧たちが示されていた。当時の高僧たちが持っていた「精気」こそが、現代の仏教徒、能海の言葉を借りれば旧仏教に不足した部分だと認識し、それを探検によって補おうと考えたのである。つまり『世界に於ける仏教徒』を書いた当時の能海は、中国仏教とともに革命を展開する「好友」として、そして現代仏教に足りない「精気」を与える仏教濫觴の地として捉えていたのである。

(2) 中国仏教に触れて

ここでは、能海が探検中にどのように中国仏教に触れたのかを見ていく。

本稿はすでに第三章第三節で、成都滞在時における中国仏教との交流について見ている。ここではまず、そこでの考察に本節(1)で見た中国仏教に対する期待の議論を交えながら振り返っておきたい。第三章第三節では、多くの寺院や廟を訪れた能海は、 Sanskrit 語経典の有無を尋ねながら、僧侶たちと仏教事情やキリスト教について情報を交換し、日中の僧侶の交流を具体的に提案などしていたことが分かった。そして中国仏教を実見し現地の荒廃した寺院や中国仏教の衰退ぶりを惜しむ記述を残した当時の日本仏教徒と異なり、書簡や日記で「彼我益する所あり」や「いきもきらず話す」などの表現が散見されたように、能海は交流したことや今後交流をしていく約束をしたことへの喜びや興奮が目立った。これについて、日本仏教界の経験や抱える課題が中国仏教を見る際の尺度となり、かねてより呼びかけていた仏教徒の団結に対する気持ちをより強くさせたと考察した。能海にとって、中国仏教の衰退を嘆くよりも、類似する課題や経験を互いに共有し、その課題克服への一歩として日中の僧侶間で往来や通信を始めることの方がはるかに大きな意味を持ったのではないか、という結論を出した。

ここで、本節(1)で確認した中国仏教に対する探検前のイメージを思い出したい。宗教革命を共に展開する「好友」として中国仏教に期待を抱いていたことを考えると、成都での僧侶との交流は能海の期待に添ったものだったと言えるだろう。第一章で見た通り、能海は比較仏教学やチベット探検を提唱する際に仏教徒同士の団結を呼びかけたが、それは仏教徒同士の交流が無いことを問題と捉えたからだった³⁵³。成都で互いに僧侶を派遣させることや連絡を取り合うことを約束し、それを日本の南条文雄に伝え「日本よりも今後は往復通

³⁵³ 例えば、チベット探検の必要性を唱え際には、「共に是れ仏陀の教を奉する仏徒にてあり乍ら互に交通連絡せざるは不都合千万なることならずや。然れば仏教国仏教徒の団結上に於ても西藏国の探検は忽にすべからざるなり」(同書, p60) と言っている。

信相成様申上候³⁵⁴」と日本側にも対応を求めていることを考えると、成都での能海は探検前に構想していた革新プランのうち仏教徒の団結を、中国仏教を相手に実行に移そうとしたと言えるだろう。そして能海の提案を拒絶することなく、承諾した反応は、まさに探検前に革新運動とともに展開する「好友」となりうる中国仏教というイメージに添ったものだったと言える。このようなことができた背景には、第三章で詳しく見たように、第一次探検で訪れた四川に日本領事館関係者や日本へ関心を持つ中国人青年、知識人との交友関係があり、この関係を辿って現地仏教に接近できたことも考えられるだろう。ただし、この成都滞在は能海の三年以上の探検期間の中で初期にあたる。そのため、始まったばかりの探検や初めての国外仏教との交流などからある種の興奮状態にあったと考えることもできよう。

そこで次に、現存資料の中でも探検の後半に当たる西安での記録を見ていきたい。青海からのチベット入りを目指した第二次探検で訪れた西安は、まさに(1)で繰り返し名前を挙げた玄奘等が活躍した唐の都長安があった都市である。西安での滞在は明治33(1900)年6月27日から7月3日と一週間たらずだが、伏龍寺、大興善寺、大慈恩寺、興教寺、薦福寺などの寺院に加え終南山といった仏教ゆかりの地を訪れている。西安に到着した日の日記には、「古来我仏教上幾多の沿革歴史を有する此地〔筆者注：西安〕に入ること本懐³⁵⁵」と、仏教ゆかりの地西安に到達したことを感慨深く思っている様子が見て取れる。

成都と同様に西安でも能海は訪れた寺院でサンスクリット語經典の有無を尋ね、日中仏教の現状について話していたことが確認できる。例えば最初に訪れた伏龍寺では、經典や仏教の現状について話し、勤行にも参加している³⁵⁶。ただ異なるのは、西安では仏教徒の往来や連絡といった提案をしたのか確認できる記録が残っていないことであり、成都のように仏教徒の団結を想定した動きをとっていたのか判然としない。では西安を訪れた頃の能海に、(1)で見たような中国仏教に対する期待は無かったのかと言えば、そうではない。なぜなら先述した通り西安を訪れた能海は、仏教史と関わりの深い寺院を積極的に訪ねているからだ。以下具体的に、訪問した際の記録を見ていきたい。まず隋、唐の時代に仏教の中心だった興善寺を訪れた時の日記の記述を見てみたい。

陝西省西安府南門外、大約八清里（日本の一里）の南方にして、大路の東辺には小塔数十基有り、皆古代当時名僧の塔なりと云う。而して其西辺二三丁の所二丁四方斗りの泥壁を以て囲みたる。其の南方に至れば門あり。大興善寺と額せり。門を入れば荒敗せる境内、大雄宝殿あり。更に入れば客室、食堂あり。更に又石階を上れば仏殿あり。方丈

³⁵⁴ 『能海寛遺稿』 p54。

³⁵⁵ 『著作集 第5巻』 p174-175。

³⁵⁶ 同書, p175,297。『能海寛遺稿』 p120,133,140。また、サンスクリット語、英語、ひらがなを僧侶たちの扇子に書いて喜ばれたとあり、友好的な交流が行われていたことが窺える。

の室あり。是れぞ仏教史上許多の沿革を有せる旧蹟也。

西晋武帝 今を去る凡一千六百年前、国家の隆盛を祈らんが為め大興城、大興県、大興寺、大興門、大興園等と称する当寺を創建せり。

隋文帝 開皇十七年。今より一千三百七年前、西暦紀元五百九十七年。翻經学士此寺にあり。天竺沙門闍哆笈多〔筆者注：闍那崛多か？〕住せり。大明天順四年。開山満徳の歴代三宝記の立碑あり。又大興の臨濟三十七世了信の撰碑あり。玄奘三蔵の道場なりと称す此寺。不空三蔵、此寺に住せりと其伝に出つ³⁵⁷。

(太字、下線は筆者による)

太字で示したように、仏教史に多くの沿革を残す寺院として興善寺を認識していたことが分かる。国寺として建立された興善寺の建立以来の歴史が簡潔に書き留められている。国家の繁栄を祈って建立された同寺院には、インドから僧侶を招き經典の漢訳がすすめられたことなども書かれている。インドから伝わった經典が、中国人だけでなくインド人僧侶も一緒に漢訳が行われたという、仏教の伝播とそれに携わる国際的な仏教徒の姿が読み取れる。これは(1)で見たような開かれた交通を使い、仏教を広めようと尽力する仏教徒、つまり能海が新仏教徒に求めていた「活発」な姿だったと言えるだろう。能海は20世紀に求められる仏教徒の姿を、西安で訪ねた寺院の歴史の中で見たのである。

また、この引用文において気になる表現が下線で示した「荒廢せる境内」という表現である。この時の訪問を日本に伝える書簡を見てみると、「頗る廢退の有様なり³⁵⁸」などの似通った表現が見られる。成都であまり見られなかった記述だが、西安での能海は仏教華やかな時代とは乖離した現状もしっかりと捉えていたことが分かる。

西安で能海が歴史と現状の乖離をより強く認識した寺院として興教寺がある。興教寺は今でこそ漢族地区全国重点仏教寺院、全国文物重点保護單位に指定され、玄奘の遺骨を保存する舍利塔があることで有名な観光地である。しかし『雁塔区志』によれば、清の同治元年から13(1862-1874)年にかけて、堂や僧房、仏像などの大部分は戦火によって破損していたという。民国13(1924)年にここを訪れた康有為は、壊れた壁や塀、傾いた堂を見て詩を詠んでいる³⁵⁹。民国遺稿修復が始まったことを考えると、能海が見た興教寺は康有為が見た状況とあまり変わらなかったと思われる。例えば書簡には次のように書いている。

是玄奘三蔵の塔院にして、一泊して古跡を調ぶ。此寺殆ど廢退して、老僧只一人あり。

³⁵⁷ 『著作集 第5巻』p281-283。

³⁵⁸ 『能海寛遺稿』p120。

³⁵⁹ 西安市雁塔区地方志編纂委員会編『陝西地方志叢書 雁塔区志』(三秦出版社2003年)p723。康有為が詠んだ歌は次の通り「晋隋旧刹暢宗風、翻譯經文殿閣雄。惆悵千房今尽毀、斜陽読偈証真空」。

印心と号す。穴居の内に宿す。三蔵の塔は五層にして、義浄慈恩両師の塔に比せば甚小なり、塔基に二師の小像あり、**塔中玄奘三蔵の舍利出づ、余は漸くにして八個を得て歎喜限りなし**³⁶⁰。

(下線、太字は筆者による)

下線で示す通り、「古跡」を調べるため、「殆ど廃退した」興善寺に一泊した。日記には、「洞穴に一泊す。殆んど泊するを得ず。更に何もなく、只荒敗のみ³⁶¹」と、宿泊は許されたものの、居心地は決して好ましいものではなかったことと、ただただ「荒敗」しかない様子が伝わる書き方をしている。更に「此地方寺院多けれども興教寺は知る者稀なり³⁶²」と別の書簡に書いていることから、そもそも近隣でも知られた存在ではなかったことがわかる。このような往昔の華やかさが消え去った興善寺で、引用中太字で示したように、能海は舍利八個を見つけている。非常に喜んでいることは引用文からも明らかで、南条文雄に宛てた書簡では「他日贈呈仕度存候³⁶³」とまで言っている。この舍利について「予は寺僧の尽力にて八粒を得たり、白色と赤色の二種なり³⁶⁴」と書簡にあることから、興善寺の僧侶に手伝ってもらって獲得したようである。ただ、そもそもこの舍利が果たして本物なのかは、舍利自体が確認できておらず不明である³⁶⁵。舍利が本物であったかはさておき、かつての仏教が華やかだった頃の謂われのある寺院を訪れ、舍利を拾ったことは、稲田を訪れ感涙した能海であれば、その感慨はひとしおだったことは想像に難くない。

また、寺院が廃れていることを伝える記述などは、すでに指摘したように中国仏教を見る際に、仏教華やかな時代だけでなく、現実の中国仏教の実情も見ていたことが分かる一例だろう。ただ、能海はその廃れ具合を状況として伝え嘆いたりなどはしていない。そのため実際に目にした能海がどのように感じたのか判然としない。

そこで中国仏教に対する認識が窺える第二次探検の見聞録「甘肅論」に注目したい。

³⁶⁰ 『能海寛遺稿』 p120。

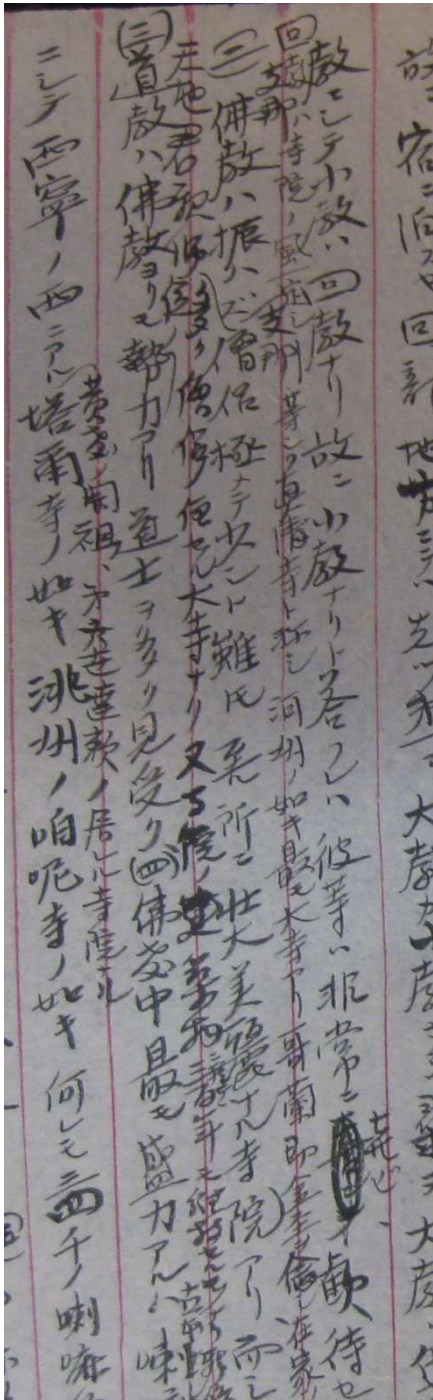
³⁶¹ 『著作集 第5巻』 p297。

³⁶² 『能海寛遺稿』 p141。

³⁶³ 同書, p131。

³⁶⁴ 同書, p141。

³⁶⁵ 玄奘の遺骨は中国本土だけでなく、日本や台湾で祀られている。その経緯については、坂井田夕起子『誰も知らない「西遊記」』（龍溪書舎 2013年）に詳しい。



『甘肅論』原稿 筆者撮影
金城町歴史民俗資料館蔵

支那佛教は振はず。支那僧侶極めて少しと雖とも、至る所に壮大美麗なる寺院あり。而して多くの僧侶住せる大寺なく、又寺院の建築物に於ては三百年も維持せるものなく、新修なれば³⁶⁶。

左に掲載した写真の通り、狭い行間に書きこまれているため判読しづらいが、仏教は振るわないと書かれた冒頭から読み進めていくと、壮大美麗な寺院はあるものの、多くの僧侶が住む寺院や古い建築物は少ないと書いているように見える。そして続けて「天地君親師位のこと」と中国の民間信仰と祭祀の対象に言及しているようにも読める。これは寺院の中に「天地君親師位」の位牌が飾られていることを指すのか、または次の節の道教で言及していることなのか判然としない。

そこであえて寺院の中に民間信仰が入ってきていたことを指すと読んだ場合、次のような疑問が浮かぶ。能海が仏教思想や教理を批判的に再編することに仏教革命の姿を眺望した仏教革新運動³⁶⁷の傍にいたことを考えると、規模の大小や壮麗であるといった寺院の外観よりも信仰の如何を問題としたのではないか。そう考えて改めて引用文を読むと、どのように仏教が信仰されているかということについて十分な説明があるとは言えない。むしろ他宗教が寺院の中に入っている様子を伝えることで、歴史や思想を批判検討しないという「新しい仏教」を求める仏教革新運動では否定される古い仏教に近い印象を与える。つまり批判や否定的記述はしていないものの、振るわないと冒頭で端的に書いていたように、仏教の革新を志向する能海にとって、第二次探検で見た中国仏教の姿は決して満足できるような状態では無かったと推察することもできるだろう。

³⁶⁶ 『著作集 第二巻』p318。

³⁶⁷ 大谷, 前掲書 p56。

以上、探検中の日記や書簡などの記述をひきながら、中国仏教に対する認識を見ようとした。第一次探検で訪れた成都では、具体的に僧侶の往来や連絡を提案するなど、探検前に構想していた革命プランの一部である仏教徒の団結を実行に移そうとしていた。そして実際に約束を取り付けていたことから、成都での中国仏教の反応は、探検前に革命とともに展開する「好友」となりうる中国仏教というイメージを裏切らなかつたと言える。

一方、第二次探検で訪れた西安では、成都と同じように寺院を巡ったものの、仏教徒の往来や連絡といった提案に関して記録が残っておらず、成都のように仏教徒の団結を想定した動きをしていたのかは確認できない。ただ、経典を漢訳し仏教を広めた高僧たちと関わりの深い寺院を積極的に訪れ、新仏教徒が目指すべき姿として高僧たちに思いを馳せたと思われる。同時に、荒廃が進み近隣住民からも忘れ去られた様子といった華々しい歴史を擁する寺院が廃れている現状も冷静に見つめていた。こうした中国仏教の現状は、仏教の革新を志向する能海にとって決して満足できる状態では無かつたと考えられる。第一章で見た通り、能海は旧仏教の問題は日本国内だけでなく、中国や朝鮮をはじめとする各仏教国に共通する問題だと捉えていた。この時用いた新仏教と旧仏教の二分法を借りれば、第一次探検で交流を提案した成都の仏教徒は、ともに新仏教へ変わる「好友」と映つたと思われるが、西安や第二次探検で見た中国仏教は華々しき時代の仏跡が多く残ることも手伝ってか、「好友」どころか改善すべき「旧仏教」として映つたのではないだろうか。

最後に西安を訪れた第二次探検から引き揚げて滞在した重慶で書かれたと考えられる日記「在渝日記」に注目したい。この日記の冒頭には、玄奘、道宣、窺基、義浄といった高僧たちの経歴が書き出されている³⁶⁸。これは織田得能『和漢高僧伝』（光融館 1894 年）内の漢文原文を和訳して書き出したものと思われる³⁶⁹。能海が経歴を書き出した高僧は、いずれも長安にある翻經院等でインドの経典を翻訳した人物である。(1) で見たように、この高僧たちは新仏教徒に求める「活発」で「精気」のある仏教徒として能海が名前を挙げていた人物であり、西安で実際に訪れた寺院と関わりのある人物だった。ではなぜ西安を離れた後、能海は略伝から一部書き抜いたのだろうか。これは、二度の探検を経験した後も、能海は依然としてかつての高僧たちを新仏教徒が目指すべき姿として捉えていたことを示しているのではないだろうか。この点については、二度の探検後の重慶滞在中に注目する第三節で改めて考えてみたい。

³⁶⁸ 『著作集 第4巻』p144-149。

³⁶⁹ この頃の読書リスト「参考書目録 在重慶参考する所」には、同書の書名が記載されていることから同書を読んでいたことが確認できる（『著作集 第5巻』p277）。内容を照合すると、例えば「玄奘」については『和漢高僧伝 上巻』内「玄奘伝」p27-29を要約したと思われる。

第二節 仏教盛んな地を目指して—対チベット

本節は探検前と探検中のそれぞれの時期に、能海がチベット及びチベット仏教に対してどのような捉え方をしていたのか見ていく。探検前に能海が持っていたチベットイメージについては、すでに高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房 2010年）がある。同書はリース＝ディヴィス『仏教』やシネット『秘密仏教』等のイギリス由来のチベット情報に触れた層として「反省会」に注目し、中でもチベットに関して詳細な記述を残した能海の『世界に於ける仏教徒』を分析の対象に取り上げている。高本氏の研究は、多くの文献を丹念に調査したものであるが、能海個人に焦点を絞った本研究においては、『世界に於ける仏教徒』以降、能海が書いた無記名文章や「石峯」名義の文章までも検討する必要がある。そこで本稿は、まず先行研究を参照しながら本研究にとっての不足点を補いつつ、探検前の能海がチベットに対していかなる理解を持っていたのかを改めて考察する。次に、探検前のチベット理解を踏まえたうえで、探検中に実際に書かれたメモや文章などをもとに能海がどのような側面からチベットを理解していったのかを見ていくことにする。

（1）探検前のチベット理解

まず先行研究も参照してきた『世界に於ける仏教徒』内のチベット探検の動機が書かれた「西藏国探検の必要」から、チベットに対する言及を確認しておきたい。やや長くなるが全文引用する。

往古以来他国と通せず他人種と交らず、国体は大に他邦と異にして、地理書の記する所によれば、法王あり達頼喇嘛と号し、域内に君臨す。之を弥陀の示現せる活仏なりとして人民の尊崇する甚だ厳なり。此法王に垂ぎて尚ほ数名の貴重なる高僧あり。其外に出づる時は、市井の老若皆地に伏して敬礼を施す。若し之を拜せざる者あれば厳刑に処せらる。又女僧頗る夥し、且つ⁽¹⁾ 此国は亜細亞州中の最も仏教盛に僧徒多き地なり。故に蒙古の人民此を靈地として隔遠の地方より来り巡拜する者常に多し。国内の人口大半僧侶にして寺院堂宇甚だ多く、其大なるに至りては三千或は四千の僧侶群居する者有り。

其首府拉薩は人家石を以て造り、⁽²⁾ 市街道路甚だ清潔にして、又壯麗なる寺院堂塔及び廣大なる弥陀堂ありて、其中無数の仏像金銀宝玉を充滿す、法王の宮殿の如き、即ち巨大の一寺院にして結構壯觀華美を極め無数の仏堂高塔林立して内外に羅列す。皆金銀珠玉を鏤ばめ爛々として人目を眩惑す。大凡世界中此の如く財宝を寺院僧侶に擲ち冥福を祈るもの多きを見ず。各部の都邑皆高僧の宮殿及び寺院堂宇あり。或は山林湖水の中に堂宇ありて数多の女僧を住せしむ。

又⁽³⁾ 国内都邑に住する人民は礼讓に厚く文学を研究する者多く、星学曆法の如きも此国自ら發明あり。殊に仏教を講習するの生徒最も夥しと云ふ。以上の記に依るに我邦仏

教徒の此国を探検する必要照々として明かなり。誰れか探検は軍事上殖民上にのみ要ありと云う歟³⁷⁰。

(改行、下線は筆者による)

下線部1のように、チベットをアジアで最も仏教が盛んな地として認識していることが分かる。次に下線部2のように、清潔なラサには荘厳な寺院が点在し、町全体が一つの大きな寺院のようだと、寺院が集まる美しい仏教都市としてラサが描かれている。そして下線部3のように、そこに住む人は礼儀正しく文学に親しみ、独自の学問もあるというように、チベットに暮らす人々に対して好意的に捉えていたことが読み取れる。つまり仏教が盛んで、清潔な街があり、人々は礼儀正しく学問においても独自の発展を遂げた場としてのチベットを思い描いていたことが分かる。

では、なぜ能海はこのように想像したのか。上記引用箇所について先行研究の高本氏は、欧米の地理書をもとに編纂され、当時教科書として使用されていた『輿地誌略』に基づく記述であると指摘する³⁷¹。確かに『輿地誌略 第二巻 亜細亜州』(内田正雄編訳 明治七十七文部省)³⁷²で紹介された「西藏」の内容と上掲の能海の記述は、順序の違いこそあれ殆ど一致する。ただし更に同氏が指摘するように、『輿地誌略』には地勢や中国の宗主権下にあること等の政治的状況、産物、一妻多夫制などの情報は省かれている。高本氏は、能海が所属した「反省会」の機関誌『反省会雑誌』でシネット『秘密仏教』やエドウィン・アーノルド『アジアの光』、リース=ディヴィス『仏教』などが取り上げられていたことから、能海もこれらの著作から影響を受けチベットを「隠者民」「閉鎖国」と表現したという分析結果と合わせて、『世界に於ける仏教徒』のチベットは「全くの未知の地域とされつつ、生き仏によって統治され、その繁栄を人々が享受して平和に暮らす場所として」描き出されたと指摘している³⁷³。しかしなぜ能海が『輿地誌略』から、チベットに対してポジティブな記述を抜き取ったのかは言及がない。ただ、このチベットに関する記述が、仏教を宇内一統教とするための準備や方策を書いた『世界に於ける仏教徒』であったことを考えると、準備の一つである探検の目的地としてチベットを説明する際に、その仏教に注目するのは当然と言える。また能海が目指す探検が、歴史的考究と仏教徒の団結だったことを考えると、団結する相手の仏教徒について説明するのはごく自然な流れだと思われる。つまり、能海が『輿地誌略』を引きながらも地勢や政治的状況等について十分に言及しなかったのは、『世界に於ける仏

³⁷⁰ 『世界に於ける仏教徒』 p58-59。

³⁷¹ 高本, 前掲書 p66。

³⁷² 同書は国立国会図書館デジタルコレクションで、他の年に出版されたものと一緒に公開されている。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761773> (最終アクセス日 2020年10月1日)

³⁷³ 高本, 前掲書 p67。

教徒』の趣旨にとって必要ではなかったからなのではないかと筆者は推察する。

とはいえ、上掲のチベットに対する能海の説明は、仏教を重んじるチベットの様子であって、そのチベット仏教がいかなるものか、また日本仏教との関わりや相違点について触れていない。近年の一部の研究では能海はチベット仏教、特に教義については関心が無かったのではないかという疑問を呈するものすらある³⁷⁴。確かに『世界に於ける仏教徒』の記述の他、後で見ると探検中の記録を見ると、チベット仏教の教義に対する言及は少ない。だが、日清戦争によって最初の探検行きを断念した能海が明治 31(1898)年に探検に出るまでの間に投稿したいくつかの文章、及び友人たちの投稿文章を見る限りでは、チベット仏教に対する理解が全くなかったとは言えないと筆者は考える。先に挙げた高本氏の研究では、能海が触れたであろう国外の研究として主にイギリスの研究が挙げられていた。しかし期間を探検出発まで延ばし、さらに対象を能海と彼の仲間たちにまで広げた場合、より多くの国外の研究に触れチベット情報を取得し、機関誌等を介して共有し合う青年たちの姿が見えてくる。

例えば、明治 29(1896)年『反省雑誌』11(8)に掲載された能海による無記名記事³⁷⁵「西藏喇嘛の分派」は、ドイツの学者シュラーギントヴァイト(Emil Schlagintweit 1835-1904)の「西藏仏教」を参照しながら、チベット仏教にある九つの宗派の概要を紹介している。また明治 30(1897)年には石峯名義で「西藏国新教の開祖「ツランクハバ」の略伝」(『東洋哲学』第四編第五号)と、「ツランクハバの年代異説」(『東洋哲学』第四編第七号)を投稿している。前者はチベット仏教ゲルク派開祖のツォンカパの略伝について、後者は前者の補足として年代に関する複数の説を参考文献とともに紹介している。ここで挙げられている研究は、チベット学の開祖と呼ばれるケーレシ・チョマ・シャーンドル(Körösi Csoma Sándor 1784-8142)の「西藏国歴史年表」やシュラーギントヴァイトの『西藏仏教』、ベンガルのアジア協会雑誌、『喇嘛教沿革』に収録された『聖武記』の他、友人渡邊海旭の「西藏仏教一斑」である。このうち能海は、チベット人が考定したという理由からケーレシ・チョマやシュラーギントヴァイトの説を支持している。このように投稿記事から、探検前の能海は『喇嘛教沿革』など日本国内で出版された著作以外にも自ら目を通し、更に未だ不明な事が多いチベットについて自分なりの見解を持っていたことが分かる。

能海がチベットについて投稿していた当時様々な角度からチベットを取り上げた文章が雑誌上で発表された。例えば渡邊海旭がチベット仏教の教史や教義などをまとめた「西藏仏教一斑」(『浄土宗学友会会報』1895年)、「西藏仏教の二大本尊」(『仏教』第122号)を発表し、秦敏之はチベットの由来から文成公主までをまとめた「西藏国の起源及同国に於ける

³⁷⁴ 根敦阿斯尔「能海寛が見たチベット仏教」(能海寛研究会『能海寛研究会 25周年記念論集』(能海寛研究会 2020年) p50-73)。

³⁷⁵ 渡邊海旭は「西藏仏教の二大本尊」(1897年『仏教』第122号)の中で、「九派の事は友人能海君シユラギンドワイドより「反省雑誌」に投じたることあり就て見るべし」と、能海が書いた論文を紹介している。

仏教の弘通」(『反省雑誌』11(4))を書きあげた。彼等はいずれも、能海が探検へ出発する前に東京の宝亭で開かれた壮行会に参加しており(付録資料2 壮行会参加者リスト)、能海と個人的な関係にあったことが確認できる。その他、能海が参加していた反省会の機関誌『反省雑誌』でも、歴史面や宗教的実践面に注目した藤井宜正「西藏国の六字大明呪に就きて」(『反省雑誌』13(4))、外字新聞をもとに一妻多夫制や踊り等の風俗、習慣を中心にまとめた紫微山人「西藏談(一)」(『反省雑誌』10(1))などが次々と発表されている。これらの記事は外字新聞に基づいたものを除き、先に述べたシュラーギントヴァイトとケーレシ・チョマ・シャンドルの他、ブライアン・ホートン・ホジソン(Brian Houghton Hodgson 1800-1894)、ウィリアム・ウッドヴィル・ロクヒル(William Woodville Rockhill 1854-1914)、ローレンス・ウォッデル(Laurence Waddell 1854-1938)といった欧米東洋学におけるチベット研究者の研究が参照されている。これらのことから、当時日本国内で、欧米の東洋学研究を通して、最新のチベット研究の動向を捉えようとする人々があり、その中に能海がいたことが分かる。

それでは能海たちは欧米由来のチベット研究についてどのように考えていたのか。能海が欧米のチベット研究に対して直接的な批判や指摘をしたという資料は少ない。先に述べたように、『東洋哲学』に投稿した「西藏国新教の開祖「ツランクハバ」の略伝」と「ツランクハバの年代異説」では、複数ある説から自身が支持する説とその理由を明示している。このことから、能海は無批判に情報を取り入れていたのではなく、チベット人が考定した等の理由をもって取捨選択していたことが分かる。しかしより明確な態度を読み取るのは難しい。

そこで仲間たちの論考を見てみると、批判的精神を以て国外のチベット研究を取り入れていたことが窺える。例えば、渡邊は先に挙げた「西藏仏教一斑」で、欧米のチベット研究に基づきながらチベット仏教を概説している。内容は仏教がチベットに伝わって以降の歴史、聖典と教義、宗派を概説した教義、僧侶の階級や戒律、法具などを説明した教制である。中でも、これから聖典、教義、宗派を紹介しようとする時に、次のように当面の課題を指摘している。

唯憾む所は獵涉甚だ浅に、其大綱を撮る能はざるを、且欧人の書、固仏乘に精ならず、観察する所、頗る支吾なきにあらざ、西藏の原本に就くに非ざれば、到底其真を識る能はざるを、大方希くは諒焉³⁷⁶。

(原文の句点は読点に改めた)

残念なことに十分な調査ができず大綱を捉えきれていないことと、よる所の本は仏乘に詳しくない欧米人が観察したもので、いい加減な部分がないわけではない。チベットの經典

³⁷⁶ 渡辺海旭『渡辺海旭論文集』(壺月全集刊行会 1936 年) p207。

がなければ、その真実を知ることはできないので、許してほしいと言っている。渡辺はこのような断りを入れた後、概説に入っているが、九つの宗派を紹介した後には再び自らのコメントを挿入している。

教義一章、項を分つもの四、支条相依りて略教林の粹を描かんことを期せり。然ども凡筆悪画、固より丹青の法に適はず。布置多きは宜きを失す。文辞雅ならず参照精を欠き、粗笨破裂、毫も見るに足るべきなく、疑訝すべきもの、研究すべきところ、愈出でて筆路益渋晦す。背上の慚汗、何ぞ畜衣を濡すのみならんや。唯希くは世、教界の風光を賛して其幽趣を解するの士、幸に此一幅の悪画に依りて、崑崙雪嶺の間、一大勝景色の横るを知り、親く西藏の原本に就きて委曲の観察をなし、以て予を誨ゆる所あらば、則其幸何ぞ独り予が蒙を開くのみに留まらんや。真に仏門全体の度なりと言ふべし³⁷⁷。

満足のいく説明が書けない渡辺の無念に思う気持ちが伝わる文章である。書いていくうちに、怪しく思ったり、研究すべきと感じたりする所が出てきて、ひどく困った様子が読み取れる。渡辺はこの文章によってチベットの存在を知り、チベットの経典原本を細かく研究して、誤っていたところがあれば訂正して欲しいと言っている。渡辺としては、チベットの歴史や法制よりも、教義に関する研究は充分ではないという認識があり、原本に基づいたより詳細な研究をするべきだと考えていたことが窺える。更の一つ前の引用文に、「欧人の書、固仏乘に精ならず」とあるように、自分たち仏教徒よりも仏教に詳しいとは思えない欧米人による研究の限界も意識していたように思われる。

更にもう一人の友人の文章を見ておきたい。明治 28(1895)年能海の友人の古河老川が投稿した「世界的仏教の一大学校」(『仏教』)である。この文章は、タイトルの通り仏教研究を支える世界的な大学を作るべきだと呼びかけたものである。その中で、欧米の仏教研究に言及した際に、古河は次のように指摘している。

仏教学上の暗黒往々開け去るものあり、其勞力実に感謝せざるを得ず、唯之を東洋学者の仏教研究に比するに、彼〔筆者注；欧米の仏教研究〕は歴史的研究に一步を進めて、教理的研究は殆ど未だ手を着けず、之に反して東洋学者の仏教研究は、教理的研究に全力を尽して歴史的研究は殆んど雲煙過眼なり³⁷⁸。

欧米の研究は素晴らしいが、その多くは歴史研究であり、教理研究はまだ行われていない。

³⁷⁷ 同書, p227。

³⁷⁸ 古河老川(勇)著『老川遺稿』(仏教清徒同志会 1901年) p 190。同書は国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/899791>
(2020年10月2日最終アクセス)

それに反して東洋の学者は歴史的研究に関心を示さず、教理研究ばかりしてきたと、両者の特徴を指摘する。そして欧米で歴史研究ばかり行われてきた理由として、もともとは語学の研究者か宣教師によって行われた研究で、彼等には仏教の哲理を理解する力が無いため、教理的研究が行われてこなかったのだと言う。そこで古河は今後「西人は須らく歴史的研究を主として、教理的研究を客とすべく、東人は亦須らく教理的研究を主として、歴史的研究を客とすべき³⁷⁹」と分業を提案し、東洋に設立する仏教大学に教理的研究を学びに欧米人を呼べば良いのだと言う。この古河が指摘した教理的研究が欧米の研究では行われていないという点は、先に見た渡辺と共通している。当時の欧米の研究は、仏教徒から見たときに、物足りなさを感じるものだったということだろうか。そして古河は続けて、大学設立にあたって日本、スリランカ、チベットを、中心的役割を担う国として挙げている。当時日本人僧侶が留学していたスリランカと並んでチベットが、重要な役割を担う仏教国として挙げられていることは興味深い。古河がスリランカとチベットを選んだのは、仏教が今でも盛んで、更に教理面の研究が進んでいるという認識に基づいている。こうした古河のチベットに対する期待は、日本仏教と手を組むべき相手として見ていた点で、能海の仏教徒の団結と繋がる見方ともいえるだろう。だが、この古河が書いた文章に対して、能海が全くの同意見だったか確かめる資料を筆者は探し出せていない。しかし、第一章で述べたように共同生活を送る関係にあった二人が意見の交換をしていた可能性は十分に考えられるだろう。まだ実態がつかめないものの、仏教が盛んといわれるチベットに対して、自分たちが進めようとする団結や大学設置といった事業をともに進めてくれるのではと期待したのではないだろうか。

以上、『世界に於ける仏教徒』におけるチベットの描写から、渡辺や古河など能海の仲間たちの論考まで射程を広げて、彼らが理解したチベットについて見ようとしてきた。能海は『世界に於ける仏教徒』でチベットを仏教が盛んな地として描いた。だが能海がこうした認識しかしていなかったわけではなく、仲間たちと欧米の東洋学者によるチベット研究に関する情報を雑誌上で共有していたことから、チベット仏教に関しても一定程度理解していたと思われる。そして古河や渡辺などの親しい仲間から、欧米のチベット研究に対して教義面の研究が不足していると指摘する声も上がっていた。その中で能海が賛同したのか否かは、本研究では明らかとできなかった。しかし欧米由来の研究もまた能海のチベットイメージの形成に一役買ったことは少なくとも言えるだろう。また不足を指摘する声があがっていたように、欧米の研究はチベットに対する能海の好奇心を完全に満たしてくれたわけではなかった可能性もあるだろう。

このような完全に実態が掴み切れていない状態こそ、探検前の能海がチベットに対して抱く期待をより大きくさせた背景でもあるだろう。仏教が宇内一統教となることを望み、その一準備として探検を提唱した能海にとってチベットは、経典のある場所という点で歴史的考究、あるいは中でも仏教徒としては不足を感じざるを得なかった教義的研究の進展に

³⁷⁹ 同書, p190。

必要な目的地だったのではないか。また、仏教が熱心に信仰されているという点で、仏教徒の団結を目指す能海にとっては、ぜひとも連携して共に運動を盛り上げたい相手として期待したのではないだろうか。

(2) 探検中のチベット情報

探検中のチベットに対する認識を見ていく。(1) で見たように、探検前の能海には、チベットに対して経典がある場所としての期待があった。それは教義面の研究を進展させたいと考えていたからではないかと先述した。ここではまずこの経典との接触について見ていきたい。

探検中の経典蒐集を辿った奥山直司「能海寛によるチベット語経典の蒐集と日本への送付について」(『25周年記念『論集』』2020年)では、能海は成都とダルツェンドで集めた経典を南条文雄に送ろうとし、中でもダルツェンドでは周辺地域から経典を取寄せたのではないかと指摘されている³⁸⁰。つまり能海は初めてチベット仏教に接したであろう成都と第一次探検で訪れたダルツェンドで、多くのチベット経典に触れ、それを日本へ送り出そうと奮闘していたということなる。また同論文では、第一次探検に失敗した能海がダルツェンドで39の仏像画を描いた「丙第五号³⁸¹」は、「ジャムバラ神」とされる図を除いては、全てL.A.Waddell(1854-1938)の“The Buddhism of Tibet, or, Lamaism”(London 1895)の挿図を写したもので、分類法も同書に従っていると指摘している³⁸²。興味深いことに能海は、チベット仏教圏に入った後も、現地で入手したと思われる欧米の東洋学の文献を通じて、チベットの仏像の理解を深めていたということになる。奥山氏の研究から、成都とダルツェンドは、能海がチベット仏教を理解する過程において重要だったことが窺える。第一章でも参照したメモ「思想の変遷」からは、この時期に自らの研究に対して気づきが生まれたことが分かる。このメモは、第二次探検後の重慶滞在時に自身の半生を振り返って書いたものだが、九段階のうち最後の段階である「西藏学の必要」は唯一探検期間中に該当し、ちょうどこの頃の変化を示すものである。

西藏漠遊の途に上りて、段々と土人等に遮られて、暫時巴塘及打箭爐に滞在、少々西藏経文を得て研究せし処、案外にも其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は英文よりも梵学よりも、却て西藏文研究の愈々必要なるを感するに至れり³⁸³。

³⁸⁰ 奥山直司「能海寛によるチベット語経典の蒐集と日本への送付について」(能海寛研究会『25周年記念『論集』』2020年 p28-40)。

³⁸¹ 『著作集 第5巻』p93-168。

³⁸² 奥山, 前掲論文。

³⁸³ 『著作集 第4巻』p233。

「土人等に遮られ」た後滞在したバタンとダルツェンドで、チベット語經典を見て思いの外自身が追い求めたサンスクリット語の原文に近いことを知ったという。そして經典を翻訳するための英語やサンスクリット語よりも、チベット語の研究こそが必要だと感じるようになったと振り返っている。つまりチベット語經典に直に触れた能海は、それまではインドでは無くなってしまったサンスクリット語經典がある場所として見ていたチベットを、研究の対象としても捉えるようになったのである。また「巴塘及打箭爐」とは、第一次探険で最もチベットに近づいたバタンと、その後に戻ったダルツェンドでのことを指すと考えられる。探検でチベット仏教に触れたことで、チベット語の研究のようにチベットを研究しようとする気持ちがより強くなっていったことが窺える。また、(1) で見た探検前の欧米のチベット研究を取り入れていた頃を思い出すと、經典やそれに関する研究に対してチベット語という新たな課題を認識するようになっていたと言えるだろう。

では、実態が判然としないものの仏教が盛んであることや、それに伴い革新運動をともに盛り上げる相手として見ていたチベット仏教徒やチベットという場所に対してはどのように認識するようになったのか。そこで次に探検中にチベット文化圏に入った際に書かれた二つの見聞録を見てみたい。

最初に第一次探険で訪れたリタンで書かれた「入蔵途次見聞録」から見る。本資料はもともと本山への上申書として書かれたが、結局実弟水野齊入へ書簡として送られた。前半はリタン、後半がバタンでの見聞がまとめられている。ここではリタンで書かれた前半を見る。

智識は只宗教を信すると、食物を得るの道を講ずるとにありて、衣服、家屋、耕作等未だ野蛮の域を免れず。況や政治等に関する念は殆んどもなし。故に理解力甚乏しく、只武に長せるのみ³⁸⁴。

チベット人が人種的にモンゴル人や日本人に似ていると指摘した後に続く一文である。チベット人は、宗教を信じ食物を得ること以外は「野蛮の域」から出ない人たちだとし、更に政治に関心も無く、理解力も無いと言っている。この記述は、言うまでもなく(1) で見た『世界に於ける仏教徒』で描かれた好意的な記述とはあまりにもかけ離れている。共通しているのは、唯一仏教信仰に熱心であることぐらいだろう。しかしその仏教に関しても厳しい評価をしている。ラマ僧に関する箇所を見てみたい。

土人と同しく、性悪敷粗暴なり。ラマ各々、百姓小作を有し、百姓所得の頭をはり、西藏は殆んどラマ政治の下に住せり、故にラマの権力甚強し、其ラマ寺事を●せむは、又大に便利を得れとも、更に智識なく、無学文盲、自分の名をも書き得ず。我大ラマの名をも知らざる程の愚僧多く、此愚上人而も権勢強きゆへ、西藏の野蛮域脱出する第一

³⁸⁴ 『著作集 第15巻』 p240。

に、ラマを退治せずは、到底西藏国の前途は謀ることを不得³⁸⁵。

粗暴で無智というラマ僧に対する記述に加え、政治上も強い権力を持っていることを批判している。今後のチベットのために、このようなラマを「退治」しなくてはならないと怒りとも思える強い表現をしている。

まずここで、第一章第一節で能海が学問を信仰の「手段」として捉えていたことを思い出したい。『世界に於ける仏教徒』で、「組織宗教学」を提唱したことについて注目した際に、中西牛郎の「真正なる信仰は学問を要すと雖も、学問は実に其手段に過ぎざるなり³⁸⁶」という一文を引用し、新仏教は知識を獲得して満足するのではなく、信仰をより篤くするための手段として用いるのだと指摘した。これは言い換えると、手段としての学問が成立するには学問自体を行う必要があるということであり、実際に宗教学や歴史学などさまざまな研究法を列挙したように、能海は学問自体を重視していた。また、本節（2）で見たように、能海はチベットに対して、文学や星学暦法、仏教に関する研究や発明が進んでいるという、自身が重視する学問を重んじるという価値観を共有できる相手として期待を抱いていたと見ることができる。つまり、能海は自身と同じように学問を重視する場所としてチベットを認識していたのである。ところが「知識なく、無学文盲、自分の名をも書き得」ないとラマについて書いているように、チベットに対する能海の勝手な期待はあっけなく瓦解したことが分かる。たとえそこで実際に「学問」が行われていたとしても、能海には学問として映らなかったという両者の認識のズレも一つの背景として考えられるだろう。

次に政治上ラマが権力を持っていることに対する強い批判について考えてみたい。再び、第一章で見たように仏教革新運動の改革策に政治権力からの自立があったことを思い出したい。1900年の『新仏教』の創刊号には「政治上の保護干渉を斥く」とあるように、政治から距離を置くことも、仏教清徒同志会が提示した「新仏教」のイメージに含まれていたことが分かる。ただし、能海の参加が確認できているのはその前身の反省会と経緯会であるため、能海が探検前に政治権力からの自立をビジョンとして持っていたのか判然としない。しかしラマ僧が政治体制にコミットしている姿を「退治」する対象として強く批判していることから、少なくとも政治と関わる仏教徒の姿をよしとっていなかったことが分かる。つまり、学問や政治という面で、現地ラマは能海が思い描く仏教徒像から、あまりにもかけ離れていたことが確認できるのである。言い換えれば、旧仏教と新仏教という軸でラマ僧を見ていたとも見えるだろう。

ただ（1）で確認したように、能海は『世界に於ける仏教徒』の中で、人民から崇拜されるダライラマの存在に触れており、チベットでは政教が切っても切れない関係にあることは承知していたと考えられる。しかしこのことに対する批判も特段展開されていない。この

³⁸⁵ 『著作集 第15巻』 p244-245。

³⁸⁶ 中西牛郎, 上掲書 p181。

ように考えると能海にとって政治と宗教の関係が密接だという政治体制よりも、批判すべき問題として映ったのはラマだったのではないか。

そこでこの「入蔵途次見聞録」が書かれた状況を振り返りたい。本稿第二章では、第一次探検でのリタン滞在時に、ネパールへ戻る朝貢使節によって荷駄馬や人夫が確保できず、現地ラマ僧から二倍の金額を支払うことになったなど苦戦したことについて述べた。またその前に滞在していたダルツェンドでも、駐蔵大臣とともにラマの紹介状を同知に求めたがいずれも断られていた。更に同地の寺院を訪ねた際の日記には、「蛮語を話す不能云々にあるも、実は外国僧を案内するをはばかりにあり³⁸⁷」とあり、遠回しに外国人であることを理由に境内に立ち入ることを断られていた。つまり能海は第一次探検で、十分な権力があるにも関わらず同じ仏教徒に協力しないこと、仏教寺院に立ち入ることすら許さないことを、身を以て知ったのである。それはそれまで長く滞在した重慶や成都で、紹介状を書くなどして協力し、話し相手になっていた江瀚等とは異なる対応で、能海の中でラマに対する悪感情が募ったことは想像に難くない。このようにチベット仏教に最初に触れた第一次探検で、チベット仏教徒に対する期待は肩すかしをくらったと言えるだろう。

ここまで第一次探検で訪れたリタンで書かれた「入蔵途次見聞録」の記述を見てきた。取り上げたチベットに対する厳しい記述内容からは、実際に出会ったチベット仏教は能海の期待通りではなかったことが分かった。「無智」で権力を持ち探検に非協力的なラマ僧に出会ったことで、学問を重んじ、共に運動を展開する相手というチベットに対する期待は、崩れ去っていった。そしてこれに伴い生まれた不満という感情が、チベットやチベット仏教徒に対する厳しい評価につながったと思われる。ただ、後述するように当時チベットは国際的に厳しい立場に立たされており、外国人に対して強い警戒心を抱いていた。能海がこうしたことを把握していたことが確認できるのは、リタンの後に訪れたバタンでのことであり、「入蔵途次見聞録」はチベット情勢とは無関係に、能海が最初の探検で接したチベットに対する感情が読み取れる資料と言える。

第二次探検での見聞をまとめた「甘肅論」も見てみたい。もともと第二次探検後重慶から日本に出した手紙には、「人口の多少、物産、人情、風俗等につき、見聞せる所を録載致したきこと多きも〔～中略～〕他日更に詳報致すべし³⁸⁸」と、手紙では書き足りないと伝えている。「甘肅論」はこうした背景から、第二次探検の見聞をまとめたものとして書かれたと思われる、実際に明治34(1901)年2月20日に本山へ送られた³⁸⁹。内容は、地理、風俗、歴史、宗教、政治の他、新疆や青海、チベットに対する言及までである。先に見た「入蔵途次見聞録」と比べると多様な内容で、能海が中国西北地方での探検で関心を持ったこと、伝えたいと思ったことがまとめられた資料とみることができる。このうちチベットに関する記述

387 『著作集 第4巻』 p87。

388 『能海寛遺稿』 p130。

389 『著作集 第9巻』 p190。

を見ていく。ただ中国西北地方での見聞であることを改めて断っておく。

まず「甘肅論」の執筆態度について「入蔵途次見聞録」とは明らかに異なるということを書いておきたい。

予は一日番人の部落を通するの節、此地は何縣管轄なるやを問へり。番人は不審の顔付きにて笑ひつつ、我々は何県の管下にもあらず。某土司の民なりと答へ、殆んど支那政府の有無を解せず。土司酋長の類を以て王の如く思へり。又其实殆んど然り。政府の微力なる政令の行はれざる以て知るべし³⁹⁰。

何県の管轄に入るのかと尋ねたところ、県の管轄下ではなく土司の民と回答を得たことから、中央政府の権力が殆ど届いていないと伝えている。つまり自身の関心に依じて、実際に質問をしているのである。批判の言葉が多かった「入蔵途次見聞録」は、同資料だけでは実際にどういった会話を交わし批判するに至ったのかは窺えなかった。一方、上掲引用文では、現地インタビューさながら質問を投げかけている。探検が思うように進まないことから来ると思われる感情的で批判的な姿勢はそこにはなく、好奇心をもって接し自身の考察をまとめているような記述が散見される。

このような「甘肅論」から、チベット族の風俗について紹介した箇所を見てみたい。ブーツを履き、肉を食べ、煉瓦造りの家に暮らすチベットの風俗について、「西洋と大に其趣を同ふするこそ奇なれ³⁹¹」とある。

日本か近來の新輸入、新流行にあらずして彼等元來の風俗なり。一は氣候、地理、産物等の西洋に相同しきにもせよ、自称文明の西洋と此未開の西番土人とか、如此も衣食住、風俗に至るまで相同しきを見れば、西洋文明の祖先たるか、親類たるか、縁遠きものにあらざるを知る³⁹²。

日本が「西洋文明」から新たに取り入れてきたものたちは、実はチベットにとってはもとの風俗であった。ブーツや肉食、煉瓦で作られた家屋など、能海にとっての「文明」を、「未開」と思っていたチベットで発見したのである。探検前にチベット情報を積極的に集めていたとはいえ、予想もしなかった西洋とチベットとの共通点に気づき、両者が近い関係にあるのだろうと考えを書いている。このようにチベットを西洋と比較する記述は、先に見た「入蔵途次見聞録」ではもちろん見られない。

次に一つチベットに関する記述を見ておきたい。

³⁹⁰ 『著作集 第2巻』 p322。

³⁹¹ 同書, p327。

³⁹² 同上。

西藏国を其人種、言語、宗教の同じきものを以て、一国と仮定せんか、西藏四大本部よりも更に大なるの領土を得べし。即ち青海全部、甘肅の三分の一、四川の五分の二、雲南の三分の一、及印度雪山各地は、皆確に人種、言語、宗教を一とし、支那の本部十八省と大差なくして、一千万以上の人口を有する大国は此亜細亜中原に強を称するに足る大西藏国と成るべきも、惜しむべし³⁹³。

人種、言語、宗教の共通性で見た場合、チベットは青海、甘肅、四川、雲南、ヒマラヤ諸国などを含み、中国よりも遙かに大きな「大西藏国」となりうると言っている。「惜しむべし」と付け加えている通り、能海には実際はそうではないという認識があるのは言うまでもない。また第二次探検後に書かれたと思われる「清代疆域沿革史」は、清朝の境域の歴史的変遷を追ったものと思われるが、その大部分が蒙古四大部（外モンゴル、内モンゴル、オイラト、ホシュート）の分布と各部族と清朝、チベットとの関係に費やされている³⁹⁴。この「清代疆域沿革史」執筆の際に参照した文献などは不明だが、何かしらの書物を読みながらまとめたものと考えられ、チベット文化圏の広がりについても文献を通じてまとめようとしていたのではないかと推察できる。さらに、こうした広がりに対する感想を、第二次探検後寺本婉雅に送った書簡で率直に書いている。

西藏仏教の版図の廣大なる、流石は大陸的教なる所、小嶋人のうらやま敷の至に不堪候³⁹⁵。

広大なチベット仏教の広がりを「大陸的教」と呼び、羨ましいと率直に伝えている。探検前の能海は、チベットに関して言えば（1）で見た『世界に於ける仏教徒』のようなラサを中心としたチベットや、チベット仏教に対する記述が多く、チベット仏教圏に関する言及は見当たらない。それに比べ、上掲引用文のように、一時共にチベットを目指した寺本に書簡でわざわざ伝えているということは、探検を通じてチベット仏教圏の広がりについて実感したのだと考えられる。そしてこの気づきは、「大陸的」、「小嶋人」という対比がなされていることから明らかなように、「小嶋人」能海の想定を遙かに超えた大規模なものに映ったことが分かる。

ここまで第一次探検中にチベット文化に触れた初めの時期にあたるリタンで書かれた「入蔵途次見聞録」と、第二次探検後にまとめられた「甘肅論」のチベットに関する記録を見てきた。二つの見聞録を見ることで、「入蔵途次見聞録」は感情的な批判が多く、「甘肅論」

³⁹³ 同書, p328。

³⁹⁴ 『著作集 第4巻』 p218-224。

³⁹⁵ 『能海寛遺稿』 p136。

は自身が関心を持ち日本に伝えたいと思った事柄が書かれていることが分かった。それはそれぞれの見聞録が、チベット仏教圏に入った初めての探検中だったこと、そして第二次探検後書簡で伝えようとしたことを改めて見聞録にまとめたという背景から分かる。また、「甘肅論」では、日本で抱いていたチベットに対する期待とは異なる実態を否定し批判するのではなく、異なることに対して興味を持ち自分なりの考察や感想を伝えている。これは探検を通じて、探検前の認識と実体とのギャップを受け入れる土壌が能海の中で形成されていたことを示すのではないだろうか。また第二次探検後に能海が伝えようとしたということは、チベットに対する情報の不足を認識し、チベット自体をもっと知っていく必要があると考えたと言えるだろう。

次にチベット仏教や文化に対する記述と同じく、頻繁に書きつけが確認されるチベットを取り巻く国際情勢について見ておきたい。第一章でも見たように、チベット探検を決意した際、能海はロシアやイギリス等の大国によるグレートゲームの焦点となりつつあったチベットが危機的状況にあり、「世界の珍書」を失ってしまう可能性があると捉え、危急で探検すべきだと考えた³⁹⁶。そして探検中も能海は引き続きチベットを取り巻く情勢に注意を払っていたのである。

ここで、第一次探検中のバタンで書かれた日記「第参号」を見てみたい。中でも「八月二十五日 寺本君所蔵の「蔵印邊務録 二卷」を見る³⁹⁷」と書かれた後、18ページ続く漢文の書き写しに注目したい。「寺本君」つまりダルツェンドから合流した寺本婉雅から見せてもらった「蔵印邊務録」の内容を「第参号」に書き写したものと考えられる。

寺本の日記を取めた『蔵蒙旅日記』によれば、日本から上海に渡った寺本は、領事館書記生深沢暹³⁹⁸を介して文廷式(1856-1904)³⁹⁹と通じたという。そして能海と合流すべく北京からダルツェンドへの移動時に立ち寄った上海で、当時日本領事館に身を寄せていた文廷式から同書が送られたとある⁴⁰⁰。この寺本が譲り受けた本こそ、能海が書き写した「蔵印邊務録」だと考えられる。本の由来から見れば、少なくとも中国の知識人からチベットに入ろうとする日本人にチベット辺境に関する情報が提供されていたと捉えることができるだろう。

³⁹⁶ 『著作集 第6巻』 p90-91。

³⁹⁷ 『著作集 第5巻』 p55。

³⁹⁸ 深沢暹(1876-1944)は、南京、上海、奉天、吉林などでの外交官勤務を経て、後に中東海林採木公司理事長などを務めた(東亜同文会編, 前掲書 p1052-1061)。

³⁹⁹ ちなみに、寺本と文廷式が直接会った時の筆談は寺本の日記に残されている。しかし話題は終始日中仏教談で、同書が送られたことやそれに対する寺本の反応は日記からは確認できない。また文廷式の日記に寺本に関する言及がないかと探しているが現在のところ見つかっていない。

⁴⁰⁰ 横地, 前掲書 p53。

ではこの『蔵印辺務録』は、一体どのような本なのか。同書には、中国とイギリスとの間で「中英蔵印条約」(1890)が締結されるまでの間の交渉期間に、中国側代表の駐蔵大臣升泰⁴⁰¹が中央政府へ提出した上奏と、海関税務司から届いた電報が収録されている。当時貿易赤字の解消のためインドで栽培した茶をチベットに売り込もうと考えたイギリスは、シッキムやブータンにヒマラヤ諸国に進出していった。加えて1875年ビルマから雲南に向かおうとしていたイギリス調査探検隊の通訳マーガリーが殺害されたことを受けて締結された芝罘(煙台)条約により、イギリス調査探検隊のチベットの通過が承認された。こうした中、ロシアの南下がチベットに及ぶことを恐れたイギリスがラサヘマコーレー使節団を派遣しようすると、芝罘条約にも反対していたチベットは、イギリス人を阻みチベットを防衛するため行動に移した。1886年シッキムとチベットの境界に位置するリントウ山に、チベット側が出兵して検問所を設け全ての往来を遮断し、砲台を設置した。イギリスは境界を越えてシッキム側を侵犯したと捉え、1888年進軍しチベット兵を撃破した。この善後処理として中国とイギリスとの間で締結されたのが「中英蔵印条約」で、この条約によりシッキムはイギリスの保護下に入り、シッキムとチベットの境界が画定された⁴⁰²。両軍衝突後、新たに駐蔵大臣として着任し現地で調査や締結交渉にあたった升泰は、チベットの辺境で戦後状況や交渉過程を中央政府へ報告したが、それが『蔵印辺務録』に収録されている。

「第参号」中の『蔵印辺務録』引用箇所		
執筆日	典拠元	文章の種類
8月25日	巻2.5	電報(光緒15.11.24)
	巻1.5-6	上奏(光緒14.8.18)
	巻1.7-8	上奏(光緒14.9.10)
	巻1.11	上奏(光緒14.9.10)
9月9日	巻1.11	上奏(光緒14.9.30)
	巻1.40	上奏(光緒16.4.1)
	巻1.30	上奏(光緒15.8.20)
	巻1.44	上奏(光緒16.5.22)
	巻2.7	電報(光緒16.1.17)

「第参号」と『蔵印辺務録』をもとに筆者作成。

では、この『蔵印辺務録』から能海はどのような内容を書き写したのか。北京への報告が収録された上巻と、電報が収録される下巻から構成される『蔵印辺務録』を、能海は8月25日と9月9日に書き写している。能海が書き写した箇所と『蔵印辺務録』を照合したところ、典拠先が9カ所ある。典拠元を表にまとめると左のようになる。

では、この『蔵印辺務録』から能海はどのような内容を書き写したのか。北京への報告が収録された上巻と、電報が収録される下巻から構成される『蔵印辺務録』を、能海は8月25日と9月9日に書き写している。能海が書き写した箇所と『蔵印辺務録』を照合したところ、典拠先が9カ所ある。典拠元を表にまとめると左のようになる。

表からも分かる通り、9箇所の典拠元のうち、第二巻からは2カ所書き抜いている。それら

⁴⁰¹ 升泰 (?-1892) 蒙古正黄旗人。卓特氏、字は竹珊。按察使、布政使などを歴任し、光緒7年(1881)イリ参贊大臣、1884年ウルムチ都統を経て、1887年駐蔵幫弁大臣となる。翌年駐蔵大臣としてイギリスとの交渉にあたり1890年「中英會議蔵印条約」を締結した(李華興編『近代中国百年史辞典』浙江人民出版社1987年p142)。

⁴⁰² 当時のイギリスのヒマラヤ地域進出とチベットの関係については、平野、前掲書p225-260を参照し、中英蔵印条約については朱昭華「蔵錫辺界糾紛与英国兩次侵蔵戦争」(『歴史檔案』2013年第一期p96-104)を参照した。

は、光緒十五（1899）年と十六年正月付の電報内に示された条約草案だった。しかし光緒十六（1890）年二月に締結された肝心の条約正文については書き写しておらず、条約草案が書き写された箇所末尾に「其後数回訂議あり」とだけあることから、条約自体に関心があったと断言することは難しいと思われる。

一方、他の書き写した典拠先は全て第一巻に収録された現地から北京にあてた報告の一部に当たる。これらを内容に応じて大別すると、現地の様子、英露二国の動向、そしてシッキムからチベット高原まで抜ける行程の三つに分けられる。中でも注目したいのは、前の二つである。まずイギリスやロシアの動向については、光緒十六年の上奏がページを割いて引かれている。

奴才此次在印、始知俄人謀襲印度志念甚堅、英人朝夕提防、是以印督終年駐守新拉、其地与克什米尔相連、乃防俄人重鎮、本年印度送見新聞紙、知俄人分三起遊歷西藏、英人甚慮俄人先至拉薩、恐将来俄人假道藏地、搗印界之東北、每々形諸於口、意謂駐藏大臣必宜力阻俄人、不令行入藏界、始司謂与英国真有睦誼、而英人又極思派人到藏遊歷、藉以探俄人消息⁴⁰³

升泰がイギリスを介して知ったロシアの動向を伝える箇所を書き写していることが分かる。まさに『蔵印辺務録』を通じて、イギリスとロシアの二つの大国がチベットに近づかんとしている状況を書き写していたのである。

次にチベット人の様子について書きうつした箇所を見たい。先述したように、イギリスの探検隊のチベット通過を認める芝罘条約やマコーレー使節団派遣にチベットは断固として反対した。しかしチベットはリントウ山でイギリス軍に敗北を喫する。その後のチベット人の様子を能海は書き写している。

十四年四月十三日蔵番戦敗後兵士無鬪志^(ママ)・・・三大寺僧衆、以国教爲名、共立誓詞、云

⁴⁰³ 『著作集 第5巻』 p71-72。概要は次の通り。「私はこのたびインドで初めてロシア人がインドを襲撃する意思が強いことを知りました。イギリス人は朝晩用心し、インド総督は通年新拉到に駐在しています。これはカシミールと繋がっており、ロシア人の軍事的要地を防ぐためです。今年インドから送られた新聞を読みました。ロシア人は三手に別れてチベットを遊歴し、イギリス人はロシア人が先にラサに到達するのではとても心配しております。恐らく将来ロシア人はチベットへの道を借りてインド境界の東北を攪乱するでしょう。それぞれに情勢は語られますが、つまりは駐藏大臣が必ずロシア人を阻むことに務め、チベットに入れないようにしろということです。そうして初めてイギリスと本当の親睦と友誼を持っていると言えるでしょう、イギリス人は人をチベットに送って、ロシア人の消息を探るでしょうと」。

蔵地男女、不願与洋人共生於天地之間、此後蔵中無論如何、不得有違此誓⁴⁰⁴

敬密陳者、奴才於八月二十九日、接得蔵番失利之信^(ママ)・・・八月二十日戦敗之後・・・連日以來、揀派三大寺喇嘛僧衆、前往帕隘防堵、委員等百計開導、第穆呼因克因無法阻止、又接辺報、前月戦争、被槍斃死者五六^(ママ)百人、被驅逐落水者数百人。蔵番各路士兵共一万四千有零、茲聞収集敗殘僅五六千人。其余概行逃散⁴⁰⁵

イギリスとロシアの大国が近づかんとするチベットで暮らす人々の様子を伝える箇所が書き写されている。イギリスとの戦いに敗北したチベット兵は闘志を失い、僧侶たちは「洋人」が入ってくることを強く拒み続けている——能海は『蔵印辺務録』を読むことで、自分がまだ到達できていないチベットの様子を知ったのである。

ここまで『蔵印辺務録』の書き写しに注目してきた。同書から単に大国の動勢ではなく、南北からにじりよる近代的国際秩序の波がぶつかり合う焦点に巻き込まれた人々や抵抗を続ける僧侶たちに関する記述を書き写していたことが分かった。現地の様子を伝える上奏文が収録された『蔵印辺務録』は、大国間の衝突に現地の仏教徒たちが容易に巻き込まれてしまうことを具体的に能海に示したと言えるだろう。仏教徒の団結を呼びかけていた能海にとってまだ見ぬチベット本土の仏教徒たちは、関心の対象であったに違いない。また戦禍に巻き込まれることで、信仰という営みさえもなくなってしまうという危惧をも抱いたかもしれない。

「第参号」ほどはまとまっていないものの、新聞記事の書き写しなどから、第三次探検に出るまで能海はチベットを取り巻く国際情勢について情報を集め続けたことが分かる。中には、チベットがロシアに使者を派遣したことに言及し、李鴻章が送ったという報道に対して否定的な見解を述べ、今後引き続きチベットに対して注意を払うべきだと呼びかける書

⁴⁰⁴ 『著作集 第5巻』p57-58。概要は次の通り。「十四年四月十三日敗戦後チベットの兵士から闘志が無くなってしまった。…三大寺の僧侶たちは国教という名のもとに、ともに誓いを立てた。曰くチベットの男女は、洋人と天地の間に共生したくない。今後チベットがどうなるうとも、この誓いに従わなくてはならないと」。

⁴⁰⁵ 『著作集 第5巻』p58-59 概要は次の通り。「秘密に報告します。私は八月二十九日にチベット人が負けた知らせを受けました。…は八月二十日敗戦の後…連日三大寺ラマ僧たちが道を塞いでいる所に委員を送りあらゆる説得を試みた。ティバフトクトゥは阻止できず、また辺疆からの知らせによれば、先月の戦いで大砲に撃たれて5,600人が死に、落水したものは数百人という。チベットの各道に配備した兵は、全1万4千人で、ここで収集した限りでは残りは5,6000人だという。その他は逃げた…(三大寺の僧兵云々)」。

簡を寺本に送っている⁴⁰⁶。日本で再度チベット入りを狙っていた寺本と探検中の能海との間で、チベットに関する情報を共有する関係性が維持されていたことは興味深い。そして能海が情報を得ることができたのは、第三章の最後に述べたように、重慶に再滞在した際に井戸川辰三と原田鉄のもとに身を寄せていたという環境面の理由が大きいと思われる。当時使われた「在渝日記」には、上海で刊行されていた『中外日報』や日本の『朝日新聞』、『外交時報』などに掲載されるチベット関係の記事が書き出されている⁴⁰⁷。このようにチベットに関する情報を集め続けた能海は、探検先でありながらチベットをとりまく国際情勢について自らの見解を述べることができた。

以上、本節は探検前と探検中とで、チベットに対して能海が抱いた期待と認識について見てきた。探検前の能海はチベットに対して仏教が盛んだと捉え、思い描いた仏教革新運動を連携しながら共に進める相手として期待した。またチベット仏教が盛んという認識だけでなく、どのような仏教であるかということを経米の研究を通じて知ろうとしていた。ただ、それによって能海のチベットに対する好奇心が満たされたとは考えがたく、むしろそうした断片的な情報はあるものの完全には把握しきれない状況こそが、チベットに対する期待をより大きくしたように思われる。

探検中の認識については経典、チベット及び仏教、国際情勢に分けて見た。実際に経典に触れることで、チベット語という研究上の新たな課題を認識するようになったことが分かった。チベット及び仏教に対しては、第一次探検でチベット仏教が信奉される地域に実際に入ると、かなり厳しい評価をしていた。それは自身が思い描く仏教徒像（新仏教徒）や、連携相手としての期待から、実際のチベット仏教徒はかけ離れていたことと、探検を進めるうえでラマが非協力的だったこと等の不満が背景にあった。しかし第二次探検後に書かれた見聞録では、自身の予想とは異なるチベットを批判するのではなく、実見して関心を持ったことについて伝えようとする書きぶりへと変わっていった。そして探検前に情報を集めた日本において、チベットに関する情報が依然として不足していることを改めて認識し、現地からの情報を伝えようとしたのではないか。また、探検前に欧米のチベット情報にも接していたことを考えると、情報が不足していたと認識したのは日本だけでなく欧米も含まれるだろう。

またチベットを取り巻く国際情勢の先に注目したのは、大国が近づかんとするチベットで戦禍に巻き込まれるチベット人や抵抗を続けるラマ僧の姿だった。もともとチベット探

⁴⁰⁶ 『能海寛遺稿』 p147-148。

⁴⁰⁷ 例えば『中外日報』1900年11月15日付「西藏」30日付「重慶」、『朝日新聞』1900年12月28日付「西藏と露国」、『外交時報』35号1900年12月10日付「西藏の使節到来」がある。またこの頃の日記（11月から1月）には、毎週火曜日に『朝日新聞』が届いていた等の記録があり（『著作集 第4巻』 p276-283）、定期的に日本の情報に触れることができていたことが分かる。

検の必要性を唱えたのは、こうした国際情勢によってチベットにあると言われる「珍書」が紛失する可能性があるからで、実際の探検を通じてチベットに暮らす人々に視線を注ぐようになったことが分かる。能海が団結を望んだことを踏まえると、同じ仏教徒の置かれた状況や信仰という営みもまた関心の対象だったからだと考えられる。団結という直接的な繋がりは叶わなかったものの、能海の中では同じ仏教徒という連帯感を持ち続けたからではないだろうか。

以上のように探検前に抱いたイメージや期待とは大きく異なるチベットを実際に見た能海は、第二次探検と第三次探検の間に滞在した重慶で、一つ計画を構想する。次節では、二度の探検を経て見出した新しいチベットへの接近の方法として「西藏研究倶楽部」を見ることにしたい。

第三節 明治青年僧の探検

本節は、第二次探検後にチベット研究の計画を具体的にまとめた「西藏研究倶楽部」を見る。これは再訪した重慶での記録『在渝日記』内にあり、明治33(1900)年11月4日から翌年2月21日に同地を発つまでの間に書かれたと考えられるが、この計画を誰かに伝えたかどうかは確認できない。しかしこの計画が二度の探検の後に書かれたことと、管見の限り現存資料でこれほど具体的な構想は見つからないことを踏まえると、二度の探検を経験した能海が打ち出したチベット研究として見ることができると筆者は考える。また、それは能海が探検で認識したチベットの実態に応じたものとも言え、チベット認識の変遷を追ってきた本章の最終節に相応しいと考える。「西藏研究倶楽部」は、ここまで見てきたチベットに対する理解、探検を通じて得た知見との連続性に注目する。その上で、探検を通じて能海の中で「探検」の持つ意味が変容していく中で、あるいは実態に即して柔軟に対応する過程で、探検を志した頃から変わらず貫かれたものとは何だったのか考察する。

まず「西藏研究倶楽部」の概要を見ていく。下の写真のうち、右と中央に載せたものを見てみたい。

・ 西藏^(ママ)仏教研究倶楽部

宜しく文部省は留学生を出して研究せしむべし

一 留学生は日本僧侶を出すべし

二 其選定は予に一任すべし

三 留学生は蒙古に二名 青海一名 西藏三名 四川^(ママ)一名北京 印度一名 ニポール一名 日本一名 計十名

経費 一人に付 一年 百二十円 一千二百年

縦続 五か年 六千円

外 経費 一人に付 往復 四百円 計四千円

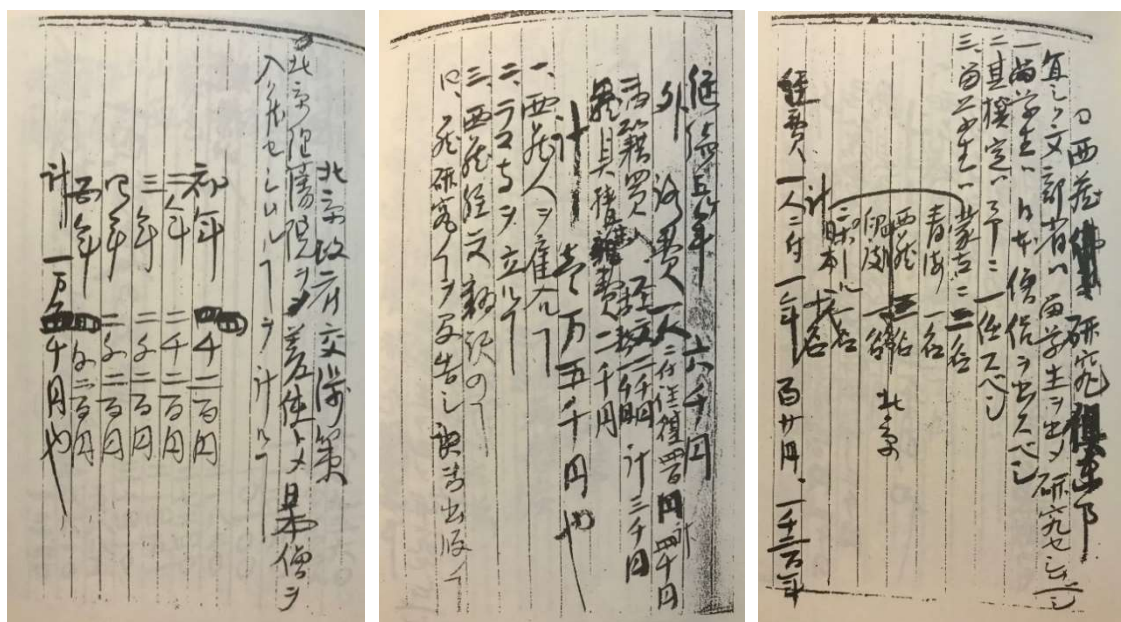
書籍買入 経文 二千円

●●〔書籍?〕 一千元 計 三千元

蔵具●●雑費 二千元

計 一万五千元也

- 一 西藏人を雇入ること
- 二 ラマ寺を立ること
- 三 西藏経文翻訳のこと
- 四 蔵研究のことを報告し翻訳出版のこと⁴⁰⁸



西藏研究倶楽部と北京政府交渉策 (『著作集 第4巻』 p191-193)

以上「西藏研究倶楽部」構想の冒頭2ページを書き出した。まず「西藏研究倶楽部」とは、日本の文部省から日本人僧侶を「留学生」として送り出すという計画だったことが分かる。そしてモンゴル、青海省、チベット、北京（四川）、インド、ネパール、そして日本が派遣先として挙げられている。これら地域へ派遣される僧侶は、「予に一任すべし」と書いているように能海自ら選定することになっている。そして末尾に「経費」とあるように、2ページ目（写真中央）にかけて具体的な五年間の計画の予算が計上されており、その後具体的な事業内容が挙げられている。「一 西藏人を雇入ること」「二 ラマ寺を立ること」「三 西藏経文翻訳のこと」「四 蔵研究のことを報告し訳書出版のこと」の四つである。

この実行されることのなかった「西藏研究倶楽部」とは、簡単に言えば「留学生」派遣計画だと言える。実際にチベットと日本の間で留学生の派遣が行われるのは、明治44(1911)年のことである。明治41(1908)年に中国山西省五台山でダライラマと大谷尊由との間で会

⁴⁰⁸ 『著作集 第4巻』 p191-192。

談が開かれ、留学生交換が約束されたことに基づき、44年にダライラマの側近が一年間日本留学したのが最初だと言われている⁴⁰⁹。そしてその側近の帰国に同伴してラサ留学したのが青木文教である。こうした日本とチベットの関係性を踏まえてみると、能海の留学生派遣計画は、日蔵間で留学生派遣が議題に上る七年前にすでに練られたものだったことが分かる。

次に「西藏研究倶楽部」について、これまでのチベット認識や探検を踏まえてもう一步分析を深めたい。特に、研究対象と事業内容に注目したい。まず、研究対象から見ていく。この計画は日本人僧侶を留学生として送り出すものだと述べたが、その派遣先を見るとチベットの他に、モンゴルをはじめとするチベット仏教徒がいる地域と、チベットと同じくサンスクリット語経典があると言われるネパールが挙げられている。そこで第二節で見た「甘肅論」内のチベットに関する記述を思い出したい。能海は人種、言語、宗教の共通性に注目し、チベット本土に青海、甘肅、四川、雲南、ヒマラヤ諸国などを加え「大西藏国」と呼んだ。そしてこの広大な領域で信奉されるチベット仏教を「大陸的教」と言い、こうした状況を羨ましいと日本の寺本に伝えていた。またモンゴルについては「清代疆域沿革史」で、チベット仏教との歴史的な繋がりについて注目していた。つまり「西藏研究倶楽部」における留学生派遣先は、探検中に能海がチベット、チベット仏教との関係性が深いことを知った地域だったのである。『世界に於ける仏教徒』内のラサを中心とするチベットへのイメージを思い出すと、明らかに能海の中でチベットという概念が拡大していることが分かる。「西藏研究倶楽部」で僧侶たちが派遣れる諸地域は、探検という経験を通じて拡大したチベット概念に基づいたものと言える。

次に事業内容である。先述したように「西藏研究倶楽部」では四つの事業が列挙されていたが、そのうちチベット経典の翻訳から見ていく。この経典の翻訳自体は、第一章でも確認したように、能海がチベット探検を志すきっかけでもあった。また第三章や本章でも見たように、探検中能海は訪れた寺院で必ず経典の有無を尋ね、道中も依然として経典を求め続けていたことが分かる。しかし探検前から求め続けた経典とはサンスクリット語経典であり、チベット語経典ではなかった。本章第二節(2)で確認したように、バタンとダルツェンドでチベット経典に触れた能海は、チベット語を学ぶ必要性を感じるようになった。ちなみにダルツェンド滞在時にキリスト教徒の周徳喜からチベット語を教わり始めている。要するに、能海にとって経典翻訳や経典はかねてより強い関心の対象であり、それは二度の探検を経験した後も変わっていない。しかし、第一次探検で訪れたチベット仏教圏でチベット語経典に触れ、サンスクリット語よりもチベット語こそ研究の必要があると認識するようにな

⁴⁰⁹ Ryosuke Kobayashi. 2019. The exile and diplomacy of the 13th Dalai Lama (1904-1912)-Tibet's encounter with the United States and Japan-. In: Yumiko Ishihama. *The Resurgence of "Buddhist Government" – Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*, 37-68. Osaka: Union Press.

ったのである。「西藏研究倶楽部」でチベット經典の翻訳が事業の一つとして掲げられているのは、チベット語およびチベット經典の研究が必要だという探検中の気づきが反映されていると言える。二度の探検を終えた後の能海にとって、チベットの經典は当面の課題として認識されていたのである。それは明治 34(1901)年元旦に井上円了に宛てた書簡で「今日原文經文の多く発見せられざる間は、西藏經文の考究は、第一位にある必学なる者と愚考仕候⁴¹⁰」とあることから確認できる。

そして事業内容でもう一つ注目したいのが、チベット人を雇い入れるとあることだ。雇い入れたチベット人に一体どのような仕事を依頼するのか等具体的な内容については判然としない。しかしチベット人たちを雇いながら翻訳作業を進めるという仕組みは、大きく捉えれば、共同作業という点で能海が探検前から呼びかけてきた仏教徒との団結と見ることもできるだろう。また、日本人僧侶とチベット人が一緒に翻訳を行うということは、ちょうど本章第一節で見たようなインドから来た僧侶たちと一緒に經典翻訳を進める長安の高僧たちの姿と重なるようにも思える。本章で見てきたように、探検を進めるに伴い、成都の寺院で見られたような仏教徒の交流や通信等の具体的な仏教徒の団結へ向けた動きは成都以降の資料からは確認できないものの、チベット人を雇い入れることを「西藏研究倶楽部」計画に盛り込んでいたことから、かつての高僧たちのような共同で翻訳を進めるという本格的な仏教徒の団結を図る実践的な構想だったと言えるだろう。

ここまで研究対象や事業内容を見てきた「西藏研究倶楽部」だが、その計画名を前掲写真で改めて確認したい。「西藏」の後に何かが消された跡があり、よく見るとそれは「仏教」の二文字であることが窺える。つまり能海は「西藏仏教研究倶楽部」と一度書いたが、「西藏研究倶楽部」へと変更したと考えられるのである。消した理由について説明はないが、第一章でも見たように、チベット探検が社会学や言語学など仏教以外の諸学問に与える影響を探検前から認識していた能海は、「西藏研究倶楽部」でも同じく他学問への影響を意識していたのではないだろうか。チベットで日本の僧侶を五年間も滞在させることが諸学問にもたらす意義を意識した能海は、その可能性を示すために「仏教」をあえて消したのではないか。それは、經典という「かつての仏教」に対する関心だけでなく、「現在のチベット仏教」あるいはそれを信奉する人々をも見つめていた能海のまなざしとも関わるだろう。探検を通じてチベットについてまだ十分に知られていないことを実感した能海は、そこに長期滞在することの意義をより強く意識したであろうし、そうした行為が決して仏教学内での貢献で収まるものではないことは十分に理解していたと思われる。「仏教」が消された痕跡からは、仏教教義や仏教史、さらにはチベットと周辺地域との交渉史などのチベット仏教圏、能海の表現を借りれば「大西藏国」への関心が強まっていったことが窺えるのである。

最後に「西藏研究倶楽部」構想に続いて書かれた「北京政府交渉策」(前掲写真左)も見ておきたい。これは、日本人僧侶のチベット入りを認めるよう理藩院へ交渉することを提案

⁴¹⁰ 金城町歴史民俗資料所蔵。

したものである⁴¹¹。「西藏研究倶楽部」冒頭に、日本の文部省から僧侶は派遣される旨が書かれていたことと合わせて考えると、この構想は日中両政府の許可を得たうえで行われるものとして設定されていたことが分かる。第二次探検と「西藏研究倶楽部」を書いた後出発した第三次探検で、護照も使わず独力でチベット入りを目指した能海自身の行動とは対照的である。能海は探検を通じて、チベットに近づき、チベットについて研究するには、個人で活動するのではなく、政府の援助の下堂々と言う必要があると考えたのではないか。言い換えれば、能海にとって重要なことは、どのようにしたらチベットで経典を調べることができるかということだったのだろう。

以上、ここまで研究対象と事業内容を中心に「西藏研究倶楽部」を見てきた。日本人僧侶を留学生として派遣するこの計画には、能海が探検で得た多くの知見が反映されていた。例えば「甘肅論」で「大西藏国」と呼んだような広大なチベット仏教圏の各地に僧侶が派遣される計画であったり、翻訳する経典はチベットの経典であったりなどである。またチベット人を雇い入れるという事業内容からは、仏教徒の団結という仏教革新プランにおいて重視されていたものが様式を変えて継承されているようにも読めた。つまり二度の探検を行った後構想された「西藏研究倶楽部」とは、探検を通じて能海が認識したチベットの実態に応じて、チベット研究のあり方を模索した結果と言えるだろう。ただ、その中でも、種類は変わったものの経典を翻訳するということは探検前から一貫して求め続けたと見えることができるだろう。

おわりに

本章は能海の思想的変容に注目した。特に探検することでもたらされた認識や目的の変化を探ろうとした。チベットに加え、探検すべき仏教国として認識されていた中国仏教を対象に、探検前と探検中の認識をそれぞれ捉え、探検という経験がその後のチベットに対する接近方法へ与えた影響を見ようとした。

探検前の能海は中国仏教に対して、仏教革新運動とともに展開する「好友」として、また現代仏教に足りない「精気」を与える仏教濫觴の地として捉えていた。第一次探検で訪れた成都では日中仏教徒の交流を約束し、第二次探検で立ち寄った西安でも寺院を巡った。しかし中国仏教の現状を「振るわない」と述べたように、「精気」を持つ中国仏教はすっかり過去のものとなり、能海を満たすものではなかったようである。

一方チベットに対しては、歴史的考究や教義面の研究を深めるための経典のある場所、あるいは団結相手である熱心な仏教徒のいる場所という認識を持っていた。探検当初は自身の想像していた姿と異なる実態を否定し批判したが、第二次探検を終えた頃には、異なることに対して自分なりの考察や感想を伝えるようになり、むしろチベットの実態が十分に理解されていないことを認識するようになったと思われる。また実際に経典に触れたことで、

⁴¹¹ 『著作集 第4巻』 p193。

チベット語の研究という新たな課題を見つけた。

そして二度の探検を経験した能海は「西藏研究倶楽部」を構想する。この計画では、探検前から重視してきた経典翻訳が事業として継承されているものの、探検で得た多くの知見が反映されていた。まさに探検を通じて能海が認識したチベットの実態に応じて、チベット研究のあり方を模索した結果だと言えるだろう。

以上、本章の内容を振り返ると、探検前の能海が中国やチベット対して持っていた認識は、実際のところほとんどその通りではなかった。簡潔に「振るわない」と書いたり、怒りとも読める厳しい評価を連ねたりするなど、中国仏教とチベット仏教に対する能海の受け止め方はそれぞれ異なっていた。しかしその評価の根底には、「新仏教」という理想の仏教の姿があり、それにはどの仏教も「新仏教」に向かって進化するものという前提があったように思われる。このような独りよがりな価値観に由来する能海の仏教革新プランは、探検という実態を実見する経験を通じて、修正を余儀なくされたと考えられる。二度の探検の後に構想された「西藏研究倶楽部」は、研究対象や事業内容などから探検中の気づきが反映され、また仏教徒との団結という探検前より唱えていたことを実現するような内容だった。つまり探検を通じて能海が認識したチベットの実態に応じて、チベット研究のあり方を模索した形跡が窺えるのだ。

また探検を通じて能海は、そもそもチベットに対する認識が十分ではないことを実感したと思われる。それは、日本国内はもちろんのこと、もともと探検前から国内由来の情報ではなく欧米のチベット研究からチベット情報を獲得していたことを考えると、欧米の研究も例外ではなかったのではないか。二度の探検を経た能海が「西藏研究倶楽部」で、「継続五カ年」(前掲写真中央)と明記し、五年間の予算をあげているのは、単に経典研究に要する時間と見ることもできる。しかし、チベットを理解するには、それぐらい月日が必要と考えたと見ることもできるだろう。チベット仏教圏に滞在させ、その具体的な雇用内容は不明だがチベット人を雇いながら、五年かけて行われる翻訳作業は、まさにチベットの中に身を置きチベットをより深く知っていくことでもあったのかもしれない。

最後に本章を通じて、能海が探検前から一貫して求め続けた経典翻訳について述べたい。言うまでもなく経典の翻訳自体は、能海が活発だと言った往昔の仏教徒も行ってきた古くからある営みである。ただ能海の場合は別の意味が付与されていた。まず第一章で見たように、能海が「自動的東洋学の必要」と表現したように、東洋学という場で東洋人が研究の主体を掴むべきだと考えていたことが明らかとなったことを思い出したい。能海が探検に出るまで携わったという経緯会の主筆古河老川は、歴史や教義発達の過程の研究の必要性を唱え、仏教に対して批判的に研究すべきと呼びかけた。また本章第二節で見たように、友人の渡邊海旭は、欧米の東洋学について教義に関する研究が不十分と指摘し、経典原本に基づいた詳細な研究が必要だと考えていた。古河や渡邊は、仏教革新運動や欧米の東洋学に対する反応として経典に注目したのである。そして彼らと能海の関係性を踏まえてまとめると、経典を研究するという営みに、東洋人が研究という場で主体性を掴みとるという意味が付

与されたと言えるだろう。この新たに意味が付与された経典研究に対して、能海は探検という経験を加えて「西藏研究倶楽部」を構想した。チベットに接近しようとした能海が考えた新しいチベット研究のスタイルだったと言えるのではないだろうか。

終章

ここまで論じた内容を踏まえて能海寛が行った探検について改めて考えてみたい。能海寛の探検を問い直す本稿では、以下二つの課題を設定していた。まず従来等閑視されてきた能海の探検から時代性を引き出すことが一つ、そして殖民とともに使われていた探検の概念が、学術という新しいあり方を獲得するという近代日本における探検の系譜とは異なる探検像を示すことだった。本章では、これら課題にそって能海の探検についての考察を述べる。

まず時代性についてである。日本仏教界で仏教の革新運動が展開された時期に、能海は『世界に於ける仏教徒』で新仏教徒が行うべき準備として仏教国を探検することを提唱した。中でもチベットに注目するようになったのは、海外宣教会で欧米の仏教徒情報に触れたことを機に、海外布教のために経典の英訳に着手した際、音訳された漢訳経典ではなくより釈迦が説いた言葉に近いと言われるサンスクリット語経典があると考えたからだった。サンスクリット語の習得と原本を求めた能海は、言語学や宗教学など欧米の東洋学と出会い、そこで大乘非仏説が支持されていることを知った。能海がチベット探検を目指すようになった過程は、仏教革新運動や学問などの領域で日本仏教の変革が求められた時期であり、またすでに「仏教の国際化の時代⁴¹²」と指摘されているように、日本仏教界が国外に視線を向け始めた頃でもあった。能海はこうした中で、アジアのみならず欧米の仏教事情や学術界の様子を知っていった。そして探検という行為、チベットへ行くということに対して、仏教革新運動だけでなく学問上の意義も見出すようになっていった。

そして明治 31(1898)年上海に上陸した。最初に目指した四川省までの過程では、在留日本人を訪ねたり、日本に関心を持つ中国人から助けを借りたりしながら歩を進めていた。日清戦争後の日中間では、実業家の進出、留学生や教師の派遣、受け入れが行われるなど、双方間の人的往来が活発になり、また互いへの関心が高まっていた。こうした戦後の日中関係の変容、活性化は、人脈や情報という点で中国大陸の東方から西方へと向かう能海にとって追い風となった。

また日清戦争後の日本政府は、インドから北上するイギリスと南下するロシアの動きを注視し成田安輝をチベットへ送り込もうとした。能海は成田とチベット入りを目指す時期が重なることで、紹介状や護照を手に入れたりするなど便宜を受けることができた。しかし国際的に危機的状況に陥っていたチベットでは、強い警戒心を持っており、護照を持ち日本人としてチベットに入ろうとした能海が受け入れられることはなかった。以後、能海は日本人という身分を隠して探検を進めるようになる。

以上のように、岐路に立たされた日本仏教界で生まれた探検は、欧米から流入する諸概念や学問、また日清戦争後の東アジア情勢やグレートゲームの影響を受けながら展開された

⁴¹² 中西・吉永、前掲書 p5。

のである。能海のチベット探検は、チベット以外の諸外国の情勢とも絡み合いながら実行されたのであり、決して日本やチベットだけで完結するようなものではなかったのである。

このように多様な影響を受けながら実行された探検だが、もともとチベット探検を提唱した当初能海は仏教徒が実行することに意義、特異性を見出していた。『世界に於ける仏教徒』で探検を呼びかけた際、「今日社会の流行語一大風潮物」の探検を「仏教徒の業に移し得べき」と言い⁴¹³、歴史的考究と仏教徒の団結の二つの意義を挙げていた。それは仏教を宇内一統教とすることを目指す革新プランにおいて、宗教学や哲学などの新しい学問と並んで、信仰を篤くするために新仏教徒がとるべき手段として探検を捉えていたからだった。能海は仏教国を探検するという行為自体に、明確に仏教革新上の意義を見出していたのである。

当時の国内の探検に注目した研究によれば、福島安正と郡司忠成の二人の日本人の探検によって、従来殖民とともに使われていた探検の概念の変容が始まり、明治43(1910)年白瀬矗が南極探検に挑む頃には、探検という言葉は学術という新しいあり方を獲得していたと言われている。また能海が探検に出た日清戦争後に関しては、国威の発揚の言説とともに学術探検を振興する声が上がりはじめた時期だとも説明されている⁴¹⁴。このような系譜を見ると、福島や郡司の探検を熱心に新聞記事で追い、自身が探検に出た理由の一つとして戦勝によって「感動」した心情を挙げるなど、能海にも当てはまる部分が多い。またチベットに行くことで社会学や地理学などに与える影響も認識していたように、チベットを探検することの学術的意義も理解していた。

ただ探検という行為に仏教革新上の意義を見出していた宗教的側面を踏まえると、能海の言うところの仏教徒の探検とは、探検という当時の流行物に、仏教革新運動や学術への対応といった仏教界の課題の解決を盛り込んだものだったことは重要である。能海のチベット探検を大乘非仏説の反証として釈迦の言葉に近い経典を求めてチベットへ行った行為とみると、それはまさに「仏教本来の姿を求めての行動⁴¹⁵」と映るが、その背景や目的などを見ていくと、同時代的課題を欲張りなほどに背負ったものだったことが分かるのである。

このような能海の探検における宗教的側面は、探検中の対応からも確認できる。能海は二度の探検を通じて、チベット仏教や中国仏教、現地の風俗などを実見したことで、チベット概念の広がりやチベット経典の重要性、またチベットに対する情報が十分でないことを認識し、その知見を「西藏研究倶楽部」に反映させた。この計画でチベット人を雇い入れることが事業内容として盛り込まれていることを、チベット人と一緒に経典翻訳を進めると広く捉えるなら、仏教徒の探検に見出していた歴史的考究と仏教徒の団結が継承されていると見ることもできるだろう。探検前より掲げていた探検の二つの意義が、探検という経験を

⁴¹³ 『世界に於ける仏教徒』 p54。

⁴¹⁴ 鈴木, 前掲書。

⁴¹⁵ 藤井, 前掲論文。

通じて形を変えながら模索され続けたと捉えることも可能だろう。そう考えた場合、探検中の能海は自身の理想と実態の衝突及び調和を繰り返しながら、仏教革新プランという理想に向けた手段を更新し続けていったと言えるのではないか。

また、歴史的考究と仏教徒の団結を求め続けた能海は、探検を通じて過去と現在両方の仏教を見つめ続けたとも言えるだろう。例えば遺跡や古文書を発見したスウェン・ヘディンやオーレル・スタインに代表されるような学術探検と能海の探検の相違点を挙げるなら、交流や通信を提案したり、翻訳事業への参加や長期の留学を構想したりするなど、眼前の仏教あるいは仏教徒をも視界に入れ続けたことであろう。

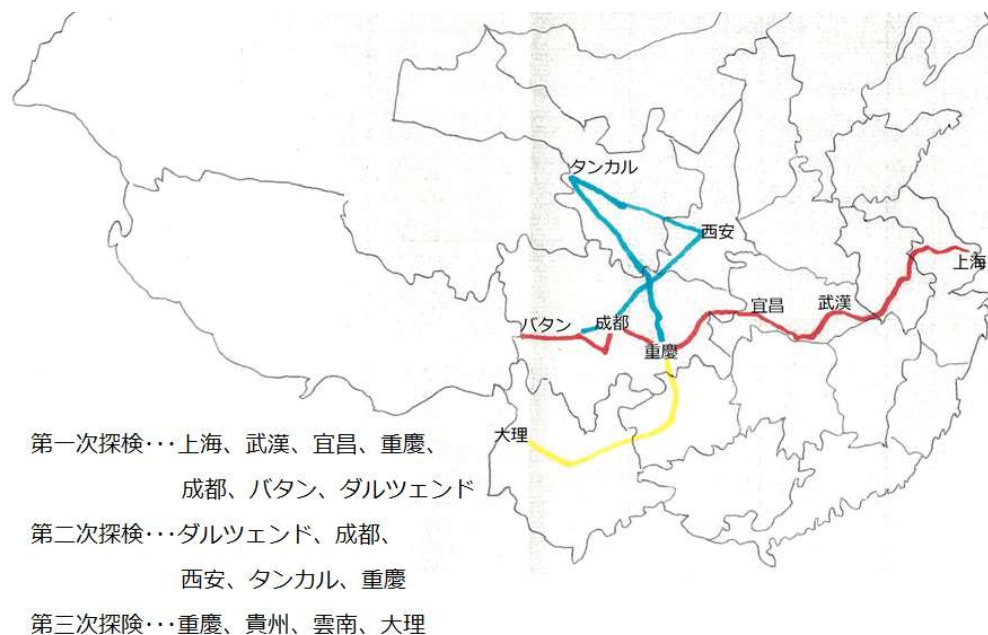
そしてこのように能海が過去と現在の両方の仏教を見つめ続けたのは、岐路に立たされた仏教界で学問や革新運動に関心を抱いた仏教青年だったからであろう。さらに自身が仏教徒だという属性は、国や文化が違った仏教徒に対しても連帯感とも呼べる感情を生みだしたと思われる。冒険や探検を日本が取り入れる際に付随して受容したイデオロギーとして、高嶋氏が指摘するような帝国主義やナショナリズムなど諸概念⁴¹⁶に加え、能海の探検では仏教徒という属性も大きな作用をもたらし、まなざしや思考へ影響を及ぼしていったのではないだろうか。

以上のように、本稿は主に探検を志した時期から消息が途絶える第三次探検に出る直前までの期間を取り上げて能海の探検を追ってきた。これが可能となったのは、何よりも各時期の資料が豊富に残されていたからである。本稿はこれら資料を積極的に使おうとしてきたが、使えなかったものもかなりある。特に、中国で手に入れた書籍や冊子などはまだ手付かずのものもある。例えば「天足会」による小冊子「莫包脚歌」は、1895年に西洋人女性たちが重慶で設立した纏足解放運動を目的とした会のもので、能海は重慶を訪れた際に手に入れ日本に送ったものと思われる。この頃同地での宣教師や欧米人の活動などを書き留めた書簡などもある。これらは日本で禁酒論や廢娼論など社会上仏教的実践を呼びかけていた仏教青年が、中国で欧米人が行う社会運動をどのように見ていたかを示す資料としても有用だと思われる。このように、チベットへ行く途上で書かれた能海の資料は、革新的仏教青年の異国での見聞を書き留めた資料としても参照することができ、チベット以外の様々な研究領域における活用の可能性を秘めた資料なのである。今後は資料の更なる精査を進め、より広い領域で活用できるように資料の公開を行う必要があり、能海寛の人物研究を深化させていくことともに今後の課題としたい。

⁴¹⁶ 鈴木上掲書, p 125。

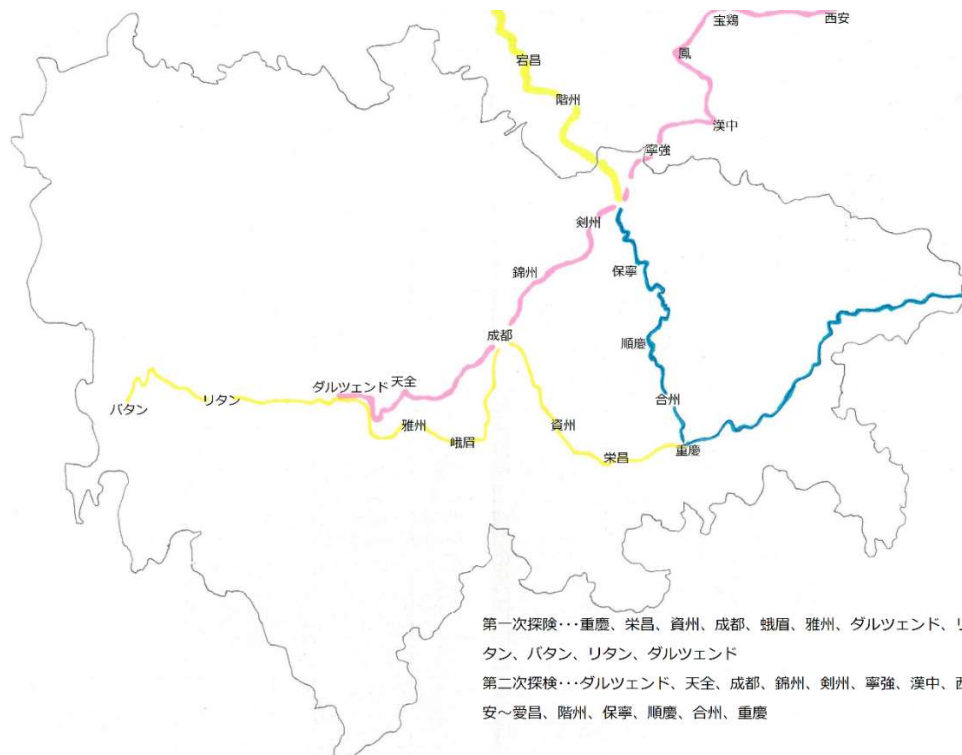
付録資料

1 探検行程図



譚其驥主編『中国歴史地図集 第八巻』中国地図出版社をもとに、筆者作成。

四川省における第一次、第二次探検の行程

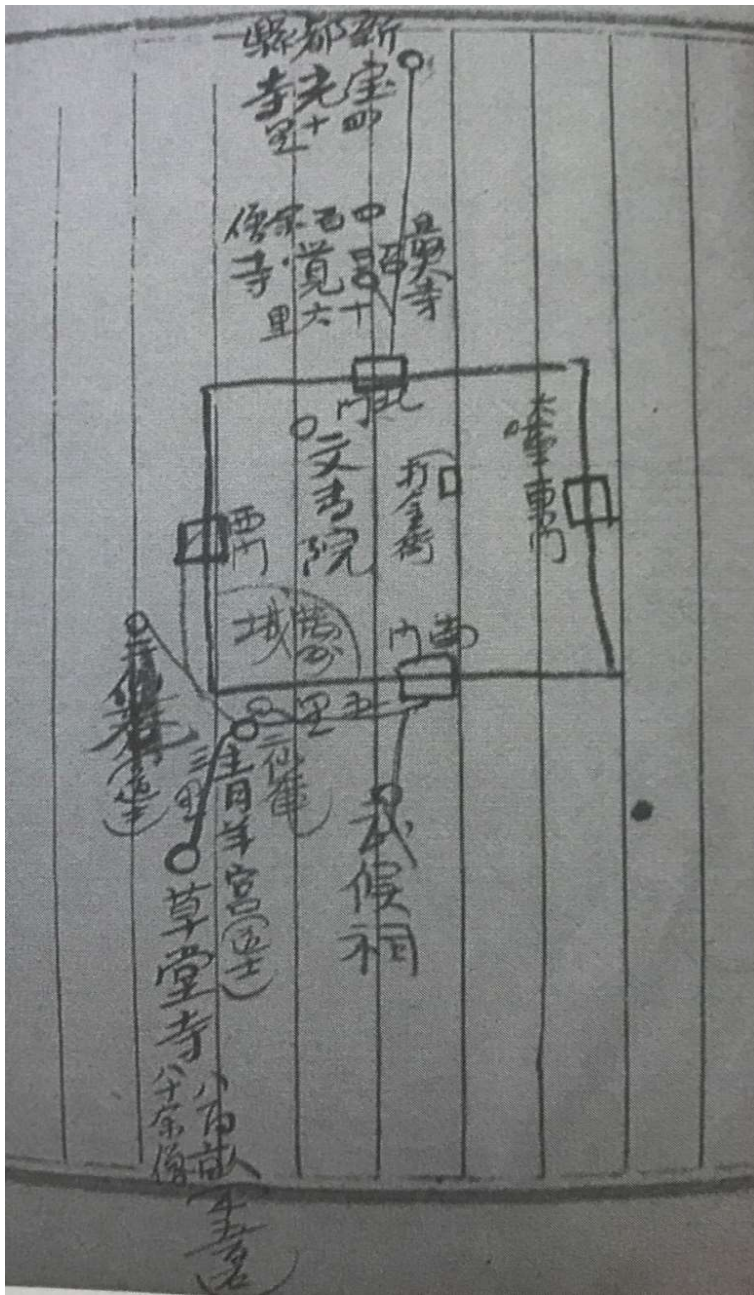


譚其驥主編『中国歴史地図集 第八巻』中国地図出版社をもとに、筆者作成。

2 壮行会参加者リスト

明治30年(1897)11月9日 能海寛壮行会 参加者一覧 @宝亭		
安藤弘	1869-1942	愛知県出身。哲学館卒業。経緯会に加わり仏教清徒同志会創立者の一人。
境野哲海 (哲・黄洋)	1871-1933	宮城県出身。1889年哲学館入学。94年経緯会結成に加わる。古河老川、高嶋米峰等と大正の新仏教運動の主唱者の一人とされる。
田中治六	1869- 没年不詳	長野県出身。1887年に上京し91年に哲学館卒業。中等・高等教育に晩年まで携わる一方、99年仏教清徒同志会の創設者の一人。
三石賤夫 三島中州		
梶宝順	1864-1920	1885年福田行誠・釈雲照などと共に能潤会を結成して『能潤会雑誌』を刊行。89年古河老川が主筆を務めた経緯会の機関誌『仏教』では経営にあたる。
渡邊海旭	1872-1933	東京都出身。浄土宗教学校卒業後、1899年仏教清徒同志会参加。翌年ストラスブルク大学へ留学、帰国後宗教大学(現大正大学)、東洋大学教授を歴任。『大正新脩大藏経』を監修。
海野詮教 (土屋詮教)	1872-1956	福島県出身。1896年早稲田大学文科卒業後、宗余乗研鑽のため京都留学。同時に文学寮教授を一年間務める。99年東京朝日新聞記者となるが病気のため辞職。曹洞宗中学などで教鞭をとった後、早稲田大学講師となり仏教青年会監督に就任。
★梅原融 (中臣融)	1865-1907	普通教校、慶応義塾の同窓。反省会メンバーでもある。1894年文学寮教授となり後に東京に日華学堂、簡易商業夜学校、中央商業学校を創設。清国学生や実業家の教育に尽力。
★桜井義肇	1868-1926	反省会を結成し『反省会雑誌』の編輯を務めた。上京後東京の高輪仏教大学で教鞭をとり仏教改革や国際化に取り組もうとした。
秦敏之 (秦千代丸か?)	1870-?	普通教校出身。シンガーミシン裁縫女学院を設立する傍ら輸出商を営んだ。
杉村広太郎 (杉村楚人冠)	1872-1945	和歌山中学の同窓古河勇通じて仏教青年協会、東京仏教青年会、大日本仏教青年会、経緯会に加わる。1903年朝日新聞入社後は『アサヒグラフ』を創刊した。
近角常観	1870-1941	滋賀県出身。1889年東本願寺留学生として上京、共立学校、第一高等学校に入る。1894年大日本仏教青年会結成時幹事に就任。95年東京帝国大学文科哲学科に入学98年卒業。後に東京本郷の学生寮で布教教化に専念し学生や青年知識人を感化する。『新仏教』には積極的に関与することはなかったが、会員との交流はあった。
★宝閣善教	1868-1939	普通教校で反省会メンバーの一員。後東大史学科学生となる。1899年から中央商業学校の主監、二代目校長として30年勤務した。
古田復之		
★高嶋大円 (米峰)	1875-1949	新潟県出身。普通教校で反省会に加わる。93年哲学館に入学。99年境野黄洋、田中治六、安藤弘らと仏教清徒同志会を結成。
『著作集 第3巻』p275-276、新佛教研究会編「近代日本における知識人宗教運動の言説空間-『新佛教』の思想史・文化史的研究」(2012年)、大谷栄一、吉永進一、近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもう一つの近代』(法蔵館 2016年)をもとに筆者作成。		

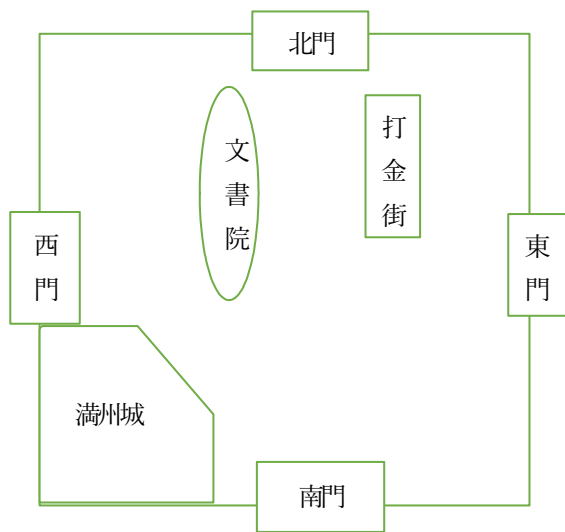
3 成都地図



能海が作成した成都の地図（『著作集 第15巻』p181）

・宝光寺
(新都県 四十里)

・昭覺寺
(最大寺 四百余僧
十六里)



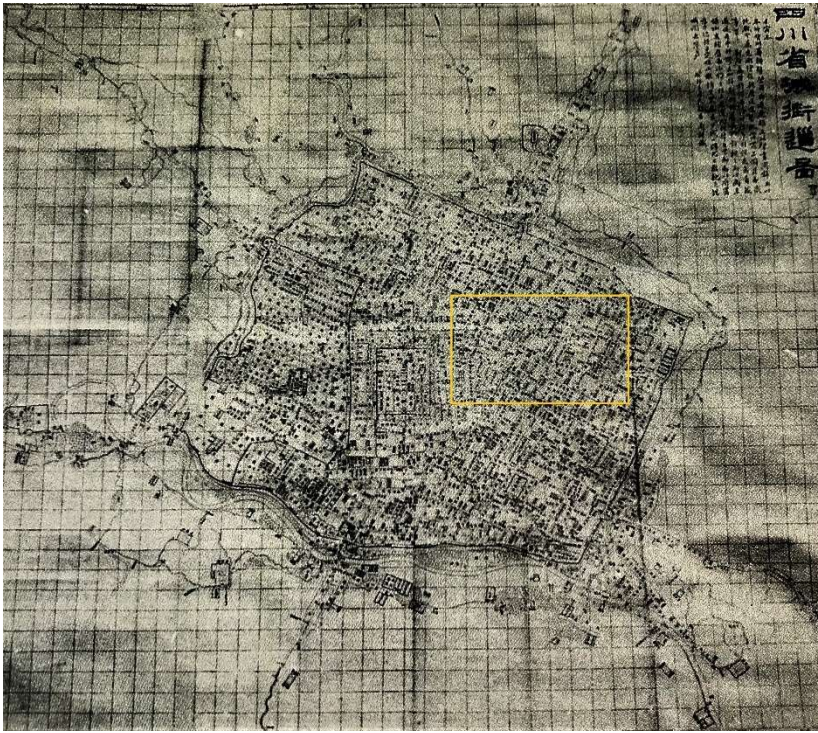
・二仙庵 (五里)

・青羊宮 (道士)

・武侯祠

・草堂寺
(八百畝 (千五百里)
八十余僧)

前掲資料をもとに筆者作成。



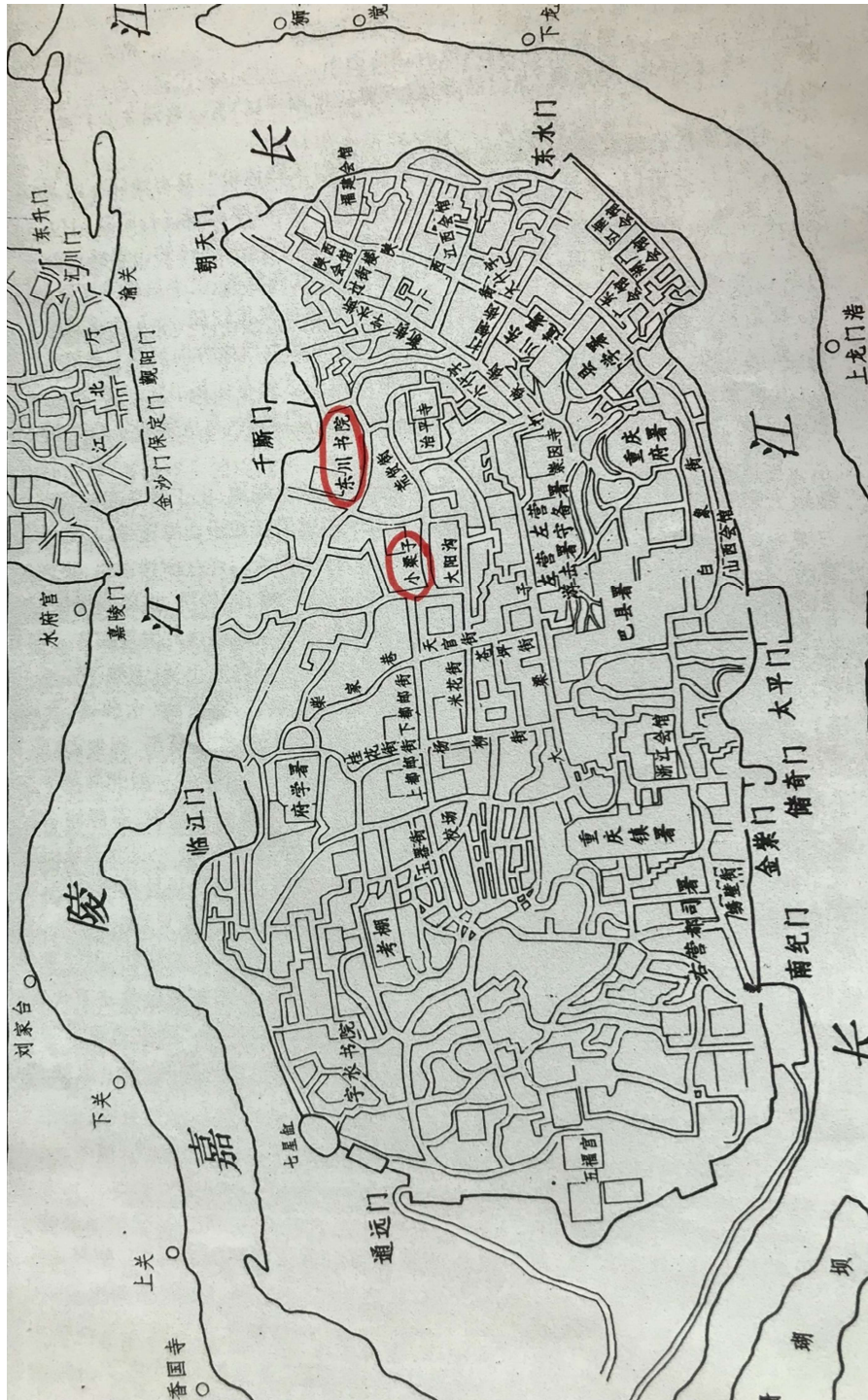
上掲地図内の枠部分を拡大したものが、下の写真である。



呂蘭『四川省城街道図』光緒 29(1903)年

(曹婉如ほか編『中国古代地図集 清代』(文物出版社 1990 年) No203,206 より)

4 重慶城內地圖



(重慶市地方志編纂委員會編輯室『重慶市志(第一卷)總術·大事記·地理志·人口志』(四川大學出版社1992年) p729)

「甘肅論」

『甘肅論』は、25.8×60.1 cmの和紙 10 枚に書かれた第二次探検で訪れた甘肅省に関する見聞録である。影印版は『能海寛著作集 第二巻』p297-334 に収録され、原稿は金城町歴史民俗資料館に保管されている。本稿第四章でも紹介した通り、書簡で伝えきれない見聞を改めて書いたものと考えられ、実際に明治 34 (1901) 年 2 月 20 日に本山へ送られたことが分かっている (『著作集 第 9 巻』p190)。したがって少なくとも、重慶に戻ってきた明治 33(1900)年 11 月 4 日から本山に送られた 2 月 20 日までの間に書かれた文章と推定できる。

ただ、現存するのは生家浄蓮寺から発見された資料であり、本山に実際に提出されたものではないことと、現存資料には末尾に「緒言」として文章全体の目録が書き留められていることから、現存資料は本山へ提出する前に書かれた下書きだと考えられる。そのためか、現存資料には行間の書き込みや、末尾に本文を書きなおしたと思われる文章がある。このように資料として扱うには難しい点もあるが、日記やメモと比べて能海の見聞や考えが比較的まとまっていることから本稿の付録として公開することにした。

なお末尾に「緒言」として書き留められた全体の目録は、本文に先んじて紹介することにした。また、末尾の書き直しは、段落を改めて最後に掲載した。

緒言

第一地理 一省界 二人種 三面積人口 四山地及其地味（山、土、旱、雨、林、草）
五水辺及其地味（産、河、沃、水利、船） 六物産
七交通 八三大府 九里程 十氣候

第二風俗 一住所旅宿 二土城 三衣服 四番人 五回々 六食物 七商業外国品
八通貨 九物価

第三沿革 古戎、五国、唐代、新疆、古跡、蘭州、五泉、石碑

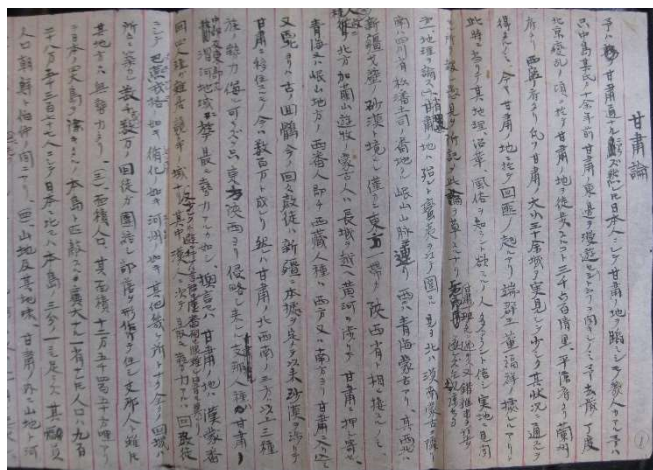
第四宗教 一回々教 二佛教 三道教 四喇嘛教 五耶蘇教

第五省治 一府●、総督、城小官大、統計 二山賊反徒（董福祥）、番人及土司
三兵備 四北清事件

第六甘肅と新疆及青海 一甘疆の關係、物価、鉄道

二青海の風俗と西洋及西藏人種の範圍、日本と此地方

（『著作集 第2巻』p332-333より抜粋）



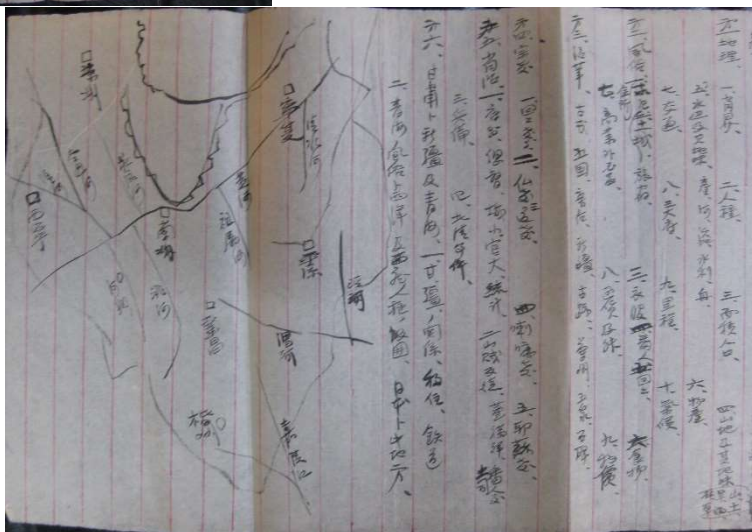
←左写真

「甘肅論」原稿。

↓下写真

「甘肅論」最終ページ。写真向かって左側には寧夏、蘭州、西寧などの都市を網羅した地図が確認できる。

金城町歴史民俗資料館蔵 筆者撮影



甘肅論

予は甘肅通なるにあらず。然れども日本人にして甘肅の地を踏みしもの幾人かある。予は只中島某氏⁴¹⁷が十余年前甘肅の東辺り漫遊せりと云ふを聞きしのみ。予去歲丁度北京変乱の頃⁴¹⁸に於て、甘肅の地を徒歩すること三千六百清里、平涼府たり、蘭州府たり、西寧府たり、凡そ甘肅の大小三十余城を實見して、少しく其状況に通するを得たるのみ。今や甘肅の地に於て回匪の起るあり⁴¹⁹。端群王⁴²⁰、董福祥⁴²¹の拠れるあると。此時に当りて、其地理、沿革、風俗を知らんと欲するの人多からんと信し、實地に見聞せる所を報じ、愚見を附記して、此論を草するなり。甘肅一斑たるに過ぎず、又錯雜未だ訂正を遂げず、乞う之を諒せよ。

第一 地理を論ず。

(一) 省界

甘肅の地は殆んど蛮夷を以て囲まる。見よ、北は漠南蒙古に隣り、南は四川省松藩土司の番地たる岷山山脈を連り、西には青海蒙古あり、其西北は新疆戈壁の砂漠と境ひし、僅かに

⁴¹⁷ 「中島某氏」とは普通教校の同窓中島裁之を指すのではないかと思われる。

⁴¹⁸ 「北京変乱」とは内容から1900年6月から翌年9月にかけて起こった義和団事変を指すと考えられる。

⁴¹⁹ 「今や甘肅の地に於て回匪の起るあり」とあるが、清代の甘肅において大規模な回族蜂起が起ったのは、1873年馬文禄などがある回族義軍最後の根拠地肅州を鎮圧したのが最後とされる(甘肅省地方志編纂委員会編纂『甘肅省志 第一卷』甘肅人民出版社1989年p87-88)。能海が「甘肅論」を書く際に想定した「回匪」が、董福祥によるものがあるが、当時董は清軍側に転向し、さらに北京で新型陸軍の統領となっているため、「回匪」を起すとは考えづらい。よってこの記述は能海による誤りだと思われる。

⁴²⁰ 1894年に瑞群王となった清朝の皇族載漪(1856-1922)と思われる。戊戌政変後傳僞を皇太子に擁立し、西太后とともに光緒帝の廢位を画策した。義和団事変発生時、総理各国事務大臣だったが、義和団を利用して列国との開戦を主張した。しかし列国に北京が占領されると西太后とともに西安へ逃げた。列国は載漪の死刑を求めたが、結局新疆へ追放された(朱傑勤、黄邦和主編『中外関係史辞典』湖北人民出版社1992年p838参照)。義和団事変後、清朝の皇族たちが西安に逃げたというニュースが日本人の西安に対する関心を引き付けていると能海が考えたことが窺える。

⁴²¹ 董福祥(1838-1908)清末の將軍。寧夏固原の人。字は星五。同治元年(1862)甘肅・陝西省で起った回民蜂起に父と加わり、安化を占拠するも、清軍の劉松山の攻撃を受け左宗棠に降伏し、鎮圧する側に回る。光緒十二年(1886)阿克蘇鎮の總兵となりカシュガルに入って以降は、1890年提督、1894年甘肅提督となり、甘肅軍を束ねるようになる。1897年には日清戦争後清朝が設けた近代的陸軍武衛軍の後軍の統領となり、八ヶ国連合軍が北京に入城した際には、各国公使館を攻撃した(『民族詞典』編纂委員会編『民族詞典』上海辞書出版社1987年p1046)。

東方一帯が陝西省と相ひ隣接するのみ。

(二) 人種

故に北方加蘭山^(マア)422遊牧の蒙古人は長城を越へ、黄河を渉りて甘肅に押し寄せ、青海又は岷山地方の西番人、即ち西藏人種は西方又は南方より甘肅に入り込み、又西北よりは古の回鶻、今の回々教徒は新疆に本拠を定めて以来砂漠を渉りて甘肅に移住するもの、今は数百万と成れり。然れば甘肅の北西南の三方は、以上三種族の勢力悔る可らず。只東方陝西より侵略し来れる支那人種は甘肅の中部及東部なる渭河地域に於て最も勢力あるが如し。換言せば、甘肅の地は漢蒙番回四人種が雑居、競争の域なり。又少しく片避に行けば、言語も漢番相ひ混雑し、口音も異れり。其中漢人に次て最も勢力あるは回教徒にして、巴燕戒格^{バエンゲンゴク}423の如き、循化の如き、河州^{ホーチョウ}の如き、其他幾カ所となく、全くの回城は所々に築かれ、数千或は数万の回徒が団結し、部落を形作りて住し、支那人と雖ども其地方には無勢力たり。

(三) 面積人口

其面積十二万五千四百五十方哩ありて、日本の四大島を除きたるの本島と匹敵する広大な一省なれども、人口は九百二十八万五千三百七十七人にして、日本に比せば、本島の三分の一にも足らず。其幅員人口朝鮮と伯仲の間にあり。

(四) 山地及其地味

甘肅の内に山地と河辺との二大分類あり。

(山) 先つ其山地に就て云はんか、崑崙の山脈は全省に起伏し、月界にでも有るかと思はしむるの甲斐絹色を帯ぶるの秃山、降雨の度毎に崩れ流るるの赤土黄泥山は至る所に聳へ、古の崑崙、赤嶺、或は今の岷山看秀山等、盛夏白雪を頂くの高山又少からず。

(農業、牧畜) 然るに此甘肅の山地たる概して之を云へば、殆んど山頂に至るまで、耕耘を施さざる少なく、大麦、小麦、烏麦、粟、菽、稗、玉蜀黍、豌豆等の農業及び羊、牛、馬、騾、驢等の牧畜盛んに行はるを見る。水田なし。併し乍ら決して豊饒の地なりとは称すべからず。

(旱魃) 数十町に渉る廣大なる田畠も、天若し不下雨^{フシヤユウイ}の時は、筆の穂の如き憐れなる作物は此処彼所に二三本ずつあるのみ。夫れを一本々々に苜り集めて漸く秋の収穫を了る。是れ此の四五年来旱魃に於ける山地農家の近状なり。

(降雨) 而して一旦夕立急雨の襲い来るあらんか。干田は忽ち一大泥湖と成り、濁流大道に漲り、「甘肅のあらん限りにいかにせん、黄河の水の清む時もなし」とても謡うべく河南省一帯、年々黄河の治水に幾百万両の国庫の補助を仰ぐは、皆此甘肅の泥土が流れて河底を高かめ、村落よりも却て河水の方遙かに高きにあるが故に、中国之憂とまで治水大臣を煩悶せしむる所以なり。

(山林) 然らば山林牧草は如何と云ふに、殆んど山林と称すべきものなく、蘭州の西北に

422 賀蘭山だと思われる。

423 現在の甘肅省巴戎県。

於ては、一百清里中一本の樹木も見ざりしことさへあり。甘肅三千六百清里の旅行中に於て、只三カ所に於て、天然の楨、山梨等の木が繁茂せる林中を過ぎたることありしのみ。夫れも僅かに各々十清里斗りに過ぎず。

(牧草) 牧草は一帯に生すと雖とも、山頂までも耕作せらるるの地なれば、六盤山、石積山等の如き非常なる寒地にして、耕作に適せざる地方を除くの外は、牧場と称すべき程の原野なり。

(苦水) 此山地は水に乏しければ草木の発生を妨ぐる事非常なり。特に蘭州の北方に至れば、砂漠の風を帯ひ来りて、砂山漠地多ければ、水草に乏しく大に内地と趣を異にせり。又此山地の一大異点は、甘肅省の名に反きて其水の苦きことなり。是を苦水と称し、所謂塩の滴りたるにがり水と同じ、静寧、會寧、安定、平番、展伯等の数百里に渉るの山地の溝、井、皆苦水ならざるはなし。故に田畠、山野、塩分の土塊は干柿が粉を吹きたるが如く、或は石灰を散きたるが如し。故に苦水を以て塩を製する地方あり。飲料に適さず、土坎に天水を溜め用ひ、或は遠方より車にて運ひ来る。以上は山地方に於ける状況なり。

(五)水辺及其地味

(主産) 水辺は山地に反して灌漑水利の便あれば、樹木森々と茂り、水田少けれども、又全くなきにあらず。麦、粟類は勿論、阿片、煙草、綿、^{ソラマメ}富豆、野菜、瓜類、杏、大桃、梨、柿、林檎、白葡萄等諸種の産物少からず。之れを甘肅省目抜き最上の地とす。

(河) 先つ其区域を^(ママ)挙げは〔挙げれば?〕、黄河及其支流たる清水河、祖勵河、莊浪河、大通河、湟河、大夏河、洮河並に下流に於ける大支流たる渭河及び其支流涇河一帯と、揚子江の一大支流たる^(ママ)嘉陸江〔嘉陵江〕の上流各地と又出口なき涼州、甘州地方の河域なり。

(沃地) 水辺に沿へる蘭州を始め各府州県、皆豊饒の地なり。然れども其区域甚だ狭くして成都又は西安地方の如き一望千里の地を見る能はず。河辺大概幅十清里^(ママ)より二三十清里の所を最広とし、長さに至りては五六十清里乃至百清里に達する地あり。然れども断崖絶壁の地多くして、河辺と云へども前記の山地に属すべき不毛瘦地なる所甚多し。

(水利) 以上許多の条流は何れも雪山或は大山より源を発するものなれば、水量多く、澤々干田を湿すと雖ども、何れも水深く、幅広く、流れ急にして、船筏を通するに不便、且つ不毛の地を通過すること遠ければ、灌漑の外には何の功用も為さず、一ヶ所として舟の通するの地を見ず。只渡し舟又は船橋の所々にあると、循化と岷州の下流に於て僅か数十清里間、二三の筏ありしを見しのみ。以上は水辺に於ける概況なり。

(六)物産

麻、棗子、富豆、豌豆、稗、甘肅胡麻、洋芋、牛、毛牛、馬、騾、驢、豚、羊、酒、塩、羊毛、皮、角、毛織物、毡子、薬材、麝香、水煙、阿片、甘州米、大麦、小麦、烏麦、菽米、粟、粟の如き糯米、玉蜀黍、楷州の綿、果物、野菜等あり。砂金及鉄鍋等少しく産するの地あるも、他に有名の鉱山あるを見聞せず。哈密には銅を生し、蘭州地方に来るもの多し。石炭の産する地又少し。蘭州及碾伯に至る地方之を産す、而して茶、竹、紙、砂糖の如き之を産せず。石又少し。

(薪材)の如き値高くして、●草最も多く、灌木、石炭は之に次げり。薪木は殆んど無しと云ふべし。馬糞、牛糞、羊糞を以て薪材となすの地方又甚多し。

(七) 交通

甘肅の一大名物は、殆んど至る所馬車の通することなり。陝西より蘭州に至り、更に一は新疆に向ひ、一は青海に至る。其他の片避、皆車の通せしむべし。如此の山地にして、如此く車の通するは一奇とすべし。其他出れば必ず馬、騾、驢に騎し徒歩する者少なく、又轎●●〔少し?〕。西安より蘭州に至る馬車十八站、十六両、蘭州より涼州に至る五両、新疆省迪化府に至る九十站八十両なりと聞けり。冬期には新疆、青海より駱駝の背に扱て貿易を為すもの多し。又西安より蘭州に至る道路幅廣く、両傍柳樹を列へ植へ、絶ることなく炎天の旅者は陰を行き、樹根に休み或は眠むり、其益する所無限なり。是れ左宗棠甘陝総督新に之を移殖せしものなりと云ふ⁴²⁴。木材に乏しければ、橋梁至て少く徒歩のものは幾回か泥河を渡らさるべからず。又電線は蘭州に至り、更らに新疆の境肅州にまで達せり。爾れども蘭州以北は切断せる所ありて用をなさず。此地方電柱を得ること難きに由るなるべし。又傳驛早馬の制ありて文書を送り、又飛脚の信局あり。

(八) 三大府

蘭州府は甘肅省の首城にして、黄河上流の四大支流は蘭州の上流に於て皆黄河に合し、水勢強大と成りて来る。而して長さ六七十清里、幅二三十清里斗りなる。一大平地は瓢箪形をなし、黄河其中央を流れ、其両大平地の中、両山迫り来りて●峽をなし、南山の突出せる麓、黄河の南岸に於て蘭州はあり。内外両城より成り、内城甚た狭く七八丁四方に過ぎず。甘陝総督此に居る。外城は内城を取囲みて●十余丁四方なり。四門を設け、人口凡そ五万内外あり。市内甚だ賑ふ。黄河には船橋を架し、新疆及青海に通す。蘭州の東北寧夏府には鎮守將軍駐屯して漠南蒙古を鎮め、蘭州の西北西寧府には、人口凡そ一万余あり、青海辦事大臣駐在して青海蒙古を撫し、以上蘭州、寧夏、西寧の三府を以て甘肅省の三大名府とす。

(九) 里程

蘭州は西安の西一千四百十清里にあり。北京に至る三千九百三十五里、或云四千〇四清里、新疆迪化府に至る四千六百二十里、伊犁に至る六千五百四十里、青海冬科爾に至る八百里、四川成都に至る二千四百里あり。而して省城より省内各府に至る、平涼へ七百七十里、寧夏へ一千一百四十里、鞏昌へ四百二十里、慶陽へ一千〇八十里、西寧へ六百二十里、涼州へ五百六十里、甘州へ一千〇四十里、安西へ二千二百二十里、各州へ至るには肅州へ一千四百六十里、楷州へ一千一百五十里、泰州へ七百三十里、涇州へ九百五十九里あり。甘肅の十清里は、四川、陝西に比して距離遠く、凡そ我一里半に当れり。

⁴²⁴ 同治10年2月(1871)から光緒4年(1878)にかけて、東は涇州から西は安西、南は狄道から北は環県まで52万を植林した。これらは左宗棠が西へ進軍する際に道を作らせ、柳を植林したことにより、「左公柳」と呼ばれている(甘肅省地方史志編纂委員会編纂『甘肅省志 第二十卷』甘肅人民出版社1999年p42)。

(十) 気候

甘肅は甚だ寒冷の地なり。我国の北海道と大同小異ならんか。故に甘肅の多く米を生せざるは此為めなり。七月の中旬六盤山を越ゆるに手の凍●けたるあり。蘭州に於ては七月の末に尚稲の苗が苗代にあり、未だ田植へをなしあらざるを見たり。四川にては四月頃花盛りになる阿片が、甘肅にては八月の末に之を眺めらる。麦、豆等の刈り入れは、又八月の末なること、西寧の西に於て夏土曜の上に雹に逢ひ、大に困りたることあり。夏尚坎爐に火を入れて、夜寝るの地なり。以て其寒冷の土を推察するに足らん。

第二 風俗を論ず。

以上は地理を中心として、色々の見聞を記したるが、是れより少しく甘肅の風俗に就て記せば、(一) 家屋 材木の不自由なる地なれば、土を以て煉瓦を造り、之を天日に乾して積み上げ、屋根も二三本の木を並べて上に小枝などを配置し、泥土を以て平屋を塗り、室内又土坎を造り、板少ければ多くは土間に甘肅製毡ケット子を敷けり。陝西に比して、穴居人少けれども、又所々に見れり。(二) 土城、驛、鎮等人家五六十以上もあれば、必ず堡と称する土城を築き、多く二門又は一門を設け、匪徒の却掠を妨ぐに備ふこととなし、又甘肅の宿屋は客多く、騎牲口なるか馬車に乗る●なるを以て、構内広く数十の牲口又は車を置くに足る。(三) 衣服は他の支那人、回々人共に内地と一般に異ならずと雖とも、寒冷の地なれば、或は毛皮、毛織等を着するあり。(四) 番人は、番域を築き漢回と雑居せず。或は回部、番部交々部落ありて、雑居せずと雖とも、部落の雑交することあり。番人は人種、言語、宗教、衣服、風俗を異にし、近頃は支那風に化せられたるものも少なからず。番女にして纏足するものあるに至れり。(五) 回々 是又人種、宗教、風俗を異にすと云へども、支那服を着、支那語を用ひ居れば、一見異らざるが如きも、其性質大に異れり。回々の家に必ず店頭茶瓶、茶碗の図を画きたるか、又は教門と書せるかの長さ七八寸巾五六寸なる木札を下げ、同族同教のものは知らざるものと雖ども、互いに相ひ助け、相ひ親しみ、旅行なす時にも、茶碗、箸、鍋等を所持し、決して豚を食せざるの教規なれば、支那人が豚を煮、豚を食せるの鍋、箸、碗をも用ひず。頗る綺麗好きの風あり。又回々人は其眼付き、軀格一見して支那人種と異なるを見出さる。回々教のものは、支那人の云ふ所に依れば、盜賊を為すもの甚だ多しと云ひ、支那人も彼等を恐る。

(六) 食物 甘肅には米を食するものは、官吏など内地より赴任せるもの数人に過ぎず。他は皆麵を常食とし、之を飯と称し、麵を食するを吃飯ツーフアンと云はずして、喝飯ホーフアンと云フ。実に奇なり。其他鍋塊ゴフコイ(所謂パンなり)、炒麵サフミン(麦粉)、牛、羊、豚、牛乳、卵等、其主なるものなり。酒は焼酒のみ、又阿片を食するもの少からず。回々教徒は之を吃せず。

(七) 商業及外国品 商業は交通不便、水利不便なれば振わず。西安には天津、上海よりの外国輸入品多く、大洋物店あり。又新疆省には露国より輸入する外国品多しと云ふと雖ども、甘肅は何れよりも最内地のこと、特に水利の便もなければ、輸入外品甚だ少し。嘗て露国人蘭州に商店を開き居りしと云ふも、今は閉店せり。然れども外国製鈕、針、洋傘、寸燐、洋

布、器械糸等少からず。西寧及青海の辺に於て、日本の寛永通宝錢の多きと、日本製自転車商標の寸燐が輸入せらるるを見しは奇なり。何れも西安、蘭州を経て入りたるものにして、一ヶの寸燐十文なり。

(八) 通貨及升^{マズ} 甘肅全体に銀、銅の通するは他と同じ。只西寧地方に於ける毛錢、悪錢の多き、百文中五十文、六十文の多きは実に一奇なり。支那には大錢^{ターチエン}、百文共に善き錢を云ふ、二八錢^{アルバー}、二十文の小錢と八十文の大錢^{サンチー}、三七錢^{スールー}、小三十大七十文、四六錢、小四と大六十、対半^{トイバン}、小五十大五十等の用ひ方ありて、各縣各府一定せされば、昨日通せるの地は、大錢の外通せざるに、今日は対半となるあり。従て銀を銅錢に換ゆるにも、一兩に付蘭州ては一千百五十文のもの、西寧にては一千三百五十文と変し、又地方に依りては一千文なる一吊^{イーテヤ}錢^{チエン}は九百八十文の地あり、少きは四百文の地あり。故に一百と云へは八十文にして、一吊と云へは四百文と成り、混雑名状すへからず。又量升は如何と云ふに、支那一升の米は通常三斤内外の重さあり。日本の一升と大同小異なるか、甘肅に於ては一升到九斤の地あり。蘭州の如きは十二斤にして、日本の四升入りを以て蘭州は一升とし、西寧の如きは三升入りを以て同じく一升と云へり。

(九) 物価 近年陝西甘肅共に早魃の為に殆んど飢餓に迫まり、一斤の麵^{ミエン}又は鍋塊^{ゴフコイ}各地大に差あり。西安六十四文、平涼七十五文、會寧八十五文、蘭州七十二文、平番四十文、甘州十八文、礦伯三十二文、西寧二十八文等、各位に非常の差あるも、運輸不便なれば、之れを貿易して平均せしむること出来ざる有様なり。

第三 甘肅の沿革

古へより甘肅は蛮夷を以て有名なる地なり。遠く夏の世の西戎、周の世の犬戎あり。北方匈奴の憂ひあれば秦始皇をして甘肅、蘭州より長城を築かしめ、下りて唐朝以前には今の甘肅一省中にさへ、西涼國安正、北涼國蘭州、後涼國涼州、南涼國西寧、西秦國蘭州北、夏國寧夏の東と分立して、王と称したることあり。予は西寧の西に於て大なる古墳らしき丘陵を見たり、蓋し前涼又は南涼王の墳墓ならん。其後代々吐蕃、回鶻、突厥、蒙古等の西夷、北狄は常に甘肅を冒し、中国に冠せざるはなく、又古へ西域三十六國、龜茲國庫車、干闥國和闐、焉耆國喀喇沙爾、疏勒國喀什噶爾、高昌國吐魯蕃等のより遙かに印度國の古代仏教國と支那國との交通は、代々絶ゆることなくして、常に其中間に在りて、此甘肅は亞細亞文明の交換場たりしなり。故に甘肅は四千年來、支那史上幾多の沿革を経來れるの地なり。

孔明は●〔屢か？〕兵を甘肅の地に出せしことあり。元の太祖成吉思汗寧夏地方を征し、六盤山に於て崩せり。蘭州の如き漢に金城群を置きし以來、唐に至りて蘭州と改め、益々發達し來りたるものなり。蘭州城の南山に五泉と称する結構美麗、殿宇高壯にして、而も其高樓に依りて、風景を眺める絶佳なること云ふへからず。蘭州城を目下に見、遙かには黄河の滔々と流るるを望む。崇慶古刹には地藏堂、金剛殿、明代萬曆の石碑あり。大悲殿（喇嘛宇の咒を額し、靈祐祠、崇文閣、文昌宮、地藏寺等、或は「恒河宝筏」と額し、或は真に迫るの名画、極彩色は四川陝西に於いても未だ此如く美麗なる殿堂は見ざる所なり。大明嘉靖十

三年、五泉千佛閣記なる碑文あり。「蘭古金城郡也、今僧清朗寂之禪林幽静遂修閣」云々、又大明天順六年の碑、及萬曆二十一年先登橋記（即ち高樓の記）臬蘭山三大閣碑等あり。京都丸山也阿弥の風景⁴²⁵に比して、勝るとも劣ることなし。又蘭州には此外、西門外四五里の地なる名利及び黄河の船橋を渡りたる所、断岸絶壁上の金山寺は、共に蘭州の三大名所として風景最も佳なり。此等は勿論寺なれとも一人の僧侶だに住せず、俗人ありて之を守り、参拝するもの、遊来するものへ、茶菓を出して優待せり。甘肅にても三百年已前の建築物は見ず、皆●●●代に新修せるもののみなり。甘肅に於て古碑は明代以上のものを見当らず。安会県城外の如き、多く明碑を見たるも参考たるべきものあらず。清朝に至りては石碑、木碑多しと雖とも、多くは道路修善等の記事なり。循化か回匪の為に囲まれしときに、寧夏督^{ママ}〔総督か？〕来りて其囲を解けりとの碑を見たり（今其写を紛失せり）。

第四 宗教

（一）回教、甘肅の名物たる回教徒は、唐代より此地に雑居し来り。又元の太祖に従て来れるもの多かりしかは、之を各省に分ちて、其勢力を分てりと云う。清朝の始めには、涼州、蘭州、鞏昌を陥れしことあり。乾隆年代、循化地方反寇すること絶へざりしと云ふ。又十余年前、固涼、平涼、涇州に於て回族一揆を起し、長武等を擾し長安に寇せりと云ふ。昨年予が回々の部落を通せんとするや、支那人は其危険を説きて頻りに予に通行を中止すべしと勧告せしも、予は断然其地を過きたり。循化の上流、黄河の渡しあるの地、数百の回々は一昨年反せるも、直ちに平定せり。又昨年も反寇せんとの模様ありと聞けり。或夜回々人の内に泊す。一人支那人の小売商は、予に耳語して云へり。回々の部落を巡るには、自分も回々なりと云ひて、彼等を欺さずんば、何の商売も出来ずと。彼は主人などに向て頻りに回教なりと虚言を云ひ居るを見たり。果して回々か盗を為すか、支那人か回々を欺すか、何れも大同小異の悪人輩なるか如し。故に宿に泊すや、回部地方にては先づ第一に大教か小教かを尋ね、大教は仏教、道教にして、小教は回教なり。故に小教なりと答ふれば、彼等は非常に喜び、歓待せり。回教は寺院の風一定し、等しく真清寺〔清真寺〕^{ママ}と称し、河州の如き最も大寺あり。哥蘭、即ち金経を念し在家の教師あり。

（二）支那佛教は振はず。支那僧侶極めて少しと雖とも、至る所に壮大美麗なる寺院あり。而して多くの僧侶住せる大寺なく、又寺院の建築物に於いては三百年も維持せるものなく、新修なれば天地君親師位のこと⁴²⁶。

（三）道教は仏教よりも勢力あり。道士を多く見受く。

⁴²⁵ 安養寺の六つの塔頭の一つで、江戸以降それぞれ料亭や旅館を営み、明治になると京都で初めての西洋ホテルとして発展を遂げた。現在の円山公園内にあたる。

⁴²⁶ 「天地君親師位のこと」は次の道教について書かれた行との隙間に書かれている。道教との繋がりを考えると不自然と思われるため、仏教の続きとして理解した。本稿第四章第一節（2）で問題個所の写真を掲載しているため参照されたい。

(四) 佛教中最も勢力あるは喇嘛教にして、西寧の西にある黄教の開祖第六世達頼の居れる寺院なる塔爾寺⁴²⁷の如き、洮州の咱呢寺の如き、何れも三四千の喇嘛僧住し、又狭道、西寧、西蕃等の番人は、皆喇嘛教徒なり。

(五) 耶蘇教、天主教の宣教師、平涼、蘭州、岷州に住し、各地を巡化すと雖とも、信者は少し。全省五千余人なりと云う。

第五 省治の模様

甘肅省内八府五州及び五十三の州、縣、廳あり。嘗て伊犁事變の頃、左宗棠蘭州にありて甘陝〔陝甘〕總督たり。近頃には今の兩廣總督陶模去りて、魏光燾来り。今や前の雲貴總督崧蕃又其後任として蘭州に赴きつつありと云う⁴²⁸。甘肅に三●●あり。城小官大、門小窓大、臉好脚大と云ふ。是れ甘肅の各城の寂漠たるを云ひ、又元来支那人は闇室を好むの風なるに、甘肅の家には窓、障子の大きくして、明かるきを評し、又女纏足するも他省に比して足大なるを云ひしなり。實に其如く、甘肅の府州縣より宿駅鎮の各城、各駅、實に寂漠たるものにして、之を四川省などに比するとき、甘肅の府縣は四川の田舎なる一鎮一駅にも及ばず。隆徳縣の如きは、其最も甚しきものにて、城内外僅に一二百戸あるのみ。三千戸に達するの城は極めて少し。平均千戸のものならん。而かも縣城の間、距離遠く、百里●外なるは少なく、二百里、三百里以上の距離なるあり。其間には宿駅ありと雖とも、百戸を越ゆるの地は少く、三戸五戸多くして四半戸の如き最も多し。如何に甘肅の各地が寂漠たるかを想像するに足らん。予か実見推測する旅記にて見れば、四川省成都府より省界七盤関に至る途上、九百清里（日本の一百十里）には、成都を除き九ヶの大市、凡そ三万四千戸、十七の中市、五千二百五十余の小駅、計七百戸を通りたるに、蘭州より省界涇州、瓦雲に至る九百五十清里（日本の一百四十里、甘肅里長し）の間に蘭州を除きて、僅かに六大市凡そ七千八百戸、●の中市二千三百五十戸、五十一ヶ所の小駅九百戸を過ぎたり。以て照見すべし、大市なりして只寂漠たるの小駅か連梯することを、兩省の一斑を見るべし。四川は七十六ヶ所計三万九千九百五十戸にして、甘肅は七十一ヶ所、一万一千〇五十戸に過ぎず。里長に於て三十日本里を増すにもかかわらず、殆んど四分の一なる戸数なり。以て城小の実を知るべし。而して官に至ては四川の富地も甘地の貧地も總督たり、將軍たり、提督たり、知府たり、知縣たり、皆同等の官を置けり。故に城小官大の諺出つるなり。省治果して如何。董福祥は元と寧夏府の省南金積堡と称する地方にありて、旅人等の物品を却掠するを以て業となし居りし山賊なりしか、時の將軍其武雄なるを見て、彼れに甘肅提督の官を授け、回匪を平けし功ありて今の位置に上りしものなりと。其実は官、其暴勇を持て余し、官を授けて懐柔策を講せるものなりと。四川余蛮子の今官名を有するか如く、由来支那政府の一大秘訣たるか如し。故に甘肅に於ける支那人は治者の位置にあり乍ら、他種族又は豪族の為に苦しめられ、

⁴²⁷ クンブン・チャムパーリン寺。チベット仏教ゲルク派の開祖ツォンカパの生誕の地。

⁴²⁸ 魏からの交代は1900年。

弥縫の策を講して、其日を送り居るにはあらざるか。支那政府の弱点を見ては、蜂起せんとするの兆候あるは回徒の反状常なきを見て明らかならん。予は一日番人の部落を通するの節、此地は何縣管轄なるやを問へり。番人は不審の顔付きにて笑ひつつ、我々は何県の管下にもあらず。某土司の民なりと答へ、殆んど支那政府の有無を解せず。土司酋長の類を以て王の如く思へり。又其实殆んど然り。政府の微力なる政令の行はれざるを以て知るべし。

甘肅の兵備又嚴ならざるにあらず。寧夏に將軍あり。蘭州、涼州、甘州諸府提督あり。西寧等に副將あり。各地に營所、守備堡配置あり。嚴ならざるにあらず、又蘭州に洋式の兵の練あるを見たり。予は其實力如何を知らずと雖とも、甘肅の兵は瘦地に育ち、難に堪ゆるものなれば、衆の服する將を得しならば、清国中有数の強兵たるを得しか。

(北京事変)

昨年六月末丁度、北京騒動の起り始めに陝西省西安府にありて、西門外等数十營の旗を翻へししつつ駐屯し大軍過境とあるを見て、何の故なるやを知らず。甘肅省の平涼府に至りて始めて北京各国の外人を攘斥せり^(ママ)の事を聞き、次て途上甘肅兵の北上に逢ひ、或は蘭州に於ける甘肅兵の洋操、旅人の宿調べの嚴なるあり。或は外教信者九人を捕縛せるあり。更に西寧府に入れは、今まで等困に放棄し有りし青海の取締一層嚴重となり。漢人、蒙古人、西藏人、回々人等しく路票と称する青海大臣の証明^(ママ)証を有せざるものは、青海に入ることを許さざることとなり、循化に於ては皇帝西安に逃れりと聞き、河州に至れば八戸に一人つつの兵丁を西安に送れるあり。更に狄道州に至れば、新募の軍夫城内に武備し、四方より集り来るもの日々に増加す。軍夫と云ふと云へとも、皆戦争に出づるものなれば、頻りに青龍刀など持ち稽古をなし、岷州の外人一ヶ月も以前に引揚げしと云ひ、楷州にては或地方は外人を止宿せしむへからずとの告達ありと云ひ、其頃より北京の騒動も下火となりしと見へ、不准殺洋人の告示を見る。支那人之れを見て驚くものあり。又外人を保護するの文出て、中外議和などに至り安心するに至れり。

第六 甘肅と新疆の關係、及青海

此二省は最も親密の關係あり。甘肅か太古より漢蛮の衝突地となり、幾十年間幾多の沿革を有するに關はず、尚太古と同様に漢蛮の焼点となり、西戎去れば、犬戎出て、匈奴起り、吐蕃交はり、突厥、回鶻、蒙古、回々、西番何代として漢蛮の争ひ絶へたるはなし。今や又北魯の強力は新疆伊犁に襲ひ来たり。蒙番回に次て此地に衝突を見るは、或は露清の關係ならんか。甘肅も尚新開の地たるを免れず。湖南、湖北、河南、陝西の内地に喰ひ余れる支那人、或は内地にて犯罪して一時跡を盲まさんとするの悪漢は、年々甘肅に移住し来り。安定の如き、湖南人は殆んど其大半を占むと其地至る所に湖南人の勢力あり。彼等は只甘肅に止るものみにあらず。新疆の地か却て甘肅より遙か数等の上位する豊饒にして生活に適せるを見聞しては、新疆に入り込むもの少許にあらず。僅に十余年間中にさへ戈壁地方旅店なく、舗子なき地に、今は漢人の部落所々と現在し来れりと。支那政府は兎に角、支那人種か回々、蒙古の中に益々侵入するは、目今此地方の有様なり。果して将来如何の結果となるや。

此甘肅、新疆をして、将来最も有望ならしめとせば、鉄道を布設するに若かず。予蘭州に徒歩し行く道中案すらく、他日此地に遊ぶの日には、今日の難は見るへからず。必ず鐵路に拠ることあらんかと。近頃露国は新疆より甘肅を経て西安に達せんとする鉄道布設に意ありと。西伯利亞鉄道さへも未だ成らざるの時、俄に其希望ありとも、此地に鉄道布設せんとするは、頗る困難なるべし。爾れとも予は考ふるに、此線は必ず他日計画あることを信す。第一欧亚最近の線たること。第二に寒気も西伯利亞鉄道の如く甚しからざること。第三、地平坦にして、西安より渭河に沿ふて上り、蘭州より莊浪河に沿ふて上り、喀密、伊犁に至れば、殆んど山なく布設に便なること。第四、将来亜細亜中原は各国勢力の焼点たること等なり。而して困難なるは石、又は枕木の如き、遠方より運ばざるへからざる。尔れとも青海又は天山南路には山林又少しとせず。或は鉄道を見るに至るの日あらんか。

(^(ママ)甘肅邊境及青海、西藏等^(ママ))の風俗を見るに、西洋と大に其趣を同ふするこそ奇なれ。建築は洋館の如く、石、煉瓦にて疊み上げ、支那人之を蛮家又は碉房と云ふ。又窓の恰好、煙筒の有る工合より、米生せざれば麵包を食し、牛乳を呑み、牛肉、羊肉を食し、バター(支那人之を酥油と称す)を食し、珈琲砂糖なければバターに茶と塩を混してのみ、麦酒を造り、衣服も筒袖の皮服を着し、出るに馬に騎し、馬具も西洋馬具に酷似し、天幕を張りて野営し、水草を追て牧畜を業とし、其他帽子と云ひ、手袋と云ひ、皮製の長履に至るまで、日本か近來新輸入、新流行にあらずして彼等元來の風俗なり⁴²⁹。一は氣候、地理、産物等の西洋に相同しきにもせよ、自称文明の西洋と、此未開の西番土人とか、如此も衣食住、風俗に至るまで相同しきを見れば、西洋文明の祖先たるか、親類たるか、縁遠きものにあらざるを知る。文字は印度の古文にとり、言語は西伯利的語にして、蒙古、滿州、朝鮮、日本等に近かく、支那語とは大に其系を異にす。併し西藏国を其人種、言語、宗教の同じきものを以て、一国と仮定せんか、西藏四大本部よりも更に大なるの領土を得べし。即ち青海全部、甘肅の三分の一、四川の五分の二、雲南の三分の一、及印度雪山各地は、皆確に人種、言語、宗教を一とし、支那本部十八省と大差なくの大国は、此亜細亜中原に強を称するに足る大西藏国と成るべきも、惜しむべし。今は古のスロンザンガンポー大帝の勇なければ、清に削られ、蒙古に襲はれ、英に併せられ、漸く頭蔵、喀木、前蔵、後蔵阿里的四部を存するのみ。

(日本人と此地方)

日本人が大陸思想なく、孤島根生の仕方なきと、又年々五十万の増殖する人口を以て、他に移民を求むるの時節、此青海及新疆新開の地にのり込み、大に大陸の風光に生活し、又日本の文明を此内地に移植するに至らば総からん。甘肅如きは米を生し、皇帝に進貢すと云う。然れば全く、蘭州、西寧地方に輸出し、麦余りありて西安又は蘭州に一斤七八十文なるに、

⁴²⁹ 「日本か」の後に「如く」が消された跡があるため、「日本が如く近來の新輸入、新流行にあらずして、彼等元來の風俗」なりという意味で書いた一文だと思われる。

其地方は十七文の価なり。米なき地にあらず。麦余りあり。西洋に行くと思へは、大差なからん。前記の甘肅辺境記事を見玉はは、其間違なきを了解せらるるならんと信す。

青海の光景

周囲七百清里（但十二日里、又云四十八日里）、流れ込む河一百〇八●とも云へとも、実は十七八●にすぎず。海中の島を海中山と称すラマ寺あり。夏は波浪の為に行く不能、冬期氷結時、往来一日にして達す。一年中の食物を蓄へ、専ら海中魚産多く、土人之を釣りて、甘肅、西寧に送るもの幾万尾。一尾二三尺大にして、四五十文なり。土人酋長皆青海の周囲に住し、二十九旗あり。青海大臣之れを統へ、一年一回酋長の進貢に冬科尔に於て●●、予は丁度其節にありて実見す。大臣、副将、三百余名壯觀たり。

屋根も二三本の木を並べて、上に藪枝などを置き、泥土を以て塗込み、平たき屋根となす故に、屋上は乾草などの場所となり、上下自由なり。室内土坎を造り極少ければ多くは土間に甘肅製の毡子ケットを敷けり。陝西に比して穴居人少けれども、又所々に見る。甘肅の旅店は客多くは牲口に騎るか、馬車を率ふるかなれば、構内広く、能く数十代の馬車を曳き込んで宿さる。食物は自分に粉を所持して、自製自炊の風なり。又蒲団なければ自ら所持するを要す。土城、驛或は鎮等、人家五六十以上もあれば、必ず堡と称する土城を築き、二門或は一門を設け、匪徒の却掠を防ぐに備ふ。衣服、一班に異ならずと雖とも、寒冷の地なれば、皮着、毛織、毛服等を着る地あり。医師、予道中に在て、風邪し、発熱烈火しかりしゆえ、漢法医を招き診断を乞い、容體書の通り服薬せしに忽ち全治せり。

参考文献

1 未公開資料

- ・ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B03050316600 成田安輝西藏探検関係一件(1-6-1-11)(外務省外交史料館)」
- ・ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C07082243000 明治31年 参謀本部大日記 参月(防衛省防衛研究所)
- ・ JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. C09120198700 明治7年9月 諸省 9 15(防衛省防衛研究所)」
- ・ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C09120818700、起明治14年4月尽同年6月 諸省院使 39 4(防衛省防衛研究所)
- ・ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C10070982900 明治31年6月より32年12月に至る 発着控第1号(防衛省防衛研究所)
- ・ 傳牌 金城町歴史民俗資料館所蔵
- ・ 劉廷恕の名刺 金城町歴史民俗資料館所蔵
- ・ 明治34(1901)年元旦付で能海寛が井上門了に宛てた書簡 金城町歴史民俗資料館所蔵

2 公刊資料

『朝日新聞』、『海外仏教事情』、『官報』、『教学報知』、『新仏教』、『中外日報』、『天則』、『東亜同文会報告』、『東洋哲学』、『反省雑誌』、『North China Herald』(『北華捷報』)

3 日本語文献

文献

- ・ 赤井正三(2016年)『旅行のモダニズム-大正昭和前期の社会文化変動』ナカニシヤ出版
- ・ 内田正雄編訳(1874-1877年)『輿地誌略 第二巻 亜細亜州』文部省
- ・ 江本嘉伸(1999年)『能海寛-チベットに消えた旅人』求龍堂
- ・ 江本嘉伸(1993-94年)『西藏漂泊 上下』山と溪谷社
- ・ エリック・シッケタンツ(2016年)『墮落と復興の近代中国仏教-日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』法蔵館
- ・ 汪向荣著,竹内実等訳(1991年)『清国お雇い日本人』朝日新聞社
- ・ 大里浩秋,孫安石編著(2006年)『中国における日本租界-重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房
- ・ 大谷栄一(2012年)『近代仏教という視座 戦争・アジア・社会主義』ペリカン社
- ・ 大谷栄一,吉永進一,近藤俊太郎編(2016年)『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもう一つの近代』法蔵館
- ・ 小川原正道編,小山聡子ほか著(2010年)『近代日本の仏教者-アジア体験と思想の変容』慶應義塾大学出版会

- ・織田得能(1894年)『和漢高僧伝』光融館
- ・外務省外交史料館蔵(1996年)『外務省警察史 50巻』不二出版
- ・金子民雄(2002年)『西域 探検の世紀』岩波新書
- ・金子民雄(2011年)「英露対立から英露協商期における国際政治社会—チベット問題を中心として」(白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会—チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版 p3-37)
- ・川邊雄大(2010年)「明治期における東本願寺の清国布教について-松本白華・北方心泉を中心に」(篠原啓方, 井上充幸, 黄蘊, 氷野善寛, 孫青 編著『文化交渉による変容の諸相』関西大学文化交渉学教育研究拠点) p153-222
- ・川村伸秀(2013年)『坪井正五郎-日本で最初の人類学者』弘文堂
- ・熊達雲(1998年)『近代中国官民の日本視察』成文堂
- ・高本康子(2010年)『近代日本におけるチベット像の形成と展開』芙蓉書房
- ・黒龍会編(1966年)『東亜先覚志士記伝』原書房
- ・小島勝,木場明志(1992年)『アジアの開教と教育』龍谷大学仏教文化研究所
- ・坂井田夕起子(2013年)『誰も知らない「西遊記」』龍溪書舎
- ・坂野徹(2005年)『帝国日本と人類学者-1884年—1952年』勁草書房
- ・佐藤三郎(2003年)『中国人の見た明治日本-東遊日記の研究-』東方書店
- ・佐藤三郎(1984年)『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館
- ・佐藤哲朗(2008年)『大アジア思想活劇』サンガ
- ・実藤恵秀(1943年)『明治日支文化交渉』光風館
- ・さねとうけしゅう(1981年)『中国留学生史談』第一書房
- ・白須浄眞(2018年)「20世紀初頭の国際政治社会と日本-大谷光瑞とスヴェン・ヘディンとの関係を中心として」(田中和子編『探検家 ヘディンと京都大学-残された60枚の模写が語るもの』京都大学出版社 2018年 p183-195)
- ・白須浄眞(2016年)「大谷探検隊に先行する真宗青年僧の英領下セイロンへの留学」(『シルクロードと近代日本の邂逅—西域古代資料と日本近代仏教』勉誠出版 p659-771)
- ・末木文美士編(2011年)『新アジア仏教史 14 近代国家と仏教』佼成出版社
- ・鈴木康史編(2019年)『冒険と探検の近代日本-物語・メディア・再生産』せりか書房
- ・隅田正三(2018年)『新仏教徒運動の提唱者 求道の師 能海寛』波佐文化協会
- ・隅田正三(1989年)『チベット探検の先駆者 求道の師「能海寛」』波佐文化協会
- ・隅田正三(2010年)『チベット巡礼探検家 求道の師能海寛』USS 出版
- ・高木宏治編(2011年)『東亜同文会報告 2巻』ゆまに書房
- ・陳祖恩著(2010年)『上海に生きた日本人 幕末から敗戦まで』大修館書店
- ・塚本善隆(1975年)「中華民国の仏教」(『塚本善隆著作集 第5巻 中国近世仏教史の諸問題』大東出版社))
- ・東亜同文会編(1973年)『続対支回顧録 下』原書房

- ・ 冨山一郎(2002年)『暴力の予感-伊波普猷における危機の問題』岩波書店
- ・ 長沢和俊(1973年)『日本人の冒険と探検』白水社
- ・ 長沢和俊(2003年)『日本の探検家たち 未知を目指した人々の探検史』平凡社
- ・ 中西牛郎(1889年)『宗教革命論』博文堂
- ・ 中西直樹,吉永進一(2015年)『仏教国際ネットワークの源流-海外宣教会(1888年~1893年)の光と影』三人社
- ・ 中西直樹(2018年)『新仏教とは何であったか-近代仏教改革のゆくえ』法蔵館
- ・ 中村義(1999年)『白岩龍平日記-アジア主義実業家の生涯』研文出版
- ・ 能海寛(1893年)『世界に於ける仏教徒』哲学書院
- ・ 能海寛研究会(2005年-10年)『能海寛著作集』(全15巻,USJ出版)
- ・ 能海寛研究会(2020年)『能海寛研究会25周年記念論集』能海寛研究会
- ・ 能海寛追憶会(1917年)『能海寛遺稿』私立真宗大谷大学内
- ・ 平野聡(2004年)『清帝国とチベット問題-多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版会
- ・ 福嶋寛隆,藤原正信,中川洋子編(2005年)『反省(會)雑誌I』龍谷大学仏教文化研究所
- ・ 藤谷浩悦(2018年)『戊戌政変の衝撃と日本-日中聯盟論の模索と展開』研文出版
- ・ 古河老川(1901年)『老川遺稿』仏教新徒同志会
- ・ 村上護(1989年)『風の馬-西藏求法伝』佼成出版社
- ・ 山口瑞鳳(1987年)『チベット 上・下』東京大学出版
- ・ 横地祥原編(1974年)『蔵蒙旅日記』芙蓉書房
- ・ 吉田久一(1998年)『近現代仏教の歴史』筑摩書房
- ・ 劉建雲(2005年)『中国人の日本語学習史』学術出版会
- ・ 六角恒廣(1988年)『中国語教育史の研究』東方書店
- ・ 渡辺海旭(1936年)『渡辺海旭論文集』壺月全集刊行会

論文

- ・ 朝井佐智子(2013年)「日清戦争開戦前夜の東邦協会-設立から1894(明治27)年7月までの活動を通して」(愛知淑徳大学博士論文)
- ・ 飯塚勝重(2016年)「新仏教徒能海寛と一統教」東洋大学アジア文化研究所『アジア文化研究所研究年報』第50号 p14-33
- ・ 飯塚勝重(2017年)「浄蓮寺蔵書目録と西藏関係書目-御堂用書のなぞ-」能海寛研究会『石峰』第22号 p1-16
- ・ 江島尚俊(2010年)「哲学的仏教研究から歴史的仏教研究へ-井上円了と村上专精を例として」『大正大学大学院研究論集』第34号 p244-234
- ・ 小川博(1989年)「柏原文太郎と中島裁之-中国留日学生史の一齣-」早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』35巻第1号 p1-28
- ・ 奥山直司(2016年)「明治印度留学生-その南アジア体験をめぐって-」日本印度学仏教

学会『印度学仏教学研究』第64巻第2号 p1042-1035

- ・オリオン・クラウタウ(2014年)「近代日本の仏教学における“仏教 Buddhism”の語り方」『ブッダの変貌-交錯する近代仏教』法蔵館 p68-86
- ・木村肥佐夫(1981年)「成田安輝西藏探検行経緯(上)ー外交資料に見る東チベット經由入蔵挫折記ー」亜細亜大学アジア研究所『アジア研究所紀要』8 亜細亜大学 p33-87,
- ・高本康子、三宅伸一郎(2014年)「寺本婉雅『新旧年月事記』翻訳」大谷大学真宗総合研究所『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』31号 p143-186)
- ・小林亮介(2008年)「ダライラマ政権の東チベット支配(1865-1911)」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカ言語文化研究』(76)p51-85
- ・澤田次郎(2018年)「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に(一、二)」拓殖大学人文科学研究『人文・自然・人間科学研究』第40号 p1-42,第41号 p1-24
- ・柴田幹夫(2013年)「『日華学堂日誌』1899~1900年」新潟大学国際センター『新潟大学国際センター紀要』第9号 p23-85
- ・隅田正三(2019年)「水野齋入書簡に見る『能海寛遺稿』の出版経緯」能海寛研究会『石峯』第24号 p82-90
- ・隅田正三(2006年)「能海寛西藏探検行の源流を探る」能海寛研究会『石峰』第11号 p40-47
- ・隅田正三(2018年)「能海寛(石峰)と古河勇(老川)の新仏教運動」能海寛研究会『石峰』第23号 p53-59
- ・錢鷗(1998年)「羅振玉における「新学」と「経世」」同志社大学言語文化学会『言語文化』第11号 p71-103
- ・千葉正史(2018年)「清末中国奥地の郵便事情-能海寛の手紙より探る」東洋大学アジア文化研究所『アジア文化研究所研究年報』第53号 p177-179
- ・富山一郎(1994年)「国民の誕生と「日本人種」」岩波書店『思想』845 p37-56
- ・野口宗親(2002年)「明治期熊本における中国語教育(2)」熊本大学『熊本大学教育学部紀要 人文科学』第51号 p65-83
- ・村田雄二郎(1992年)「孔教と淫祠-清末廟産興学思想の一側面」東大中国学会編『中国社会と文化』第七号 p199-218
- ・万代剛(2005年)「「官話事始め」-能海寛のチベット行と中国語学習」能海寛研究会『石峰』10号 p22-30
- ・和田大知(2019年)「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」『史滴』41号 p225-203

その他

- ・柏原祐泉,藪田香融,平松令三監修(1999年)『真宗人名辞典』法蔵館
- ・新佛教研究会編(2012年)「近代日本における知識人宗教運動の言説空間-『新佛教』の思

想史・文化史的研究」

http://www.maizuru-ct.ac.jp/human/yosinaga/shinbukkyo_report.pdf

(最終アクセス日：2019年11月20日)

- ・日本仏教人名辞典編纂委員会編(1992年)『日本仏教人名辞典』法蔵館
- ・古林亀治郎,日本現今人名辞典発行所,成瀬麟,土屋周太郎『明治人名辞典 復刻版』(1987年)日本図書センター

4 英語文献

- ・Ryosuke Kobayashi. 2019. The exile and diplomacy of the 13th Dalai Lama (1904-1912)-Tibet's encounter with the United States and Japan-. In: Yumiko Ishihama. *The Resurgence of "Buddhist Government" – Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*, 37-68. Osaka: Union Press.

5 中国語文献

- ・曹婉如ほか編(1990)『中国古代地図集 清代』文物出版社
- ・常明等修(2011年)『嘉慶四川通史 八卷』鳳凰出版社
- ・重慶市地方志編纂委員会編輯室(1992年)『重慶市志(第一卷) 総術・大事記・地理志・人口志』四川大学出版社
- ・甘肅省地方志編纂委員会編纂(1989年)『甘肅省志 第一卷』甘肅人民出版社
- ・甘肅省地方史志編纂委員会編纂(1999年)『甘肅省志 第二十卷』甘肅人民出版社
- ・葛兆光(2006年)『西潮又東風』上海世紀出版
- ・海関総署『中外旧約章大全』編纂委員会(2004年)『中外旧約章大全 下』中国海関出版社
- ・江瀚著,馬学良整理(2016年)『江瀚日記』国家図書館出版社
- ・隗瀛涛主編(1990年)『四川近代史稿』四川人民出版社
- ・隗瀛涛,沈松平(2011年)『重慶史話』社会科学文献出版社
- ・海関総署『中外旧約章大全』編纂委員会(2004年)『中外旧約章大全 下』中国海関出版社
- ・劉廷恕纂(1992年)『光緒打箭廳志』巴蜀書社
- ・『民族詞典』編纂委員会編(1987年)『民族詞典』上海辞書出版社
- ・秦永章(2005年)『日本涉藏史—近代日本与中国西藏』中国藏学出版社
- ・任達著,李仲賢訳(2006年)『新政革命与日本-中国,1898-1912』江蘇人民出版社
- ・上海図書館編(1986年)『汪康年師友書札 一』上海古籍出版社
- ・四川省康定県志編纂委員会(1995年)『康定県志』四川辞書出版社
- ・四川省文史研究館著(2006年)『成都城坊古跡考』成都時代出版社
- ・吳豊培編,趙慎応校対(1994年)『清代藏事奏牘 下』中国藏学出版社
- ・譚其驥主編『中国歴史地図集 第八卷』中国地図出版社
- ・吳康零主編(2010年)『四川通史 卷六』四川人民出版社

- 西安市雁塔区地方志編纂委員会編(2003年)『陝西地方志叢書 雁塔区志』三秦出版社
- 中国第一歷史檔案局(1995年)『光緒朝硃批奏摺 第105輯』中華書局
- 中国人民政治協商会議四川省委員会四川省省志編纂委員会(1964年)『四川文史資料選輯 第15輯』四川省新華書店
- 周詢(1987年)『芙蓉話旧録 卷四』四川人民出版社
- 朱傑勤、黄邦和主編 (1992年)『中外關係史辞典』湖北人民出版社
- 朱金甫主編(1996年)『清末教案 第2冊』中華書局

論文

- 包曉嬌(2014年)「清末中国文武官員「東遊軍事考察記」研究-以丁鴻臣『東瀛閱操日記』、沈翊清『東遊日記』為中心」復旦大学修士論
- 徐君(2004年)「近代天主教在康区的傳播探析」上海社会科学院歷史研究所『史林』第3期 p61-68
- 朱昭華(2013年)「藏錫边界糾紛与英国兩次侵藏戰爭」『歷史檔案』年第一期 p96-104